新潟県埋蔵文化財調査報告書　第65集

北陸自動車道

上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅴ

鉄砲町遺跡

1995

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

北陸自動車道

上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅴ

鉄砲町遺跡

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

滋賀県米原町と新潟市を結ぶ北陸自動車道は、昭和63年に全線が開通しました。この道路は名神高速道路と関越自動車道につながり、北陸地方と首都圏・関西圏を結ぶ大動脈として、地域の発展に多大な効果をもたらしています。

新潟県教育委員会は、昭和47年から北陸自動車道の建設に伴う遺跡の発掘調査を数多く実施してまいりました。

本書は上越市に所在した「鉄砲町遺跡」の発掘調査の結果をまとめた報告書であります。

鉄砲町遺跡は、戦国時代に越後の雄として全国に名を馳せた上杉謙信の居城として知られている春日山城の山麓に営まれた古代と中世の集落跡です。この発掘調査で数々の新知見を得ることができました。

古代にあっては、県内では類例の少ない平安時代末期の土器が出土し、その様相の解明に一役を果たすものと考えられます。また、中世あっては、遺跡所在地の小字名「鉄砲町」が示すように春日山城下の「鉄砲町」として栄えた地域の一角ではないかと想定され、町並形成期以前の集落の一端が明らかになりました。

今回の調査結果が、今後の新潟県における古代・中世の歴史を考える一資料として広く活用されると共に、広い意味で文化財に対する理解と認識を深める契機にしていただければ幸いであります。

最後に、本調査に対して多大なご協力とご援助を賜りました日本道路公団新潟建設局・同上越工事事務所をはじめ、上越市教育委員会や地元の方々に厚く御礼を申し上げます。

平成７年３月

新潟県教育委員会
教育長　本　間　栄三郎

例　　言

1．本書は新潟県上越市大字大豆字鉄砲町ほかに所在する「鉄砲町遺跡」の発掘調査報告書である。調査は、北陸自動車道建設に伴い、新潟県が日本道路公団から受託して実施した。

2．調査主体は新潟県教育委員会であり、発掘調査は第一期線分を昭和59年～60年に、第二期線分を昭和62年～63年に、整理作業は平成４年～６年に行った。
　平成４年度からの作業は、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(以下埋文事業団)が新潟県教育委員会(以下県教委)から受託して実施した。

3．調査にかかる資料と出土遺物はすべて県教委が保管している。遺物の注記は、鉄砲町遺跡を示す「TE」に地区・出土地点・遺物番号を併記した。

4．本書の作成は埋文事業団調査課調査第一係職員が当たった。執筆は第Ⅰ～Ⅲ章・第Ⅴ章１を藤巻正信が、第Ⅳ章・第Ⅴ章２を横田浩が分担した。第Ⅴ章３及び要約は両名の共同執筆とした。編集・校正は両名の共同作業とした。

5．本書は本文と巻末図版とからなる。巻末図版は図面と写真で、主な遺構と遺物をおさめる。

6．報告は調査地区ごとに行う。遺構の番号は地区ごとに種別の通し番号とした。遺物の番号はすべて通し番号とした。これらの番号は本文・挿図・表・図面・写真のすべてに共通する。

7．遺物の分類・計測は横田が担当した。

8．本書に使用した遺物写真は藤巻が撮影を担当した。遺構の写真撮影は現地調査員が行い、遺跡空中写真は委託した。

9．本書で用いた方位は全て磁北である。真北は東編約７°０'である。

10．文中の註は脚註とした。引用・参考文献は著者と発行年を〔　〕で文中に示し、巻末に一括して掲載した。

11．発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々からご教示・ご協力を得た。厚く御礼を申し上げる。(敬称略、五十音順)
　小林達雄（国学院大学文学部）・小島幸雄（上越市教育委員会）・高野武男（新潟県立高田高等学校）・出越茂和（金沢市教育委員会）・西中川駿（鹿児島大学農学部）・四柳嘉章（漆器文化財科学研究所）

目　　次

第 I 章　序　　説

1．遺跡の環境 …… 1
2．周辺の地形と遺跡分布 …… 1
3．調査に至る経過 …… 2

第 II 章　調査の概要

1．確認調査 …… 5
2．グリッドの設定 …… 8
3．調査ブロックの設定 …… 8
4．調査の方法 …… 8
5．調査の概要 …… 10
6．整理の経過 …… 13
7．記述の方法 …… 14

第 III 章　遺　　跡

1．基本層序 …… 15
2．遺　　構 …… 16
A．Ⅳ層下面検出遺構 …… 17
鉄砲町1・2地区
鉄砲町3地区
掘立柱建物 …… 17　　井　戸 …… 19
土　坑 …… 20　　溝 …… 23
その他の遺構 …… 24
CB8ブロック
溝 …… 25　　土　坑 …… 25
その他の遺構 …… 26
B．Ⅲ層下面検出遺構 …… 27
鉄砲町3地区

井　戸 …… 27　　土　坑 …… 32
溝 …… 41　　その他の遺構 …… 43
CB 8 ブロック
井　戸 …… 46　　土　坑 …… 47
溝 …… 47
鉄砲町 1 ・ 2 地区
土　坑 …… 49　　溝 …… 50
鉄砲町二期線 A 地区 …… 53
鉄砲町二期線 B 地区 …… 54

第 Ⅳ 章　出 土 遺 物

1．遺物の分類 …… 55
2．鉄砲町 3 地区(CB 8 ブロックを含む)出土遺物 …… 59
A．Ⅳ層下面検出遺構出土遺物 …… 59
B．Ⅳ層出土遺物 …… 67
C．Ⅲ層下面検出遺構出土遺物 …… 68
D．Ⅲ層出土遺物 …… 75
E．Ⅱ層下面検出遺構出土遺物 …… 76
3．鉄砲町 1 ・ 2 地区(CB 10ブロックを含む)出土遺物 …… 76
A．おもな遺構出土遺物 …… 76
B．その他の遺構・包含層出土遺物 …… 80
4．鉄砲町二期線分出土遺物 …… 84
A．二期線 A 地区出土遺物 …… 84
B．二期線 B 地区出土遺物 …… 86

第 Ⅴ 章　ま と め

1．遺　　構 …… 87
2．遺構出土の遺物 …… 88
3．集落の推移 …… 90

要　　約 …… 91

引用・参考文献 …… 108

挿　図　目　次

図１　周辺の地形と遺跡分布図 …… 3
図２　確認調査範囲 …… 5
図３　確認調査出土遺物 …… 6
図４　調査区とグリッド配置図 …… 9
図５　基 本 層 序 …… 16
図６　Ⅳ層下面検出遺構群 …… 17
図７　Ⅲ層下面検出遺構群 …… 28
図８　土器器種分類 …… 58
図９　SE 201復元模式図 …… 62
図10　SE 206復元模式図 …… 63

表　目　次

表１　鉄砲町遺跡の展開時期 …… 89
別表１　鉄砲町３地区(CB８ブロックを含む)Ⅳ層　出土遺物観察表 …… 92
別表２　鉄砲町３地区(CB８ブロックを含む)Ⅲ層　出土遺物観察表 …… 98
別表３　鉄砲町１・２地区　出土遺物観察表 …… 101
別表４　鉄砲町二期線Ａ地区　出土遺物観察表 …… 105
別表５　鉄砲町二期線Ｂ地区　出土遺物観察表 …… 106
別表６　鉄砲町遺跡　出土遺物観察表 …… 106

図　版　目　次

図　　面

1　Ⅳ層下面遺構配置図　1
2　Ⅳ層下面遺構配置図　2
3　Ⅳ層下面遺構実測図　1（鉄３　SB）
4　Ⅳ層下面遺構実測図　2（鉄３　SE・SK）
5　Ⅳ層下面遺構実測図　3（鉄３　SK）
6　Ⅳ層下面遺構実測図　4（鉄３　SK・SD・SX・pit）
7　Ⅳ層下面遺構実測図　5（CB８　SD・SK・pit）
8　Ⅲ層下面遺構配置図　1

9　Ⅲ層下面遺構配置図　2

10　Ⅲ層下面遺構配置図　3

11　Ⅲ層下面遺構配置図　4

12　Ⅲ層下面遺構配置図　5

13　Ⅲ層下面遺構配置図　6

14　Ⅲ層下面遺構配置図　7

15　Ⅲ層下面遺構実測図　1（鉄３ SE）

16　Ⅲ層下面遺構実測図　2（鉄３ SE）

17　Ⅲ層下面遺構実測図　3（鉄３ SE・SK）

18　Ⅲ層下面遺構実測図　4（鉄３ SK）

19　Ⅲ層下面遺構実測図　5（鉄３ SK）

20　Ⅲ層下面遺構実測図　6（鉄３ SK）

21　Ⅲ層下面遺構実測図　7（鉄３ SK）

22　Ⅲ層下面遺構実測図　8（鉄３ SK）

23　Ⅲ層下面遺構実測図　9（鉄３ SD・SX・pit）

24　Ⅲ層下面遺構実測図　10（鉄３ pit、CB８ SE）

25　Ⅲ層下面遺構実測図　11（CB８ SE・SK・SD）

26　Ⅲ層下面遺構実測図　12（CB８ SD・SX、鉄１・２ SK・SD）

27　遺構実測図（鉄１・２ SD・SX）

28　遺構実測図（二期線Ａ SE・SD）

29　鉄砲町３地区Ⅳ層下面遺構出土遺物　1

30　鉄砲町３地区Ⅳ層下面遺構出土遺物　2

31　鉄砲町３地区Ⅳ層下面遺構出土遺物　3

32　鉄砲町３地区Ⅳ層下面遺構出土遺物　4

33　鉄砲町３地区Ⅳ層下面遺構出土遺物　5

34　鉄砲町３地区Ⅳ層下面遺構出土遺物　6

35　鉄砲町３地区Ⅳ層下面遺構出土遺物　7

36　鉄砲町３地区Ⅳ層下面遺構出土遺物　8、　CB８ブロックⅣ層下面遺構出土遺物　1

37　CB８ブロックⅣ層下面遺構出土遺物　2

38　鉄砲町３地区Ⅳ層出土遺物　1

39　鉄砲町３地区Ⅳ層出土遺物　2

40　鉄砲町３地区Ⅲ層下面遺構出土遺物　1

41　鉄砲町３地区Ⅲ層下面遺構出土遺物　2

42　鉄砲町３地区Ⅲ層下面遺構出土遺物　3

43　CB８ブロックⅢ層下面遺構出土遺物

44　鉄砲町３地区Ⅲ層下面遺構出土遺物　4

45　鉄砲町３地区Ⅲ層出土遺物　1

46　鉄砲町３地区Ⅲ層出土遺物　2

47　鉄砲町１・２地区遺構出土遺物　1

48　鉄砲町１・２地区遺構出土遺物　2

49　鉄砲町１・２地区遺構出土遺物　3、　鉄砲町１・２地区包含層出土遺物　1

50　鉄砲町１・２地区包含層出土遺物　2

51　鉄砲町１・２地区包含層出土遺物　3

52　鉄砲町１・２地区包含層出土遺物　4

53　二期線Ａ地区遺構出土遺物　1

54　二期線Ａ・Ｂ地区遺構・包含層出土遺物

写　　真

1　鉄砲町３地区Ⅳ層下面全景

2　Ⅳ層下面検出遺構　1（鉄砲町３地区）

3　Ⅳ層下面検出遺構　2（鉄砲町３地区）

4　Ⅳ層下面検出遺構　3（鉄砲町３地区）

5　Ⅳ層下面検出遺構　4（鉄砲町３地区、CB８ブロック）

6　鉄砲町１・２（及び鉄砲町３の一部）地区Ⅲ層下面全景　1

7　鉄砲町３（及び鉄砲町１・２の一部）地区Ⅲ層下面全景　2

8　CB８ブロックⅢ層下面全景

9　Ⅲ層下面検出遺構　1（鉄砲町１・２地区）

10　Ⅲ層下面検出遺構　2（鉄砲町１・２地区、鉄砲町３地区）

11　Ⅲ層下面検出遺構　3（鉄砲町３地区）

12　Ⅲ層下面検出遺構　4（鉄砲町３地区）

13　Ⅲ層下面検出遺構　5（鉄砲町３地区）

14　Ⅲ層下面検出遺構　6（鉄砲町３地区）

15　Ⅲ層下面検出遺構　7（鉄砲町３地区）

16　Ⅲ層下面検出遺構　8（鉄砲町３地区）

17　Ⅲ層下面検出遺構　9（鉄砲町３地区）

18　Ⅲ層下面検出遺構　10（鉄砲町３地区）

19　Ⅲ層下面検出遺構　11(鉄砲町３地区、CB８ブロック)

20　Ⅲ層下面検出遺構　12(CB８ブロック)

21　Ⅲ層下面検出遺構　13(二期線Ａ地区)、　Ⅱ層下面検出遺構(鉄砲町３地区)

22　鉄砲町３地区Ⅳ層下面検出遺構出土遺物　1

23　鉄砲町３地区Ⅳ層下面検出遺構出土遺物　2

24　鉄砲町３地区Ⅳ層下面検出遺構出土遺物　3

25　鉄砲町３地区Ⅳ層下面検出遺構出土遺物　4

26　CB８ブロックⅣ層下面検出遺構出土遺物　5、
　　鉄砲町３地区Ⅲ層下面検出遺構出土遺物　1

27　鉄砲町３地区Ⅳ層出土遺物、CB８ブロックⅣ層出土遺物

28　鉄砲町３地区Ⅲ層下面検出遺構出土遺物　1

29　鉄砲町３地区Ⅲ層下面検出遺構出土遺物　2

30　CB８ブロックⅢ層下面検出遺構出土遺物、
　　鉄砲町３地区Ⅳ層下面検出遺構出土遺物　5

31　鉄砲町３地区Ⅲ層出土遺物、　CB８ブロックⅢ層出土遺物

32　鉄砲町１・２地区検出遺構出土遺物　1

33　鉄砲町１・２地区検出遺構出土遺物　2

34　鉄砲町１・２地区包含層出土遺物　1

35　鉄砲町１・２地区包含層出土遺物　2、　二期線Ａ地区出土遺物

36　二期線Ａ・Ｂ地区出土遺物、　鉄砲町３地区Ⅱ層下面検出遺構出土遺物

37　鉄砲町３地区Ⅳ層下面検出 SE 168出土ウマ骨

第Ⅰ章　序　　説

北陸自動車道建設に伴う新潟県上越市春日・木田地区の発掘調査は、昭和57年度の試掘調査に始まり、昭和60年の夏に二期線分を残し大半が終了した。二期線分についても昭和62・63年の二か年で終了している。法線内での調査対象面積は約61,000㎡で、この中に6遺跡(木田遺跡・池田遺跡・一之口遺跡・八反田遺跡・鉄砲町遺跡・高畑遺跡)が含まれる。これらの整理作業は昭和59年度から断続的に実施しており、今までに池田遺跡〔寺崎・鈴木・田海ほか1985〕、高畑遺跡〔寺崎・肥田野・田中1986〕、一之口遺跡西地区〔坂井ほか1986〕(以上〔鈴木・春日・高橋1994〕から転載)、一之口遺跡東地区〔鈴木・春日ほか1994〕が報告されている。

今回の報告書は鉄砲町遺跡の調査対象範囲(14,800㎡のうち、第一期線分鉄砲町1(CB 10ブロックを含む)・2(PR 9ブロックを含む)・3(CB 8ブロックを含む)地区と第二期線分A・B地区を合わせた9,969㎡について(図4参照)である。遺跡の東側新潟寄りは、八反田遺跡に連続している。本遺跡の範囲は鉄砲町3地区CB 8ブロックまでとした。

1．遺跡の環境

鉄砲町遺跡周辺の地理的・歴史的環境については、『北陸自動車道　上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅰ』〔寺崎・鈴木・田海ほか1985〕から『北陸自動車道　上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ』〔鈴木・春日・高橋1994〕までに詳細な記述があるので、これに譲る。

2．周辺の地形と遺跡分布図(図1)

鉄砲町遺跡は、春日・木田地区遺跡群の西側にあり、北陸自動車道建設に係ることになった。春日・木田地区は上越市高田・直江津両市街地のほぼ中央から西寄りの春日山東麓に位置する。この位置は関川支流の正善寺川左岸にあり、標高はおおむね15mを標準とする。

高田平野は、関川水系と保倉川水系とによって形成された沖積平野である。関川は平野の西寄りを北流し、現在は河口付近で保倉川と合流して直江津港で日本海に注ぐ。途中、大小の河川を合わせるが、高田平野を形成した代表的なものに、保倉川とその支流の飯田川・戸野目川、関川とその支流の櫛池川・別所川・矢代川・青田川・正善寺川がある。高田市街地は平野の北西部、春日山東麓にあって微高地を形成する。関川がその手前で櫛池川・別所川・矢代川を合わせ、この微高地を西側に抱き込んで南から北に流れる。青田川は市街地を流れ、高田城の堀

用水に利用されている。正善寺川は西頸城丘陵北端から高田市街地と直江津市街地との間に流れ出して、平野の西北端を形成した。現在は流路を変更されて、岩木・春日地区から木田地区で関川に合流する。

保倉川はもと西ケ窪浜で日本海に注いでいた。全ての河川は蛇行状に北流する。数多くの河川は数多くの自然堤防を形成した。遺跡は山麓とこの自然堤防上に存在することになる。

県教委遺跡台帳(1994)によると、奈良・平安時代の遺跡は、関川右岸においては各自然堤防上への集中及び中屋敷地区以南での散在が認められ、春日山東麓では存在が認められない。中世の遺跡は重川左岸の自然堤防上及び春日山東麓並びに高田・直江津間の中屋敷周辺に集中するようにみられる。この遺跡分布からは、古代から中世にかけての占地範囲がある程度知られるとともに鉄砲町遺跡・一之口遺跡が存在する中屋敷・寺分・木田といった現正善寺川左岸の各地区と、これらの地区以南の範囲が、古代から中世に連続して重要な位置であったことが再確認できる。

3．調査に至る経過

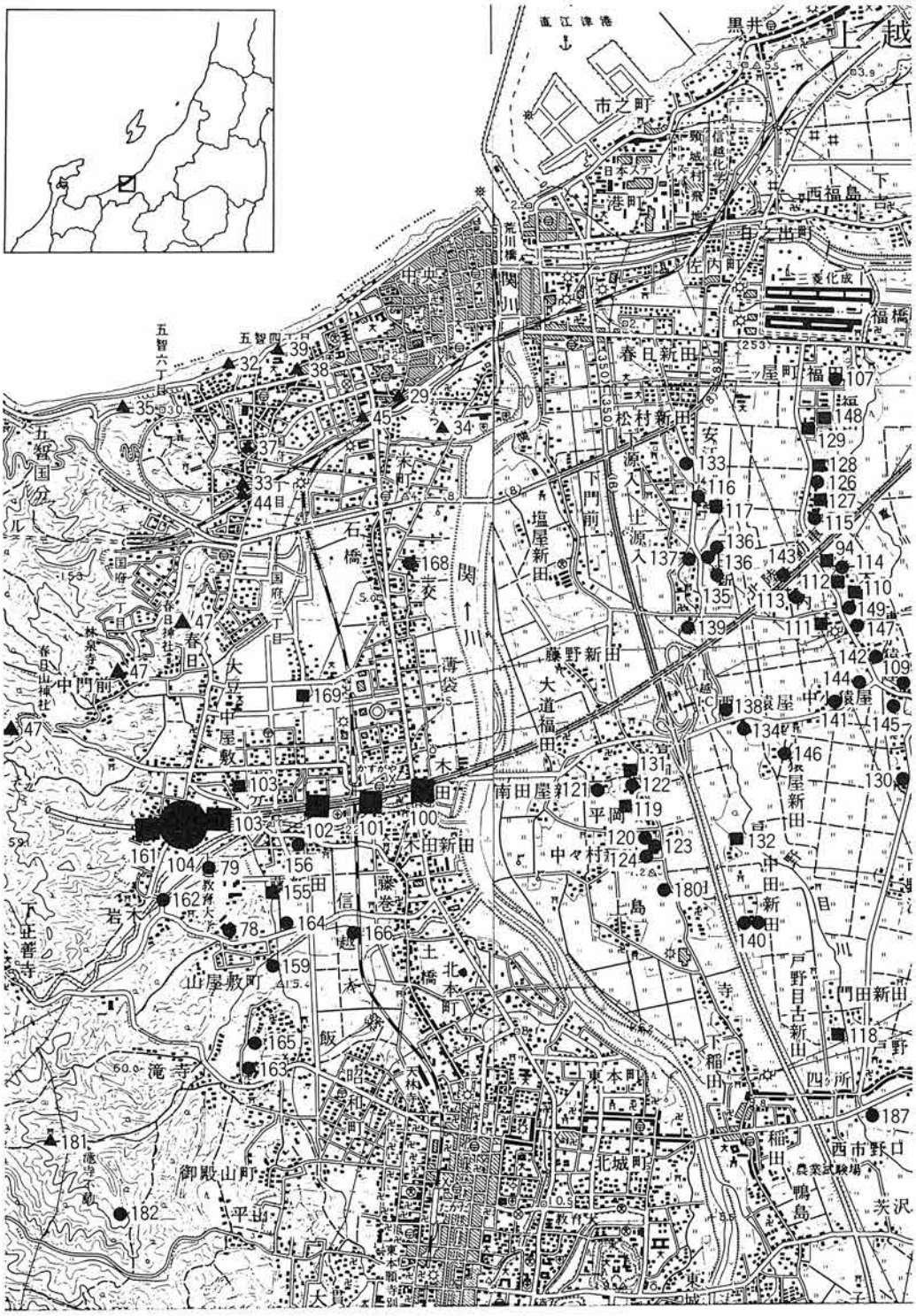
調査に至る経過は『北陸自道車道　上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅰ』〔寺崎・鈴木・

古代の遺跡
78 山屋敷Ⅱ遺跡　79 山畑遺跡　107 福田屋敷添遺跡　109 一番割遺跡　113 谷地B遺跡　114 下押出遺跡　115 舞台野遺跡　116 天池B遺跡　120 塩地場B遺跡　121 観音堂B遺跡　122 観音堂A遺跡　123 新道農協倉庫北遺跡　124 新道農協倉庫南遺跡　126 寺屋敷遺跡　130 荒屋遺跡　133 西袋遺跡　134 小猿屋観音堂遺跡　135 北原B遺跡　136 一番割遺跡　137 北原A遺跡　138 古苗代遺跡　139 駒林遺跡　140 越前遺跡　141 横ノ浦遺跡　142 下野遺跡　143 谷地A遺跡　144 蔵屋敷遺跡　145 竹之内遺跡　146 沢田遺跡　147 上押出遺跡　149 大野遺跡　156 藤新田遺跡　159 仏香遺跡　162 板橋遺跡　163 飯小学校裏遺跡　164 藤巻西遺跡　165 飯北遺跡　166 本郷新田　168 高畑遺跡　180 角畑遺跡　182 滝寺古窯跡　187 中島廻り遺跡

中世の遺跡
29 安国寺跡　32 北塚　33 愛宕国分廃寺　34 至徳寺跡　35 居多神社旧社地　37 光源寺供養塔　38 浜善光寺石塔群　39 善光寺浜石塔群　44 山崎窯跡　45 御館跡　47 春日山城跡　125 中江下遺跡　161 高畑遺跡　181 伝吉祥寺跡

古代・中世の複合遺跡
94 宮野遺跡　100 木田遺跡　101 池田遺跡　102 一之口遺跡　103 八反田遺跡　104 鉄砲町遺跡　110 岡原遺跡　111 橋子田遺跡　112 大野Ⅱ遺跡　117 天池A遺跡　118 屋敷付遺跡　119 塩地場遺跡　127 屋敷添遺跡　128 沢田遺跡　129 下畑遺跡　131 梨子ノ木遺跡　132 若宮遺跡　148 深谷遺跡　155 江向遺跡　161 高畑遺跡　169 四ツ屋遺跡

（遺跡No名称は新潟県遺跡台帳1994と一致する）



●古代　▲中世　■古代・中世

図１　周辺の地形と遺跡分布図

（国土地理院発行 平成元年「高田東部」平成5年「高田西部」昭和63年「柿崎」1:50,000原図）

田海ほか1985〕から次の文を転載する。

北陸自動車道は総延長480㎞に及ぶもので、起点を新潟市におき、日本海沿岸の新潟・富山・石川・福井の各県を経由し滋賀県米原町で名神高速道に接続する一大高速自動車道である。この路線は各県の主要都市を連絡し、さらに関西方面に直結させるものであり、関連する地区はもとより地域の開発促進に係る役割はきわめて大きいものがある。

昭和45年８月、この一大事業に対して文化財保護部局である県教育委員会は在地研究者に依頼して、新潟から長岡間の埋蔵文化財包蔵地の調査を行った。長岡から上越までの区間の埋蔵文化財については昭和46年１月29日付けで在地研究者である室岡博、中村孝三郎、金子拓男、花ケ前盛明の各氏に自動車道建設及びそれに係る可能性のある遺跡について現況調査を依頼し文書による回答を提出してもらった。上越市(当時、直江津市・高田市)を担当した花ケ前氏はこの中で15遺跡を報告している。

昭和48年４月25日、長岡から上越までの路線発表があり、県教育委員会は逐次遺跡の分布調査を実施した。上越市については国指定史跡春日山城跡が関連することになり、その取扱について昭和52年７月12日、53年３月27日、４月18日、７月11日、54年４月18日、６月11日に県教育委員会は日本道路公団と協議し、路線や施工方法等について話を進め、保護に万全を期した。

春日山城に係ることが予想された法線近接の通称御馬山地区が昭和55年上越市教育委員会によって発掘されたが、遺構等の存在は確認されなかった。また、平地部については、法線内の宅造地域及び法線に近い畑地の一部が試掘され、後者からは古代・中世の遺物が出土した。また、この調査期間中に随時行なわれた付近の遺跡分布調査によって、法線内の岩木地区から木田地区までの畑地の大部分には古代・中世の土器類が散布していることが知られるに至った。この地区にはまた鉄砲町、一之口等中世の民衆生活に由来すると考えられる小字名が散見されることは、研究者からつとに指摘されていたところでもあった。このように、現在の微高地には土器類が散布している事実及び文献上の研究成果等の考察から、この地区一帯は微高地はもとより、現在畑地として使用されている地域にも遺物、遺構が埋在していることが想定されるに至ったのである。そこで、昭和56年２月２日の協議で「春日山城の本城は解決したが、山地から木田集落までの平地は調査が必要である」旨県教育委員会が提示し、同年10月１日の協議で「春日山城下の調査を実施してほしい」との依頼が日本道路公団から出され、昭和57年２月10日付で昭和57年度発掘調査遺跡として文書依頼された。昭和57年８月12日、県教育委員会は日本道路公団上越工事事務所庶務課長、同担当工事長と現地で立合い協議し、調査方法、面積等について打合わせを行い、調査用基準杭打設を指示した。調査は法線内の微高地で土器散布の多い中屋敷地区の畑地一帯を発掘調査し、同時に調査期間内に木田地区北端から春日山城の山地までの法線内全地域の試掘を実施することとし、８月23日から11月６日までを調査期間とした。

第Ⅱ章　調査の概要

1．確認調査

昭和57年に実施した。方法・結果については『北陸自動車道　上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅰ』〔寺崎・鈴木・田海ほか1985〕から次の文・図を転載する。

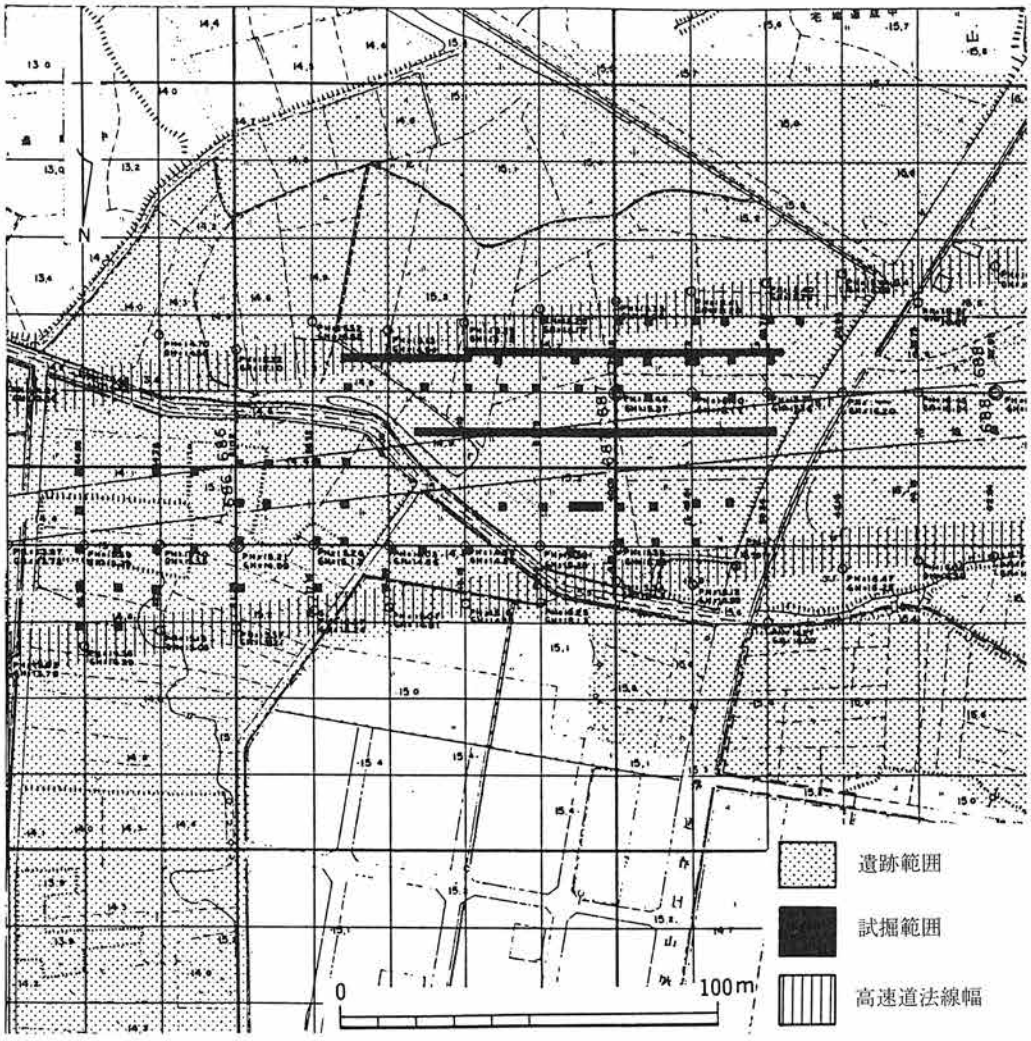


図２　確認調査範囲

A．確認調査の方法

グリッド・トレンチを併用し、グリッドでは作業員による手掘りで100㎡に４㎡の割合を試掘した。トレンチでは法バケット装着のバックホーを用い、幅２ｍのトレンチを階段状に掘削調査した。遺物または遺構を検出した段階で遺跡と認定し、調査を中断した。その結果、層序の把握が十分に行われず、本発掘調査に支障があった。

B．確認調査の結果

現状は宅地・畑地・水田で、本発掘調査の対象面積は14,800㎡である。トレンチ及び試掘グリッドは66か所に設定し、その延べ面積は648㎡である。なお、今回の調査では遺跡南西側の範囲の推定は不可能であった。

層序は０・Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵの５層からなる。Ⅳ層は灰黄褐色を呈し、炭化物を多く含み、土師器・須恵器などが出土することから遺物包含層と考えられる。ピットが検出され、縄文土器・土師器・須恵器・中世陶器なども出土していることから縄文時代・古代～中世にかけての遺物

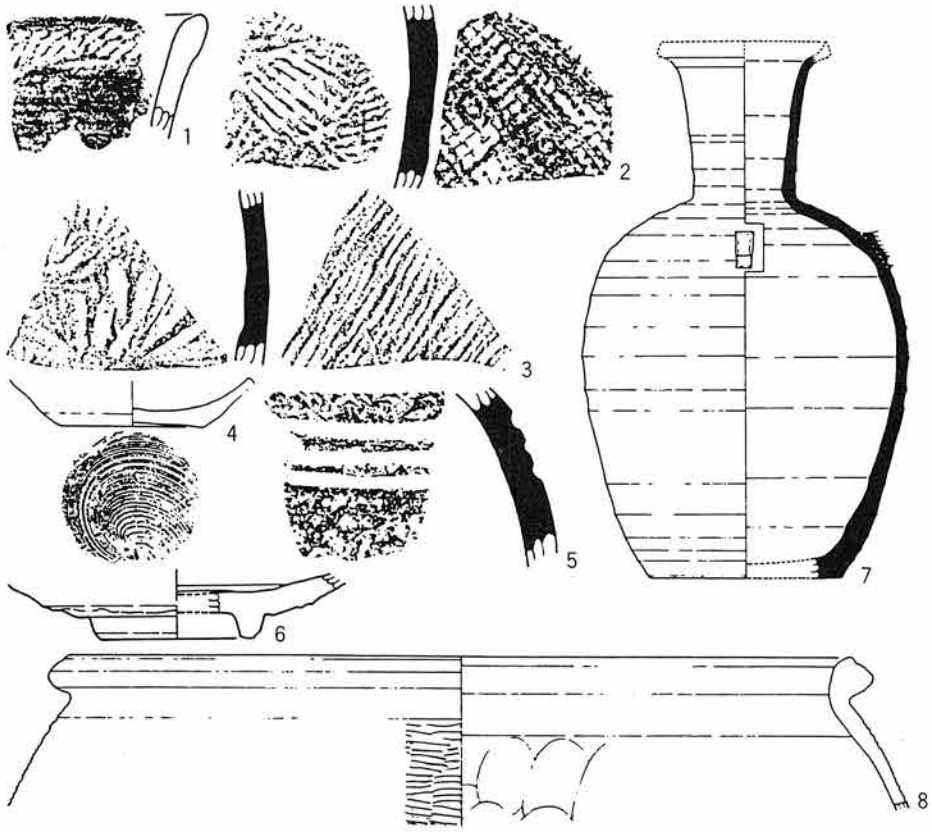


図３　確認調査出土遺物

包含地と考えられる。

図３の１は７Ｃ８Ｉｆから出土した縄文土器の深鉢の口縁部破片である。口縁最上部にはLRの縄文が施され、器の内外面はみがかれている。縄文後期後半以降に比定される。７は６Ｃ９Ｘｅから出土し、口径4.4㎝・底径５㎝・器高28㎝と推定される須恵器の双耳瓶である。胴最下部は篦削り、それ以外はロクロナデ整形がなされている。焼成は良好で、胎土は小礫を含むが緻密である。２・３は６Ｂ17Ｖｉと７Ｃ８Ｉｆから出土した須恵器の甕の胴部破片で、器の外面には格子状及び平行沈線の、内面には放射線状の叩きが施されている。５は６Ｂ４Ｖｊから出土した須恵器の壺の肩部破片と考えられる。３条の平行沈線が巡り、その上部にカキ目が認められるが、時期等の詳細は不明である。４は５Ｂ23から出土した土師器の無台坏である。底径は5.6㎝を測り、底部には回転糸切りの痕跡が認められる。色調は灰褐色を呈し、胎土は緻密である。８は７Ｃ７Ⅲａから出土した珠洲系陶器の大甕の口縁部破片である。口径43㎝と推定される。胴部の外面には平行沈線、内面には長円形の叩きが施されており、口縁部の内部はロクロナデ整形がされている。焼成は良好で、色調は青みがかった黒褐色をなし、胎土には白い砂を多く含んでいる。15世紀前半に比定される。６は５Ｃ４Ｘｅから出土した近世磁器である。底径約４㎝で、胎土は灰褐色を呈し、緻密である。内面の釉削り取り部分及び底部外面に炭が付着している。

Ｃ．確認調査の体制

調査主体	新潟県教育委員会(教育長　久間健二)			
管　理	総　括	南　義昌	新潟県教育庁文化行政課長	
	管　理	歌代荘平	〃	課長補佐
	庶　務	飯口　猛	〃	庶務係主任
		若杉幸三	〃	庶務係主事
		伊藤和子	〃	庶務係主事
調　査	指　導	金子拓男	〃	埋蔵文化財係長
	担当者	横山勝栄	〃	埋蔵文化財係文化財主事
	調査員	寺崎裕助	〃	埋蔵文化財係学芸員
		田海義正	〃	埋蔵文化財係学芸員
		高橋　勉	〃	埋蔵文化財係嘱託員

2．グリッドの設定(図4)

春日・木田地区のグリッドは全遺跡に共通している。自動車道センター杭STA 679を基準とし、南西端に原点を置いた。グリッドは大・中・小を設定し、大グリッドは100m、中グリッドは20m、小グリッドは2mの方眼とした。大グリッドは東西を数字列(西→東)、南北をアルファベット列(南→北)とし、組み合わせによって「1A」のように表示した。中グリッドは大グリッド内を25等分して、南西から北東に番号付けした。小グリッドは東西をローマ数字列、南北をアルファベット小文字列で「Ⅰa」のように表示した。従って、位置を表す場合は「1A 25Ⅱb」のようになる。

3．調査ブロックの設定(図4)

工事区の都合により、現地発掘調査は昭和59・60・62・63年の4か年に渡った。調査範囲は一期線分を1・2・3地区に分けて設定されたが、道路・水路などに係る構造物部分を先行工事するとされたため、調査もこれらのブロックを先行した。二期線分は一期線開通後となったため、高盛り土の直近を掘削することは危険であるとされ、調査区は狭く2ブロックに分けることになった。また、1・2地区と3地区とでは遺物包含層のあり方が異なっていた。そのため、実際の現地調査及び整理作業においてはグリッドのほかにこれらの地区・ブロックを併用した。従って、一期線分を鉄砲町1・2地区、鉄砲町3地区、CB 8ブロック、CB 10ブロックに分けて、二期線分を二期線A地区、二期線B地区に分けて行う。なお、鉄砲町1・2地区と鉄砲町3地区との境界については、6C5・10、6B25から東を鉄砲町3地区とする。

4．調査の方法

発掘調査は、地区あるいはブロックごとに大・中・小のグリッドによって実施した。調査の作業は、おおむね次のようである。

表土除去　グリッド杭打ち　メインセクションベルト設定　基本層序設定兼排水溝設置
包含層掘削　遺構確認　遺構半割　遺物収納　断面観察　写真　図面　完掘　写真　図面
遺物収納　底面等観察　写真　遺構配置図

表土除去はバックホー等重機を用いて実施した。グリッドは確認調査時に春日・木田地区遺跡群全体に設定したものをそのまま利用し、測量業者に委託して20mメッシュの基準杭を打設

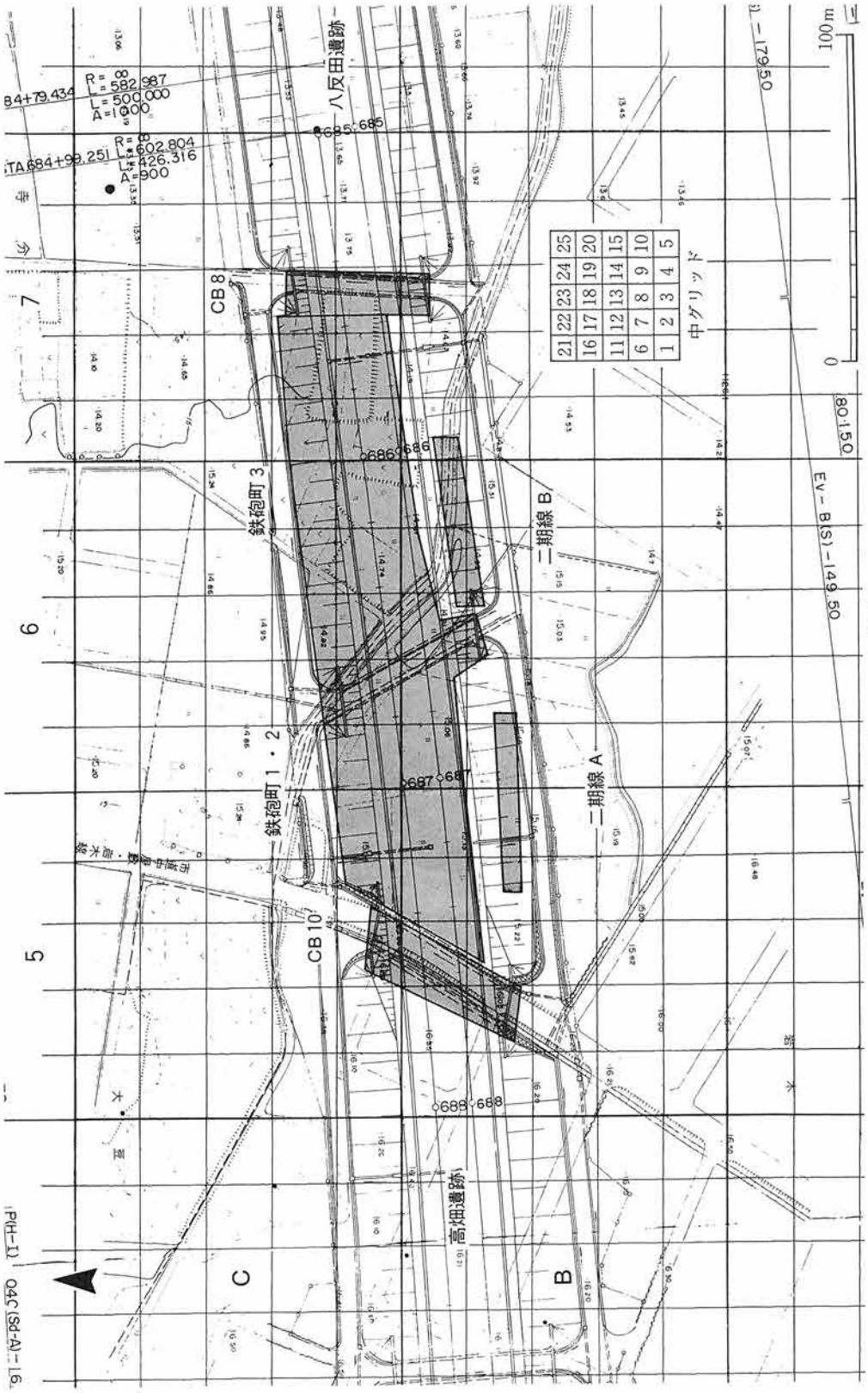


図4　調査区とグリッド配置図

した。

基本層序の設定は、メインセクションベルト(中グリッドライン)の設定と、この両側の排水溝を兼ねた先行トレンチによって、各年度・地区の調査担当者が行ったが、鉄砲町１・２地区と鉄砲町３地区とでは堆積土の在り方が異なっていた。また、各年度・地点によって堆積土の観察・記述に異なりがあり、統一的ではない。

包含層の発掘は、作業員のスコップ・ジョレン作業によって行い、各土層面で遺構確認を行った。遺構は、作業員の移植ごて作業によって、大型のものを十字・小型のものを一字・溝状のものは複数か所を一字切りとして発掘し、埋土の状況・遺物の出土状況等を記録した。

遺物は出土層位・グリッド及び遺構 No・遺物 No を記して収納した。包含層中の遺物は小グリッドごとに層序と遺物 No を記して収納した。

写真撮影は基本層序・遺構配置・遺構・遺物を対象とした。35㎜カラー・モノクロフィルムを用い、各調査員が撮影を分担し、撮影ごとに写真台帳に記録した。部分的に空撮を利用した範囲もある。

図面作成は基本層序・遺構配置・遺構・遺物を対象とした。基本層序については1/20を、遺構配置図については平板を用いた1/40を、微細図については1/10を基準として1/20を併用した。部分的に空測を利用した範囲もある。

各種観察記録は図面に直接記入したほか、野帳・日誌に記入した。

5．調査の概要

発掘調査は暫定２車線供用という日本道路公団の都合により、一期(昭和59・60)・二期(昭和62・63)の２期に分けて実施することとした。しかし、初めてのことでもあり、双方の協議に手落ちがあったため、一期調査範囲と二期調査範囲との間に、調査できない空白地帯が残ってしまった。これは高速道路の盛り土法面と法尻から調査掘削部分までの逃げの範囲とである。

A．第一期線調査

昭和59・60の２か年に渡って調査を実施した。

1）昭和59年度調査

59年度調査は鉄砲町３地区カルバート８ブロック及び鉄砲町１地区カルバート10ブロックの２地点を調査対象とした。

鉄砲町３地区カルバート８ブロックでは中世の溝・土坑・杭列跡・井戸及び古代のピット群を検出した。古代ピット群は次年度調査結果と合わせることにより掘立柱建物跡になる可能性

もある。遺物は中世珠洲系陶器のほか、井戸からウリ果皮(ユウガオか)・曲物片が出土し、古代の土師器・須恵器も検出された。

鉄砲町1地区カルバート10ブロックからは平安時代の杭列・溝状遺構の検出をみた。また、所々に焼土が分布しており、この周辺から遺物の発見されることが多かった。遺物は土師器片・須恵器片である。

昭和59年度調査体制

調査主体	新潟県教育委員会(教育長　久間健二)			
管　理	総　括	高橋　安	(新潟県教育庁文化行政課長)	
	管　理	大越敏夫	(　〃	課長補佐)
	庶　務	菊池　脩	(　〃	庶務係長)
		高橋幸治	(　〃	主事)
調　査	指　導	中島栄一	(　〃	埋蔵文化財係長)
春日・木田地区調査担当		岡本郁栄	(　〃	文化財主事)
鉄砲町遺跡調査担当		山本　肇	(　〃	学芸員)
(CB 8 ブロック)				
	調 査 員	石原　悟	(　〃	文化財主事)
		國島　聡	(　〃	嘱託)
(CB 10 ブロック)				
	調 査 員	田海義正	(　〃	学芸員)
		鈴木俊成	(　〃	嘱託)
		遠藤孝司	(　〃	嘱託)

2）昭和60年度調査

鉄砲町2地区プレロード9ブロック・鉄砲町1・2地区の残部・鉄砲町3地区の3地点について調査を実施した。

鉄砲町2地区プレロード9ブロックの北半部では表土下に平安時代の遺物包含層が広がっており、南半部では古代・中世の河川が遺物包含層を削っている様子が認められた。

鉄砲町1・2地区の残部の東側では平安時代の遺物包含層が一部に遺存する。西側西端では古代の井戸とみられる遺構や溝が検出されている。

鉄砲町3地区では遺構及び近世の高盛土による畑が存在した。高盛土の表面－10cmで中世の井戸・土坑・溝・ピットが、更に－5cmで平安時代の掘立柱建物・竪穴状遺構・井戸・土坑・溝・ピットが検出された。ほかに、ウマ脚骨・磨製石斧が出土している。

昭和60年度調査体制

調査主体	新潟県教育委員会	（教育長　有磯邦男）	
管　理	総　括	高橋　安	（新潟県教育庁文化行政課長）
	管　理	田中浩一	（　〃　課長補佐）
	庶　務	菊池　脩	（　〃　庶務係長）
		高橋幸治	（　〃　主事）
調　査	指　導	中島栄一	（　〃　埋蔵文化財係長）
春日・木田地区調査担当		寺崎裕助	（　〃　文化財専門員）
（1・2地区）			
	調査担当	田海義正	（　〃　文化財専門員）
	調査員	高橋保雄	（　〃　文化財専門員）
		高橋昌也	（　〃　文化財専門員）
（3地区）			
	調査担当	山本　肇	（　〃　文化財専門員）
	調査員	柳　恒雄	（　〃　文化財専門員）
		肥田野弘之	（　〃　文化財専門員）

B．第二期線調査

第二期線調査は昭和62・63の2か年にわたって実施した。

1）昭和62年度調査

二期線B地区を調査対象とした。昭和59・60年の調査区（鉄砲町1・2地区）に隣接する位置にあり、旧河川跡のほか溝を検出し、羽口・鉄滓などが出土した。

昭和62年度調査体制

調査主体	新潟県教育委員会	（教育長　田中邦正）	
管　理	総　括	大塚克夫	（新潟県教育庁文化行政課長）
	管　理	矢部　亮	（　〃　課長補佐）
	庶　務	土田　玲	（　〃　主事）
調　査	指　導	中島栄一	（　〃　埋蔵文化財係長）
	調査担当	鈴木俊成	（　〃　文化財専門員）
	調査員	高橋昌也	（　〃　文化財専門員）
		竹田和夫	（　〃　文化財専門員）

2）昭和63年度調査

二期線A地区を調査対象とした。昭和60年の調査区(鉄砲町3地区)から連続する位置にあり、平安時代の井戸及び中世末(16世紀)の用水路が検出された。

昭和63年度調査体制

調査主体	新潟県教育委員会	(教育長　田中邦正)	
管　理	総　括	大塚克夫	(新潟県教育庁文化行政課長)
	管　理	矢部　亮	(　〃　課長補佐)
	庶　務	境原信夫	(　〃　主事)
調　査	指　導	中島栄一	(　〃　埋蔵文化財係長)
	調査担当	田海義正	(　〃　文化財専門員)
	調査員	山本幸俊	(　〃　文化財専門員)
		佐藤俊幸	(　〃　文化財専門員)
		梶　良成	(　〃　文化財専門員)
		本間桂吉	(　〃　嘱託)

6．整理の経過

遺物の水洗・注記等の基礎作業は発掘調査に平行して、現場で実施することを基本とした。整理作業は埋文事業団の発足後に県教委から埋文事業団が委託を受けて、平成4～6年に曽和分室で実施した。整理報告にかかわる実質的な作業は平成4・5の2か年で終了している。

遺物の整理は戸根・鈴木の指導を得て、横田が4・5・6年度に実施し、記述した。

遺構の整理は戸根・鈴木の指導を得て横田が4年度に基礎整理を実施し、藤巻が5・6年度に記述した。

平成4年度整理体制

主　体	新潟県教育委員会	(教育長　本間栄三郎)	
整　理	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団		
	管　理	藍原直木	(専務理事・事務局長)
		渡辺耕吉	(総務課長)
		茂田井信彦	(調査課長)
	指　導	戸根与八郎	(　〃　副参事調査第1係長)
	整理担当	横田　浩	(　〃　専門員)
	庶　務	藤田守彦	(総務課主事)

平成５・６年度整理体制

主　　体　新潟県教育委員会（教育長　本間栄三郎）

整　　理　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管　　理　藍原直木　（専務理事・事務局長）

渡辺耕吉　（総務課長）

茂田井信彦（調査課長）

整理担当　藤巻正信　（　〃　副参事調査第１係長）

調 査 員　横田　浩　（　〃　文化財調査員）

庶　　務　藤田守彦　（総務課主事　５年）

泉田　誠　（　〃　主事　６年）

7．記述の方法

鉄砲町遺跡は現地調査が多年次にわたっている。また、調査作業の便宜のため、地区ごとの発掘調査とした。その結果、３枚の遺物包含層と遺構・遺物が検出されたが、それらは遺跡全面での普遍的な存在ではなかった。上層は近世、中層は平安時代末期・中世、下層は平安時代中期に所属する。

調査はアルファベットと数字による大・中・小グリッドのほかに、工事区による地区ブロックによった。地区ブロックは西(富山寄り)からCB 10ブロック、鉄砲町１地区・２地区・３地区、CB８ブロックとし、ほかに二期線分Ａ地区・Ｂ地区がある。

上(Ⅱ)層の包含層は鉄砲町３地区の一部にのみ存在した。中(Ⅲ)・下(Ⅳ)層は鉄砲町３地区で明らかな間層をもち分離可能であったが、鉄砲町１・２地区では明らかな包含層が存在せず一面での遺構検出となった。そのため、鉄砲町１・２地区検出の数少ない遺構はⅢ層下面検出遺構として一括した。

報告は基本層序・遺構説明・遺物説明とし、若干のまとめを付した。

遺構については、本文は層序・地区でまとめ、掘立柱建物・井戸・土坑・その他・ピットの順に報告する。図面・写真も、本文と同じく層序・地区でまとめ、遺構の種類ごとに遺構番号の順番に報告した。

遺物については、本文は地区・層序ごとに、遺物出土量が比較的多い遺構の出土遺物・それ以外の遺構出土遺物・包含層出土遺物の順に器種ごとに報告する。図面・写真は地区・層序で分けて、遺構ごとに出土遺物をまとめ、遺構の報告順に配置し、その後、包含層出土遺物を報告した。観察表は、実測図を載せた遺物を地区・層序で分け、遺構・包含層の順に配置し、その後、写真のみ載せた遺物を報告した。遺物の器種分類は、第Ⅳ章１で記述する。

第Ⅲ章　遺　　跡

1．基本層序

遺跡全体は同一の層序を示さない。遺跡の西(富山)側と東(新潟)側とで異なり、調査範囲のほぼ中央から西半部は低湿地となっている。このことは昭和60年の鉄砲町１・２地区調査日誌に次のように記録されている。

４月16日　「暗渠溝の排土に旧正善寺川の上部に堆積している青灰色の砂がみられる。このため、遺跡の相当部分が河川によって破壊されているものと考えられる。」

４月18日　「土層は６Ｃ４Ｖｊの畑と水田の境で、即ち鉄砲町２地区と３地区とで完全に変わる。鉄砲町２地区では、現在の耕作土の直下が平安時代の遺物包含層と考えられる灰色粘土、その下がシルト質の土壌で旧正善寺川の存在を予想させる。……中略……遺物包含層は１層のみである。」また、「包含層中から平安・中～近世の遺物が遺構と一緒にみつかる。厚さ15cmほどの中に凝縮されていることが予想される。古代の遺構と中世以降の遺構とを覆土で分離することは困難である。」

遺跡は関川の支流である正善寺川の現左岸に位置し、この川の影響を強く受けているため、堆積層序も一様ではない。加えて、現地調査が数次・多地区ブロックに渡ったため、観察の基準が統一されていない。

図５では図面整理の後、春日・木田地区遺跡群の共通的一般的基本層序にあわせて、本遺跡の基本層序を表示した。第Ⅰ層は現水田の耕作土である。下位の第Ⅱ層から第Ⅳ層は部分的な存在で、調査範囲のほぼ中央から東半部だけに存在した。第Ⅱ層は東半の一部だけに存在し、混入遺物から近世に所属する攪乱層とみられる。第Ⅲ層は中世の堆積層であるが、西半部(鉄砲町１・２地区)では欠落している。第Ⅳ層は平安時代から中世の攪乱層とみられ、第Ⅲ層よりは広い分布を示すが、西半部の大半には存在しない。第Ⅴ層以下は旧河川堆積物とみられる粘土・シルト・砂層で、遺跡の地山を形成する。

これによると、鉄砲町３地区では図５土層柱状図ｆ～ｊ・ｌ・ｎ～ｐの各地点にみられるように遺物包含層としてのⅢ層からⅣ層の存在がおおむね認められるが、他の地点即ち鉄砲町１・２地区においては遺物包含層と認められる層序の存在は欠落していた。

なお、細かくはｉ点を除いて古墳時代の遺物包含層の発達も認められず、同時代の遺物も存在しない。また、ｋ点(CB８ブロック)の地表面ほかが異常に低いのはプレロード盛土による地

盤沈下の結果である。ほかにも盛土による沈下のためとみられる凹凸が顕著に認められる箇所がある。

2．遺　　構

鉄砲町遺跡には、全般的な存在ではないにしても、3層の遺物包含層と3枚の遺構確認面とが存在した。上(Ⅱ)層は部分的な存在で近世に所属し、中(Ⅲ)層は平安末・中世に所属する。

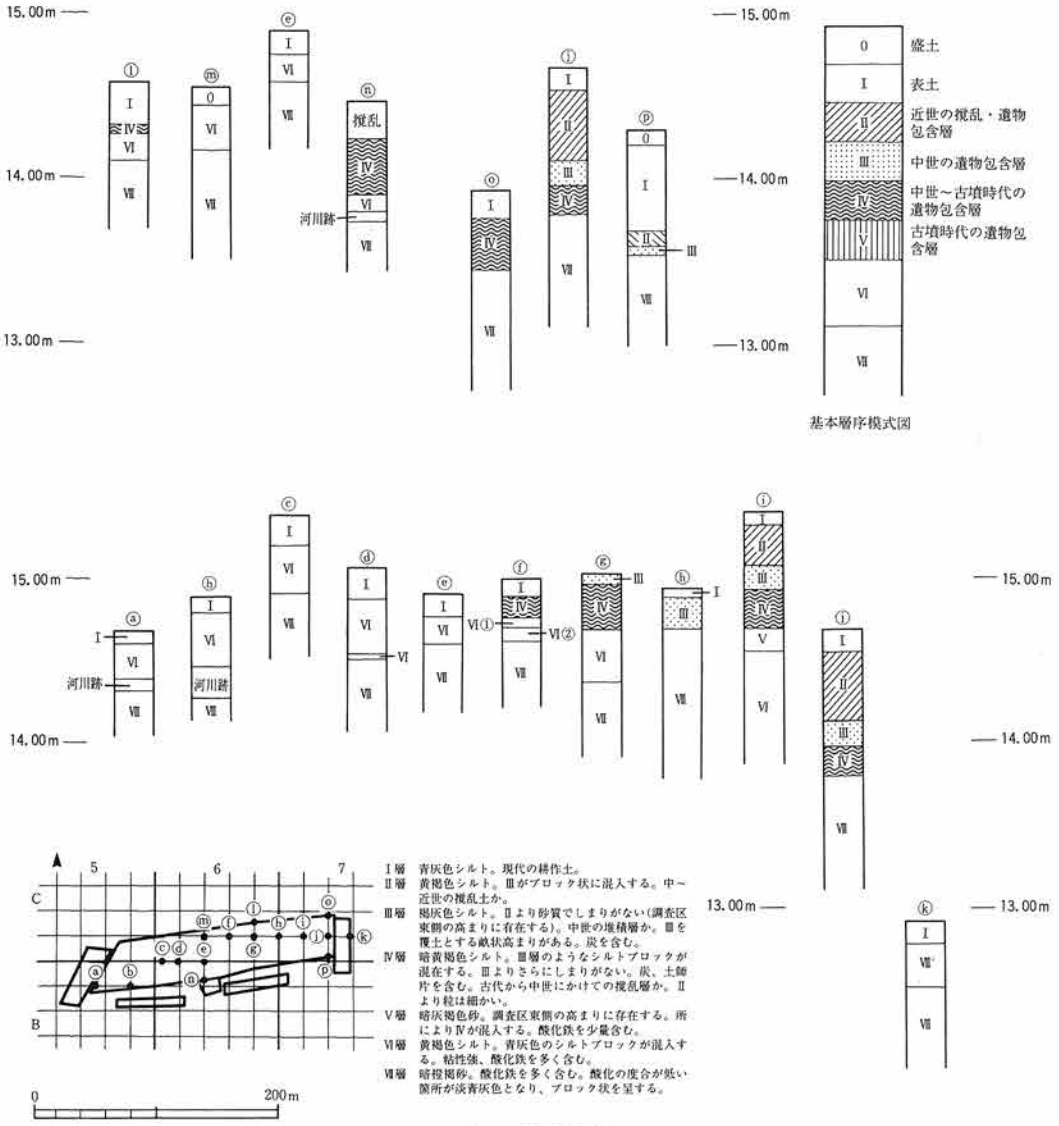


図5　基本層序

下(Ⅳ)層はやはり部分的な存在で平安時代に所属するものとみられるが、中層調査の段階で検出できなかった遺構が混在する。

また、調査の実施年度によって調査ブロックが複数に分けられている。従って、説明は層序ごと、地区ごとに記述する事とする。

なお、調査範囲の西半部(鉄砲町１・２地区)では第Ⅲ層とした遺物包含層の中層が明らかに欠落しているため、第Ⅳ層下面で検出した遺構が古代・中世のいずれに属するものか峻別できないので、中世(Ⅲ)層に一括した。

A．Ⅳ層下面検出遺構

鉄砲町１・２地区

この地区には第Ⅲ層は存在しなかった。そのため、第Ⅰ層よりも下位で検出された遺構は第Ⅲ層下面検出の遺構に一括した。

鉄砲町３地区

掘立柱建物・井戸・土坑・溝・ピットがある。

掘立柱建物

現地調査で３棟が確認されている。図上操作による更なる建物の復元は行わない。

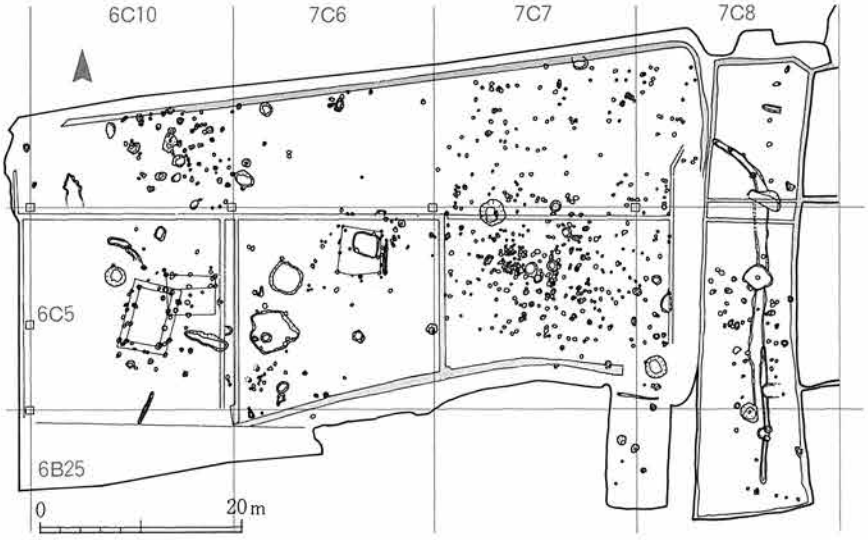


図６　Ⅳ層下面検出遺構群

SB 196（図面３、写真２）

６Ｃ５Ｖ～Ⅷc～gに存在する掘立柱建物である。短辺１間（320cm）・長辺３間（560cm）で、長軸方向はＮ－14°－Ｅである。束柱はなく、柱間寸法はほぼ等間である。長軸はもう１間伸びて４間になる可能性もあるが、側柱が伸びておらず、３間までとした。身舎の柱掘形は径24×24cm～54×40cmの円形で、深さは検出面から９～25cmである。柱根及び柱痕は検出されていない。柱穴からの出土遺物はない。現地調査者は、３面あるいは４面廂を想定しているが、廂部の柱掘形は１か所（p 14）を除いてコーナー部が不明であり、柱穴数も不安定である。柱掘形は20×16cm～44×48cmの円形で、深さは16～27cmである。柱穴からの出土遺物はない。

No	長 短 深	No	長 短 深	No	長 短 深	No	長 短 深
Ｐ１	36×30×22	Ｐ２	54×40×44	Ｐ３	34×24×26	Ｐ４	44×38×37
Ｐ５	34×24×29	Ｐ６	42×24×17	Ｐ７	36×30×24	Ｐ８	52×32×52
Ｐ９	36×36×15	Ｐ10	24×24×９	Ｐ11	48×44×18	Ｐ12	28×28×16
Ｐ13	42×42×19	Ｐ14	30×24×26	Ｐ15	20×26×17	Ｐ16	24×20×27
Ｐ17	24×24×14						

（cm）

SB 197（図面３、写真２）

６Ｃ５ⅧⅨegに存在する掘立柱建物である。現地調査者は２×２間の総柱を想定している。短辺（南北）400cm・長辺480cmで、長軸方向はＮ－０°－Ｅである。柱間寸法は東西が240cm等間・南北が120～280cmで、南北に著しく偏している。また、南側の両コーナーでは柱穴は検出されていない。柱掘形は径28×24cm～40×40cm、深さは15～40cmである。柱根及び柱痕は検出されていない。柱穴からの出土遺物はない。

No	長 短 深	No	長 短 深	No	長 短 深	No	長 短 深
Ｐ１	40×32×15	Ｐ２	28×24×22	Ｐ３	40×40×40	Ｐ６	40×36×32
Ｐ８	40×40×30	Ｐ９	38×42×31				

（cm）

SB 199（図面３、写真２）

７Ｃ１Ⅵ～Ⅷg～jに存在する掘立柱建物である。短辺２間（400cm）・長辺３間（464cm）で、長軸方向はＮ－７°－Ｅである。柱間寸法は短辺が160・240cm、長辺120～190cmである。北側の棟持柱は検出されておらず、東側桁持柱列及び南側柱列は不揃いである。柱掘形は径20×16cm～40×32cm、深さは11～47cmである。柱根及び柱痕は検出されていない。柱穴からの出土遺物はない。

東側桁持柱列にほぼ平行して、長さ320cm・幅33cm・深さ14cmの溝SD 177（図面６）が存在する。溝中に遺物はなく、平面位置だけからは付属する雨落ち溝ではないかとも考えられる。ま

た、建物のほぼ中央には方形木組みの井側をもつ SE 201(図面４、写真２)が存在する。現地調査者によるとこの井戸は上層のⅢ層調査段階で凹みが認められ、Ⅳ層下面で遺構検出したものであるという。井戸中からの遺物に中世以降のものはなく、平面位置と規模からは井戸の覆屋のようにも考えられる。

No	長 短 深	No	長 短 深	No	長 短 深	No	長 短 深
p 1	25×23×	p 2	28×18×47	p 3	32×30×33	p 4	20×16×32
p 5	40×32×35	p 6	30×24×43	p 7	22×16×11	p 8	24×24×17
p 9	23×19×17	p 10	21×16×21	p 11	30×28×31		

(cm)

井　　戸

井戸は３基確認された。うち、方形木組みの井側をもつものが２基存在する。しかし、土坑と分類されたものに深いものがあるように、井戸と分類されたものにも浅いものがある。ここでは、現地調査時の分類によって、代表的なものについて報告する。

SE 168(図面４・29・30、写真２・22・23・37)

７Ｃ３ⅠⅡｃに存在する。径114×102cmの略円形を呈す。深さは182cmを測る。埋土は17層認められ、レンズ状堆積を示す。埋土中には炭を多く含む層が複数認められる。

遺物が多く、須恵器長頸壺(１・２)・土師器無台椀(３～12)・小型甕(13)、須恵器有台杯転用硯(14)・墨書土師器(「生」字有台椀 15)、黒色漆椀(16)・曲物底板(17・18)・角材(19)・棒状製品(20・21)がある。

ほかに、特筆すべき遺物として獣骨(ウマ)一括がある。頭骨の一部と四肢骨及び肋骨の一部(428～446)で、全身骨ではない。井戸祭祀にかかわるものとみられる。

SE 201(図面４・30～34、写真２・24・25)

７Ｃ１ⅦⅧhi に存在する。SB 199と平面的にうまく重複することから、覆屋をもつものとも考えられる。112×104cmの略方形を呈する。主軸方向はＮ－76°－Ｅである。危険のため、最深部まで調査されておらず、深さは不明である。上半は腐食してしまっているが、下半には方形木組みの井側が、側面からの土圧によって押しつぶされながらも、割合に状況良く遺存していた。(図９参照)

木組みの井側は杉材を用い、内側の四隅に11×14cm～10×15cm角・長さ1,000cm以上の角材を打ち込み、上下二段に６×８cm～６×10cm角・長さ105cmの両端を尖らせた角材による貫で固定し、中内枠としていた。この外側に幅10～20cm・厚さ１～４cm・長さ1,120cm以上の割り板を縦位に隙間なく打ち込んで側板としている。その後に緩み・崩れが生じたものか、下方内

側は四隅の角柱の内側に横位に板材を当て、板杭・角杭を打ち込んで更に固定を図っている。なお、縦位の側板は転用材であるのか、下端に斜位の切裁が認められるもののほか、方形の孔を穿つものが目立つ。上端は腐食してしまっている。

埋土は図化していないがレンズ状の堆積を示し、表層部で土師器の一括廃棄が認められる。遺物が多く、須恵器無台杯(22)・長頸壺(24・25)・杯蓋(26・27)、土師器無台椀(28～42)・甕(43～45)・鍋(46)、曲物(47)・井戸部材(48～72)、砥石(73)がある。

ほかに、特筆すべき遺物として上部埋土中から蛇紋岩製の磨製石斧１点(74)が出土している。

SE 206(図面４・34・35、写真２・24・25)

７Ｃ１Ⅱ～Ⅳf～h に存在する。径320×300㎝の円形を呈する。危険のため二段掘りとしたが、下部断面は図化していない。深さは120㎝を測る。Ⅲ層調査段階で上位に重複する井戸(土坑)を検出している。

バケツ形の大きな掘り形の中央下半に、方形木組みの井側が据えられている(図10参照)。木組みは杉材を用いて設けられているが、掘り形及び中内枠の組みかたがSE 201と異なる。即ち、3.2×4.0㎝～3.2×6.4㎝角で長さ48～50㎝の角材を用い、両端を柄留めして四角形の一重中枠としている。この外側に幅８～16㎝、厚さ1.5～3.2㎝、長さ80㎝以上の割板材を、縦位多重一段に隙間なく打ち込んで側板としている。後に土圧によって一辺がつぶれている。縦位の側板は転用材であるらしく、下端に切裁痕や方形の孔を穿つものが多い。上端は腐食してしまっている。

大きな掘り形は３層のシルト質土によって埋められ、中央部に井側を据えつけている。井側の内部堆積層はレンズ状を呈するものとみられるが、重複する井戸(土坑)のため詳らかでない。上層に炭化物を多く含む。

出土遺物には土師器椀(75)・瀬戸美濃焼皿(76)・斎串(77)・曲物(78・79)がある。ほかに、井戸部材多数(80～95)。

土　　坑

23基が検出されている。土坑と井戸との区分が明確でなく、それぞれに深いものも浅いものも存在するが、現地調査による標記によって代表例を報告する。概して良好な遺物に恵まれない。

SK 103(図面４、写真３)

６Ｃ５ Ⅵgh に存在する。径200㎝の円形で、深さは74㎝を測る。断面形は深い皿状を呈し、埋土はレンズ状の堆積を示す。第②層が厚い暗色土となっている。土器等遺物を含まないが、

表層に人頭大の礫が認められた。

SK 160(図面４、写真３)

７Ｃ１ Ｘde に存在する。一辺100cm程の不正方形で、深さは100cmを測る。主軸方向はＮ－５°－Ｗである。断面形は筒状を呈するが、底部がすぼまる。一部削平されていたが、埋土は水平状を示すことがうかがえる。大きく３サイクルの炭化物を含む層序が認められ、焼け礫が出土することから、井戸とするべきかもしれない。珠洲焼壺(229)・砥石(230)が出土している。

SK 161(図面４、写真３)

７Ｃ２ ⅢⅣj に存在する。径250cmの円形で、深さは130cmを測る。底部が丸くすぼまり、埋土の下半は暗色土がレンズ状に、上半は黄色土が厚く堆積する。暗色土中からは焼け礫・木製品(231～236)が出土している。

SK 162(図面４、写真３)

７Ｃ７ ⅥⅦa に存在する。径116×100cmの略円形で、深さは190cmを測る。断面形は底の丸い筒形を呈する。埋土はほぼ水平状の堆積を示す。遺物は出土していない。

SK 163(図面５・36、写真３)

７Ｃ２ ⅤⅥgh に存在する。150×125cmの楕円形で、深さは113cmを測る。長軸方向はＮ－27°－Ｅである。断面形は底の平らな筒状を呈する。埋土は暗色土と黄色土の互層で、ほぼ水平状の堆積を示し、炭化物を含む層序の存在が目立つ。出土遺物に須恵器甕(96)・土師器甕(97)がある。

SK 164(図面５、写真３)

７Ｃ２ ⅥⅦgh に存在する。111×105cmの円形で、深さは124cmを測る。断面形は底の平らなバケツ形で、底部付近に炭化物を含む。出土遺物に珠洲焼擂鉢がある。

SK 166(図面５、写真３)

６Ｃ10 Ⅸa に存在する。90×68cmの楕円形で、深さは49cmを測る。長軸方向はＮ－32°－Ｅである。埋土は２層で水平状を呈し、下層が暗色が強い。２層とも炭化物を含み、上層から土師器が出土している。

SK 167（図面５、写真３）

７Ｃ７Ⅷｈに存在する。150×95㎝の楕円形で、深さは49㎝を測る。長軸方向はＮ－82°－Ｗである。底は凹凸があり、平坦ではない。埋土は２層で下層が暗色土となっている。出土遺物はない。

SK 170（図面５・36、写真３・26）

７Ｃ２Ⅶｉに存在する。98×84㎝の楕円形で、深さは116㎝を測る。長軸方向はＮ－60°－Ｗである。断面形は底のほぼ平らら円筒状を呈する。埋土は１層でシルトブロックの混土からなる。底面付近から土師器鉢(98)が出土している。

SK 171（図面５、写真３）

７Ｃ１Ⅲａに存在する。78×62㎝の不整長方形で、深さは15㎝を測る。長軸方向はＮ－８°－Ｅである。浅いフライパン形を呈し、埋土は１層のみである。土器等遺物は出土していない。

SK 172（図面５、写真４）

７Ｃ１Ⅲａｂに存在する。125×93㎝の楕円形で、深さは8㎝を測る。長軸方向はＮ－42°－Ｅである。浅いフライパン形を呈し、埋土は１層のみである。土器等遺物は出土していない。

SK 173（図面５、写真４）

６Ｃ５ⅧⅨＸｄに存在する。220×60㎝の長楕円形で、深さは16㎝を測る。長軸方向はＮ－70°－Ｗである。横断面形は浅い皿状を呈し、埋土は１層のみ。土器等遺物は出土していない。形状からは溝状遺構の一部ではないかともみられる。

SK 176（図面５、写真４）

６Ｃ５Ｘｄｅに存在する。82×80？㎝の円形と思われる。深さは16㎝を測る。断面形は浅いフライパン形を呈し、埋土は１層のみで、土器等遺物は出土していない。

SK 179（図面５、写真４）

６Ｃ10Ⅵｃｄに存在する。123×90㎝の長円形で、深さは75㎝を測る。長軸方向はＮ－49°－Ｅである。北側長辺に沿って浅いテラスをもち、底はほぼ平坦である。埋土はレンズ状堆積を示し、表層及び中層に炭化物を含む。土器等遺物は出土していない。

SK 180（図面５、写真４）

６Ｃ10Ⅷc に存在する。Ⅲ層の SK 144と重複する。128×116cmの略円形で、深さは60cmを測る。底は東側で一段低くなっており、埋土はレンズ状堆積を示し、坑底と中層には暗色土が堆積する。下層を除いて炭化物を含む。底面付近に礫３点が出土したほかは、土器等遺物は出土していない。

SK 181（図面６、写真４）

７Ｂ22Ｘi に存在する。92×85cmの隅丸方形で、深さは76cmを測る。坑底はほぼ平らで、埋土はレンズ状に堆積している。土師器・珠洲焼鉢が出土している。

SK 182（図面６、写真４）

７Ｂ22Ｘhi に存在する。90×75cmの円形で、深さは60cmを測る。埋土は混土層で炭化物を含み、レンズ状の黄色土を挟む。土師器が出土している。

SK 190（図面６、写真４）

７Ｃ６Ⅱef に存在する。Ⅲ層の SK 133と重複する。132×100cmの楕円形で、深さは38cmを測る。長軸方向は N－37°－W である。坑底は安定しておらず、埋土は１層のみである。土器等遺物は出土していない。

SK 191（図面６、写真４）

６Ｃ10Ⅷb に存在する。Ⅲ層の SK 126と重複する。93×73cmの楕円形で、深さは43cmを測る。長軸方向は N－45°－E である。坑底付近に段をもち、底面は平らで、埋土は１層のみである。土器等遺物は出土していない。

溝

Ⅳ層下面では、CB８ブロックの大溝のほかに、鉄砲町３地区に若干の小溝がある。鉄砲町３地区に検出された小溝は、数が少なく散発的で、目的が不明である。

SD 174（図面６、写真４）

６Ｃ５ⅤⅥhi に存在する。長さ200cm、幅40cm、深さ3cmを測る。やや弧を描くように、ほぼ北東～南西に伸びる。北端は SD 175と連続するようにみられ、南端はⅢ層の SE 103と重複し、延長は不明である。埋土は１層のみである。土器等遺物は出土していない。

SD 175（図面６、写真５）

６Ｃ５ⅣＶｉに存在する。長さ220㎝、幅67㎝で深さ16㎝を測る。ほぼ東西に伸びるが、南端はSD 174と連続するようにみられ、全体はやや弧を描く。埋土は１層のみでSD 174と同様である。土器等遺物は出土していない。

SD 177（図面６、写真５）

７Ｃ１Ⅷgiに存在する。長さ320㎝、幅33㎝、深さ14㎝で直線的である。主軸方向はＮ－５°－Ｅで、北に行くほど深さを増す。埋土は２層あるが、土器等遺物は含まない。SE 201を取り囲むように存在するSB 199の東側桁持柱列にほぼ平行して存在し、SB 199の雨落ち溝である可能性もある。

その他の遺構

性格不明の遺構及びピットがある。ピットは多数が存在したが、現地調査時には３棟以外建造物としての配列を確認できなかった。

SX 186（図面６・36、写真５・26）

７Ｃ１Ⅰ～Ⅳc～eに存在する。一辺約210㎝の不整方形で、深さは26㎝を測る。浅いフライパン形を呈するが、床は凹凸がある。内部に小ピットをもつ。検出当初は竪穴住居とも考えられたが、性格等は不明である。土師器無台椀（99～101）・鍋（102）が出土している。

pit 774（図面６・36・43、写真５・26・30）

７Ｃ２Ⅸcに存在する。71×55㎝の隅丸長方形で、深さは80㎝を測る。埋土は１層のみで、珠洲焼壺（224）・甕（225）、瀬戸美濃焼花瓶（226）、ほかに木製杓子（227）が出土している。

CB８ブロック

溝・土坑・ピットがある。この地区は前述の鉄砲町３地区の東側に隣接する。工事範囲によって便宜的に区分しただけで、連続する一連の遺構分布範囲であるとみられる。

溝

Ⅳ層では鉄砲町３地区の若干の小溝のほかに、CB８ブロックには大溝がある。

SD 35(図面２・７)

７Ｂ23Ⅶg から７Ｃ３ Ⅶd にかけて存在する。長さ13ｍ60㎝、幅64㎝、深さ22㎝を測る。南北にほぼまっすぐに伸びる。Ⅳ層下面の SK 36に切られて古く、SK 44を切って新しい。Ⅲ層下面で検出した大溝 SD１・２と重複する位置にある。埋土は４層あり、図示した断面では水平状堆積を示す。土器等遺物は検出されなかった。

土　　坑

11基が検出されている。どれも不整形で、浅いのが特徴的である。

SK 36(図面７、写真５)

７Ｂ23Ⅶij に存在する。112×105㎝の隅丸方形で、深さは18㎝を測る。主軸方向はＮ－５°－Ｗである。SD 35を切って新しく、SK 38に切られて古い。埋土は５層あって、暗色系土が大部分を占める。土師器が出土している。

SK 37(図面７・36・37、写真５・26)

７Ｂ23ⅥⅦj に存在する。206×170㎝の不整円形で、深さは170㎝を測る。底部は段をもってすぼみ、更に深い小穴状となっている。埋土はレンズ状堆積を示し、暗色土層が主体を占める。炭化物を多く含む層の存在が目立ち、また段の上位には植物層が存在し、最下層は小礫が堆積している。井戸ではなかったかともみられる。出土遺物は多く、須恵器無台杯(104)・有台杯(105)・長頸壺(106)・甕(107)、土師器甕(108・109)・鍋(110・111)がある。ほかに転用硯(須恵器杯蓋112・113)がある。

SK 38(図面７、写真５)

７Ｂ23Ⅶj に存在する。75×70㎝の円形で、深さは43㎝を測る。中位に段をもち、底は丸くすぼまる。埋土は下位は１層のみで、段より上位は複数層がレンズ状に堆積する。暗色系土が主体を占める。SK 36と重複してこれを切り、新しい。礫が出土しているほか土器等遺物は出

土していない。

SK 40（図面７、写真５）

７Ｃ３Ⅶeにに存在する。82×54cmの長円形で、深さは38cmを測る。長軸方向はＮ－88°－Ｗである。坑底は斜めで安定しない。埋土は水平状の堆積を示す。土師器片が出土している。

SK 41（図面７・37、写真５・26）

７Ｃ３ⅥⅦf～hに存在する。123×115cmの隅丸方形で、深さは９cmを測る。断面形は浅いフライパン形で、埋土は炭化物を混入している。Ⅲ層のSD１と重複して、上部を破壊されている。出土遺物に須恵器長頸壺（114）、土師器無台椀（115・116）・甕（117）がある。

SK 43（図面７、写真５）

７Ｃ３Ⅶdにに存在する。65×58cmの略円形で、深さは37cmを測る。西側に浅い段をもつ。埋土はレンズ状堆積を示す。土器等遺物は出土していない。

SK 44（図面７、写真５）

７Ｃ３Ⅶadにに存在する。140以上×125cmの隅丸長方形状であるとみられ、深さは23cmを測る。長軸方向はＮ－88°－Ｅである。埋土はレンズ状堆積を示し、炭化物を混入する。土器等遺物は出土していない。SD 35と重複してこれより古い。東半部が破壊されてしまっていた。

その他の遺構

現地調査においては建造物としての配列は認められなかったが、ピット群が検出されている。

pit 144（図面７、写真５）

７Ｃ３ⅦⅧgに存在する。72×45cmの楕円形で、深さは18cmを測る。長軸方向はＮ－76°－Ｗである。横断面形はボウル状を呈する。埋土はややレンズ状の堆積を示し、炭化物を含む層序が目立つ。

B．Ⅲ層下面検出遺構

Ⅲ層は調査区全面の存在であった。以下、地区ごと種別ごとに代表的な遺構について説明を加える。説明する地区は、鉄３地区、CB８ブロック、CB 10ブロックを含む鉄１・２地区とする。

鉄砲町３地区

調査区の東半部を占める。CB 10ブロックを含める鉄１・２地区よりも、わずかに高地にあり、最も遺構の集中する地区である。遺構の集中範囲は更に東へ及んで、CB８ブロックから八反田遺跡へと連続している。検出された遺構には、井戸・土坑・溝・その他がある。

井　　戸

21基が検出された。円形・方形が基準だが、あまり深くはなく、全て素掘りで、Ⅳ層にみられたような木組みの井戸側をもつものはない。井戸埋め祭祀にかかわるとみられる埋土中の炭化物層・焼け礫の存在が目立つ。

SE 51（図面15・40、写真10・28）

７Ｃ２Ｉgh に存在する。径110cmの円形で、深さは130cmを測る。断面形は南側の中位にわずかなオーバーハングをもつ円筒形を呈する。段から下位は暗色系の埋土がレンズ状に堆積し、上層は１層のみの堆積となっている。底部付近には、焼けた扁平な板状礫が壁に倒れかかるような状態で検出された。ほかによく使用された砥石(164)がある。

SE 52（図面15・40、写真10・28）

７Ｃ７Ｘcd に存在する。105×95cmの楕円形で、深さは110cmを測る。円筒形で、底は平坦である。埋土は暗色土を主体とするレンズ状堆積を示し、炭化物を含む層序を３枚有する。土師器甕(165)が出土している。

SE 53（図面15、写真10）

７Ｃ８Ⅲd に存在する。133×110cmの楕円形で、深さは73cmを測る。主軸方向はＮ－２°－Ｅである。南側下半に段を有し、底面は北側に小ピットをもつ。埋土は段の付近で２層に分かれる。東端でSK 96と重複し、これを切って新しい。土器等遺物は出土していない。

SE 54（図面15・40、写真10・28）

7C7 Ⅸg に存在する。径110cmの円形で、深さは96cmを測る。断面は円筒形で、底はおおむね平坦である。埋土はレンズ状で、表層には炭化物を多く含む。出土遺物が多く、土師器小皿（166～172）・柱状高台皿（173）・足高高台皿（174～176）がある。ほかに木製品曲物（177）・礫が出土している。

SE 67（図面15・40、写真10・28）

7C8 Ⅱc に存在する。156×133cmの楕円形で、深さは88cmを測る。南側の下半に段をもち、断面は筒形で、底は平坦である。埋土はレンズ状に堆積し、暗色土が多く、炭化物を多く含む。土師器小皿（178）、焼け礫が出土している。

SE 68（図面15、写真10）

7C7 Ⅲde に存在する。148×113cmの楕円形で、深さは135cmを測る。長軸方向は N－89°－

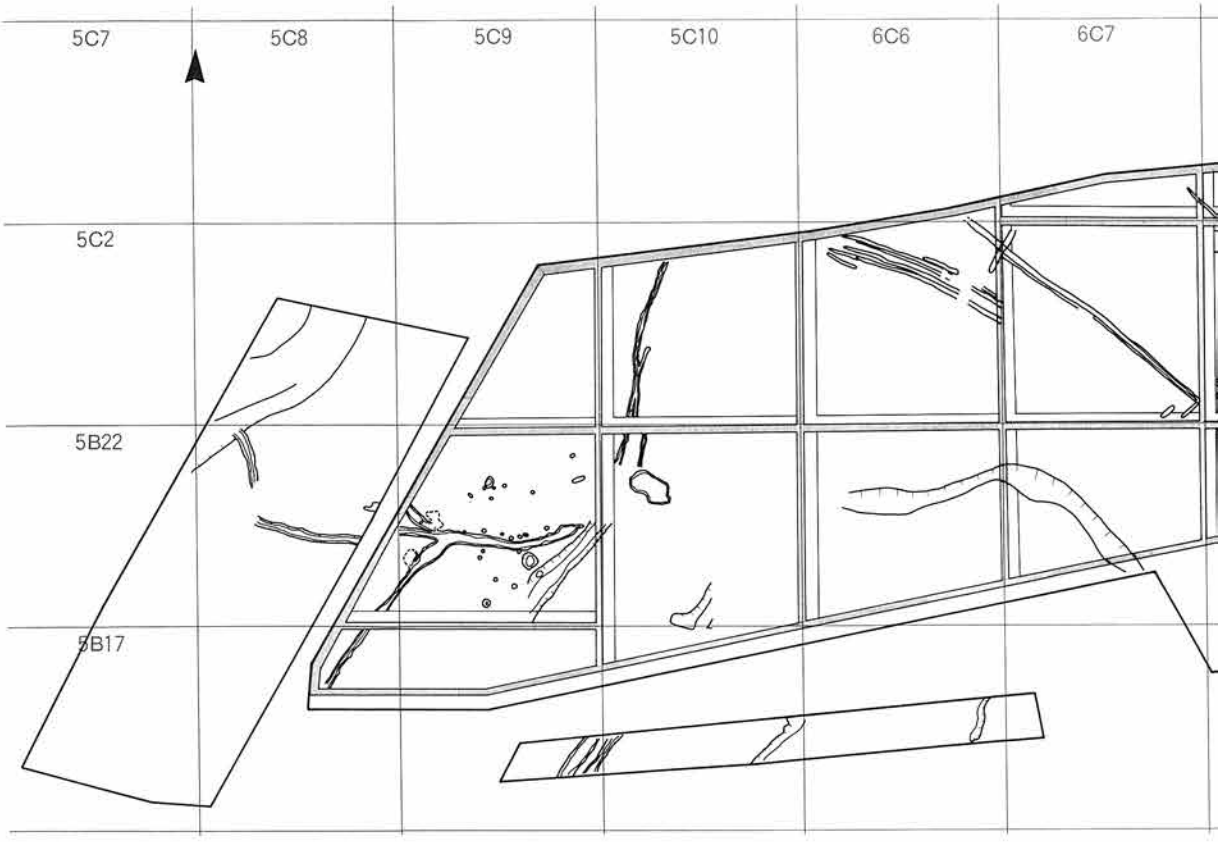


図7　Ⅲ層下面検出遺構群

Eである。危険のため、底面まで調査していないが、断面は下半がオーバーハングする筒形である。埋土は水平状に近く、表層から土師器が出土している。東西に伸びるSD 60と重複するが、これを切って新しい。

SE 70(図面15、写真11)

7C8 Ⅰbに存在する。93×78cmの楕円形で、深さは75cmを測る。断面は筒形で、底は平坦である。埋土は1層のみで堅緻に埋められている。西側をSK 69に切られて、これより古い。土器等遺物は出土していない。

SE 71(図面16・40、写真10・28)

7C7 Ⅰcに存在する。185×167cmの不整形で、深さは133cmを測る。上面の不整形は壁の崩落によるとみられ、底面は円形状である。壁の下位にはオーバーハングも認められる。断面形は基本的には円筒状で、底は平坦である。埋土はおおむねレンズ状を示す。珠洲焼片口鉢(180)

が出土している。

SE 73（図面15・40、写真11・28）

7C2 Ⅲgh に存在する。116×126cmの略方形状で、深さは116cmを測る。断面形は上部がやや開く筒形を呈し、底はほぼ平坦だが南寄りに若干の凹みが認められる。埋土はレンズ状堆積を示し、暗色土が主体で、最下層に炭化物を混入する。漆椀(181)が出土している。

SE 75（図面15・40、写真11・28）

7C2 Ⅳg に存在する。上面は112×110cmの隅丸方形状、底面は円形状で、深さは90cmを測る。断面はバケツ形を呈し、底面は平坦である。埋土は暗色土がレンズ状に堆積しており、底面付近から珠洲焼擂鉢(182)、漆皿(183)が出土している。

SE 76（図面16・41、写真11・28）

7C2 Ⅴfg に存在する。124×107cmの略方形で、深さは151cmを測る。断面は南壁に段をもつが基本的には筒形で、底面は西側に偏るが平坦である。埋土はレンズ状に堆積し、曲物の底板(184)が出土している。

SE 77（図面16・41、写真11・28）

7C2 ⅧⅨe に存在する。94×80cmの略円形で、深さは121cmを測る。断面形は筒状で、底面は平坦である。埋土はレンズ状堆積を示し、最下層中から漆皿(185)・板材(186)が出土している。

SE 79（図面16、写真11）

7C3 ⅠⅡef に存在する。135×107cmの不整円形状で、深さは90cmを測る。断面は上部がラッパ状に開くバケツ形で、底面は平坦である。埋土はレンズ状に堆積し、上半は暗色土である。底面付近から須恵器甕・金属片が出土している。

SE 80（図面16・41、写真11・28）

7C3 Ⅰj に存在する。127×117cmの略円形で、深さは91cmを測る。断面はバケツ形で、底面は略平坦である。埋土は1層のみで、暗色土・粘土のブロック状混土である。底面から漆椀(187)が出土している。

SE 83（図面16・41、写真11・28）

7C8 Ⅱgh に存在する。108×88cmの楕円形で、深さは74cmを測る。長軸方向はN－30°－E

である。断面は底のやや丸くなるバケツ形である。埋土はおおむねレンズ状に堆積し、底面付近から珠洲焼甕(188)・礫が出土している。

SE 85(図面17・41、写真11・29)

7C7Ⅳgに存在する。170×160cmの略円形で、深さは96cmを測る。断面は上部がラッパ状に開く筒形を呈するが、底部では砂質の壁が流れ出した結果とみられる浅いオーバーハングが認められる。排水溝と重複してしまったが、埋土はレンズ状に堆積し、暗色土と炭化物を含む層が目立つ。底面付近から珠洲焼甕(189)・砥石(190)・土師質土器皿・板材2枚・煤の付着した焼け礫が出土している。

SE 92(図面16、写真11)

7C2Ⅲfeに存在する。106×96cmの隅丸方形状で、深さは111cmを測る。長軸方向はN－0°－Eである。断面はバケツ形で、底面はやや丸く凹む。埋土はレンズ状に堆積し、表層・最下層に炭化物を含む。土器等遺物は出土していない。

SE 97(図面16・41、写真11・29)

7C8ⅢⅣcdに存在する。排水溝と重複してしまったが、145以上×125cmの隅丸長方形となるとみられ、深さは130cmを測る。断面はバケツ形を呈し、底面は略平坦である。中位に崩落によるとみられるオーバーハングが認められる。埋土は下層は炭化物を含む暗色土がレンズ状に堆積し、中層は壁の崩落とみられる黄色土の存在が顕著で、その上位に薄い炭化物層が存在する。上層は炭化物・土器片を含む暗色土が厚く堆積している。下層から珠洲焼壺(191)・砥石(192)が出土している。

SE 137(図面17・41、写真11・29)

7C6Ⅶaに存在する。径128cmの略円形で、深さは143cmを測る。断面は西側がやや緩く傾斜する筒形を呈し、底面は略平坦である。埋土はレンズ状に堆積し、暗色土が主体である。底面付近から丸木材(193・194)が出土している。

SE 139(図面16、写真12)

7C7Ⅰaに存在する。110×105cmの円形で、深さは127cmを測る。断面は上部の開く、やや歪んだ筒状を呈し、下半にオーバーハングが認められる。埋土はおおむねレンズ状の堆積を示すものとみられ、暗色系で、上層には炭化物が混入する。土器等遺物は出土していない。

SE 202(図面17・41、写真12・29)

7C1 Ⅶd に存在する。119×97cmの不整円形で、深さは164cmを測る。断面形は筒状で、南側上位に段をもち、底面は平坦である。埋土はレンズ状に堆積し、最下層に炭化物が混入する。被熱した石臼(上臼195)が出土している。

土　　坑

土坑は66基が存在した。

SK 55(図面17、写真12)

7C7 ⅦⅨa に存在する。径115cmの円形で、深さは55cmを測る。底のやや丸い椀形を呈する。埋土中に灰色シルトのブロック状堆積が認められ、炭片・土師器片が含まれている。pit 167と重複するがこれより古い。

SK 56(図面17、写真12)

7C7 Ⅸab に存在する。85×80cmの隅丸方形で、深さは66cmを測る。胴の張るコップ形を呈し、底面は平坦である。埋土中に灰色シルトのブロック状混土が認められ、炭粒を含む。土器等遺物は出土していない。

SK 57(図面17、写真12)

7C7 Ⅸb に存在する。上面は一辺111cmの隅丸方形状であるが、底面は径73cmの円形状を呈す。上部がラッパ状に開く筒形で、底面は平坦である。埋土はおおむねレンズ状堆積であるとみられ、上半には炭化物を含む。土器等遺物は出土していない。

SK 58(図面17・41、写真12・29)

7C7 Ⅸcd に存在する。120×78cmの不整長方形で、深さは76cmを測る。長軸方向はN－85°－W である。断面は歪んだバケツ形で、底面は凹凸があって平坦ではない。埋土中に灰色シルトのブロック状堆積が認められ、炭片・土師器片が混入している。珠洲焼擂鉢(196)が出土している。

SK 59(図面17、写真12)

7C8 Ⅱcd に存在する。径95cmの円形で、深さは50cmを測る。中位にわずかな段をもち、底のやや平坦な、浅いコップ形を呈する。埋土はレンズ状に堆積している。SD 60と重複し、これより新しい。土器等遺物は出土していない。

SK 64(図面17、写真12)

7C7 Ⅵcd に存在する。径96cmの円形で、深さは50cmを測る。壁が丸く、底のやや平坦な椀形を呈し、埋土は炭片を含む暗色土1層のみである。土器等遺物は検出されていない。SK 72と重複し、これを切って新しい。

SK 65(図面18、写真12)

7C7 Ⅳd に存在する。100×90cmの不整円形で、深さは55cmである。壁は北側が緩く、底部は南側に偏って平坦だが狭い。埋土は3層あって、炭化物を含む暗色土が主体である。土師器片が出土している。

SK 66(図面18、写真12)

7C7 ⅣⅤc に存在する。南西辺が丸味を欠き直線状をなす185×165cmの不整楕円形で、深さは63cmを測る。断面は底の丸い皿形を呈す。埋土は1層のみで、固くしまって炭化物を含む。土器等遺物は出土していない。

SK 69(図面18、写真13)

7C8 Ⅰab に存在する。径85cmの円形で、深さは66cmを測る。底面の平坦な円筒状を呈し、埋土は1層のみである。土器等遺物は出土していない。東側にSE 70と接し、これを切って新しい。

SK 74(図面18、写真13)

7C2 Ⅲh に存在する。東角が張り出す70×68cmの隅丸不整方形で、深さは40cmを測る。東壁が緩く西壁が急で、底の狭い、不安定な形態である。埋土は炭化物を含む暗色土がレンズ状に堆積している。土器等遺物は出土していない。

SK 78(図面18・42、写真13・29)

7C2 ⅨⅩd に存在する。136×104cmの楕円形で、深さは116cmを測る。底面はやや凹凸があり、断面は歪んだ円筒形を呈する。埋土は暗色系土がレンズ状に堆積し、炭化物を含む。砥石(197)が出土している。

SK 82(図面18、写真13)

7C7 ⅥⅦb に存在する。径100cmの円形で、深さは106cmを測る。壁ラインの歪んだ円筒状で、底面は平坦である。埋土は下位に複数枚、上位には1枚のみが存在している。層中に炭化物を

含み、土師器片が出土している。

SK 84（図面18、写真13）

7C7 Ⅳab に存在する。径85cmの略円形で、深さは90cmを測る。深いバケツ状を呈し、底面は平坦である。埋土はおおむねレンズ状に堆積しているものとみられ、炭化物片を含む。下半位に焼け礫複数を検出した。

SK 86（図面18・42、写真13・29）

7C7 ⅥⅦa に存在している。120×100cmの不整形で、深さは80cmを測る。底は平らではなく、断面形も安定しない。本来は南北に長い長方形状であったが、西壁が崩落したものとも思われる。埋土は1層のみだが、上位の凹みに薄い堆積土が更に被さっている。出土遺物に砥石(198)がある。

SK 87（図面18・42、写真13・29）

7C2 Ⅸij に存在する。95×90cmの不整形で、深さは46cmを測る。壁も床も凹凸があって不安定である。埋土は1層のみで、珠洲焼鉢(199)が出土している。

SK 88（図面18・42、写真13・29）

7C2 ⅦⅧef に存在する。径73cmの不整円形で、深さは51cmを測る。浅い円筒状で、平坦な底面は中央に更に凹みをもつ。南側中位にテラス状の平坦部が認められる。詳らかではないが、ピットと重複しているらしい。埋土はおおむねレンズ状堆積とみられる。珠洲焼擂鉢(200)のほか、土師器鍋が出土している。

SK 89（図面18、写真13）

7C2 Ⅵe に存在する。125×94cmの不整楕円形で、深さは57cmを測る。深い擂鉢状を呈し、底面は平坦であるが狭い。埋土は暗色土がレンズ状に堆積し、炭化物を含む。土師器台部(122)が出土している。

SK 90（図面19、写真13）

7C2 ⅢⅣg に存在する。径83cmの円形で、深さは124cmを測る。底の平坦な上面がやや開く円筒状を呈する。埋土は暗色土が水平状に堆積している。土器等遺物は出土していない。SK 91と重複し、これより新しい。

SK 91（図面19、写真13）

7Ｃ2 ⅢⅣg に存在する。一辺71cmの隅丸方形状で、深さは49cmを測る。浅く、底は平坦でない。埋土は柱を抜き取られた柱穴状に堆積している。土器等遺物は出土していない。SK 90に切られて、これより古い。

SK 93（図面19、写真14）

7Ｃ2 ⅤⅥef に存在する。132×92cmの楕円形で、深さは23cmを測る。断面形は浅いフライパン状を呈し、底面は凹凸がある。土器等遺物は出土していない。

SK 94（図面19、写真14）

7Ｃ2 Ⅴd に存在する。63×55cmの楕円形で、深さは139cmを測る。歪んだ筒状であるが、底面は安定している。埋土はおおむね水平状に堆積しているとみられる。底部壁寄りに木材片が出土したほか、土器等遺物は出土していない。図の上位３層は遺構埋土ではない。

SK 96（図面19、写真14）

7Ｃ8 ⅢⅣde に存在する。排水溝によって東側を破壊されてしまっているが、150×65cm以上の矩形となるものとみられ、深さは57cmを測る。底面は平坦で、壁はやや開いて立ち上がる。埋土は暗色土と黄色土とがブロック状につまっている。土器等遺物は出土していない。

SK 98（図面19・42、写真14・29）

7Ｃ7 Ⅱ～Ⅳab に存在する。422×236cmの不整形で、深さは106cmを測る。３基の土坑の重複の結果ではないかとみられるが、新旧関係等は現地調査では明らかにできなかった。埋土はブロック状の黄色土である。珠洲焼甕(201)が出土している。

SK 102（図面19、写真14）

6Ｃ5 ⅥⅦg に存在する。径75cmの円形で、深さは47cmを測る。底の平坦なバケツ形を呈する。埋土は暗色土がレンズ状に堆積している。切り合い関係はなく、土器等遺物も出土していない。

SK 103（図面19・42、写真14・29）

6Ｃ5 ⅥⅦg に存在する。大小２基が重複しているものであるらしい。103－Ｂの中に103－Ａが存在する。従って、103－Ａの方が新しい。

103－Ａは径115cmの円形で、深さは51cmを測る。断面形は複雑な凹凸をもち、底面も安定していない。埋土は炭化物を含む複数の暗色土層で、灰釉陶器椀(202)が出土している。

103－Bは径200cmの円形で、深さは74cmを測る。断面形は底のやや丸いボウル状を呈する。埋土は暗色土と黄色土のレンズ状の互層堆積で、上面に人頭大の礫2点が存在した。

SK 104（図面19、写真14）

6C5 Vgに存在する。112×97cmの楕円形で、深さは22cmと浅い。フライパン状を呈し、底面から人頭大の礫2点が検出されたほか、土器等遺物は検出されていない。

SK 105（図面19、写真14）

6C5 VIbに存在する。155×145cmの円形状で、深さは31cmを測る。断面は浅いIII状を呈し、埋土はレンズ状に堆積している。土師質土器が出土している。

SK 113（図面20・42、写真14・29）

6C5 VIgfに存在する。183×112cmの楕円形で、深さは67cmを測る。2基の略円形土坑ほかの重複ともみられる。断面形は洗面器状を呈する。埋土は暗色土中に黄色土ブロックが目立つ。叩石(203)が出土している。ピットと重複してこれに切られている。

SK 114（図面20、写真14）

6C5 VIIIhに存在する。85×65cmの楕円形で、深さは60cmを測る。断面形はバケツ形で、炭化物を含む埋土がレンズ状に堆積している。土器等遺物は出土していない。

SK 117（図面20・42、写真15・29）

6C10IVaに存在する。95×78cmの楕円形で、深さは66cmを測る。長軸西側が緩くラッパ状に開き、底は平坦でない。埋土は暗色土が略レンズ状に堆積している。底面付近から土師器小皿(204)・灰釉陶器椀(205)・焼け礫が出土している。

SK 118（図面20、写真15）

6C10Vbcに存在する。108×90cmの略円形状で、深さは67cmを測る。北側にややオーバーハングし、断面形は底・壁がやや丸みをもったボウル形を呈する。埋土は暗色土がおおむねレンズ状に堆積しているとみられ、最下層には炭化物を多く混入している。土器等遺物は検出されていない。

SK 120（図面20、写真15）

6C10VIcに存在する。100×75cmの楕円形状で、浅いフライパン状を呈し、底面は平坦で

ある。埋土は暗色土のレンズ状堆積で、土器等遺物は検出されていない。

SK 121（図面20、写真15）

6Ｃ10Ⅴ Ⅵde に存在する。112×90㎝の不整楕円形で、深さは80㎝を測る。底はやや階梯状で、壁は略直立する。埋土は暗色土のレンズ状堆積で、須恵器杯が出土している。

SK 122（図面20、写真15）

6Ｃ10Ⅵd に存在する。113×95㎝の楕円形で、深さは53㎝を測る。断面形は椀形で、坑底中央に浅い凹みを有する。埋土は暗色土のレンズ状堆積である。土器等遺物は出土していない。

SK 123（図面20、写真15）

6Ｃ10Ⅵb に存在する。90×70㎝の不整楕円形状を呈し、深さは52㎝を測る。坑底は安定しない。土器等遺物は検出されていない。SK 124と重複するが新旧関係は明確ではない。

SK 124（図面20、写真15）

6Ｃ10Ⅵb に存在する。100×90㎝の隅丸長方形で、深さは15㎝と浅い。フライパン状を呈し、底は平坦である。土器等遺物は出土していない。SK 123と重複関係にある。

SK 125（図面20、写真15）

6Ｃ10Ⅶb に存在する。135×126㎝の楕円形で、深さは47㎝を測る。断面形はフライパン状で、底面は平坦である。埋土は暗色土がおおむね水平状に堆積している。土器等遺物は出土していない。

SK 126（図面20、写真15）

6Ｃ10Ⅷb に存在する。径70㎝の円形で、深さは50㎝を測る。埋土が左右対称に堆積し、中央に暗色土が存在することや、底面中央部が大きく凹むことから柱の抜けた柱穴ではないかと考えられる。土器等遺物は出土していない。

SK 127（図面20、写真15）

6Ｃ10Ⅷd に存在する。長軸北側が SK 128と重複しているため詳らかではないが、93以上×86㎝の楕円形を呈するものとみられ、深さは97㎝を測る。底面中央部が大きく丸く凹み、南側には版築かとみられる粘質土の存在が認められる。柱の抜けた柱穴ではないかと考えられる。土器等遺物は出土していない。SK 128と重複し、これを切って新しい。

SK 128（図面20、写真15）

6Ｃ10Ⅷde に存在する。185以上×88cmの溝状を呈するものとみられ、深さは30cmと浅い。底面はやや凹凸があるが略平坦で、断面形はフライパン状である。土器等遺物は出土していない。SK 127と重複してこれより古い。

SK 129（図面21、写真16）

6Ｃ10ⅨＸb に存在する。125×110cmの楕円形で、深さは48cmを測る。上面がラッパ状に開き、下位がバケツ形を呈する。埋土は暗色土２枚が存在する。珠洲焼擂鉢が出土している。

SK 130（図面21、写真16）

7Ｃ6Ⅱc に存在する。103×92cmの楕円形で、深さは18cmと浅い。断面形は皿形で、暗色土がレンズ状堆積している。土器等遺物は出土していない。SK 131と重複してこれより新しい。

SK 131（図面21、写真16）

7ＣⅡc に存在する。長軸南端は SK 130によって破壊されてしまっているが、150以上×100cm程度の楕円形とみられ、深さは18cmと浅い。フライパン形を呈し、埋土は暗色土である。土器等遺物は出土していない。SK 130と重複してこれより古い。西側ではピットと重複するが新旧関係は不明である。

SK 132（図面21、写真16）

7Ｃ6Ⅱde に存在する。一辺100cmの隅丸方形状を呈し、深さは100cmを測る。斜行する円筒状で、北西側の底部付近がオーバーハングしている。底面は平坦で、埋土は暗色土がレンズ状に堆積している。上位第２層は炭化物を混入している。土器等遺物は出土していない。

SK 133（図面21、写真16）

7Ｃ6Ⅱef に存在する。116×103cmの楕円形状で、深さは30cmを測る。底面の歪んだ、浅いバケツ状を呈する。埋土は暗色土がレンズ状に堆積している。土器等遺物は出土していない。

SK 135（図面21、写真16）

6Ｃ10ⅥⅦa に存在する。径60cmの円形で、深さは50cmを測る。底のやや丸いバケツ形を呈し、埋土は暗色土である。土器等遺物は出土していない。

SK 136（図面21、写真16）

7C6ⅠⅡbに存在する。302×198cmの楕円形状を呈するが、円形土坑2基の重複の結果とみられ、深さは西側の土坑で44cmと浅い。断面形はどちらも浅い皿状を呈し、埋土は略水平状に堆積している。土師器杯・鍋が出土している。

SK 138（図面21、写真16）

7C6Ⅷaに存在する。SE 137の東側に隣接する。135×120cmの不整楕円形で、深さは62cmを測る。坑底も断面形も不安定である。埋土は暗色土がレンズ状に堆積している。土器等遺物は出土していない。

SK 140（図面21、写真16）

7C6ⅧⅨfに存在する。115×75cmの楕円形で、深さは37cmを測る。断面形は皿形を呈する。土器等遺物は出土していない。

SK 141（図面21、写真16）

6C10ⅥⅦdに存在する。140×95cmの楕円形状で、深さは56cmを測る。断面は東南に向かって階梯状に低くなる。埋土は暗色土の水平状堆積で、土器等遺物は出土していない。南側にSK 142と隣接するが、新旧関係は不明である。

SK 142（図面21、写真17）

6C10Ⅶcに存在する。94×78cmの楕円形状で、深さは55cmを測る。底のやや丸いバケツ状を呈し、埋土は下位が地山土のブロック状堆積、上位は暗色土の水平状堆積である。土器等遺物は出土していない。東側でSK 143と重複して、これより古い。北側にSK 141と隣接する。

SK 143（図面21、写真17）

6C10ⅦⅧcdに存在する。125×106cmの不整な楕円形で、深さは74cmを測る。断面形は深い皿状を呈する。埋土は暗色土がレンズ状に堆積している。土器等遺物は出土していない。西側でSK 142と重複して、これより新しい。南側ではSK 144と重複して、これより新しい。

SK 144（図面22、写真17）

6C10Ⅷcに存在する。150×136cmの不整な楕円形で、深さは50cmを測る。やや歪んだバケツ状で、北側にテラスをもち、底面は平坦ではない。埋土は暗色土が支配的である。土器等遺物は出土していない。北側でSK 143と重複して、これより古い。

SK 145（図面22）

6Ｃ５Ⅱｊに存在する。北側を排水溝で破壊されてしまっているが、径96㎝の円形を呈するものとみられ、深さは30㎝を測る。フライパン状で、底面は平坦である。土器等遺物は出土していない。

SK 146（図面22・42、写真17・29）

6Ｃ10Ⅸ Ｘｅに存在する。北側を排水溝で破壊されてしまっているが、160×140㎝程度の楕円形状を呈するものとみられる。深さは90㎝を測る。斜行して東側底部がわずかにオーバーハングする。西側壁はやや階梯状を呈し、底面も安定していない。埋土は暗色土がレンズ状に堆積している。土師器杯・砥石(206)・木材が出土している。直上にSD 158が重複して存在する。

SK 148（図面22、写真17）

6Ｃ５Ⅸ Ｘｊに存在する。北側を排水溝で破壊されてしまっているが、250×160㎝程度の楕円形を呈するものとみられる。断面は皿形で、埋土は水平状堆積である。土器等遺物は出土していない。南側にSK 149と隣接する。

SK 149（図面22）

6Ｃ５ Ｘｉに存在する。東側を排水溝で破壊されてしまっているが、100×60㎝程度の楕円形状となるものとみられる。深さは13㎝を測り、断面形は皿形である。土器等遺物は出土していない。北側にSK 148と隣接する。

SK 150（図面22、写真17）

6Ｃ５ Ｘｅｆに存在する。160×144㎝の楕円形で、深さは30㎝を測る。皿状を呈し、一部上面を破壊してしまった。土器等遺物は出土していない。

SK 151（図面22、写真17）

6Ｃ５ Ⅱ～Ⅳｉｊに存在する。310×240㎝の楕円形で、深さは30㎝と浅い。北側を排水溝に切られているが、フライパン状を呈する。東側坑口付近で人頭大の礫を検出したほか、土器等遺物は出土していない。

SK 165（図面22、写真17）

7Ｃ１ Ｉｊに存在する。北側を排水溝で破壊されているが、125×70㎝程度の楕円形となるものとみられ、深さは31㎝を測る。皿状を呈し、埋土は暗色土がレンズ状に堆積する。土器等遺

物は出土していない。

SK 195（図面22、写真17）

7C6 Xeに存在する。一辺75cmの隅丸方形状で、深さは103cmを測る。筒状を呈し、底面は平坦である。埋土はブロック状で、埋め戻されたものとみられる。土器等遺物は出土していない。

SK 203（図面22、写真18）

7C1 ⅨXgに存在する。112×100cmの楕円形で、深さは16cmを測る。皿状を呈し、埋土はブロック状である。土器等遺物は出土していない。

SK 207（図面22、写真18）

7C1 Icに存在する。148×88cmの楕円形で、深さは34cmを測る。不安定な皿状を呈し、埋土は水平状堆積である。土器等遺物は出土していない。

溝

溝は21基が存在した。

SD 60（図面23）

7C7 Ide～Ⅶde、7C7 Ⅸd～7C8 Ⅲdに存在する。幅約80cmで、深さは23cmを測る。断面形は皿状を呈するが、底面は一定ではなく凹凸がある。東西に走り途中でとぎれるが、長く連続し、更に東側ではCB8ブロックの南北に走るSD2に連続するものとみられる。土師器杯が出土している。SE 68・SK 59と重複して、これらよりも古い。

SD 95（図面23、写真18）

7C2 ⅧⅨfに存在する。長さ386cm・幅約14cmで、深さは14cmを測る。横断面は皿形を呈する。東西に走り、短い。主軸方向はN－81°－Wである。隣接するSD 81とは直交する格好となる。ほぼ同規模で、同一方向を指すとみられるものは、7C1・7C3に存在する。土器等遺物は出土していない。

SD 106（図面23、写真18）

6C5 Ⅳa～cに存在する。長さ416cm・幅約75cmで、深さは10cmと浅い。横断面は皿形を呈する。南北に走り、主軸方向はN－10°－Eである。南側の同方向に走る溝と連絡する可能性

もある。同方向・同規模の溝は、７Ｃ２に存在するSD 81のほか６Ｃ５に集中している。土器等遺物は出土していない。

SD 107（図面23、写真18）

６Ｃ５Ⅱａ～ｆに存在する。長さ11ｍ78㎝・幅約40㎝で、深さは20㎝を測る。横断面は皿形を呈する。南北に走り、主軸方向はＮ－５°－Ｅであるが、南端が東偏している。土器等遺物は出土していない。

SD 109（図面23）

６Ｃ５Ⅳefに存在する。長さ380㎝・幅約35㎝で、深さは５㎝と浅い。南北に走り、主軸方向はＮ－18°－Ｅである。南側の短い溝と連続して、更に長いものであったかとみられる。横断面は皿形で、土器等遺物は出土していない。

SD 110（図面23、写真18）

６Ｃ５Ｖefに存在する。長さ380㎝・幅約40㎝で、深さは11㎝と浅い。主軸方向はほぼ北を指す。横断面は皿形を呈し、土器等遺物は出土していない。

SD 111（図面23、写真18）

６Ｃ５Ｖghに存在する。長さ204㎝・幅約23㎝で、深さは34㎝を測る。細くて深い。南北に走り、主軸方向はＮ－６°－Ｅである。横断面はバケツ形を呈する。土器等遺物は出土していない。SD 109・110の北側に隣接するが、それぞれに主軸方向が異なる。

SD 134（図面23）

７Ｃ６Ⅱａ～Ⅲｆに存在する。南側は排水溝・セクションベルトで止まっており、北側は調査範囲外に伸長している。長さは10ｍを越え、幅は約80㎝で、深さは24㎝を測る。ほぼ南北に走るが幅が不安定で、南側は西偏する。南側はセクションベルトを越えて、SD 208に連続する可能性もある。土器等遺物は出土していない。

SD 204（図面23）

７Ｃ１Ⅵg～Ⅷiに存在する。長さ692㎝・幅約35㎝で、深さは19㎝を測る。主軸方位はＮ－51°－Ｅである。南西～北東に直線状に伸びて、SD 205と連続するものかとみられる。両溝とも北側が低くなっている。断面は浅いボウル形で、埋土はシルト質である。土器等遺物は出土していない。SK 201と重複して、これより新しい。

SD 205（図面23、写真18）

7C1Ⅸi～7C7Xaに存在する。長さ416cm・幅約40cmで、深さは20cmを測る。断面は深いボウル形で、埋土は砂質シルトである。南西方向のSD 204とほぼ直線状にあり、規模も近しく、連続する溝ではなかったかと考えられる。土器等遺物は出土していない。

SD 208（図面23、写真18）

6B25Xj～7C1Ⅱfに存在する。長さ13m76cm・幅約50cmで、深さは16cmを測る。断面は皿形で、埋土はシルト質である。やや蛇行状で南北に走るが、北端が細くなっている。更に北方のSD 134と連続する可能性もある。土師器杯・須恵器が出土している。

SD 209（図面23、写真18）

7C1Ⅲg～Vjに存在する。北端はセクションベルトと排水溝で止まっており、長さ560cm以上・幅約56cmで、深さは20cmを測る。直線状に南西～北東に走り、主軸方位はN－28°－Eである。横断面は皿形で、底面は所々に凹みがあるが、北が高くなっている。埋土はシルト質である。土器等遺物は出土していない。

SD 210（図面23、写真19）

7C1Ⅳ～Vcに存在する。長さ304cm・幅約30cmで、深さは20cmを測る。短いが、北東～南西に走り、主軸方位はN－26°－Eである。横断面は皿形で、埋土はシルト質である。北端はSD 212・pit 405と重複してこれらより新しい。土器等遺物はは出土していない。

SD 211（図面23、写真19）

7C1V～Ⅶcに存在する。長さ300cm・幅約40cmで、深さは28cmを測る。短く、ほとんど東西方向に走る。横断面は深いバケツ形で、埋土はシルト質である。pit 404と重複するが、新旧は不明である。土器等遺物は出土していない。同規模・同方向の小溝はこのグリッドにはほかになく、6C5・7C3に存在する。

その他の遺構

SX 200（図面23）

7C2Ⅲ～Vbcに存在する。排水溝によって、破壊されてしまっており、全容は明らかではないが、径200cm・深さ20cmほどの不整形を呈するものとみられる。断面皿形で、埋土は炭化物を含むシルト質土である。ほかの遺構群とはやや離れた存在である。土器等遺物は出土していない。

pit 158（図面23）

7Ｃ7 Ⅶde に存在する。90×65cmの楕円形で、深さは22cmを測る。断面はⅢ形を呈し、安定しない。埋土はシルト質で炭化物を含む。土師器が出土している。東側にピットと重複するが、これを切って新しい。

pit 167（図面24）

7Ｃ7 Ⅸa に存在する。径45cmほどの略円形で、深さは25cmを測る。SK 55の東側にやや重複して存在する。断面はバケツ形を呈する。SK 55を切って新しく、pit 168に切られて古い。土器等遺物は出土していない。

pit 168（図面24、写真19）

7Ｃ7 Ⅸa に存在する。径40cmほどの略円形で、深さは30cmを測る。東側に段をもつ。pit 167の東側に重複して存在し、これを切って新しい。土器等遺物は出土していない。

pit 172（図面24、写真19）

7Ｃ7 Ⅵef に存在する。34×34cmの円形で、深さは74cm以上を測る。断面はバケツ形を呈し、底面も平らで安定している。埋土はシルト質である。柱穴とみられるが、これに対応するものがなく建造物を復元することはできなかった。土器等遺物は出土していない。

pit 181・182（図面24、写真19）

7Ｃ7 Ⅳa に存在する。103×78cmの楕円形で、深さは54cmを測る。２基のピットの重複であるが、新旧は不明である。pit 181は深さもあり、形態も安定しており、柱穴とも考えられるが、対応するものがみつけられなかった。pit 182は浅く、断面Ⅲ形で、柱穴ではないものとみられる。土器等遺物は出土していない。

pit 201（図面24、写真19）

6Ｃ10Ⅷc に存在する。A・B２基のピットが近接して存在している。A は径50cmほどの略円形で、深さは30cmを測る。B は径30cmほどの略円形で、深さは20cmを測る。重複して存在し、B の方が新しい。柱穴としては対応するものをみつけられなかった。土器等遺物は出土していない。

pit 202（図面24、写真19）

6Ｃ10ⅧⅨd に存在する。65×40cmほどの楕円形状で、深さは20cmを測る。断面は底面に凹

凸をもち、２基の円形状ピットの重複ではないかとみられる。土器等遺物は出土していない。

pit 203（図面24）

７Ｃ２Ⅷｆに存在する。62×52cmの楕円形状で、深さは41cmを測る。底面が狭く、建造物の柱穴とは考えにくい。土器等遺物は出土していない。

pit 204（図面24）

７Ｃ２Ⅷｉに存在する。68×61cmの円形で、深さは22cmを測る。断面はⅢ形であるが、底面に凹凸がある。埋土は２枚の砂質土で、建造物の柱穴とは考えにくい。土器等遺物は出土していない。

pit 404・405（図面24）

７Ｃ１Ｖｃに存在する。２基のピットは重複して存在し、形態・新旧は不明である。pit 404はSD 211の西端に重複し、これに切られて古い。pit 405はSD 210の東端に重複し、これに切られて古い。土器等遺物は出土していない。

CB８ブロック

調査区の東側、新潟寄りに存在し、遺跡の空間利用は鉄砲町３地区に連続する。昭和59年度に発掘調査を実施した。検出した遺構には井戸・土坑・溝・その他がある。

井　　戸

５基が検出された。素掘りの井戸だけで、井側等施設をもつものは認められなかった。

SE５（図面24・43、写真19・30）

７Ｃ３ⅥⅦi～７Ｃ８ⅥⅦa に存在する。340×230cmの隅丸長方形状で、深さは86cmを測る。断面はⅢ形で、埋土は暗色土がレンズ状に堆積している。口径の割合いに浅いが、井戸として機能したものと思われる。灰釉陶器Ⅲ(213)・珠洲焼擂鉢(214)が出土している。東側にSD１と重複し、これに切られて古い。

SE６（図面24・43、写真19・30）

７Ｃ３Ⅳ～Ⅵh に存在する。370×290cmの隅丸長方形状で、深さは75cmを測る。断面はⅢ形で、埋土は炭化物粒を含む暗色土がレンズ状に堆積している。土師質土器Ⅲ(215・216)・珠洲焼擂鉢(217)が出土している。南側はSD３と近接する。

SE 12（図面25、写真19）

７Ｃ３Ⅳef に存在する。西側が排水溝にかかり、全てを発掘していないが、171×120cm以上の方形状を呈するとみられ、深さは86cmを測る。筒形を呈し、平坦な底部の中央付近には更にピットがあり、礫が沈んでいる。埋土は炭化物を混入する暗色土がレンズ状に堆積している。図示できる遺物は出土しなかった。

SE 31（図面25・43、写真20・30）

７Ｂ23ⅧⅨhi に存在する。87×45cmの楕円形状を呈し、深さは75cmを測る。筒状で、上部の大きく開くラッパ形を呈する。埋土は暗色土がレンズ状に堆積している。埋土中からは土師器柱状高台Ⅲ(218)・ウリ(ユウガオか)果皮製容器(219)が出土している。

SE 33（図面25・43、写真20・30）

７Ｃ８Ⅶab に存在する。75×70cmの不整円形で、深さは85cmを測る。筒状で、上部の開くラッパ形を呈する。埋土は炭化物を含む暗色土のレンズ状堆積で、中層にはクリ等の種子を多く含み、最下層には土器等が混入する。土師器小Ⅲ(220)・須恵器が出土している。

SK 13（図面25、写真20）

7Ｃ３Ⅴef に存在する。75×70㎝の台形状を呈し、深さは83㎝ を測る。断面は上部のやや開くバケツ形を呈する。埋土はレンズ状の堆積を示す。土器等遺物は出土していない。

SK 20（図面25、写真20）

7Ｃ３Ⅳd に存在する。排水溝にかかっており最深部まで発掘していないが、78×66㎝の円形状で、深さは34㎝以上を測る。断面は深い皿形で、埋土はほぼ水平状の堆積を示す。埋土中に数点の礫を検出した。

SK 21（図面25）

7Ｃ３Ⅳc に存在する。82×72㎝の不整形な隅丸長方形状で、深さは44㎝を測る。箱形を呈し、埋土は炭化物を含む暗色土がレンズ状に堆積している。珠洲焼が出土している。

SK 22（図面25、写真20）

7Ｃ３Ⅴab に存在する。65×50㎝の楕円形状で、深さは63㎝を測る。断面はバケツ形で、埋土は暗色土が堆積している。最下層上面から礫が出土している。

SK 26（図面25、写真20）

7Ｃ３Ⅳa に存在する。76×70㎝の楕円形状で、深さは49㎝を測る。底が丸く、深いボウル状を呈し、埋土は炭化物を含む暗色土がレンズ状に堆積している。土器等遺物は出土していない。

SK 27（図面25、写真20）

7Ｃ３ⅤⅥa に存在する。82×60㎝の楕円形で、深さは122㎝を測る。口径が広く、底径の狭い、歪んだ形の筒状を呈し、埋土は暗色土が、下層はレンズ状に、上層は黄色ブロックを含んで厚く堆積している。須恵器有台杯が出土している。

SK 29（図面25）

7Ｂ23ⅥⅦef に存在する。一部排水溝にかかっているが、70×64㎝以上の円形状を呈するものとみられ、深さは27㎝を測る。断面は深い皿形を呈する。土器等遺物は出土していない。

溝

いくつかの小溝のほかに、調査区を大きく南北に走り抜ける大溝 SD 1 が存在する。ほかに

東西方向に走り、これと合流するSD２が存在する。

SD１（図面25・43、写真20・30）

７Ｂ23Ⅵ Ⅶf～７Ｃ８ Ⅶh に存在する。調査区を南北に走り、北側は調査区外に伸長し、南側は二俣に分かれて終わる。長さは44ｍ以上で、幅は約120㎝、深さは33㎝を測る。横断面はⅢ形で、埋土下層は暗色土である。南端が二俣に分かれるのは、或いは二本の溝の重複であるかもしれないが、現地調査では不明であった。なお、７Ｃ８ Ⅵb でSD２東端と交わるが、新旧は不明である。土師質土器Ⅲ(221)・青磁Ⅲ(222)・珠洲焼擂鉢(223)が出土している。

SD２（図面25、写真20・30）

７Ｃ８ Ⅵa～Ⅴd に存在する。更に西方へ伸長して鉄砲町３地区のSD 60に連続するものとみられる。東端はSD１に交わるが、新旧は不明で、二本の溝が合流するものとみられる。土師器が出土している。

SD３（図面26、写真19）

７Ｃ３ Ⅳ～Ⅵhi に存在する。SE６の南側に隣接し、やや弧状である。西端は排水溝によって破壊されてしまっている。長さ400㎝程・幅約40㎝で、深さは約20㎝を測る。土器等遺物は出土していない。

SX 14（図面26）

７Ｃ３ Ⅴ Ⅵde に存在する。長径300㎝の不整形で、深さは13㎝と浅い。断面はフライパン形を呈する。土器等遺物は出土していない。

鉄砲町１・２地区

この地区は広く、遺構の分布は希薄であった。土坑・溝その他の遺構が存在したが、遺構群は東側の鉄砲町３地区と連続する部分に多く、西側ではまばらな溝群が検出されたのみであった。

土　　坑

土坑は位置的に２群あり、一は鉄砲町３地区遺構群の連続であり、二は調査区の西端５Ｂ24を中心とする位置にある。２つの地点の間には、まばらな溝しか存在しない、広い空白帯がある。

SK 122(図面26・47、写真９・32)

５Ｂ24ⅥⅦcd に存在する。SD 120の南側に近接し、147×140cmの隅丸方形状で、深さは35cmを測る。底面は平坦ではなく、南寄りが更に一段浅く凹んでいる。埋土は炭化物を含む暗色土がレンズ状に堆積している。土師器小皿(266)・曲物(267)・連歯下駄(268)・杭(269)・羽口(270)・叩石(271)・墨書のある石(272)が出土している。

SK 124(図面26、写真９)

５Ｂ24ⅣⅤgh に存在する。110×76cmの楕円形で、深さは11cmと浅い。断面はフライパン形で、底面は平坦である。埋土は暗色土が堆積している。付近にピットが存在するが、関連性は認められない。土器等遺物は出土していない。

SK 158(図面26、写真９)

６Ｃ４ⅥⅦfg に存在する。155×95cmの楕円形で、深さは18cmを測る。断面形は皿形を呈するが、底面は凹凸があって安定していない。埋土は炭化物を含むシルト質土１層のみである。土師器が出土している。SD 155・156・157に近接する。

SK 159(図面26、写真９)

６Ｃ４ⅧⅨj～６Ｃ９ⅧⅨj に存在する。170×156cmの不整方形状で、深さは60cmを測る。皿状を呈し、埋土は粘質土が水平状に堆積している。土師器・礫が出土している。遺構検出当初はSD 156・164と連続するものかとも思われたが、断面観察によって、溝を切って新しく、中世に所属することが判明した。

SK 165（図面26、写真９）

６Ｃ９ Ｘcd に存在する。92×72㎝の楕円形で、深さは36㎝を測る。壁は直立し、底面はやや平坦である。南側に隣接し、古銭５枚が重なって出土した、土坑墓とみられる鉄砲町３地区SK 147（図面12）と規模・形態・埋土の状況がよく似ている。あるいはこの土坑も墓であったかもしれない。

溝

溝には大溝と小溝とがあり、小溝は鉄砲町３地区の小溝群の連続である。

SD 102（図面26）

６Ｃ２ Ｘb～６Ｃ６ Ⅷa に存在する。北西から南東にかけてほぼまっすぐに伸び、主軸方位はＮ－60°－Ｗである。長さ20ｍほどで、幅は約40㎝、深さは10～15㎝と浅く、横断面はⅢ形である。ほぼ同位置に SD 103が存在し、重複が著しい。新旧関係は SD 103に切られてこれより古い。土器等遺物は出土していない。

SD 103（図面26）

６Ｃ２ Ｘb～６Ｃ６ Ⅷa に存在する。北西から南東にかけて長く伸び、主軸方位はＮ－60°－Ｗである。長さ30ｍ・幅約40㎝で、深さは48～57㎝を測る。横断面はバケツ形で、埋土は炭化物を含む粘質土である。表層には管状斑鉄が認められる。溝は北側が低く、南側が高くなっている。SD 102とほぼ同位置に、ほとんど重複して存在する。SD 102を切って新しい。土器等遺物は出土していない。

SD 106（図面26、写真９）

６Ｃ３ Ⅱj～６Ｃ３ Ⅰi に存在する。北西から南東にかけて直線状に伸び、長さ約30ｍ・幅約100㎝で、深さは50㎝と浅い。主軸方位はＮ－50°－Ｗである。SD 103とほぼ並行する。掘り込みが浅いためプランの確認が困難であったが、南端はセクションベルトで止まり、北端は調査区外まで伸びていたらしい。土器等遺物は出土していない。

SD 117（図面26、写真９）

５Ｃ５ Ⅶh～５Ｂ25 Ⅰh に存在する。やや蛇行しながら、ほぼ南北に伸びる。長さ約21ｍ・幅約40㎝で、深さは７㎝と浅い。北端は調査区外に伸長する。埋土は粘質土で、土師器が出土している。途中 SD 118と一部重複するが、これを切って SD 117が新しい。南端は更に伸びて東へ湾曲し、SD 120に連続するものかとみられた。

SD 118(図面26、写真９)

５Ｃ５ Ⅱｄ～５Ｂ25Ⅱｈに存在する。ほぼ南北に伸びる。長さ12ｍ・幅約20㎝で、深さは10㎝前後と浅い。埋土は暗色の粘質土である。土器等遺物は出土していない。西側に存在するSD 117と部分的に重複するが、SD 118が新しい。南側に灰釉陶器碗・須恵器有台杯・土師器・漆椀・木製品等が出土した、井戸ではないかとみられるSX 119と近接する。

SD 120(図面26)

５Ｂ23Ⅹｅ～５Ｂ24Ⅸｅに存在する。長さ19ｍ・幅約100㎝で、深さは17㎝を測る。東西に伸びて、東端はSD 117に連続するのではないかと思われた。西側は調査区外へ伸長し、途中SD 121・125と連続するが、新旧関係は明らかにできなかった。埋土は炭化物を含むシルト質土で、土師器が出土している。

SD 121(図面27)

５Ｂ18Ⅶｇ～５Ｂ24Ⅸに存在する。南西から北東方向に直線状に伸びて、長さ18ｍ40㎝・幅約150㎝で、深さは12㎝と浅い。底面は凹凸があり、埋土は暗色シルトで、須恵器・土師器が出土している。南端は調査区外に伸び、北端はSD 120と合流するようにみえるが、新旧関係は詳らかではない。

SD 150・151・152(図面27、写真９)

６Ｂ23Ⅵｂ～６Ｂ23Ⅲｅに存在する。おおむね北西から南東に走る。長さ10ｍ前後、幅約80㎝で、深さは40～50㎝を測る。埋土はシルト質土で、土器等遺物はまったく出土していない。３条の溝は近接して並行する。現代のコンクリート製の側溝とも並行する。南端ではやや湾曲し、北端は直線状に延長するとSD 110・SD 111と連続するのではないかと思われたが、明らかではない。

SD 154(図面27)

６Ｃ４ Ⅱｉ～Ⅳｉに存在する。ほぼ東西に伸びる。長さ196㎝・幅約30㎝で、深さは７㎝を測る。埋土は粘質土で、土器等遺物は出土していない。南西から北東に伸びるSD 153に切られて古い。

SD 155(図面27、写真９)

６Ｃ９ ⅢⅣａ～６Ｃ４ Ⅵｆに存在する。やや湾曲しながら、おおむね北西から南東へ走る。長さ12ｍ・幅約100㎝で、深さは９㎝を測る。土師器が出土している。西側にSD 154と隣接し、東側にSD 157と並行する。

SD 156（図面27、写真10）

6Ｂ24Ⅶg～6Ｃ4Ⅷj に存在する。ほぼ南北にまっすぐに走る。長さ25ｍ・幅約90㎝・深さは30㎝を測る。主軸方向はＮ－6°－Ｅである。横断面は深いⅢ形を呈し、埋土は暗色の粘質土である。南端は調査区外に伸び、北端は SK 159と重複し、これに切られて古い。あるいは更に伸長して、SD 164に連続するものかもしれない。中世包含層の下位に検出した。土師器が出土している。

SD 164（図面27）

6Ｃ9Ⅷa～d に存在する。長さ710㎝・幅約40㎝で、深さは16㎝を測る。主軸方向はＮ－10°－Ｗである。埋土はシルト質で、土器等遺物は出土していない。北から南にまっすぐ伸び、北端は調査区外に及び、南端は SK 159に重複する。新旧関係は SD 164が古い。更に南へ伸長して SD 156に連続するものかともみられたが、明らかではない。

SX 119（図面27・49、写真10・33）

5Ｂ25ⅡⅢf～h に存在する。430×250㎝の不整楕円形状で、深さは62㎝である。埋土は暗色土がレンズ状に堆積している。出土遺物が多く、灰釉陶器碗（301）・須恵器有台杯（292・293）・土師器無台椀（294～296）・甕（299・300）・黒色土器有台椀（297・298）・漆椀（302）・木製品等がある。井戸ではないかとみられる。SD 118の南側に存在するが、連続する関係にあるかどうかは明らかにできなかった。

二期線 A 地区

A 地区は法線の南側、新潟寄りに存在する。これは、一期線の鉄砲町 3 地区に対応する位置にある。昭和63年度に発掘調査を実施した。一期線調査から分離する段階で、取扱協議に手違いがあり、二期線調査範囲は大変狭いものとなってしまった。

検出遺構は井戸・溝があるだけで、数も種類も少なく、北側の一期線鉄 3 地区とは遺跡の空間利用が異なるようにみられる。

SE 1（図面28・53、写真21・35）

6 B 20ⅢⅣi に存在する。90×86㎝の隅丸長方形状で、深さは83㎝を測る。筒状を呈し、底面は平坦である。埋土は、下位と上位とが暗色土のレンズ状堆積で、中位は褐色土の水平状堆積となっている。上位層から土師質土器が、最下層からウリ（ユウガオか）果皮が出土したほか、土師器・砥石(362)・木片が出土している。南半部で SD 6 と重複し、これに切られて古い。

大雨のため、土層観察終了前に土層壁が崩落してしまった。

SD 2（図面28・53、写真21・35）

7 B 21Ⅳb～7 B 22Ⅴa に存在する。ほぼ東西に走り、東端はやや南へ湾曲しながら調査区外へ伸長している。長さ20ｍ・幅約70㎝で、深さは20㎝を測る。埋土は炭化物を含む暗色シルトで、浅いところではほとんど残っていない。須恵器・土師器甕(363)・珠洲焼・近世陶器・木片が出土している。

近接して、現代まで使用されていた用水路を初め、SD 3 ・ 7 を含めて、広い時代にわたって用水路が繰り返し開かれてきた。表土以下で、SD 2 の上部あたりにも、遺構として確定しなかった最近の（ビニール・缶等を含む）用水路跡がいくつか確認された。SD 2 はこの位置に設けられた、比較的初期の用水路であろう。

A トレンチ断面精査の段階で、SD 2 の上位に存在する SD 7 の表層（SD 7 －Ⅲ層）から、鉄砲玉 1 点を採取した。発射されていないものか、球形を保ち、大きなキズもない。径11㎜、鉛製。

SD 3（図面28・53・54、写真21・35・36）

6 B 25～7 B 22 に存在する。ほぼ東西に直線状に伸びるものであるらしい。両端が調査区外に伸長しているが、東端は一期線鉄 1 ・ 2 区には及んでいないようである。南半部は、ほぼ同一地点に並行して存在する、現代のコンクリート水路によって破壊されてしまっている。長さ35ｍ・幅100㎝以上で、深さは20㎝を測る。埋土は暗色シルト質で、砂粒・炭化物・礫を含む。出土遺物が多く、須恵器(364・365)・土師器・珠洲焼(367・368)・土師質土器・越前焼・唐津焼・古銭（洪武通宝・元聖通宝）・五輪塔(373・375・376)・石臼(372)・土留め杭がある。

A地区では最も多くの遺物を出土した。特に、調査区中央部にかかる辺りでは湧水があり、底面に土坑状の小穴がいくつかあり、五輪塔片や古銭・石臼等が集中しており、当初は独立した大きな土坑ではないかと思われた。おそらく、中世後半まで使用された水路と考えられ、現代のコンクリート水路と重なって存在する。

SD 6（図面28）

6B20Ⅰ～Ⅵ存在する。調査区の南端に検出され、一部しか調査されていない。おおむね東西に走る溝状遺構と思われ、長さ11m以上を測る。埋土は黒色・青灰色の粘質土で、ビニール・コーラ瓶を含む。現代の水路であると判断される。SE 1を切っている。

二期線B地区

B地区は法線の南側、富山寄りに存在する。これは、一期線の鉄砲町1・2地区に対応する位置にある。昭和62年度に発掘調査を実施した。一期線調査から分離する段階で、取扱協議に手違いがあり、二期線調査範囲は大変狭いものとなってしまった。調査によっては、溝状遺構1基を検出したのみである。他に河川跡1がある。

SD 1（図面9）

5B20に存在する。北東から南西に伸びるものとみられ、両端は調査区外へ伸長している。壁はほぼ直立し、底面は小溝状に一段凹んでいる。横断面は皿状を呈し、埋土は下層は暗色土・上層は黒色土のレンズ状堆積となっている。須恵器・土師器・珠洲焼・羽口(390・391)・鉄滓が出土している。

鍛治関連の遺物は昭和60年の調査区(鉄砲町1・2地区)では出土しておらず、南西方向の調査区外に鍛治遺構の存在が予想される。

河川跡（図面6）

5B20・6B16に存在する。おおむね北東から南西にかけて伸びるものとみられる。両端とも調査区外へ伸長しているが、北端は昭和60年の調査区(鉄砲町1・2地区)には検出されていない。

第Ⅳ章　出土遺物

今回の調査で出土した遺物は平安時代・中世の土器・陶磁器・木製品・石製品などで、出土量は平箱(54×34×10cm)で180箱程度、井戸部材が水槽(100×100×50cm)で6槽である。遺物包含層の枚数は地区で異なり、出土状況は地区・層序で大きく異なる。遺構番号も地区ごとに付してあるので、ここでは地区別・層序別に報告する。

1．遺物の分類

出土遺物の分類は、出土量が多く、層序で検出できた鉄砲町3地区を基準に行う。鉄砲町3地区の遺物包含層はⅡ層・Ⅲ層・Ⅳ層の3枚である。出土遺物の時期はおおむね、Ⅱ層が近世、Ⅲ層が11世紀から16世紀、Ⅳ層が9世紀後半から11世紀に属すると思われる。

Ⅳ層出土遺物は土器・木製品・石製品・鍛冶関連遺物・その他である。

土器では須恵器・土師器・黒色土器・特殊土器・灰釉陶器が出土している。ほとんどが土師器である。

須恵器　食膳具として使用した杯や貯蔵具として使用した壺・甕が出土している。

無台杯　高台がない杯。底部の切り離し技法には回転糸切り(以下、糸切り)と、回転ヘラ切り(以下、ヘラ切り)がある。

有台杯　高台が付けられる杯。底部の切り離し技法は糸切りで、ヘラ切りによるものはない。

有台椀　鉄砲町1・2地区で出土している。有台杯に比べると、付けられている高台が高く、体部が開き、体部上半が上方に折り曲げられ、口縁部が外反する。

杯蓋　有台杯に伴う蓋。口縁端部は下方に屈折する。天井部は切り離し後に、調整されるものとそのままのものとがある。

長頸壺　長い頸部をもつ壺類を一括した。口縁部は外反し、肩部は鋭く屈折する。

短頸壺　頸部が短い壺。なで肩ぎみの体部から口縁部が上方に短くのびる。

横瓶　体部が横に長い壺。二期線A地区から破片1点出土しているが、全体の形は不明である。

甕　いずれも外反する口縁部をもつと思われるが、全体の形がわかる個体はなかった。

土師器　いずれもロクロ成形で、無台椀・甕・鍋・鉢が出土している。無台椀が食膳具、甕・鍋が煮沸具として使用したと思われるが、無台椀にはススやタールが付く場合があるので灯明

皿として使用したと思われる個体もある

無台椀　高台がない椀。底部の切り離し技法は糸切りで、ヘラ切りによるものはない。法量から大形の無台椀Ⅰ(口径17cm以上)と中形の無台椀Ⅱ(口径14.5～16.5cm)と小形の無台椀Ⅲ(口径11～13.5cm)に分けられる。径高指数(器高／口径×100)は28以上である。ほとんどが無台椀Ⅲで、無台椀Ⅱと無台椀Ⅰは少ない。

須恵器や土師器での「杯」と「椀」の区別は、口径に対しての底径が大きく、体部が直立している形態を「杯」、口径に対しての底径が小さく、体部が開いている形態を「椀」とした。鉄砲町遺跡全地区の出土遺物をみると、径底指数(底径／口径×100)では、須恵器・無台杯が65以上あり、土師器・無台椀が55以下で大半が40台である。

甕　法量や器形から、口径が小さく平底の小形甕と口径が比較的大きく丸底の長胴甕に分けられる。小形甕の底部の切り離しはほとんど糸切りであるが、108のみが静止糸切りである。

鍋　半球状の体部に外側に屈折する口縁部をもつ。

鉢　平底で直線的にのびる体部をもつ。1点(98)しか出土していない。

黒色土器　器面に炭素を吸着させて黒色処理した土師器の椀。内面が黒色処理される無台椀が出土している。

特殊土器　土師器の無台椀に文字が書かれた墨書土器と須恵器の有台杯や杯蓋を転用した硯が出土している。

灰釉陶器　平安時代、東海地方でつくられた施釉陶器。椀と皿が出土している。

木製品　漆器椀や曲物などの生活用具と祭祀用具である斎串が出土している。[註1]

井戸枠部材　遺存状態の良好な下部から、井戸枠の内枠に用いた角材や側板に用いた板材などが出土している。

石製品　砥石と石鉢が出土している。

鍛冶関連遺物　鉄滓と炉壁材が出土している。

獣骨　ウマ骨がSE 168から出土している。

Ⅲ層出土遺物は土器・陶磁器・木製品・石製品・鍛冶関連遺物などである

土器・陶磁器では土師器・黒色土器・灰釉陶器・山茶碗・土師質土器・珠洲焼・瀬戸美濃焼・中国陶磁器などが出土している。

土師器　ロクロ成形の皿類が出土している。皿類とは小皿・柱状高台皿・足高高台皿である。甕も出土しているが出土量は少ない。

小皿　高台はなく、口径10cm以下で、径高指数は28以下で体部は短くのびる。底部の切り離しは糸切りである。Ⅳ層で出土している土師器・無台椀Ⅲとは、口径がひとまわり小さく、身

註1　分類と名称は『木器集成図録』〔奈良国立文化財研究所1985〕によった。

が浅いことで区別できる。

土師器での「椀」と「皿」の区別は、口径に対しての器高が高くて身が深い形態(径高指数28以上)を「椀」、口径に対しての器高が低くて身が浅い形態(径高指数28以下)を「皿」とした。

柱状高台皿　皿を身に、分厚い円柱状の高台がロクロ成形される。底部の切り離しは糸切りである。

足高高台皿　皿を身に、高い円輪状の高台が付けられる。

黒色土器　器面が黒色処理される土師器の椀。内面が黒色処理され、高台が付けられる有台椀が出土している。

土師質土器　中世につくられた素焼きの土器で、中世土師器という用語も使われる。ロクロを使わない手づくねの皿とロクロ成形で底部糸切りの皿が出土している。手づくねの皿は口縁部に横ナデが行われる。

灰釉陶器　平安時代、東海地方でつくられた施釉陶器。皿と椀が出土している。底部のみ遺存する個体は山茶椀である可能性もある。

山茶椀　中世、東海地方で灰釉陶器と同じ焼成でつくられた無釉陶器。高台の接地面に籾殻圧痕のつく椀が、鉄砲町１・２地区で出土している。

瀬戸美濃焼　中世、東海地方でつくられた施釉陶器。古瀬戸とも呼ばれる。産地は区別できなかったので一括して瀬戸美濃焼と記述する。[註1]

珠洲焼　中世、石川県の能登半島先端の珠洲市周辺でつくられた無釉陶器。壺・甕・片口鉢が出土している。

壺　紐ロクロ成形の壺Ｒ種と紐叩打成形の壺Ｔ種[註2]がある。ほとんどがＲ種で、Ｔ種は少ない。

甕　全体の形状が復元できる個体はないが、口径は35cm前後と40cmを超えるものがある。

片口鉢　擂鉢とおろし目のないこね鉢がある。破片のみの個体も多く、両者の区別ができない場合が多い。口径がわかる個体をみると27cmから33cm前後の中形品が多いが、口径20cmの小鉢も出土している。

中国陶磁器　青磁の碗や皿が出土している。

木製品　漆器の椀・皿・盆、曲物などの生活用具、板材が出土している。

石製品　砥石、石臼、叩石・磨石、石鉢が出土している。

鍛冶関連遺物　羽口、鉄滓、炉壁材が出土している。

Ⅱ層出土遺物は鉄製品と石製品である。その他、近世陶磁器も出土している。

註１　灰釉陶器、山茶椀、瀬戸美濃焼の分類と名称は『美濃焼』〔田口1983〕を参考にした。

註２　「総論　珠洲名陶」『珠洲の名陶』〔吉岡1989 a〕によった。

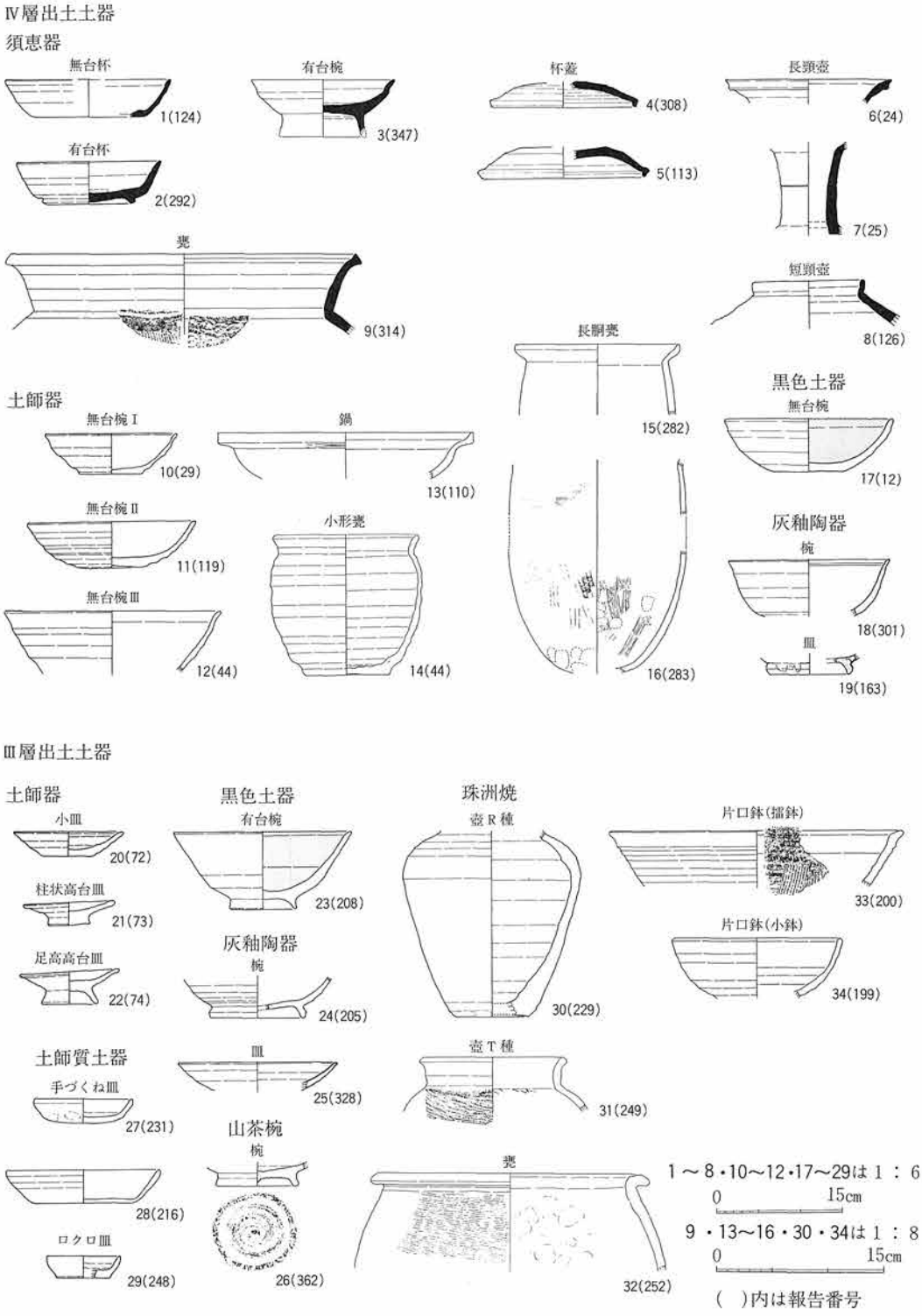

Ⅳ層出土土器
須恵器
無台杯
1(124)
有台椀
3(347)
杯蓋
4(308)
長頸壺
6(24)
有台杯
2(292)
5(113)
7(25)
甕
9(314)
短頸壺
8(126)
長胴甕
15(282)
土師器
無台椀Ⅰ
10(29)
鍋
13(110)
黒色土器
無台椀
17(12)
無台椀Ⅱ
11(119)
小形甕
16(283)
灰釉陶器
椀
18(301)
無台椀Ⅲ
12(44)
14(44)
皿
19(163)
Ⅲ層出土土器
土師器
小皿
20(72)
黒色土器
有台椀
23(208)
珠洲焼
壺Ｒ種
30(229)
片口鉢(擂鉢)
33(200)
柱状高台皿
21(73)
足高高台皿
22(74)
灰釉陶器
椀
24(205)
片口鉢(小鉢)
34(199)
土師質土器
手づくね皿
27(231)
皿
25(328)
壺Ｔ種
31(249)
山茶椀
椀
28(216)
ロクロ皿
29(248)
26(362)
甕
32(252)
1～8・10～12・17～29は１：６
0 15cm
9・13～16・30・34は１：８
0 15cm
(　)内は報告番号

図８　土器器種分類

2．鉄砲町3地区(CB8ブロックを含む)出土遺物

前述の通り、鉄砲町3地区の遺物包含層はⅡ層・Ⅲ層・Ⅳ層の3枚があり、出土量は目算ではⅣ層が過半を超える。なお、CB8ブロックは遺物包含層が2枚あり、鉄砲町3地区のⅢ層・Ⅳ層に対応し、鉄砲町3地区の遺構番号の数字もCB8ブロックの遺構番号に続いて付しているので鉄砲町3地区に含めて報告する。

A．Ⅳ層下面検出遺構出土遺物

ここではⅣ層下面で検出した遺構の埋土から出土した遺物を報告する。まず、比較的まとまって出土しているSE 168・SE 201・SE 206・SK 37・SK 41・SK 47・SX 186の出土遺物を報告し、次に、これら以外の遺構の出土遺物を報告する。なお、pit 774・SE 201・SK 160・SK 161はⅣ層下面で検出した遺構であるが．遺物(224～236)は12世紀後半以降と思われるので、Ⅲ層下面検出遺構出土遺物と一緒に後述する。また、122はⅢ層下面で検出したSK 87から出土した遺物であるが、所属時期は古代と思われるので、ここで報告する。

1）SE 168出土遺物(図面29・30、写真22・23・37)

長頸壺(1・2)　口縁部は大きく外反し、口縁端部の外側に面をもつ。端面の下端は顕著に引き出されないが、端面上端は上方につまみ出され、2の端面上端は下端の外側に伸びる。

土師器

無台椀(3～11)　法量から小形の無台椀Ⅲと中形の無台椀Ⅱと大形の無台椀Ⅰに分けられる。

無台椀Ⅲ(3～6・10)は口径13cm程度、器高3.6～3.8cm、径高指数は28～29である。体部はいずれも丸みをもって立ち上がる。3・4は径底指数が46で、口縁部はわずかに外反し、口縁部外面下辺とこれに対応する内面にはロクロナデで生じた稜がみられる。3の底部外面には、切り離し後、仮置段階で直径5mm前後の丸棒によってできた圧痕がみられる。4の底部外面には焼成時にできたと思われるヒダスキがみられ、内面の一部にはススが付く。5は径底指数が53、体部の丸みは報告する無台椀の中で最大の部類に入り、口縁部外面上端が玉縁状に肥厚する。10は口縁部を欠失するが、底部から体部への立ち上りが5と同程度の丸みをもつことから無台椀Ⅲと思われる。

無台椀Ⅱ(7・8・11)の形態は、7が径高指数が36、径底指数が37と無台椀Ⅲに比べると身が深く、底部がすぼまる。体部の開きは直線的で、口縁部はわずかに外反する。口縁部の一部が残存する8は7よりひとまわり大きく薄手である。底部のみ残存する11は底径から無台椀Ⅱと思われる。

無台椀Ⅰ（９）　歪んでいるが、口径は18㎝以上と思われる。

甕(13)　平底の小形甕で、内面はロクロナデの凹凸が目立ち、底部中心から反時計回りの渦巻状に伸びる。内面全体と体部外面の大部分にススが付き、割れ口にもススが付くので割れた後に火を受けた可能性もある。

黒色土器

無台椀(12)　大きさは無台椀Ⅱにあたり．径高指数が33、径底指数が42で体部は丸みをもって立ち上る。体部外面下端と、底部外面にロクロケズリが行われる。口縁部の内外面には横方向にミガキが加えられる。

特殊土器

硯(14)　須恵器の有台杯を転用した硯で、底部を高台にそって打ち欠いて形を整える。内外面全体に墨が付く。有台杯としての形態は、底部外面がロクロケズリによる面取りで高台内側にある底部外面中央が低く、外縁が高く、高台の貼り付け部分は斜めになる。

墨書土器(15)　土師器有台椀の体部外面に「生」の字がみえる。やや歪みがあるが、径高指数が32前後、径底指数が45で共伴した土師器の無台椀Ⅱに比べると身が深い。底部内面にロクロナデによる渦巻状の凹凸がみられるが器面は全体に滑らかである。口縁部の内外面にはススが付くので灯明皿として使われたと思われる。

木製品

漆器・椀(16)　内外面に黒色漆が塗られる。高台は欠失している。体部の内外面にはロクロ挽きの痕がよく残っている。

曲物底板(17・18)　一枚板でつくられ、側面はわずかな法をつけられる。正面には二次的な刃物痕、側面には調整の削り痕がみられる。17は柾目板を使い、木目に沿って左側1/4が欠ける。遺存部の側面には径２㎜の釘孔２孔が確認できる。18は板目板を使い、木目に沿って左側の一部が欠ける。正面には周縁から約５㎜内側に深さ１㎜以下のケビキ痕かとみられる傷が輪環状に残る。遺存部の側面には径約５㎜の木釘が４か所残っている。

角材(19)　左側と下半は欠失する。右側面上方にチョウナによる加工痕がみられる。

棒状製品(20)　細い角材の角を面取りし、断面が楕円形になるように加工し、上端は角を取って円頭形に整え、下方５㎝程度を削り細めて先端を斜めに切断する。下端には焦げ目があるので、火鑽（ひきり）棒として使われた可能性もある。

用途不明(21)　自然木をノコギリで切断し、下端面が面取りされる。

獣骨

ウマ骨(228～446)　出土量は平箱(54×34×10㎝)３箱で１頭分はない。部位が判明[註1]したのは428～436である。428～431が下顎で歯の破片もみられる。432が左前足前膊（ぜんぱく）の上腕骨、433が左前

註１　鹿児島大学農学部　西中川駿氏の教示による

足管(かん)の内側の橈骨(とうこつ)、434が左後足脛(すね)の大腿骨、435が右後足脛の大腿骨、436が右後足管の脛骨(けいこつ)である。いずれも両端の関節がそろうものはなく、ひびが入り、脆くなっていた。切断の痕跡はみられないが、火を受けた痕跡はなく、髄の部分も残っている。

なお、SE 168の出土遺物で、出土位置のわかっている個体は互層になっている炭化物包含層の下位にある埋土から出土したものである。底面は標高11.8m前後で底面上に厚さが約50cmの淡緑黒シルト(図示の第17層)・緑灰砂があり、これらの層から主な遺物が出土した。底面から体部上半を欠く土師器甕(13)とウマ骨(428～446)が出土した。やや上位では、長頸壺(1・2)の破片が出土し、1個体の黒色土器無台椀(12)が出土した。完形の土師器無台椀(3)が木製品の棒状製品(20)・用途不明(21)と近接して出土している。2枚の曲物底板(17・18)と角材(19)の3個体が同位レベルで出土している。上位の淡緑黒シルト(図示の第17層)から、漆器椀(16)と完形の「生」字・墨書土器無台椀(15)が出土している。漆器椀(16)と完形の土師器無台椀(3)は伏られた状態で出土している。これらの遺物は埋井の際に埋納されたのではないかと思われる。

2) SE 201出土遺物(図面30～34、写真23～25)

須恵器

無台杯(22)　体部は大きく開く。底部外面は切り放し後、ロクロケズリされる。器厚は全体に薄く、底部内面はロクロナデの凹凸が残る。外面には数か所タールが斑状に付く。

長頸壺(24・25)　いずれも口頸部である。24は口縁部の一部で、口縁部は大きく開き、口縁端部は下外方に引き出され、端面は凹状となっている。25は口縁部を欠く。外面には幅2mm前後の沈線があり、全体に薄く自然釉がかかる。

壺(23)　体部の最大径が9.8cmで口頸部は欠失する。底部外面は切り放し後ロクロナデが施され、幅広の低い高台を付けられる。内面はロクロナデの凹凸が目立ち、底部中心から反時計回りで渦巻状に伸びる。

杯蓋(26・27)　体部は直線的に開き、口縁端は下方に屈折する。27の口縁端部は外反する。いずれも、胎土の色調から土師器にみえるが堅く焼成してあり、器種から考えて須恵器の焼き損ないと思われる。

土師器　遺存状態は良くなく、表面が荒れているものが多い。

無台椀(28～42)　法量から小形の無台椀Ⅲと中形の無台椀Ⅱと大形の無台椀Ⅰに分けられる。

無台椀Ⅲ(28～34・38・39・41)　口径11.8～13.6cm、全形が復元できる個体の径高指数は29～33である。29・30・34は体部が直線的に伸び、口縁部は外反せずに丸くおさまる。29・34の外面はロクロナデの凹凸が少し目立つが内面は滑らかである。31・32は体部が丸みを帯び、31の口縁部内外面はロクロナデによって凹状になり、32の口縁部は外反する。

無台椀Ⅱ(35～37)　全形が復元できる35は歪みがあるが、口径15cm弱、径高指数は32前後に

なると思われる。

無台椀Ⅰ(40・42)　底部のみの遺存で口径は不明であるが、底径や体部の立ち上りから考えて口径は17cm以上と思われる。

甕(43～45)　43・44は体部から口縁部は「く」の字に外反し、端部は短くわずかに内向する。口縁部内面にはススが付く。44の体部外面下半は火を受けて剝落し、赤褐色に変化している。体部下半から底部にかけての外面にはススが付く。45は体部から口縁部は「く」の字に外反し、口縁部端面上端はわずかにつまみ上げられる。

鍋(46)　口縁部は短く直線的に開き、口縁端部は上方につまみ出される。体部の内外面にはカキ目がみられる。

木製品

曲物底板(47)　柾目板を利用してつくられる。外面全体がトロケて、調整痕は不明であるが、側面に釘孔が８か所みられる。側板も出土しているが実測できなかった。

井戸枠部材

井戸枠の上部は腐食して遺存しないが、下部はよく残っている。井側は方形隅柱横桟型〔坂詰1980〕で板材は割り板である。部材の多くは家屋などに使われたものを転用したと思われる。

隅柱(48・49)　実測できた２本を図示した。48が南西角、49が南東角に用いられていた。下端から約60cmの部位に中内枠を組み込む方形の孔がノミであけられる。48は東面を図の正面にしたが、正面の下方は円形と方形の孔がノミであけられ、裏面は下端の角を取り、合欠(あいかぎ)状の仕口(しくち)にしている。49は北面を正面にしたが、正面の下方に削り痕があり、楕円形の孔があけられる。48・49の下方の孔や仕口が井戸枠として使うためにあけられたのか、転用前の名残りかは不明である。

中内枠(50～52)　実測できた３本を図示した。50は北辺、51が西辺、52が南辺に用いられていた。52は48と49をつないでいた。50・

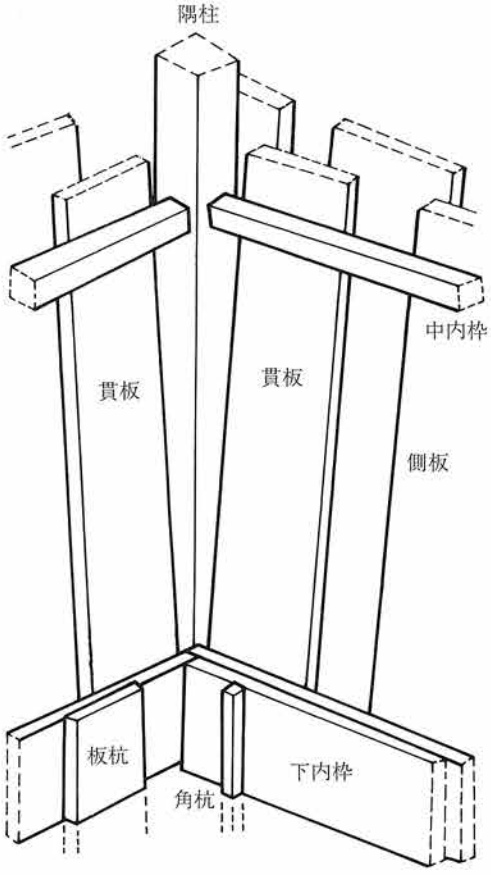


図９　SE 201復元模式図

51は両端の4面を削って細める。52も同様の加工が行われたが、図示の上端は腐食して加工痕は不明である。

下内枠(53～55)　53は東辺、54は南辺内側、55は南辺外側に用いられていた。いずれも割り板で両端はノコギリ挽きの痕を残すが、53の図示の下端は二次加工の痕を残す。

角杭(56・57)　南辺にあった下内枠(54)の内側に刺さっていた。56が東側、57が西側に用いられていた。角材の下端を削って杭にされている。上端にはノコギリによる切断痕が残る。

板杭(58)　北辺にあった下内枠の内側に刺さっていた。板材下端の表裏面を削って杭にしている。上端にはノコギリによる切断痕が残る。

貫板(59～62)　隅柱と中内枠が接続している部分の外側に刺さっていた。60・61は南辺の東端、62は南辺の西端に用いられていた。下端は表裏面・両側面を削り先端を尖らせる。節孔には丸棒が埋め込まれ、孔を塞ぐ。59は北辺の東端に用いられていた。下端は削られていないが、斜めに切断してあることや配置から考えて側板杭として用いられたものと思われる。

側板(67～72)　上端は腐蝕して遺存しないが、下側面には切断の痕跡が残る。下端中央の一辺に6㎜前後の方形の孔が穿ち抜かれる。67～69は北辺、70は西辺、71・72は南辺に用いられていた。68は下端の孔が、やや左側に、板面に対して斜め方向に穿たれ、ほかの側板と異なる。72は下端の両側がチョウナによって削られている。

その他(63～66)　遺存状態の悪い上位から出土した。井戸枠上部の部材と思われる。

石製品

砥石(73)　断面が方形になり、上下部が欠失する。4側面に砥面をもつ。

磨製石斧(74)　埋土の上部から出土した。表面は鉄分が付着して黒色に変化している部分(図トーン)と地の色が比較的残る部分がある。変色の部分が着柄の範囲を示すと思われる。

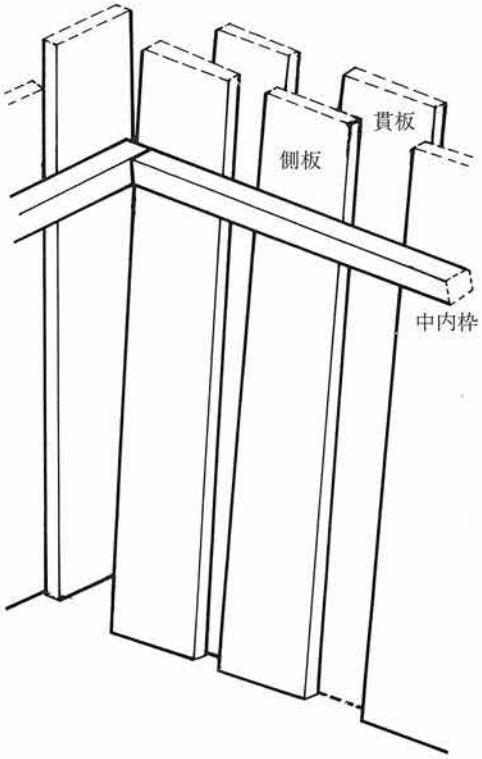


図10　SE 206復元模式図

3）SE 206出土遺物(図面34・35、写真24・25)

土師器

無台椀(75)　無台椀Ⅲで径高指数が33、器厚は厚く体部は丸みをもち、口縁部は丸くおさまる。

瀬戸美濃焼

皿(76)　体部下端がロクロケズリされる。高台は割高台で、削り出しで輪高台をつくった後、

十字の４箇所をＵ字形に削り取られたと思われる。

木製品

斎串(77)　上端を圭頭状にして、側面から切り込みを入れる。表裏面には墨書はみられない。

曲物(78・79)　78は箍(たが)つき釘結合曲物で上部を欠く。箍板の先端部は上下側が削られて先端に向って細くなる。箍の綴り合わせは、外側が先端部と先端から約４㎜の部分の２か所で行われ、先端部が一段の外綴り、他方が一段の内綴りで綴り合わされる。側板の内側には上下縁に対して垂直方向にケビキが入る。側板の綴り合わせは両方の端部２か所で行われる。外側に出ている端部は３段の内綴、内側にある端部は１段の内綴りで綴り合わされる。側板と底板を結合させるため、箍の上から木釘が６か所に打ち込まれる。79は底板で釘孔が５つ残る。

井戸枠部材

上部は遺存状態はよくないが、標高13.9ｍ以下の部位はよく残っていた。井側は方形横桟型〔坂詰1980〕である。

中内枠(80～83)　長さ71㎝前後の角材の両端をノミとノコギリで凹凸をつけ、枘(ほぞ)をつくる。80は北東辺、81は南東辺、82は南西辺、83は北西辺に用いられていた。

側板[註1](85・87～89)　割り板で、下側面はノコギリによる切断痕が残る。下端に孔が穿たれている板といない板があり、孔の形状も方形と楕円形がある。87は北東辺、88は南西辺、89・90は南東辺の中央部に90が89の外側に重なる状態で、85・91～93は北東辺で85は中央部の外側、91は西端、92は85の西隣、93は北端にあった。

貫板[註2](84・86)　板の下方をチョウナで削り、下端を細くさせている。84は北東辺の北寄り、86は北西辺の西寄りに用いられていた。

部位不明(94・95)　上部の部材と思われる。

４）SK 37出土遺物(図面36・37、写真26)

須恵器

無台杯(104)　体部の立ち上がり角度から無台杯と思われる。器厚は薄く、口縁部は外反せず、丸くおさまる。

有台杯(105)　底部と体部の境は角張り、体部は直線的に立ち上がる。底部外面の高台外側はロクロケズリで凹状になって器厚が薄くなる。高台内側もロクロケズリが施されるが、中央部は行われないで糸切り痕が残る。高台は外に張り出し、内端が接地する。

長頸壺(106)　器厚は薄く、口縁部は外反し、端部上端は上方につまみ出される。

註１　下端を尖らせているものを貫板、尖らせていないものを側板とした。

註２　SE 201とSE 206は貫板の置き方が異なっている。SE 201は一辺の両端部、中内枠に接して置かれていた。SE 206は一辺の両端でない部位に、中内枠や側板の外側に置かれていた。

土師器

甕(108・109)　平底の小形甕。108は底部の切り離しは静止糸切りで、この遺跡では１点のみの存在であった。内面にはロクロナデによる凹凸がみられ、底部内面には工具でできた沈線が中心から反時計回りの渦巻状に伸びる。109の外面は剝落するが、内面には底部中心から反時計回りの渦巻状にのびるロクロナデの凹凸がみられる。

鍋(110・111)　110の口縁部は内湾気味に立ち上り、端部は上方につまみ出される。内外面にはススが付着する。111の口縁部は直線的に開き、端部は上方につまみ出される。

特殊土器

硯(112・113)　須恵器の蓋を転用した。内面全体に墨が付着し、天井部内面は磨滅して滑らかである。蓋としての形状は、裾部は内湾して開き、口縁部は鋭く下方に屈折し、端部は内側に引き入れられる。天井部外面には糸切り痕がみられる。113の体部外面には筆で付けたような墨跡がみられる。

５）SK 41出土遺物(図面37、写真26)

須恵器

長頸壺(114)　口縁部は大きく外反し、口端部上端は上方へつまみ出され、先端は鋭角になる。内面には自然釉が掛かっている。

土師器

無台椀(115・116)　115は無台椀Ⅱで体部は直線的に開く。内外面は風化が著しいが、赤彩とも思える色素が所々に付着する。116は無台椀Ⅰで体部は直線的に開き、外面にはロクロナデの凹凸がみられ、口縁部はわずかに外反する。

甕(117)　平底の小形甕。内外面は風化している。内面には底部中心から反時計回りの渦巻状に伸びるロクロナデによる凹凸がみられる。

６）SK 47出土遺物(図面37、写真26)

土師器

無台椀(119)　無台椀Ⅱで、体部は丸みをもって立ち上がり．径高指数は29で身は浅い。

灰釉陶器

椀(120)　口径は20cm近くに達すると思われる。底部から体部は丸みをもって立ち上り、口縁部は心持ち外反する。体部下端はロクロケズリが行われる。施釉は漬け掛けで口縁部から体部下端に及ぶ。

7）SX 186出土遺物（図面36、写真26）

土師器

無台椀(99～101)　法量からみて無台椀Ⅲにあたり、体部は丸みをもつ。外面はロクロナデの凹凸がみられるが、内面は滑らかに仕上げる。99・100は径高指数は28、径底指数は56～57、100は口縁部を外反させる。101は径高指数は33、径底指数は47、口縁部をわずかに外反させる。

鍋(102)　口縁部は大きく外反し、端部は上方につまみ出される。内外面は風化が著しく調整は不明である。

8）その他の遺構出土遺物（図面36・37、写真26）

SK 163出土遺物

須恵器・甕(96)　口縁部は外反し、口縁部下端は少し外に引き出され、端面は外傾する。

土師器・甕(97)　器厚は薄く、口縁部は体部から「く」の字に外反し、上端は少し内側に折り曲げられ。外面にススが付着する。

SK 170出土遺物

土師器・鉢(98)　内外面の剝落・風化が著しく、外面は赤褐色に変化し、３㎜以下の礫が多量に露出している。外面には叩きとも縄目とも思える規則的な細かい凹凸がみられる。

SK 45出土遺物

須恵器・杯(118)　底部が欠失し、高台の有無は不明である。体部は丸みをもって開き、口縁端部は外反する。

pit 803出土遺物

土師器・甕(103)　長胴甕と思われる。口縁部は大きく外反し、端部は上方につまみ出されて面をもつ。外面はロクロナデの凹凸が残るが、内面は滑らかに仕上げられる。外面にはススが付着する。

pit 111出土遺物

須恵器・杯(121)　底部が欠失し、高台の有無は不明である。体部は丸みをもって開き、口縁端部は丸くおさまる。

SE 87出土遺物

土師器・器種不明(122)　ほかの土師器に比べて堅く焼成されている。体部が遺存しておらず、類例も乏しく全体の器形はわからないが、台付の鉢か甕と思われる。長い台は外に張り出すように付けられる。台の内側や底部外面には指頭圧痕がみられる。外面の体部下端から台の部分は横方向のナデが施される。底部内面には円を描くように付けられたナデ痕や指頭圧痕がみられる。

B．Ⅳ層出土遺物

ここでは遺構外の包含層から出土した遺物を報告する。

1）須恵器(図面38、写真27)

無台杯(123・124)　123は体部が直線的にのび、口縁部の端部は上方に若干折られる。底部が欠失し、有台の可能性もある。124は体部がやや丸みをもって開き、口縁端部は丸くおさまる。底部内面はロクロナデによる稜の凹凸が著しい。

有台杯(125)　低い高台をもち、体部は丸みをもって立ち上る。

短頸壺(126)　口縁端部は丸みをもち、外面には自然釉が掛かっている。

長頸壺(127～130)　127の口縁部は外反し、端部は上方・斜め上方・水平の3方向に引き出され、凹面が水平と直立の2面にできている。128・129は底部から体部にかけての内面にロクロナデの凹凸が残り、体部下端の外面にはロクロケズリが施される。130は把手の部分と思われる。

甕(131～145)　131～133は口縁部の一部で、口縁部は外反し、口縁部上端は上方につまみ出されて端部外側に面をもつ。132・133の口径は不明である。132の外面には自然釉が掛かっている。133は口縁部の開きが直線的である。134～145は体部の破片である。外面の叩き目痕は平行と格子、内面の当て具痕は同心円・放射状・平行である。134～137は外面平行・内面同心円で、134・135の外面は叩きの上にカキ目がみられる。136・137の外面は2回の叩きで格子にみえる。138は外面が平行の叩きの上にカキ目、内面が同心円の上に平行の当て具痕がみられる。139は外面平行・内面放射状。140・141は外面格子・内面同心円で、140の外面は叩きの後ナデ消しが行われる。142～144は外面格子・内面平行。145は外面が格子で、内面がナデられて当て具痕は不明である。

2）土師器(図面39、写真27)

無台椀(146～149)　法量からみて無台椀Ⅲ(146・148)と無台椀Ⅱ(147・149)に分けられる。無台椀Ⅲで全形が復元できる146は径高指数が33で、体部は丸みをもち、口縁部は外反しない。外面はロクロナデの凹凸が残るが、内面は滑らかである。148は底部のみであるが体部への立ち上がりから無台椀Ⅲと思われる。無台椀Ⅱの147は体部の立ち上がり角度が大きく、体部は直線的で口縁部はわずかに外反する。外面はロクロナデの凹凸が残るが内面は滑らかである。全形は径高指数が36前後の身の深い形状であると思われる。149は底部のみであるが、体部の立ち上がりから無台椀Ⅱと思われる。

甕(150～153)　150・151は口縁部が「く」の字に外反する。150は口縁端部に向って肥厚していき、端部は丸くおさめられる。口縁部外面は工具によりロクロナデされ端部の丸みとの境に

稜ができている。151は口縁部の端部上端が上方につまみ出され、端部外側に面をもつ。152・153の内面と体部外面はロクロナデの凹凸がみられ、153は外面にススが付く。

鍋(156～159)　いずれも体部から口縁部は緩く短く外反し、端部は上方につまみ出される。156・157の端面は緩い凸状になる。158・159の端面はつまみ出しにより、凹面となっている。159は体部が遺存し、カキ目がみられる。

器種不明(154・155)　ほかの土師器に比べて堅く焼成される。体部が遺存せず、類例も乏しいので全体の器形はわからないが、台付の鉢か甕の台部と思われる。長い台は外に張り出すように付けられる。台の内側や底部外面には指頭圧痕がみられる。外面の体部下端から台の部分は横方向のナデが施される。

３）灰釉陶器(図面39、写真27)

皿(160～163)　いずれも底部のみ遺存する。160の底部は、切り離し後、ナデられている。高台は外傾して外端が接地する。体部外面から垂れ落ちた釉は高台に達する。底部内面にも釉がみられる。底部から体部への立ち上がり方向から椀の可能性もある。161は体部下端がロクロケズリされる。高台の外面上半は外傾し、下半は面取りして内傾させる。高台の内面は外傾するが、下半は心持ち内湾する。高台外面には体部から垂れ落ちた釉が付き、底部内面にも、焼成時、上に重ねられていた個体から垂れ落ちたと思われる釉が円輪状に付く。162は体部下端がロクロケズリされる。底部外面は高台の内側がロクロケズリされるが中央には糸切り痕が残る。高台は内外面とも外傾し、端部は丸くなる。163の高台の外面は弧状で内面は内湾する。外面の高台の付け根に釉が付く。

４）鍛冶関連遺物(写真27)

鉄滓(399～406)　合計267ｇが出土した。

C．Ⅲ層下面検出遺構出土遺物

ここではⅢ層下面で検出した遺構の埋土から出土した遺物を報告する。まず、比較的まとまって出土しているSE 54・SE 97・SE 5・SE 6・SK 117・SK 160・SK 161・SD 2・pit 774の出土遺物を報告し、次ぎに、これら以外の遺構出土遺物を井戸・土坑・ピットに分けて報告する。なおSE 201・SK 160・SK 161・pit 774はⅣ層下面で検出した遺構であるが．遺物(224～236)は12世紀後半以降と思われるので、ここで記述する。また、122はⅢ層下面検出のSK 87からの出土遺物であるが、所属時期は古代と思われるので前項で報告した。

1）SE 54出土遺物（図面40、写真28）

土師器の皿類や木製品が出土している。黒色土器の有台椀と思われる底部破片が出土しているが実測できなかった。

土師器

小皿（166～172）　口径9.0～9.8㎝、器高2.0～2.4㎝で径高指数は22～24、底径3.7～5.7㎝。体部は直線的に開く。168の口縁部は外反せず、端部は丸くおさまる。168以外の口縁部は端部を折り曲げられていないが、口縁部外面をロクロナデによりやや凹ませて、口縁部内端の角を取って凸状の面を口縁部下辺の内面に稜をつくるように、心持ち外反させる。168・170は底部内面に同心円状のカキ目がみられる。166以外はススが付くので、SE 54から出土した小皿は全て灯明皿として使われたのではないかと思われる。

柱状高台皿（173）　口径は小皿よりひとまわり小さい。高台は垂直に張り出し、体部は直線的に伸びる。底部内面から底部外面の底部の厚さは1.3㎝で器高の59％を占める。

足高高台皿（174～176）　口径は小皿よりひとまわり小さい。径５㎝前後、高さ１㎝前後の外に張り出す高台をもつ。高台内側の底部外面には高台を付けた際の調整痕がみられる。器形のわかる174の体部は直線的に伸びる。175にはススが付く。

木製品

曲物底板（177）　板目板を使用する。側面には削り痕がみられる。側面に釘孔がないので蓋の可能性も考えられる。

2）SE 97出土遺物（図面41、写真29）

珠洲焼・壺（191）　壺Ｒ種。体部の最大径が16㎝前後になると思われる。体部外面への加飾はみられない。底部外面には静止糸切り痕がみられる。底部内面から体部内面下端には底部中央から半時計回りの渦巻状にロクロナデの凹凸がみられる。

石製品・砥石（192）　原形は長円形であったと思われるが、裏面を除く五側面を砥面として使用する。下側面は叩き面として使われる。

3）SE 5 出土遺物（図面43、写真30）

瀬戸美濃焼・皿（213）　遺存部の内外面に灰釉が掛けられる。口縁部は外反し、体部下端はロクロケズリが施される。

珠洲焼・片口鉢（214）　口縁端部は水平な面をもち、外端が外につまみ出される。口縁部内面は凹み、体部との間に段をつくる。おろし目の１単位は幅2.3㎝・11本で緻密であるが、深さにはばらつきがあり、端部は揃えられていない。

4）SE６出土遺物(図面43、写真30)

土師質土器・皿(215・216)　手づくねで平底。215は器厚が６㎜前後で小型の割に厚い口縁部の内外面は横ナデの調整を施し、体部下方の不調整部分との境に稜をもつ。底部の内外面には指頭圧痕がみられる。216は体部は直線的に立ち上り、口縁端部は肥厚する。口縁部の内外面は横ナデの調整を行う。体部外面下半や底部内外面に指頭圧痕がみられる。

珠洲焼・片口鉢(217)　口縁端部は水平な面をもつ。おろし目１単位の幅・本数は不明だが、目は太く、端部は揃えられている。

5）SK 117出土遺物(図面42、写真29)

土師器・小皿(204)　体部は直線的に開く。口縁部にススが付き、灯明皿として使ったと思われる。

灰釉陶器・椀(205)　体部は丸みをもって立ち上る。体部下端はロクロケズリが行われ、底部外面はロクロケズリが施される。高台は外面が弧状、内面が外傾する。

6）SK 160出土遺物(図面44、写真30)

珠洲焼・壺(229)　壺Ｒ種。体部の最大径が16.0㎝で、内面にはロクロナデの凹凸がみられる。底部外面には静止糸切り痕がみられる。外面の体部と底部の角に板があてられ、角が潰れて上下に胎土がはみ出て平らな面ができる。

石製品・砥石(230)　直方体の砥石で、砥面は正・裏・右側面にみられる。所々にススが付く。

7）SK 161出土遺物(図面44、写真30)

木製品

箸(231)　細い角材を削り出し、上下端を尖らせている。

漆器・盆(232)　全体に焦げ目があり、調整不明であるが、全体に赤色漆が施されていたと思われ、木目と異なる方向に漆のハケ目が走る。

部材(233)　細い角材。上端の右側にはめ込み痕と思われる凹みがみられる。

用途不明(234～236)　234は燃えさしと思われる。土圧で潰されて断面は楕円形になっている。235・236は側面を削り、棒状になる。先端には面取りがなされている。陽物とも考えられる。

8）SD２出土遺物(図面43、写真30)

土師質土器・皿(221)　手づくねで平底。口縁部の内外面は横ナデの調整を施し、体部外面の下端に稜ができている部分もある。体部外面下半や底部内外面に指頭圧痕がみられる。

中国陶磁器・青磁・皿(222)　体部は底部から丸く屈折して直線的に立ち上がり、口縁部は外

反する。内外面に紋様はみられない。

珠洲焼・片口鉢(223)　口縁部はわずかに内湾し、端部は外傾する面をもつ。口縁部の内端は上方につまみ出されるが、外端から体部外面は丸くなる。おろし目1単位の幅・本数は不明であるが、細く、先端が揃えられている。

鍛冶関連遺物・鉄滓(408～410)　408は平滑面はないが、409・410は比較的滑らかな1面をもち、形状は椀形をしている。410はSD1出土の破片と接合した。

9）pit 774出土遺物(図面43、写真30)

珠洲焼

壺(224)　壺R種。肩部は肥厚し、頸部や体部は器厚が薄くなる。外面には櫛目の格子文が施される。

甕(225)　口縁部は外反し、端部は丸くおさまる。口縁部の外面の屈折部はやや凹み体部との段をつくり、口縁部の内面は屈折部から上方に工具でナデられたと思われる比較的平らな面をもつ。体部の外面には平行叩き目、内面には円形押圧具痕がみられる。

瀬戸美濃焼

花瓶(226)　体部下端近くに最大径をもち、口頸部と体部の下端がくびれ、底部は台脚になる。体部には1条4本の横位平行沈線が施される。釉は体部下端のくびれまで掛けられている。

木製品

杓子(227)　柾目板を使用する。把手の部分を削って形を整えている。下端は角が取られ、丸くなる。

10）井戸出土遺物(図面40・43、写真28～30)

SE 51出土遺物

石製品・砥石(164)　上半と左半を欠失する。砥面は上下の側面を除く4面が使われ、断面は長方形になる。正面には深い砥筋が3本みえる。

SE 52出土遺物

土師器・甕(165)　長胴甕の一部。体部から口縁部は「く」の字に外反し．口縁部上端は上方につまみ出される。体部外面や口縁部内面にはカキ目がみられる。

SE 67出土遺物

土師器・小皿(178)　口縁部は外反せず、丸くおさまり、体部は直線的に伸びる。外面にはススが付く。

石製品・磨石(179)　正面と裏面に磨面を残すが、上下・左右面を欠く。

SE 71出土遺物

珠洲焼・片口鉢(180)　径は不明。口縁部は端面が内傾している。おろし目は不明である。

SE 73出土遺物

木製品・漆器皿(181)　ロクロ挽きで高台を削り出す。内面は底部をロクロ挽きで低くし、体部との段をつくっている。内外面には黒色漆が塗られるが、内面全体には漆の小塊が10個以上できている。

SE 75出土遺物

珠洲焼・片口鉢(182)　体部外面下端に指頭圧痕があり、底部外面には静止糸切り痕がみられる。おろし目については、１単位が幅3.2㎝・10本程度で、放射状に刻まれているが、放射の交点は底部の中心と一致していない。使用の結果、磨滅が著しく、おろし目が消えている部分もみられる。なお、底部外面をみると、静止糸切り痕と思われる筋目は直線状で、底部外面に露出している胎土中の小礫が筋目に対して平行に移動している。このことから、静止糸切り痕と思われる筋目は、切り離し後、ハケ状工具でナデられてできたハケ目の可能性も考えられる。

木製品・漆器皿(183)　底部内面はロクロ挽きで低くし、体部との段をつくる。内面には赤色漆を塗り、外面は高台をつけた後、黒色漆を塗る。

SE 76出土遺物

木製品・曲物底板(184)　側面に削り痕が残る。裏面の縁辺には接着剤としての黒色漆が盛り上がって残る。

SE 77出土遺物

木製品・漆器皿(185)　平坦で広い底部と短い体部からなる。全体に黒色漆が塗られている。体部外面と底部内面にはロクロ目がみられる。

板材(186)　上下が折れる。下方には孔２つがあけられる。

SE 80出土遺物

木製品・漆器椀(187)　底部に円盤状の外開きの擬高台をつくり、底部外面の円盤外縁から５㎜内側に凹線を刻み、中央を凹める。全体に黒色漆が塗られるが、底部外面の高台内は塗られていない。

SE 83出土遺物

珠洲焼・甕(188)　体部外面は斜行する平行叩き目、内面には円形押圧具痕が残る。

SE 85出土遺物(図面41、写真29)

珠洲焼・甕(189)　体部の破片で外面は平行叩き目、内面に円形押圧具痕が残る。

石製品・砥石(190)　原形は直方体であったと思われるが、上半と裏面を欠く。上下面を除く４面に砥面が残る。

SE 137出土遺物

木製品・燃えさし(193・194)　表面全体は火を受けて焦げる。

SE 202出土遺物

石製品・石臼(195)　上臼の一部で、供給口から外縁部が遺存する。側面にある挽き木を入れたと思われる孔は楕円形であるが深さ1.2cmと奥行きはあまりない。底部は磨滅している。供給口の側面と底部には炭化物が付着している。

SE 31出土遺物

土師器・柱状高台皿(218)　高台はやや外傾して張り出し、体部は直線的に開く。底部内外面の中央には指頭大の凹みがある。底部の厚みは中央の凹みで1.3cmと器高の52%を占める。

果皮製容器(219)　ウリ(ユウガオか)果皮。右側端面に削り痕がみられる。へたに近い上半部に孔(径6cm以上)をあけ、内容物を取り除いて、容器として用いたと思われる。へた部分に孔が開く。

SE 33出土遺物

土師器・小皿(220)　体部は直線的に開く。口縁部外面にタールが付く。

SE 201出土遺物(図面43、写真30)

珠洲焼・壺(228)　壺R種。体部の最大径が16.8cmで体部外面の加飾はない。口縁部は短く、やや外傾し、端部は丸くなる。体部の外面には粘土紐の不整合によるすき間があり、すき間を埋めるためと思われるナデが施される。

11) 土坑出土遺物(図面41・42、写真29)

SK 58出土遺物

珠洲焼・片口鉢(196)　口縁部は端面が内傾する。おろし目1単位は幅3.4cm・11本が単位になる。

SK 78出土遺物

石製品・砥石(197)　長方体の砥石で、上下側面を除く4面が砥面として使われ、正面と裏面が中央が凹んでいる。正面下方に深い砥筋がみられる。

SK 86出土遺物

石製品・砥石(198)　長方体(方柱状)の砥石で、上下側面と裏面を除く3面が砥面として使われ、両側面の中央がへこむ。正面下方に深い砥筋がみられる。

SK 87出土遺物

珠洲焼・片口鉢(199)　口径の小さい小鉢で、体部は丸みを帯び、口縁部は外傾する端面をもつ。

SK 88出土遺物

珠洲焼・片口鉢(200)　口縁部の端面は内傾し、内端下端は凹む。おろし目は2単位接して施

され、１単位は幅2.8㎝、10本で太く深いおろし目が残る。

SK 98出土遺物

珠洲焼・甕(201)　体部外面に平行の叩き目、内面に円形押圧具痕がみられる。拓本で図示した上と左側の破損部はヤスリに転用されて滑らかになっている。

SK 103出土遺物

灰釉陶器・椀(202)　体部上半が欠失し、皿の可能性もある。底部から丸みをもって立ち上り、高台は内外面が外傾する。釉は体部内面にみられる。底部外面の高台内側はロクロケズリの後、ナデ調整が施されたと思われ、表面が平滑になっている。

SK 113出土遺物

石製品・叩石(203)　正面と左右側面に叩き痕があり、正面中央が凹む。

SK 146出土遺物

石製品・砥石(206)　上下欠失。正面から右側面に砥面が残る。

13）ピット出土遺物（図面42・43、写真29）

pit 159出土遺物

石製品・砥石(207)　直方体（方柱状）の砥石で、上下側面を除く４面が砥面として使われ、正面の中央がへこむ。正面下方に深い砥筋がみられる。

pit 166出土遺物

黒色土器・有台椀(208)　内面は磨かれている。体部は丸みをもち、高台は外に張り出す。

pit 192出土遺物

珠洲焼・片口鉢(209)　内面は剝落により、おろし目の本数は確認できない。底部外面には静止糸切り痕がみられる。

pit 208出土遺物

珠洲焼・甕(210)　口縁部は短く外反し、端部は肥厚し断面が扇状になっている。内面の体部と口縁部の屈折部はヨコナデで器厚は薄くなっている。体部外面は平行の叩き目、内面には円形押圧具痕が残っている。

pit 220出土遺物

中国陶磁器・青磁碗(211)　口縁部外面に雷文帯をもち、体部下半には沈線をもつ。

pit 467出土遺物

土師器・小皿(212)　体部は直線的に開く。口縁部から体部の内外面にはススが付着し、灯明皿として使用されたと思われる。

D．Ⅲ層出土遺物

ここでは遺構外の包含層から出土した遺物を種類ごとに報告する。

1）中国陶磁器(図面45、写真31)

青磁・碗(237)　内外面に紋様はみられない。口縁部に行くほど器厚は薄くなる。

白磁・皿(238)　菊皿で、体部がひだのように波打つ。

2）瀬戸美濃焼(図面45、写真31)

天目茶碗(239・244・245)　口縁部は外反気味に立ち上り、口縁端部は尖る。239は体部が内湾して立ち上る。鉄釉が体部外面下端を残して全体に掛けられる。釉が掛からない体部外面下端にはケズリが施される。244・245は体部が直線的に立ち上る。灰釉が体部外面下端を残して全体に掛けられる。

皿(240・242)　240は底部外面をケズリ抜いて高台をつくる。灰釉が全体に掛けられている。242の体部は直線的に開き、口縁部は丸くおさまる。鉄釉が体部内外面まで掛けられる。

おろし皿(243)　体部は大きく開き、口縁部は外反する。底部内面は格子状におろし目を刻み、体部下端にはケズリが施される。全体に鉄釉が掛けられている。

瓶(241・246)　口頸部は垂直に立ち上り、口縁部は肥厚しながら外反し、端部は丸くおさまる。241には灰釉、246には鉄釉が掛けられている。

3）土師質土器(図面45、写真31)

皿(247・248)　247は手づくねで丸底。横ナデは口縁端部に軽く行われるが体部上半分には及ばない。内外面全体に指頭圧痕がはっきり残る。248はロクロ成形底部糸切りで体部は内湾気味に立ち上る。口径に対する底径が大きく、身も浅い。

4）珠洲焼(図面45・46、写真31)

壺(249・250)　249は壺Ｔ種。口縁部が外反し、端部に外傾する面をもつ。体部外面には平行の叩き目がみられる。250は壺Ｒ種。外面はロクロナデの後、さらにナデられている。

甕(251～255)　体部外面は平行の叩き目、内面には円形押圧具痕がみられる。251・252の口縁部は外反し、端部は丸くおさまる。口縁部の内面は屈折部から上方にヘラ状工具でナデられたと思われる比較的平らな面をもつ。251の口縁部外面には沈線がある。

片口鉢(256～259)　256の口縁部は外面がやや凹み、端部が丸くなり、内面に波状文が施される。257・258の底部外面には静止糸切り痕がみられる。257のおろし目はロクロナデの凹部で

は刻まれない部分もあるが、１単位が幅2.3cm・９本で太さの揃ったおろし目が底部に達している。258の内面は１単位が幅1.8cm・８本である。259は体部の破片で、おろし目は１単位が幅3.2cm・11本で太さは揃わない。

５）石製品(図面46、写真31)

砥石(260～264)　260・261は直方体の砥石で、上下面を除く４面に砥面をもち、砥面の中央がへこむ。262は断面が直方体(方柱状)の砥石で遺存する正・右側面に砥面をもつ。263・264は板状の砥石で正面に深い砥筋をもつ。

石鉢(265)　底部と口縁部に割れ、底部は二期線Ａ地区の現代用水の撹乱層から出土した。体部は直線的に開き、口縁部端部に水平な面をもつ。

６）鍛冶関連遺物(写真31)

鉄滓(411～413)　合計369ｇが出土した。いずれも比較的滑らかな１面をもち、原形は椀形であったと思われる。

炉壁材(414)　表面の全体には鉄分が付着する。原形は直方体と思われる。原形の外面６面のうち４面が残り、３面には壁を組む際の接合土が付着する。

Ｅ．Ⅱ層下面検出遺構出土遺物(写真36)

ここではⅡ層下面で検出した遺構の埋土から出土した遺物を報告する。395～397がSK 101・398が畝間76から出土した。395は角釘、396・397は丸釘である。398はパステル形石製品である。

３．鉄砲町１・２地区(CB 10ブロックを含む)出土遺物

１・２地区の大部分とCB 10ブロックではⅢ層は存在せず、遺物包含層はⅣ層１枚しか検出されていない。出土遺物の時期は10世紀初頭から近世に及ぶと思われる。遺物の大半が包含層からの出土であり、遺構は溝がほとんどで、遺物は流れ込みによって堆積したと思われる場合がある。まず、遺構から比較的まとまって出土した遺物を報告し、次にこれら以外の遺構・遺構外の包含層から出土した遺物を報告する。土器については、「第Ⅳ章１」で鉄砲町１・２地区出土遺物も合わせて器種分類しているので、これに従って記述する。

Ａ．おもな遺構出土遺物

ここでは鉄砲町１・２地区のSK 122、SD 104・SD 105・SD 107・SD 108、SX 119から出土した遺物を報告する。

1）SK 122出土遺物（図面47、写真32）

図示した遺物のほかに須恵器・長頸壺や土師器・甕の破片が出土している。

土師器

小皿(266)　体部は直線的に開き、口縁部はやや外反する。体部外面はロクロナデによる凹凸が大きく、口径も10.2～10.6cmと歪みがみられる。

木製品

曲物底板(267)　表面はトロケて調整は不明であるが、側面には削り痕がみられ、釘孔が残っている。

下駄(268)　台と歯を一本の木から削り出す連歯下駄で右半が木目に沿って割れて欠失している。全体の形は長円形と思われ、前後端が丸くなる。歯は台と同じ横幅でつくられ、縦断面が方形になる。鼻緒孔は後歯の前側にある左の後壺しか確認できないが、鼻緒孔は円形で、裏面にある孔の周囲は木肌が削り取られているので、鼻緒孔は台の裏面からノミを入れて木肌を削り、器厚を薄くしてキリなどで孔を開けたものと思われる。裏面には前歯前側の下駄の中央と思われる部分に削り痕があるので、前壺は前歯の前側中央にあったと思われる。

杭(269)　丸太材下端の2面を加工して先端を尖らせている。

石製品

凹石・叩石(271)　原石は偏平な円礫で、周縁が叩き面として使われ、正裏面の中央に凹みがみられる。

墨書石(272)　拳大の直方体の礫の6か所に墨書している。墨書は文字のようにもみえるが判読はできなかった。

鍛冶関連遺物

羽口(270)　破片であるが、上端は高温で黄褐色に変化する。

2）SD 104・SD 105・SD 107・SD 108出土遺物（図面47、写真32）

この4本の溝は現代の用水路に近接して切り合っている。いずれも近世陶磁器が出土し、埋土堆積の時期差は小さいと考えられるので、これらの溝から出土した遺物は一緒に報告する。276・277・421がSD 104、278～285・415・422～424がSD 105、286～291・425がSD 107、414がSD 108から出土した。

須恵器

無台杯(278)　体部は直線的に大きく開き、器厚は全体に薄くなっている。体部に接する底部内面は胎土が盛り上がっている。内外面に数か所タールが斑状に付いている。底部外面は切り離しの後、ナデられている。

杯蓋(279)　口縁部は下方に鋭く屈折し、端部は丸くおさまる。体部上方と天井部の外縁はロ

クロケズリが施される。

長頸壺(280・286)　280の口縁部は欠失している。内面に斜めのナデがみられる。286は口頸部の破片で、外面に２本の沈線がみられる。内外面にススが付く。

甕(281)　外面は平行叩き目、内面はクシ状工具でナデられた後、同心円の当具が当てられる。

土師器

甕(282・283・287)　282の口縁部は外反し、端部は上方につまみ出されて外傾する凸状の面をもっている。内外面は風化して調整は不明である。283は長胴甕の体部で、体部下半の外面に平行の叩き目、内面にハケ目があり、内外面に指頭圧痕と思われるわずかな凹みもみられる。287の口縁部は外反し、端部は上方につまみ出されてに外傾する面をもつ。内面は風化で調整は不明であるが、外面は体部上方にカキ目がみられる。

鍋(288)　体部は内湾して立ち上り、口縁部は短く外反し、端部は上方につまみ出され、外傾する面をもつ。外面はロクロナデの凹凸があり、ススが付く。

珠洲焼

甕(276・277・289)　276・277はいずれも破片で、外面に平行叩き目、内面には円形押圧具痕がみられる。277は体部上半部分と思われ、内面に粘土紐の輪積痕のすき間がみられる。289の口縁部は短く外反し、端部は丸くおさまる。体部の外面には平行叩き目、内面には円形押圧具痕がみられる。

近世陶磁器

陶器・碗(422)　高台は削り出しで輪高台がつくられている。器厚は不均衡で断面が三角形・台形になっている。体部下端にロクロケズリが行われている。内面にはロクロナデの凹凸が残っている。釉は内面全体と外面の体部下半まで掛けられている。

磁器・碗(421・423・424)　染付。421は口縁の一部で、423・424は底部の一部。　423は高台の下端を除いて釉が掛かり、底裏銘がある。

磁器・皿(425)　色絵。底部の一部。方形か多角形の皿と思われる。内面は呉須で模様が描かれ、外面には裏文様が施される。

木製品

部材(291)　細い角材で図示の上端と下方に他の部材を組み込むためと思われる切り込みがある。上端の切り込みには木釘が刺さり、下方の切り込みには釘孔が開いている。

石製品

砥石(285)　断面が正方形の直方体であったと思われる。上下面を除く４面に砥面をもつ。いずれの砥面も中央が凹んでいる。

石臼(290)　上臼の一部である。直径からみて径９寸規格でつくられたと思われる。上面は外周に縁があり、内側は凹んでいる。側面には挽き木を入れる孔があり、隅丸長方形の平面形を

している。下面は中央に向かって凹んでいき中心部には心棒受けの円形の孔がある。臼の目は磨滅して遺存しない部分もあるが、4分画が確認でき、全体は6分画であると思われる。目の方向は一定であり、目の方向から上臼の回転方向は一般的な反時計回りと思われる。

土製品

土錘(284)　先端の一部が遺存する。全形は長円形と思われる。

鍛冶関連遺物

鉄滓(415・416)　415の形状は頂点の丸い円錐で、側面は比較的滑らかである。416は比較的滑らかな球面状の1面をもつ。形状は椀形で、半分を欠いている。

3）SX 119出土遺物(図面49、写真33)

須恵器

有台杯(292・293)　口径は13cm前後、器高が4cm前後の身の低い一般的な形態である。体部と底部の境は稜をもたず丸くなっている。底部内面にはロクロナデによる凹凸がみられる。高台は低く、内端接地である。高台のつくりは粗雑で形に歪みがあり、底部外面との間にすき間がみられる部分もある。292は口縁部が外反し、底部外面にはヘラ記号が施され、ヒダスキがみられる。293の底部内面には指頭圧痕と思われる小さな凹みが数か所みられる。292・293はほぼ完形で正位の2枚重ねで出土したが、伴出する遺物とは所属時期に開きがあり、伝世品を埋納したのではないかと思われる。

土師器

無台椀(294～296)　口径が11cm前後、径高指数は28～30で、無台椀Ⅲである。体部は丸みをもって開いている。遺存状態の比較的良い294の体部内外面にはススが付いていて灯明皿として使われたと思われる。

甕(299・300)　平底の小形甕で、口縁部は短く外反し、端部は丸くおさまる。外面にはロクロナデの凹凸がみられるが、内面は滑らかである。口縁部から体部下半の外面にはススが付着する。299は体部下半にケズリが施され、底部外面はハケ状工具でナデられている。口縁部内面には小さなフキコボレ痕が付き、底部内面には焦げ痕が小さく残る。300は口縁部内外面にフキコボレ痕が付き底部内面には焦げ痕がみられる。

黒色土器

有台椀(297・298)　口径は16cm前後で体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部はやや外反する。297は底部外面をロクロケズリされ、短い高台がナデ付けらる。内面と口縁部外面はミガキが施され、内面が放射状、口縁部外面が水平方向にミガかれる。黒色処理は口縁部外面にも処理が及んでいる。298は底部外面が切り放し後ナデられる。高台は内外面が外傾するように底部外面にナデ付けられ、端部は丸くおさまる。口縁部内面には水平方向のミガキが施される。

高台と底部を除いた外面全体にススが付いている。

灰釉陶器

椀(301)　体部は底部から丸みをもって立ち上り、口縁部は心持ち外反する。口縁部内面には沈線が走る。釉は口縁部から体部までの漬け掛けされる。

木製品

漆器・椀(302)　横木取りの原材をロクロ挽きで成形し、低い高台をつくり出している。全面に黒色漆が塗られるが、高台全面と底部外面は木地のままである。

B．その他の遺構・包含層出土遺物

ここでは遺物出土量が少ない遺構や遺構外の包含層から出土した遺物を種類ごとに報告する。

1）須恵器(図面47・49・50、写真32・34)

無台杯(303～305)　成形は丁寧で内面は平滑である。303は体部が丸みをもって立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。径高指数は34と一般的であるが、底径は大きく底径指数66と口径の半分以上になり、有台杯と同じくらいになる。304は底部が欠失し、有台の可能性もあるが、器厚は口縁部に向かって薄くなる。305は底部のみ残る。

有台杯(274・306)　274はSK 161から出土し、底部外面は中央を残してロクロケズリされる。体部は直線的に立ち上り、底部との境は角張る。306の体部は直線的に立ち上がり、底部との境は角張る。高台は外端が接地する。底部外面はロクロケズリが施され、高台外側の底部外面外縁は凹む。

有台椀(307)　この１点のみ出土した。体部は大きく開き、口縁部はやや上方に立ち上り、口縁端部は外反する。高台は高く、高さが２㎝前後になると思われ、底部と体部の境に貼り付けられ、外に張り出す。

杯蓋(308)　宝珠様のつまみが付けられたと思われる天井部はロクロケズリが施され、体部はやや内湾して伸び、縁部は下方につまみ出される。

短頸壺(309)　器厚は薄い。口縁部は短く直立し、端部は丸くおさまる。

長頸壺(310～312)　全体の器形は不明。310は口頸部が少し開いて立ち上る。311は底部外面にヘラ記号が刻まれ、高台の接地面に刻目が施される。底部内面には自然釉がみられる。312は外面に自然釉が１条幅１㎝で垂れ落ちている。

甕(313・314)　313は口縁部が外反し、下端が外に引き出され、外傾する面をもつ。体部外面には格子と思われる叩き目、内面には放射状と思われる当て具痕がみられる。314は口縁端部の上端が上方に引き出される。体部外面には平行の叩き目、内面には同心円状の当て具痕がみ

られる。

2）土師器(図面47・50・51、写真32・34)

無台椀(273・315・317)　273はSK 148の出土で無台椀Ⅲにあたる。底部から体部は大きく開いて立ち上り、体部下半でやや上方に屈折し、口縁部は外反する。体部下半屈折部の外面にはロクロナデによる稜がみえる。底部外面は切り離しの後、ナデられて胎土が体部下方にはみ出している。315は体部が内湾気味に開き、口縁部は外反せずに丸くおさまる。317は底部内面にロクロナデの凹凸が残り、体部が開くので無台椀と思われる。

小皿(316・318)　316の体部は直線的に立ち上り、口縁部は丸くおさまる。318は器厚が厚く、体部外面の下端は凹んでいる。内外面にはススが付くので灯明皿として使われたと思われる。

甕(322～325)　322は器厚が厚く、口縁部は外反し、端部は上方につまみ出され、凸状に内傾する面をもつ。外面にはススが付く。323・324は器厚が薄く、口縁部は外反し、端部は丸くおさまる。324の外面と口縁部内面にはススが付く。325は表面が風化して底部外面の切り離し痕がわずかに確認できるのみである。

鍋(326・327)　半球状の体部、外反する口縁部をもち、口縁部端部は上方につまみ出されて外傾する面をもつ。326の外面にはススが付き、口縁部端面は凹んでいる。327の口縁部の端面は丸く凹状になる。

3）黒色土器(図面50、写真34)

有台椀(319～321)　319は内面にロクロナデの凹凸がみられ、高台は断面が三角形になる。320は内面と口縁部外面が横方向にミガかれて内面は滑らかである。321は内面は放射状にミガかれて滑らかである。高台は短く外に張り出すように付けられる。底部外面の高台内側に墨が付いているので墨入れとして転用された可能性も考えられる。

4）灰釉陶器・山茶椀(図面51、写真34)

328～331が灰釉陶器で、332が山茶椀である。

皿(328・329)　328は口縁部の一部で、釉は内面全体と体部外面下半までが漬け掛けされる。329は底部の一部で、高台は外面が弧状で内面が外傾する。

椀(330～332)　330は底部の一部で、釉は体部内外面の下半までが漬け掛けされる。底部の器厚は1.1cmと厚い。高台は外面が弧状、内面が外傾している。底部外面はハケ状工具でナデられている。底部内面には磨面があり、硯として転用された可能性も考えられる。331は底部の一部で、底部内面は滑らかであるが、中央に成形の際できたと思われる突起がわずかに残る。高台は外面が弧状で内面が内湾している。底部外面のナデ調整は高台内側のみで中央には切り

離し痕が残る。底部外面に墨が付くので墨入れとして転用された可能性も考えられる。332は底部の一部で、底部内面は滑らかであるが、中央に成形の時できたと思われるわずかな凹みがみられる。高台の内外面は外傾し、接地面に籾殻痕が残る。底部外面はナデられて中央には突起がみられる。籾殻痕があるのはこの個体だけであった。

5）中国陶磁器（図面51、写真34）

青磁・碗（333～335）　333・334は蓮弁文碗で、体部外面に鎬（しのぎ）蓮弁文を施す。弁は剣頭と左右の輪郭を描く。334は彫りが浅く、紋様はあまり明確でない。335は無文碗で体部は直線的に立ち上り、口縁部は外反する。

6）瀬戸美濃焼（図面51、写真34）

天目茶碗（337・338）　鉄釉が掛けられる。337は口縁部の一部で釉は内外面に掛けられる。口縁部は垂直に立ち上り、端部がわずかに外反して少しくびれ、先端を尖らせる。338は底部の一部で、釉は体部外面下端と底部外面を除く内外面に掛けられたと思われる。体部外面下端はケズられる。高台は削り出しの輪高台で、高台内側の底部外面は中央が浅くなるようにケズられて中心に小突起ができる。高台外側の底部外端面は水平にケズられて体部との境に明瞭な稜をつくる。体部外面下端と底部外面は無釉のままである。体部外面下端の釉は水滴状に厚く固まり、一部は高台まで垂れ落ちる。

香炉（339）　袴腰（はかまごし）形と思われ、鉄釉が掛けられる。口縁部はほぼ直立し、口縁端部は欠失しているが、外側へ水平に引き出され、幅のある縁帯をつくったと思われる。体部下半は外に張り出し、張り出しの上方に稜線をもつ。釉は内面は口縁部のみ掛けられ、外面は体部下方の張り出しまで掛けられているが、一部は底部まで垂れ落ちていたと思われる。

皿（336・340）　336は無台の皿で、外面はロクロケズリが施される。内面は底部がケズられて体部との段をつくる。灰釉が内面全体に掛けられる。340は体部が丸みをもって立ち上り、口縁部は丸くおさまる。底部外面はロクロケズリが施され、高台は断面が三角形になる。鉄釉が全体に掛けられるが、高台内側の低部内外面が同じ部分で丸く拭き取られる。

7）珠洲焼（図面51・52、写真35）

片口鉢（344～346・350）　344・345は口縁部の一部で、端部に外傾する面をもつ。内端のつまみ上げは345が顕著でこの部分の断面は鋭角であるが、344は顕著でなくつまみ上げ部分の断面が直角に近くなっている。おろし目の全体の条数、１単位の本数はわからないが、344は太く、345は細い。346・350は底部の一部で体部外面下端に指頭圧痕がみられる。350の底部外面には静止糸切り痕がみられる。おろし目は、346は１単位９本で太く、350は１単位の本数はわから

ないが、太い。

8）近世陶磁器(図面51、写真35)

いずれも陶器で、341・342が肥前系、343が越中瀬戸焼と思われる。

皿(341・343)　釉は灰釉で底部を除く内外面に掛けられる。体部は直線的に開き、口縁部は外反し、端部は上方に引き出され、断面が三角形の突帯をつくり、その内縁はU字の沈線が巡っている。343は削り込みで高台をつくる。体部は直線的に開き、口縁部端部は丸くおさまり、注口をもつ。釉は鉄釉で、体部下半まで施される。

天目茶碗(342)　釉は灰釉で体部外面下端と底部外面を除く内外面に掛けられたと思われる。高台は削り出しの輪高台で、外面は上半に稜線をもち、上方が外傾、下方が内傾する。高台内側の底部外面は削りとられた後、ナデられて中心に小突起ができる。高台外側の底部外面はケズられて体部との境が角張っている。体部外面下端と底部外面は無釉のままであるが、体部外面下端の釉の一部は高台まで垂れ落ちている。

9）土製品(図面52、写真35)

土錘(351)　長円形であったと思われる。断面は円形で中央に径1.1cmの孔が通る。

10）石製品(図面52、写真35)

砥石(352～354・356)　352は薄い板状の形をしていたと思われ、正面に砥面がある。353は断面長方形の直方体であったと思われ、側面には成形時のノコギリ目が残り、正面と裏面に砥面がある。356は使用の結果、断面長方形の直方体状となっている。砥面は欠損している上半を除いた面にあり、右側面には2面の砥面があり、手持ちの砥石として使用されたと思われる。

磨石(355)　円形の自然石で、正面・裏面・縁面が用いられる。

11）鉄製品(図面52、写真35)

357はキセルの雁首で火受がラッパ状に開き、管には接合痕が残る。358はクサビ状になっている。右に行くに連れて薄くなる。

12）木製品(図面52、写真35)

下駄(359)　台と歯を1本の木からつくる連歯下駄で右半分が木目に沿って欠失する。全体の形状は長円形と思われ、両端が半円形になる。鼻緒孔の前壺は遺存していないが、後壺は前歯の後側に上面部を前傾してあけられる。歯は台と同じ横幅で．断面が方形になるようにつくられる。欠失部に沿って孔があけられているが、補修孔の可能性が考えられる。

用途不明(360・361)　360は丸太材の一部と思われる。361は側面に木皮が残り、上下端面はチョウナで削られる。中央に孔があいている。

13）鍛冶関連遺物(図面52、写真35)

羽口(347～349)　いずれも外径が７㎝前後でフイゴに付けられるものと思われる。先端に焦げ目が付く。347は先端の全体が遺存し、中心部に径1.3㎝の孔が通る。348・349は全周は遺存しないが、中心部に径2.5㎝前後の孔が通る。

鉄滓(417～420)　合計738ｇが出土した。報告する417～420は比較的滑らかな１面をもつので、原形は椀形であったと思われる。

４．鉄砲町二期線分出土遺物

鉄砲町二期線分では遺物包含層は１枚あり、時期は平安時代から近世に属すると思われる。ここでは地区ごとに、遺構出土、遺構外の包含層出土の順序で報告する。

Ａ．二期線Ａ地区出土遺物

１）SE１出土遺物(図面53、写真35)

石製品・砥石(362)　断面が正方形に近い直方体である。正面に砥面をもち、上下側面を除く４側面に深い砥筋がみられる。

２）SD２出土遺物(図面53、写真35)

土師器・甕(363)　平底の一部。火を受けて表面は黒色に変化している。外面の体部下端に指頭圧痕と思われる凹みがある。

３）SD３出土遺物(図面53・54、写真35・36)

須恵器

長頸壺(364・365)　364は口縁部の一部で、口縁部は外反し、端部の上端は短く上方につまみ出される。365は底部の一部で、外面の体部下端はロクロケズリが施され、内面はロクロナデの凹凸がみられる。高台の接地面には刻み目がある。

瀬戸美濃焼

天目茶碗(366)　底部の一部で、高台は削り出しでつくられ、底部外面は内反りになると思われる。高台脇の底部外面は水平に削られて体部との境に稜線をつくり出す。遺存部の外面には釉は掛けられないが、内面全体には鉄釉が掛けられる。破損部には接着に用いたと思われる黒

色漆が付着する。

珠洲焼

壺(367)　壺R種。底部の一部で、内面にはロクロナデの凹凸がみられる。底部外面には静止糸切り痕がみられ、外面の体部下端にはロクロから取り上げるために板を差し込んだとみられる痕がある。

片口鉢(368)　内面は磨滅していておろし目は確認できないが、底部外面には静止糸切り痕がみられる。

石製品

砥石(369・370)　369は断面が正方形の直方体であり、上下が欠失する。砥面は正面で、右側面に深い砥筋が縦方向に走っている。370は断面が三角形で、砥面は正裏面にみられ、砥面は平滑である。

磨石(371)　丸い河原石で、正面には磨面、側面から裏面にかけて叩き面がみられる。

石臼(372)　上臼の一部で、上面は周縁を残して内側を水平に削り取る。下面は磨滅して平滑である。目の方向から臼の回転方向は一般的な反時計回りと思われる。

石塔(373～377)　いずれも被熱している。373は五輪塔の一部で、空輪・風輪が一体になったものである。374は石塔の台座と思われる。375・376は五輪塔の火輪で、376は373と組み合わせられるので一セットであったと思われる。377は五輪塔の地輪と思われる。

4）SD7出土遺物(図面54、写真36)

土師器

小皿(378)　口縁部の外面にススが付き、灯明皿として使用されたと思われる。

須恵器

甕(379)　体部片と思われる。外面は平行叩き目のちクシ状工具でナデられる。内面は同心円状の当て具が当てられる。

5）包含層出土遺物(図面54、写真36)

須恵器

有台杯(380)　底部の一部で、底部は中央にかけて器厚が薄い。内面にはロクロナデの凹凸が残る。高台は低く外端が接地する。体部は底部から丸く立ち上がる。

長頸壺(381)　底部の一部で、底部外面はナデられて切り離し痕が消される。内面はロクロナデの凹凸が渦巻状に残り、自然釉が付いている。体部には火ぶくれがみられる。

横瓶(382)　口縁部は短く外反し、端部内端は小さくつまみ上げられる。体部の外面は格子状叩き目、内面は同心円状の当て具が当てられる。

土師器

甕(383～385)　383・384は平底の底部の一部である。383の外面の体部下端は手持ちによるケズリが施される。384の内面全体と外部の一部にススが付くが表面は剝落が著しい。385は長胴甕の口縁部の一部で、口縁は外反し、端部内端は上方につまみ出される。

灰釉陶器

椀(386)　底部高台の一部で、高台は外面が弧状で内面が外傾する。底部外面の高台内側はロクロケズリが施される。

皿(387)　口縁部の一部。器厚は0.5㎜で、口縁端部に向けて次第に薄くなる。外面の体部下半にはロクロケズリが施される。釉は体部下半まで漬け掛けされる。

土師質土器・皿(388)　手づくねで、丸底と思われる。器厚は薄く、体部下半は少しくびれ、口縁部は外反し、横ナデによって端部がつまみ上げられる。体部には指頭圧痕と思われるわずかな凹みがみられる。

B．二期線B地区出土遺物

1）SD1出土遺物(図面54、写真36)

黒色土器

椀(389)　底部を欠くので高台の有無は不明である。体部は直線的に開き、口縁端部は丸くおさまる。体部外面はロクロナデの凹凸が残るが、内面は滑らかである。

鍛冶関連遺物

鉄滓と羽口が出土している。鉄滓は562ｇ出土し、椀形滓・ガラス質炉壁・小鉄塊などがある。木炭の破片も出土している。

羽口(390・391)　390は先端部と思われ、外径5.5㎝、内径2.1㎝で、一部は黒色に変化している。391は胴部の一部で、外径6.0㎝、内径3.2㎝前後、一部は褐色に変化している。

2）包含層出土遺物(図面54、写真36)

須恵器

長頸壺(392)　口頸部の一部、付け根部分の外径が8.5㎝前後で、口縁部に向かって開く。内面にはロクロナデの凹凸が残る。

土師器

甕(393)　長胴甕の口縁部の一部で、口縁部は外反し、端部に垂直な面をもつ。

珠洲焼

片口鉢(394)　口縁部の端部は丸く、端面内端から体部内面にかけての部分は稜線をもたない。おろし目1単位の本数・幅は確認できない。

第Ⅴ章 ま と め

鉄砲町遺跡は旧正善寺川によって形成された沖積地に立地している。基本層序・遺構のあり方は6B24 SD 156・6C9 SD 164のあたりを境に東西で異なっている。以下、東半部(鉄砲町3地区)、西半部(鉄砲町1・2地区)とする。一次調査によって鉄砲町遺跡の年代は平安時代から中世と考えられていた。ここでは検出遺構や遺物出土の状況から、遺跡の性格・年代を考えたい。

1. 遺 構

調査範囲の東半部には旧正善寺川の自然堤防が存在し、西半部は低地となっていた。遺物包含層としてはⅣ・Ⅲ層が存在するが、出土遺物からⅣ層は平安時代中期[註1]、Ⅲ層は平安時代末期・中世[註2]にあたる。遺跡の現地名「鉄砲町」が示す16世紀以降の春日山城下町に直接係る遺構・遺物は検出されなかった。また、各包含層下面の検出遺構は居住に係るものがほとんどで、特殊な遺構は存在しなかった。

居住に直接関連する遺構は東半部に集中しており、西半部では溝が数条検出されたのみであった。従って、この集落は東半部を居住域とし、西半部は生産域あるいは空地であったものとみられる。東半部での検出遺構に、建物跡・井戸・土坑・溝がある。建物跡は、Ⅲ・Ⅳ層を通じて竪穴住居跡は検出されておらず、Ⅳ層では3棟の掘立柱建物を検出・復元しているが、Ⅲ層では復元されていない。しかし、多数のピットには柱穴が含まれているものと考えられる。

Ⅲ・Ⅳ層を通じて、井戸は29基が、土坑は116基が検出されている。本報告での井戸と土坑との区分は現地調査時の分類によった。土坑の機能は不明であるが、地面に掘られた中型の穴としての遺構の名称で、使用目的を示すものに井戸のほかにゴミ穴・トイレがある。トイレ状遺構は古く上総菅生遺跡で弥生時代のそれが注目されたのが嚆矢であったが、近年歴史時代の集落におけるトイレ状遺構のありようが研究されている。井戸とトイレとの区分についても、深さが湧水レベルに達しないものは井戸ではないといえるが、それ以外の形態で分類できるものではないらしい。儀礼において〔萩原1988〕も出土遺物によっても両者は明確に区分できるも

註1 Ⅳ層から出土する遺物をみると、須恵器の大半は佐渡小泊窯跡群の製品であるので、上限は9世紀後半〔坂井1990a〕としたい。下限は、土師器無台椀の存在から11世紀〔鈴木1994〕としたい。

註2 Ⅲ層から出土する遺物をみると、土師器小皿があるので、上限は11世紀〔鈴木1994〕としたい。下限は、瀬戸美濃焼で大窯期の製品や土師質土器でロクロ成形回転糸切り皿があるので16世紀〔田口1983・坂井1987〕としたい。

のではないらしい。通常はウリ類の種子の集中検出等が指標とされるが、しかし、ウリ類の種子については井戸からも検出されるし、ウリ類の果皮の出土に及んではトイレとはいえない。トイレとの断定は底部堆積土壌中のハエの囲蛹、寄生虫やその卵、また未消化の食物残滓籌木等特殊遺物の存在によってであるという。鉄砲町遺跡で検出した145基の井戸・土坑の中には、少なからずトイレも混在しているものと考えられるが、この遺跡の調査では、井戸等土坑の堆積土壌の採取・分析等調査を行っておらず、遺構の形態・付属施設・埋土の状況・出土遺物等によってトイレを峻別することはできなかった。

2．遺構出土の遺物

Ⅳ・Ⅲ層が存在する東半部(鉄砲町３地区)を中心に、遺構から比較的まとまって出土した遺物について、器種の形態・組み合わせから遺物の展開を考えたい。

Ⅳ層については遺物を比較的多く出土する遺構があり、須恵器・土師器の食膳具が出土している。遺構からまとまって出土している食膳具の形態・器種構成はⅠa・Ⅰbの２時期が設定できる。Ⅲ層については遺構から出土する遺物量が少なくなるが、土師器小皿や珠洲焼が出土している。土師器小皿の存在や珠洲焼の時期からⅡ・Ⅲa・Ⅲbの３時期が設定できる(表１参照)。

Ⅰ・Ⅱの時期は土師器などの食膳具の編年[註1]〔鈴木1994〕によると、遺物の特徴からⅠa期は一之口Ⅱ期(９世紀末～10世紀前半)にあたり、Ⅰb期は一之口Ⅱ期(10世紀中葉～10世紀末)、Ⅱ期は一之口Ⅲ期(11世紀初頭～12世紀中葉)に含まれると思われる。Ⅲの所属時期は珠洲焼の編年〔吉岡1989a、坂井1987〕によれば、Ⅲa期が珠洲Ⅳ期(14世紀)、Ⅲb期が珠洲Ⅴ期(15世紀前半)にあたる。

Ⅰa期は、食膳具に須恵器もあるが、土師器の無台椀が多く出土する時期で、鉄砲町３地区のSE 168・SE 201がこの時期である。

SE 168出土の食膳具は土師器無台椀、黒色土器無台椀、漆器椀で、土師器無台椀が多い。須恵器は硯に転用された有台杯だけである。土師器の無台椀には小形の無台椀Ⅲと中形の無台椀Ⅱがあるが無台椀Ⅲのほうが多い。黒色土器無台椀の形態は伴出している土師器無台椀Ⅱの形態に似ている。土師器無台椀で中形品があること、黒色土器無台椀が土師器の類似形であることから、SE 168の出土遺物は一之口Ⅰ期でも古い段階(今池SD３Ⅳ層)に比定される。

SE 201出土の食膳具は土師器無台椀と須恵器無台杯で、土師器無台椀が多い。須恵器無台杯は底部の一部で全形は復元できないが、器厚が薄く、体部が直線的に立ち上がるので佐渡小泊

註１　ここでは、１世紀以上の遺物の不在を画期とする。

註２　９世紀末以降の土師器など食膳具について編年を行っている。以下、一之口Ⅰ期・一之口Ⅱ期・一之口Ⅲ期とする。

窯跡群の製品と思われる。土師器の小形無台椀Ⅲと中形無台椀Ⅱがあるが中形無台椀Ⅱは少ないので、出土遺物は一之口Ⅰ期でも新しい段階(一之口西地区 SD 188・SE 183)に比定できる。

Ⅰb期は、食膳具に須恵器がなく、土師器の無台椀が出土する時期で、ここでの無台椀は身が低く、口径が小さいものもある。この時期の遺構は、鉄砲町3地区の SX 186と鉄砲町1・2地区の SX 119である。

SX 186は検出当初は竪穴住居かと考えられた凹みで、土師器片が出土している。実測できたのは図示したものだけである。無台椀は体部に丸みをもち、Ⅰa期の無台椀と比べると底径が大きく、身が浅くなる。無台椀の形態から出土遺物は一之口Ⅱ期でも新しい段階(四ツ屋 SK 63・SK 25)に比定できる。

SX 119は井戸である可能性が高く、食膳具として土師器無台椀・黒色土器有台椀・灰釉陶器椀・漆器椀が出土している。土師器無台椀は小形の無台椀Ⅲで、口径が11cm前後、径高指数28～30と、Ⅱ期の小皿に近くなり、一之口Ⅲ期で出現する「小皿」にあたる。灰釉陶器椀は東濃産の虎渓山1様式と思われる。土師器無台椀の形態、黒色土器有台椀の出土は一之口Ⅲ期の特徴で、灰釉陶器椀の様式は一之口Ⅱ期の特徴であるので所属時期は一之口Ⅱ期の新しい段階(四ツ屋 SK 63・SK 25)と一之口Ⅲ期の古い段階(一之口東地区 SD 1′)の中間段階に比定できる。

Ⅱ期の遺構からは灯明皿として利用された土師器の小皿が出土する。この時期の遺構で土師器無台椀がみられないことは、日常の食膳具において漆器の椀・皿が一般的になるという中世の状況〔坂井1990 a〕へ移行する過程を示していると考えられる。鉄砲町3地区の SE 54がこの時期の遺構である。

SE 54では、土師器の小皿・柱状高台皿・足高高台皿が出土している。土師器の小皿は、口径が9cm台で径高指数は25以下と、形態が土師器無台椀とは異なっている。土師器の柱状高台

時期		遺構から出土する遺物の特徴	該当する遺構	層序	遺物の所属時期	時代
Ⅰ	a	食膳具に須恵器もあるが、土師器の無台椀が多く出土する。	3地区 SE168 SE201 CB8 SK37 SK47	Ⅳ層	一之口Ⅰ期 (9世紀末から10世紀前半まで)	平安時代
	b	食膳具に須恵器がなく、土師器・無台椀が出土する。ここでの無台椀は身が低く、口径が小さいのもある。	3地区 SX186 1・2地区 SX119		一之口Ⅱ期 (10世紀中葉から10世紀末まで)	
Ⅱ		灯明皿として利用された土師器の小皿が出土する。	3地区 SE54 SE67 SK103 SK117 P467 CB8 SE31 SE33 1・2地区 SK122	Ⅲ層	一之口Ⅲ期 (11世紀初頭から12世中葉まで)	
Ⅲ	a	珠洲Ⅳ期の珠洲焼が出土する。片口鉢は口縁端部が水平な面を持つ。甕は口縁部が外反させ、体部の肩を少し張り出させる。	3地区 SE71 P774 CB8 SE5 SE6		珠洲Ⅳ期 (14世紀)	中世
	b	珠洲Ⅴ期の珠洲焼が出土する。片口鉢は口縁端部の面が内傾する。甕は口縁部を外反させ、体部の肩の張り出しが弱くなり、ほぼ直線的に下がる。	3地区 SK58 SK88 P208 P220		珠洲Ⅴ期 (15世紀前半)	

表1 鉄砲町遺跡の展開時期

皿・足高高台皿の所属時期は古代末期から中世初頭〔川上1986 a、坂本1986〕とされる。この器種構成は長野県の千曲川水系の編年〔川上1986 b〕では12世紀前半代に相当し、加賀編年〔藤田1992〕では三木だいもん遺跡の溝 6 に相当すると思われ、所属時期は12世紀前半で、一之口Ⅲ期の新しい段階の一之口東地区 SE 612・SE 615と SX 3 の中間段階に比定される。

Ⅲa 期は珠洲Ⅳ期の珠洲焼が出土する。伴出する遺物は多くないが、土師質土器の手づくね皿、瀬戸美濃焼の皿・花瓶が出土している。

Ⅲb 期は珠洲Ⅴ期の器種が出土するが、伴出する遺物はみられなくなる。

居住との関連が深いと思われる井戸・土坑その他からの出土遺物の時期をみると、大きくⅠ期（9 世紀末から10世紀末）、Ⅱ期（12世紀前半）、Ⅲ期（14世紀から15世紀）の 3 つの時期がある。14世紀から15世紀の段階は 9 世紀末から12世紀前半の段階に比べると遺物の出土量が少ない。出土量の減少は生活様式の変化によると考えられるが、集落の規模縮小も要因に加わっているかは不明である。また前記の 5 時期に入らない13世紀前半にあたる珠洲Ⅱ期や16世紀の遺物もわずかにみられたが、それらは溝への流れ込みや遺構に伴わない出土であった。

3．集落の推移

鉄砲町遺跡の調査範囲では東半部（鉄砲町 3 地区）に居住地が営まれていた。その時期は、9 世紀末から15世紀に及び、近世には畑地とされていた。

遺物の出土量を時期で追うと、11世紀の 1 世紀間及び、12世紀後半と13世紀の 1 世紀半の間は遺物がごくわずかである。この遺物の少ない期間居住地が調査範囲やその近隣になかったことを示し、調査範囲を居住地とする集落が消滅・移動したと考えられる。15世紀後半以後、遺物がわずかになる状況も調査範囲を居住地とする集落が消滅・移動したと考えられる。つまり、鉄砲町遺跡の集落は 9 世紀末には形成され、11世紀になると消滅・移動した。12世紀前半の短い期間再び形成され、14世紀になると集落が三たび形成され、15世紀後半に集落が消滅・移動したといえる。鉄砲町遺跡の集落が消滅・移動と考えられる時期は、古代から中世へ、中世から近世へといった時代の転換期にあたり、社会状況の変化が集落の発生・移動・消滅に大きく関連しているものと考えられる。

16世紀に入り、春日山城が修築強化され、1560年代に春日が市街化し、城下町として展開していたことが検証〔金子1990・1991・1992〕されている。「鉄砲町」という小字名は春日山城下での鉄砲衆の居住か鉄砲の生産に由来すると考え〔宮・山田1986〕られている。調査範囲では鉄砲が伝来する16世紀中葉以降の居住に関連する遺構・遺物はみあたらず、鉄砲生産と結び付く鍛冶関連の遺構・遺物も検出されなかった。調査範囲は春日山城下鉄砲町の区域外であったと考えられる。

要　　約

1．鉄砲町遺跡は、新潟県の南西部、現在の上越市大字大豆字鉄砲町ほかに所在する。遺跡は関川水系が形成した高田平野西側の、春日山麓に水源をもち北東に流れる正善寺川の左岸沖積地に立地する。標高は約15ｍを標準とし、現状は水田・畑地・宅地であった。試掘調査の結果、遺跡は発掘調査範囲の北側(大字寺分字藤の木)に伸長していることが判明した。

2．発掘調査は北陸自動車道の建設に伴って、昭和59・60年と昭和62・63年の二期４か年に分けて実施した。調査範囲は自動車道の法線内で、工事工程に合わせて６地区・ブロックに分けた。実質的な調査面積は9,969㎡である。

3．調査範囲は東半部(鉄砲町３地区)と西半部(鉄砲町１・２地区)とに分けられ、東半部は旧正善寺川の形成した自然堤防・西半部は低地で、基本層序も異なっていた。東半部では２枚の遺物包含層が確認され、調査の結果、平安時代・中世の遺構・遺物が検出された。

4．遺構は、Ⅳ層では掘立柱建物３棟・井戸３基・土坑34基・溝５条・ピットが検出された。Ⅲ層では井戸26基・土坑82基・溝50条が検出された。居住に関連する遺構は東半部(鉄砲町３地区)の自然堤防上に集中していた。遺跡(集落)は東半部を居住域とし、西半部は生産域または空地(旧正善寺川)であったものと考えられる。

5．遺物はコンテナーで180箱(54×34×10㎝)が出土しているが、ほとんどが東半部(鉄砲町３地区)のⅢ・Ⅳ層から出土している。遺物の所属時期はⅠａ期(９世紀末から10世紀前半)・Ⅰｂ期(10世紀中葉から10世紀末)・Ⅱ期(12世紀前半)・Ⅲａ期(14世紀)・Ⅲｂ期(15世紀前半)の５期がある。この状況は調査範囲を居住域とした遺跡(集落)の盛衰・移動・消滅を示すものと考えられる。

6．遺跡所在地の小字である「鉄砲町」は、春日山城下における鉄砲衆の配置・居住または鉄砲の生産に由来すると考えられているが、今回の調査範囲では鉄砲衆の居住や鉄砲の生産に関連する遺構・遺物、即ち鉄砲伝来〔1543年〕以降の遺構・遺物は存在しなかった。調査範囲は上杉氏・堀氏を通じて春日山城下鉄砲町域にはあたっていない可能性が高い。

凡例　口→口径　底→底径　高→器高　縦→縦長
横→横長　厚→厚さ　台→高台径　径→直径
数値で小数点以下がないのは推定値である

別表１　鉄砲町３地区（ＣＢ８ブロックを含む）　Ⅳ層　出土遺物観察表

報告番号	出土地点	種別	器種	遺存度	法量(cm)	色調	技法	特記事項	図面	写真
1	ＳＥ168	須恵器	長頸壺	口縁の一部	口 16.0	黒	ロクロナデ		29	22
2	ＳＥ168	須恵器	長頸壺	口縁の一部	口 26.0	黒褐	ロクロナデ		29	22
3	ＳＥ168	土師器	無台椀	完形	口 12.8 底 6.0 高 3.6	橙	ロクロナデ 底部、回転糸切り		29	22
4	ＳＥ168	土師器	無台椀	3/4	口 12.8 底 6.0 高 3.7	にぶい橙	ロクロナデ 底部回転糸切り		29	22
5	ＳＥ168	土師器	無台椀	1/2	口 12.8 底 6.8 高 3.8	にぶい橙	ロクロナデ 底部回転糸切り		29	22
6	ＳＥ168	土師器	無台椀	1/4	口 13.0 底 5.6 高 3.8	にぶい橙	ロクロナデ 底部回転糸切り		29	22
7	ＳＥ168	土師器	無台椀	2/3	口 14.8 底 5.6 高 5.4	にぶい橙	ロクロナデ 底部回転糸切り		29	22
8	ＳＥ168	土師器	無台椀	1/8 口縁の一部	口 16.4	にぶい橙	ロクロナデ		29	22
9	ＳＥ168	土師器	無台椀	1/5 口縁の一部	口 18.0	にぶい橙	ロクロナデ		29	22
10	ＳＥ168	土師器	無台椀	1/4 底部	底 5.2	橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		29	22
11	ＳＥ168	土師器	無台椀	1/5 底部	底 6.2	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		29	22
12	ＳＥ168	黒色土器	無台椀	完形	口 14.9 底 6.2 高 4.8	にぶい赤褐色	ロクロナデ、底部回転糸切り	内面黒色処理	29	22
13	ＳＥ168	土師器	甕	1/3 底部・体部	底 6.7	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り	平底の小形甕	29	22
14	ＳＥ168	特殊土器	硯	1/5 底部	底 7.7	黒	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り？	須恵器有台杯を転用	29	22
15	ＳＥ168	特殊土器	墨書土器無台椀	完形	口 12.4 底 5.6 高 4.2	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り	「生」字	29	22
16	ＳＥ168	木製品	椀	1/4 底部	底 7.0		ロクロ挽き	漆器、内外面に黒色漆	29	22
17	ＳＥ168	木製品	曲物底板	2/3	径 12.1 厚 0.6				29	22
18	ＳＥ168	木製品	曲物底板	4/5	径 22.0 厚 1.0				30	23
19	ＳＥ168	木製品	角材	一部？	縦 29.5 横 3.4 厚 4.5				30	23
20	ＳＥ168	木製品	棒状製品	完形	縦 26.5 長径1.6 短径1.2			長径・短径は断面 火鑽棒か？	30	23
21	ＳＥ168	木製品	用途不明	完形	縦 17.6 長径6.0 短径5.5				30	23
428～446	ＳＥ168	獣骨	ウマ					後述		37
22	ＳＥ201	須恵器	無台杯	底部の一部	底 7.2	灰	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り		30	23
23	ＳＥ201	須恵器	壺	体部・底部	底 8.4	黒	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り		30	23
24	ＳＥ201	須恵器	長頸壺	口縁の一部	口 15.0	黒	ロクロナデ		30	23

報告番号	出土地点	種別	器種	遺存度	法量(cm)	色調	技法	特記事項	図面	写真
25	ＳＥ201	須恵器	長頸壺	口頸部		暗灰黄	ロクロナデ		30	23
26	ＳＥ201	須恵器	杯蓋	1/5	口 15.2	赤褐	ロクロナデ	焼き損ないか？	30	23
27	ＳＥ201	須恵器	杯蓋	1/8	口 16.8	赤褐	ロクロナデ	焼き損ないか？	30	23
28	ＳＥ201	土師器	無台椀	1/4	口 11.8	にぶい橙	ロクロナデ		30	23
29	ＳＥ201	土師器	無台椀	1/3	口 12.0	橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		30	23
30	ＳＥ201	土師器	無台椀		口 12.5 底 4.8 高 4.0	浅黄橙	ロクロナデ		30	23
31	ＳＥ201	土師器	無台椀	2/3	口 12.6 底 5.5 高 4.0	にぶい黄橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		30	23
32	ＳＥ201	土師器	無台椀	1/2	口 12.8 底 6.2 高 4.2	橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		31	23
33	ＳＥ201	土師器	無台椀	1/8	口 12.8	橙	ロクロナデ		31	23
34	ＳＥ201	土師器	無台椀	1/3	口 13.6 底 5.7 高 4.0	橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		31	23
35	ＳＥ201	土師器	無台椀	4/5	口 14.6 底 5.5 高 4.6	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		31	23
36	ＳＥ201	土師器	無台椀	1/4 底部	底 5.4	黄橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		31	23
37	ＳＥ201	土師器	無台椀	底部の一部	底 5.7	灰白	ロクロナデ、底部回転糸切り		31	23
38	ＳＥ201	土師器	無台椀	底部の1/2	底 6.4	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		31	23
39	ＳＥ201	土師器	無台椀	底部の1/2	底 6.3	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		31	23
40	ＳＥ201	土師器	無台椀	1/3 底部	底 6.6	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		31	24
41	ＳＥ201	土師器	無台椀	1/5 底部	底 6.8	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		31	24
42	ＳＥ201	土師器	無台椀	1/3	底 7.4	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		31	24
43	ＳＥ201	土師器	甕	口縁の1/4	口 13.2	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		31	24
44	ＳＥ201	土師器	甕	2/3	口 17.4 底 9.9 高 16.9	橙	ロクロナデ、底部回転糸切り	平底	31	24
45	ＳＥ201	土師器	甕	口縁の1/4	口 22.0	橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		31	24
46	ＳＥ201	土師器	鍋	口縁の1/5	口 35.0	にぶい橙	ロクロナデ		31	24
47	ＳＥ201	木製品	曲物底板	ほぼ完形	径 20.0 厚 0.6				31	24
48	ＳＥ201	井戸枠部材	隅柱	上欠	縦128.5 横 14.0 厚 10.9			南西角	32	25
49	ＳＥ201	井戸枠部材	隅柱	上欠	縦 97.0 横 13.8 厚 6.8			南東角	32	25
50	ＳＥ201	井戸枠部材	中内枠	完形	縦104.3 横 7.5 厚 5.6			北辺	32	25
51	ＳＥ201	井戸枠部材	中内枠	完形	縦104.6 横 9.9 厚 4.8			西辺	32	25
52	ＳＥ201	井戸枠部材	中内枠	先端	縦 34.2 横 8.2 厚 5.3			南辺48と49をつなぐ	32	

報告番号	出土地点	種別	器種	遺存度	法量(cm)	色調	技法	特記事項	図面	写真
53	ＳＥ201	井戸枠部材	下内枠	完形	縦105.0 横 20.0 厚 2.0			東辺	32	25
54	ＳＥ201	井戸枠部材	下内枠	完形	縦105.0 横 20.0 厚 2.0			南辺内側	32	25
55	ＳＥ201	井戸枠部材	下内枠	完形	縦 79.4 横 18.7 厚 2.5			南辺外側	32	25
56	ＳＥ201	井戸枠部材	角杭	完形	縦 95.4 横 10.5 厚 1.4			下内枠を支える54の東にあった	32	25
57	ＳＥ201	井戸枠部材	角杭	完形	縦 47.0 横 2.7 厚 3.0			下内枠を支える54の西にあった	32	25
58	ＳＥ201	井戸枠部材	板杭	ほぼ完形	縦 68.0 横 19.2 厚 2.1			北辺の下内枠を支える東にあった	32	25
59	ＳＥ201	井戸枠部材	貫板	上欠	縦115.8 横 16.3 厚 2.2			北辺の東端	33	25
60	ＳＥ201	井戸枠部材	貫板	上欠	縦 94.0 横 12.6 厚 1.9			南辺の東端	33	25
61	ＳＥ201	井戸枠部材	貫板	上欠	縦 58.0 横 12.9 厚 2.0			南辺の東端	33	25
62	ＳＥ201	井戸枠部材	貫板	上欠	縦 94.6 横 9.2 厚 1.8			南辺の西端のとなり	33	25
63	ＳＥ201	井戸枠部材	その他	上下欠	縦 38.5 横 4.7 厚 3.8			上内枠か？	33	
64	ＳＥ201	井戸枠部材	その他	上下欠	縦 69.1 横 7.0 厚 4.6			上内枠か？	33	25
65	ＳＥ201	井戸枠部材	その他	上下欠	縦 98.0 横 7.0 厚 5.0			上内枠か？	33	25
66	ＳＥ201	井戸枠部材	その他	完形	縦104.7 横 7.0 厚 5.8			上内枠	33	25
67	ＳＥ201	井戸枠部材	側板	上欠	縦 86.5 横 21.0 厚 2.4			北辺	33	25
68	ＳＥ201	井戸枠部材	側板	上欠	縦106.7 横 14.4 厚 3.8			北辺、66から１枚おいて東	33	25
69	ＳＥ201	井戸枠部材	側板	上欠	縦110.3 横 16.6 厚 2.4			北辺67の東となり	33	25
70	ＳＥ201	井戸枠部材	側板	上欠	縦 99.8 横 18.1 厚 1.8			西辺	33	25
71	ＳＥ201	井戸枠部材	側板	上欠	縦113.3 横 20.4 厚 2.3			南辺のまん中	33	
72	ＳＥ201	井戸枠部材	側板	上欠	縦112.4 横 20.2 厚 2.6			南辺、71か２枚おいて西	33	
73	ＳＥ201	石製品	砥石	上下欠	縦 9.7 横 6.2 厚 5.7				34	24

報告番号	出土地点	種別	器種	遺存度	法量(cm)	色調	技法	特記事項	図面	写真
74	SE201	石器	磨製石斧	完形	縦 9.7 横 5.3 厚 2.1				34	24
75	SE206	土師器	無台椀	2/3	口 12.4 底 5.2 高 43.1	橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		34	24
76	SE206	瀬戸美濃焼	皿	1/8 底部	台 4.5	灰白	ロクロナデ	削り出し高台	34	24
77	SE206	木製品	斎串	ほぼ完形	縦 12.8 横 2.0 厚 0.2			CI型〔奈文研1985〕	34	24
78	SE206	木製品	曲物	2/3 下部	口 17.8				34	24
79	SE206	木製品	曲物底板	3/4	口 13.5 厚 1.0				34	24
80	SE206	井戸枠部材	中内枠	ほぼ完形	縦 71.7 横 7.4 厚 4.5			北東辺	34	25
81	SE206	井戸枠部材	中内枠	ほぼ完形	縦 70.4 横 6.2 厚 4.5			南東辺	34	25
82	SE206	井戸枠部材	中内枠	ほぼ完形	縦 76.6 横 9.3 厚 4.3			南西辺	34	25
83	SE206	井戸枠部材	中内枠	ほぼ完形	縦 71.1 横 6.0 厚 5.3			北西辺	34	25
84	SE206	井戸枠部材	貫板	上欠	縦117.3 横 12.7 厚 2.0			北東辺の北方	34	25
85	SE206	井戸枠部材	貫板	上欠	縦118.6 横 17.9 厚 2.8			北西辺のまん中の外側	34	25
86	SE206	井戸枠部材	貫板	上欠	縦 94.7 横 20.0 厚 3.2			北西辺の西方	35	
87	SE26	井戸枠部材	側板	上欠	縦 90.7 横 24.1 厚 2.5			北東辺	35	
88	SE206	井戸枠部材	側板	上欠	縦 85.4 横 19.6 厚 3.7			南東辺のまん中	35	25
89	SE206	井戸枠部材	側板	上欠	縦109.4 横 20.4 厚 2.3			南西辺のまん中	35	25
90	SE206	井戸枠部材	側板	上欠	縦114.7 横 17.5 厚 3.0			南西辺、89の外側	35	
91	SE206	井戸枠部材	側板	上欠	縦116.9 横 11.8 厚 1.3			北西辺の西端	35	
92	SE206	井戸枠部材	側板	上欠	縦112.9 横 20.4 厚 2.3			北西辺、85の西となり	35	
93	SE206	井戸枠部材	側板	上欠	縦 88.3 横 21.4 厚 2.5			北西辺の北端	35	
94	SE206	井戸枠部材	その他	上下欠	縦 64.4 横 13.0 厚 10.3				35	25
95	SE206	井戸枠部材	その他	上下欠	縦 57.7 横 16.6 厚 3.6				35	25
96	SK163	須恵器	甕	口縁の一部	口 21.4	灰	ロクロナデ		36	26

報告番号	出土地点	種別	器種	遺存度	法量(cm)	色調	技法	特記事項	図面	写真
97	ＳＫ163	土師器	甕	口縁の一部	口 15.8	橙	ロクロナデ		36	26
98	ＳＫ170	土師器	鉢	1/5	口 19.8 底 6.0 高 19	明赤橙		縄文土器?	36	26
99	ＳＸ186	土師器	無台椀	口縁・体部の1/4	口 13.4 底 7.6 高 3.5	橙	ロクロナデ		36	26
100	ＳＸ186	土師器	無台椀	1/2	口 12.2 底 5.6 高 4.4	橙	ロクロナデ、底部回転糸切りで切り離し後、ハケ状工具でナデられる		36	26
101	ＳＸ186	土師器	無台椀	2/3	口 12.6 底 5.8 高 4.0	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		36	26
102	ＳＸ186	土師器	鍋	口縁の一部	口 30.8	橙			36	26
103	Pit 803	土師器	甕	口縁の一部	口 23.0	外面・灰白、内面・橙			36	26
104	ＳＫ37	須恵器	無台杯	口縁の一部	口 12.0	褐灰	ロクロナデ	佐渡小泊窯跡群	36	26
105	ＳＫ37	須恵器	有台杯	1/5 底部	台 8.0	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り	末野窯跡群今熊支群	36	26
106	ＳＫ37	須恵器	長頸壺	口縁部の1/3	口 15.0	灰	ロクロナデ		36	26
107	ＳＫ37	須恵器	甕	体部の上半		灰			36	26
108	ＳＫ37	土師器	甕	底部	底 5.5	明褐灰	ロクロナデ、底部静止糸切り		37	26
109	ＳＫ37	土師器	甕	底部	底 6.7	橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		37	26
110	ＳＸ37	土師器	鍋	口縁の一部	口 29.6	黄橙	ロクロナデ		37	26
111	ＳＫ37	土師器	鍋	口縁の一部	口 37	にぶい橙			37	26
112	ＳＫ37	特殊土器	硯	1/8	口 14.0 高 2.5	灰	ロクロナデ		37	26
113	ＳＫ37	特殊土器	硯	1/8	口 14.4 高 2.8	灰	ロクロナデ、天井部回転糸切り		37	26
114	ＳＫ41	須恵器	長頸壺	口縁の一部	口 16.4	灰	ロクロナデ		37	26
115	ＳＫ41	土師器	無台椀	1/3	底 6.5	橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		37	26
116	ＳＫ41	土師器	無台椀	1/5	口 19.6	橙	ロクロナデ		37	26
117	ＳＫ41	土師器	甕	底部	底 6.5	黄橙			37	26
118	ＳＫ45	須恵器	椀	1/8	口 10.8	浅黄	ロクロナデ		37	26
119	ＳＫ47	土師器	無台椀	2/3	口 15.2 底 6.2 高 4.1	にぶい褐	ロクロナデ、底部回転糸切り		37	26
120	ＳＫ47	灰釉陶器	椀	1/8	口 11.6	灰白、釉は緑灰	ロクロナデ	東濃産、大原２様式	37	26
121	Pit 111	須恵器	杯	口縁の一部	口 14.0	灰	ロクロナデ		37	26
122	ＳＫ87	土師器	不明	台部の2/3	台 14.4	にぶい橙	ロクロナデ、堅く焼成		37	26
123	７Ｃ３	須恵器	無台杯	口縁の一部	口 11.8	灰	ロクロナデ	佐渡小泊窯跡群	38	27
124	７Ｃ８	須恵器	無台杯	1/8	口 15 底 10 高 3.4	灰褐	ロクロナデ	佐渡小泊窯跡群	38	27
125	７Ｃ３	須恵器	有台杯	1/10	台 7.0	灰	ロクロナデ		38	27
126	６Ｃ５	須恵器	短頸壺	1/10	口 11.6	明緑灰	ロクロナデ		38	27
127	６Ｃ５	須恵器	長頸壺	口縁の一部	口 18	灰	ロクロナデ		38	27
128	６Ｃ５	須恵器	長頸壺	底部の一部	台 5.4	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り		38	27

報告番号	出土地点	種別	器種	遺存度	法量(cm)	色調	技法	特記事項	図面	写真
129	６Ｃ５	須恵器	長頸壺	底部の一部	台 15.6	灰	ロクロナデ		38	27
130	６Ｃ５	須恵器	壺	把手の破片		灰			38	27
131	７Ｃ８	須恵器	甕	口縁の一部	口 32.2	灰	ロクロナデ		38	27
132	７Ｃ８	須恵器	甕	口縁の一部	口 40	暗灰	ロクロナデ		38	27
133	６Ｃ５	須恵器	甕	口縁の一部		灰	外面平行、内面同心円		38	27
134	７Ｃ２	須恵器	甕	体部の一部		灰	外面平行、内面同心円		38	27
135	７Ｃ３	須恵器	甕	体部の一部		灰	外面平行、内面同心円		38	27
136	６Ｃ５	須恵器	甕	体部の一部		灰	外面平行、内面同心円		38	27
137	７Ｃ８	須恵器	甕	体部の一部		灰	外面平行、内面同心円		38	27
138	６Ｃ５	須恵器	甕	体部の一部		灰	外面平行、内面同心円		38	27
139	６Ｃ５	須恵器	甕	体部の一部		灰	外面平行、内面放射状		38	27
140	７Ｃ２	須恵器	甕	体部の一部		灰	外面格子、内面同心円		38	27
141	７Ｃ８	須恵器	甕	体部の一部		灰	外面格子、内面同心円		38	27
142	６Ｃ５	須恵器	甕	体部の一部		灰	外面格子、内面平行		38	27
143	６Ｃ５	須恵器	甕	体部の一部		灰	外面格子、内面平行		38	27
144	６Ｃ５	須恵器	甕	体部の一部		灰	外面格子、内面平行		38	27
145	７Ｃ３	須恵器	甕	体部の一部		灰	外面平行、内面不明		38	27
146	６Ｃ10	土師器	無台椀	2/3	口 12.5 底 5.5 高 4.2	橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		39	27
147	７Ｃ２	土師器	無台椀	口縁の一部	口 15.8	橙	ロクロナデ		39	27
148	７Ｃ８	土師器	無台椀	底部	底 5.3	浅黄橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		39	27
149	６Ｃ５	土師器	無台椀	底部の1/3	底 7.0	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		39	27
150	７Ｃ３	土師器	甕	口縁の一部	口 24.6	橙	ロクロナデ		39	27
151	７Ｃ３	土師器	甕	口縁の一部	口 23.0	橙	ロクロナデ		39	27
152	６Ｃ10	土師器	甕	底部	底 6.8	橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		39	27
153	７Ｃ３	土師器	甕	底部の1/5	底 7.0	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		39	27
154	７Ｃ３	土師器	不明	台部の2/3	台 20.8	橙	堅く焼成		39	27
155	６Ｃ10	土師器	不明	台部の一部		橙	堅く焼成		39	
156	７Ｃ８	土師器	鍋	口縁の一部	口 34.0	橙	ロクロナデ		39	27
157	７Ｃ２	土師器	鍋	口縁の一部	口 33.0	にぶい橙	ロクロナデ		39	27
158	７Ｃ８	土師器	鍋	口縁の一部	口 33.0	にぶい橙	ロクロナデ		39	27
159	６Ｃ10	土師器	鍋	口縁の一部	口 36.0	にぶい橙	ロクロナデ		39	27
160	７Ｃ８	灰釉陶器	皿	底部の一部	台 6.0	灰、釉・ふか緑	ロクロナデ		39	27
161	６Ｃ５	灰釉陶器	皿	底部の一部	台 8.0	灰、釉・明緑灰	ロクロナデ	東濃産、光ケ丘１様式	39	27
162	７Ｃ８	灰釉陶器	皿	底部の一部	台 7.6	灰白	ロクロナデ	東濃産、丸石２様式	39	27
163	６Ｃ５	灰釉陶器	皿	底部の一部	台 7.8	灰、釉・明緑灰	ロクロナデ		39	27
399～407		鍛冶関連						後述		27

別表２　鉄砲町３地区（ＣＢ８ブロックを含む）　Ⅲ層　出土遺物観察表

報告番号	出土地点	種別	器種	遺存度	法量(cm)	色調	技法	特記事項	図面	写真
164	ＳＥ51	石製品	砥石	上欠	縦 9.5 横 6.3 厚 3.2				40	28
165	ＳＥ52	土師器	甕	口縁の一部	口 21.2	にぶい橙	ロクロナデ		40	28
166	ＳＥ54	土師器	小皿	1/2	口 9.0 底 4.1 高 2.0	橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		40	28
167	ＳＥ54	土師器	小皿	1/4	口 9.2 底 5.0 高 2.0	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		40	28
168	ＳＥ54	土師器	小皿	1/2	口 9.4 底 4.5 高 2.2	橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		40	28
169	ＳＥ54	土師器	小皿	1/4	口 9.6 底 3.7 高 2.1	浅黄橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		40	28
170	ＳＥ54	土師器	小皿	1/4	口 9.8 底 4.9 高 2.4	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		40	28
171	ＳＥ54	土師器	小皿	3/4	口 9.8 底 5.3 高 2.4	橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		40	28
172	ＳＥ54	土師器	小皿	完形	口 9.8 底 5.7 高 2.3	浅黄橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		40	28
173	ＳＥ54	土師器	柱状高台皿	4/5	口 8.2 底 3.7 高 2.2	にぶい黄橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		40	28
174	ＳＥ54	土師器	足高高台皿	3/4	口 8.5 台 5.0 足 3.1	橙	ロクロナデ		40	28
175	ＳＥ54	土師器	足高高台皿	底部	台 5.0	にぶい黄橙	ロクロナデ		40	28
176	ＳＥ54	土師器	足高高台皿	底部	台 5.0	にぶい橙	ロクロナデ		40	28
177	ＳＥ54	木製品	曲物底板	1/3	径 19.6 厚 0.8				40	28
178	ＳＥ67	土師器	小皿	1/8	口 8.2 底 4.0 高 2.1	浅黄	ロクロナデ、底部回転糸切り		40	28
179	ＳＥ67	石製品	磨石		縦 10.8 横 8.5 厚 6.4				40	28
180	ＳＥ71	珠洲焼	片口鉢	口縁の一部	口 23	灰			40	28
181	ＳＥ73	木製品	皿	1/2	口 17.0 台 7.1 高 2.0		ロクロ挽き	漆器。内面赤色漆、外面黒色漆	40	
182	ＳＥ75	珠洲焼	片口鉢	1/3 底部	底 12.6	灰			40	28
183	ＳＥ75	木製品	皿	1/3 底部	台 8.6		ロクロ挽き	漆器。内面赤色漆、外面黒色漆	40	28
184	ＳＥ76	木製品	曲物底板	1/3	径 21.4 厚 0.4				41	28
185	ＳＥ77	木製品	皿	2/3	口 9.6 底 7.6 高 1.5		ロクロ挽き	漆器。内外面黒色漆	41	28
186	ＳＥ77	木製品	用途不明	上下欠	縦 46 横 4.5 厚 1.1				41	28

報告番号	出土地点	種別	器種	遺存度	法量(cm)	色調	技法	特記事項	図面	写真
187	ＳＥ80	木製品	椀	2/3	口 14.8 台 7.8 高 4.2		ロクロ挽き	漆器。内外面、黒色漆	41	28
188	ＳＥ83	珠洲焼	甕	底部の1/2	底 15.0	褐灰			41	28
189	ＳＥ85	珠洲焼	甕	体部の破片		褐灰			41	29
190	ＳＥ85	石製品	砥石		縦 5.5 横 3.8				41	29
191	ＳＥ97	珠洲焼	壺	1/2 体部・底部	底 7.1	暗灰			41	29
192	ＳＥ97	石製品	砥石		縦 11.2 横 5.6 厚 5.1				41	29
193	ＳＥ137	木製品	もえさし		縦 22.0 径 2.9				41	29
194	ＳＥ137	木製品	もえさし		縦 15.4 径 2.9				41	29
195	ＳＥ202	石製品	石臼	1/10	径 26.0 高 9.8				41	29
196	ＳＫ58	珠洲焼	片口鉢	口縁の一部		褐灰			41	29
197	ＳＫ78	石製品	砥石	上下欠	縦 6.1 横 3.6 厚 1.4				42	29
198	ＳＫ86	石製品	砥石	上下欠	縦 8.1 横 4.5 厚 3.9				42	29
199	ＳＫ87	珠洲焼	片口鉢	1/4	口 20.0	青灰			42	29
200	ＳＫ88	珠洲焼	片口鉢	口縁の一部	口 34.8	灰白			42	29
201	ＳＫ98	珠洲焼	甕	底部の一部	底 19.0	灰			42	29
202	ＳＫ103	灰釉陶器	椀	底部の1/2	底 7.8	灰白	ロクロナデ		42	29
203	ＳＫ113	石製品	叩石	完形	長径9.3 短径7.6 厚 3.7				42	29
204	ＳＫ117	土師器	小皿	完形	口 9.8 底 4.7 高 2.8	橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		42	29
205	ＳＫ117	灰釉陶器	椀	底部の1/2	台 8.4	灰白	ロクロナデ		42	29
206	ＳＫ146	石製品	砥石	上下欠	縦 6.0 横 5.5 厚 3.8				42	29
207	pit 159	石製品	砥石	上欠	縦 6.2 横 3.2 厚 2.2				42	29
208	pit 166	黒色土器	有台椀	1/2	口 15.8 台 6.0 高 7.0	にぶい橙	ロクロナデ		42	29
209	pit 192	珠洲焼	片口鉢	底部の一部	底 12.0	灰黄			42	29
210	pit 208	珠洲焼	甕	口縁の一部	口 34.8	灰			42	29
211	pit 220	中国陶磁器	碗	1/8	口 16.8	白、釉・オリーブ灰		青磁。外面・雷帯文	43	29
212	pit 467	土師器	小皿	完形	口 9.8 底 4.7 高 2.7	橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		43	30
213	ＳＥ5	瀬戸美濃焼	皿	口縁の一部	口 15.6	灰白、釉オリーブ灰			43	30
214	ＳＥ5	珠洲焼	片口鉢	口縁の一部	口 27.0	灰			43	30
215	ＳＥ6	土師質土器	皿	1/3	口 8.6 底 5.4 高 1.5	にぶい褐	手づくね		43	30

報告番号	出土地点	種別	器種	遺存度	法量(cm)	色調	技法	特記事項	図面	写真
216	ＳＥ６	土師質土器	皿	1/2	口 13.8 底 9.0 高 3.0	にぶい褐	手づくね		43	30
217	ＳＥ６	珠洲焼	片口鉢	口縁の一部	口 27.0	灰			43	30
218	ＳＥ31	土師器	柱状高台皿	4/5	口 7.3 底 3.4 高 2.5				43	30
219	ＳＥ31	ウリ果皮	果皮製容器					ユウガオか？	43	30
220	ＳＥ33	土師器	小皿	3/4	口 9.8 底 4.4 高 2.7	にぶい黄橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		43	30
221	ＳＤ１	土師質土器	皿	3/4	口 8.8 底 5.8 高 2.2	赤褐	手づくね		43	30
222	ＳＤ１	中国陶磁器	皿	口縁・体部の一部	口 8.7	灰白、釉・明緑灰		青磁、大宰府分類〔横田・森田1978〕で杯Ⅲ－１	43	30
223	ＳＤ１	珠洲焼	片口鉢	口縁の一部	口 27.0	灰			43	30
224	Ｓ774	珠洲焼	壺	体部の一部		灰黒	Ｒ種	外面・刻画	43	30
225	pit 774	珠洲焼	甕	口縁の一部	口 52	灰			43	30
226	pit 774	瀬戸美濃焼	花瓶	1/2 体部・底部	底 4.0	褐灰、釉・明緑灰			43	30
227	pit 774	木製品	杓子	4/5					43	30
228	ＳＥ201	珠洲焼	壺	1/3 口縁・体部	口 12.0	灰	Ｒ種		43	30
229	ＳＫ160	珠洲焼	壺	1/3 体部・底部	底 7.8	灰	Ｒ種		44	30
230	ＳＫ160	石製品	砥石		縦 11.8 横 5.3 厚 3.5				44	30
231	ＳＫ161	木製品	箸	完形	縦 20.2 横 0.8 厚 0.5				44	30
232	ＳＫ161	木製品	盆	1/20	径 20.2 高 0.8				44	30
233	ＳＫ161	木製品	部材	完形	縦 28.1 横 1.1 厚 0.7				44	30
234	ＳＫ161	木製品	用途不明					柄の一部か？	44	30
235	ＳＫ161	木製品	用途不明	完形	縦 21.2 横 3.8 厚 3.7			陽物か？		
236	ＳＫ161	木製品	用途不明	完形	縦 23.9 横 4.5 厚 4.0			陽物か？	44	30
237	６Ｃ５	中国陶磁器	碗	1/5		灰白、釉・明緑		青磁	45	31
238	６Ｃ５	中国陶磁器	皿	1/10	底 9.2	灰白、釉・明緑灰		白磁	45	31
239	６Ｃ10	瀬戸美濃焼	天目茶椀	1/5	口 13.8	褐灰、釉・黒			45	31
240	７Ｃ２	瀬戸美濃焼	皿	底部の一部	台 6.0	褐灰、釉・灰オリーブ			45	31
241	６Ｃ９	瀬戸美濃焼	瓶	口頸部の1/2	口 6.0	褐灰、釉・明緑灰			45	31
242	６Ｃ５	瀬戸美濃焼	皿	口縁の一部	口 10.0	褐灰、釉・褐			45	31
243	７Ｃ２	瀬戸美濃焼	おろし皿	口縁の1/4	口 14.0	褐灰、釉・赤褐			45	31

報告番号	出土地点	種　別	器　種	遺存度	法量(cm)	色　調	技　　法	特記事項	図面	写真
244	７Ｃ２	瀬戸美濃焼	天目茶椀	口縁の一部	口 14.4	褐灰、釉・オリーブ黄			45	31
245	７Ｃ８	瀬戸美濃焼	天目茶椀	口縁の1/5	口 18.2	褐灰、釉・オリーブ黄			45	31
246	７Ｃ２	瀬戸美濃焼	瓶	口頸部の1/2	口 12.4	褐灰、釉・明緑灰			45	31
247	７Ｃ２	土師質土器	皿	2/3	口 9.6 底 4.0 高 2.1	橙	手づくね		45	31
248	７Ｃ３	土師質土器	皿	1/4	口 6.6 底 4.8 高 2.0	明褐灰	ロクロナデ、底部回転糸切り		45	31
249	７Ｃ８	珠洲焼	壺	口縁の1/3	口 16.8	灰	Ｔ種		45	31
250	７Ｃ８	珠洲焼	壺	底部の1/3	底 13.6	灰	Ｒ種		45	31
251	６Ｃ９	珠洲焼	甕	口縁の一部	口 42.0	灰			45	31
252	７Ｃ２	珠洲焼	甕	口縁の一部	口 45.0	灰			45	31
253	７Ｂ23	珠洲焼	甕	体部の一部		灰			46	31
254	７Ｃ８	珠洲焼	甕	体部の一部		灰			46	31
255	７Ｃ６	珠洲焼	甕	体部の一部		橙		焼き損ないか？	46	31
256	６Ｃ５	珠洲焼	片口鉢	口縁の一部	口 33.0	灰			46	31
257	７Ｃ２	珠洲焼	片口鉢	底部の一部		灰			46	31
258	７Ｃ３	珠洲焼	片口鉢	底部の一部	底 10.2	灰			46	31
259	７Ｃ２	珠洲焼	片口鉢	体部の一部		灰			46	31
260	７Ｃ３	石製品	砥石	上下欠	縦 10.8 横 3.3 厚 2.1				46	31
261	７Ｃ２	石製品	砥石	下欠	縦 9.6 横 5.0 厚 1.0				46	31
262	７Ｃ３	石製品	砥石	上下欠	縦 8.0 横 3.8 厚 3.3				46	31
263	７Ｃ３	石製品	砥石	上下欠	縦 4.9 横 4.0 厚 0.6				46	31
264	７Ｃ２	石製品	砥石	上下欠	縦 6.9 横 5.6 厚 2.1				46	31
265	６Ｃ５	石製品	石鉢	1/2	口 25.4 底 13.0 高 10.8				46	31
411 ～414		鍛冶関連						後述		31

別表３　鉄砲町１・２地区（ＣＢ10ブロックを含む）　出土遺物観察表

報告番号	出土地点	種　別	器　種	遺存度	法量(cm)	色　調	技　　法	特記事項	図面	写真
266	ＳＫ122	土師器	小皿	ほぼ完形	口 10.6 底 5.4 高 2.8	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		47	32
267	ＳＫ122	木製品	曲物底板	1/5	径 19.5 厚 0.6				47	32
268	ＳＫ122	木製品	下駄	1/2	縦 20.3 横 6.3 高 3.8				47	32

報告番号	出土地点	種別	器種	遺存度	法量(cm)	色調	技法	特記事項	図面	写真
269	SK122	木製品	杭	上欠	縦 15.7 径 2.6				47	32
270	SK122	鍛冶関連	羽口	1/3	縦 5.6	灰白			47	32
271	SK122	石製品	凹石・叩石	完形	長径8.4 短径3.7 厚 3.7				47	32
272	SK122	石製品	墨書石		縦 9.1 横 7.1 厚 6.5				47	32
273	SK148	土師器	無台椀	1/2	口 11.0 底 5.8 高 3.4	にぶい椀	ロクロナデ、底部回転糸切り		47	32
274	SK161	須恵器	有台杯	底部の1/3	台 5.8	灰			47	32
275	SD125	土師器	甕	口縁の1/3	口 22.2	にぶい橙	ロクロナデ		47	32
276	SD104	珠洲焼	甕	体部の一部		灰			47	32
277	SD104	珠洲焼	甕	体部の一部		灰			47	32
421	SD104	近世陶磁器						後述		32
278	SD105	須恵器	無台杯	1/4	口 12.6 底 6.8 高 3.2	灰	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	佐渡小泊窯跡	47	32
279	SD105	須恵器	杯蓋	1/5	口 16.1 天井径7.6 高 2.9	灰	ロクロナヘデ、天井部回転糸切り		47	32
280	SD105	須恵器	長頸壺	口頸部 1/3		灰黒			47	32
281	SD105	須恵器	甕	体部の一部		灰黒			47	32
282	SD105	土師器	甕	口縁部の1/3	口 19.8	しぶい橙	ロクロナデ		48	32
283	SD105	土師器	甕	底部の1/3		しぶい橙	ロクロナデ	内面・キス状工具でナデられる。外面・当て具痕	48	32
284	SD105	土製品	土錘	先端の一部		橙			48	32
285	SD105	石製品	砥石	上下欠					48	32
415	SD105	鍛冶関連	鉄滓					後述		32
422 ～424	SD105	近世陶磁器						後述		32
286	SD107	須恵器	長頸壺	口頸部の一部		黒	ロクロナデ		48	33
287	SD107	土師器	甕	口縁部の一部	口 21.0	にぶい褐	ロクロナデ		48	33
288	SD107	土師器	鍋	1/10	口 40.0	にぶい橙	ロクロナデ		48	33
289	SD107	珠洲焼	甕	口縁部の一部	口 40.0	灰			48	33
290	SD107	石製品	石臼	1/5	口 26.0 高 1.4			上臼	48	33
291	SD107	木製品	部材	下欠	縦 24.4 横 1.4 厚 1.1				48	33
425 ～426	SD107	近世陶磁器						後述		33
416	SD108	鍛冶関連	鉄滓					後述		33
427	SD108	近世陶磁器						後述		33
292	SX119	須恵器	有台杯	ほぼ完形	口 12.8 底 6.7 高 4.0	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り	底部外面ヘラ記号	49	33
293	SX119	須恵器	有台杯	ほぼ完形	口 13.0 底 7.4 高 3.8	灰	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り		49	33

報告番号	出土地点	種別	器種	遺存度	法量(cm)	色調	技法	特記事項	図面	写真
294	ＳＸ119	土師器	無台椀	2/3	口 10.8 底 5.4 高 3.0	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		49	33
295	ＳＸ119	土師器	無台椀	1/4	口 10.8 底 4.7 高 3.5	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		49	33
296	ＳＸ119	土師器	無台椀	1/6	口 11.2 底 5.2 高 3.2	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		49	33
297	ＳＸ119	黒色土器	有台椀	完形	口 15.2 台 7.2 高 5.9		ロクロナデ	内面黒色処理	49	33
298	ＳＸ119	黒色土器	有台椀	1/2	口 16.3 台 7.6 高 6.8		ロクロナデ	内面黒色処理	49	33
299	ＳＸ119	土師器	甕	完形	口 14.4 底 6.8 高 11.2	にぶい橙			49	33
300	ＳＸ119	土師器	甕	1/2	口 15.4 底 8.0 高 11.7	にぶい橙			49	33
301	ＳＸ119	灰釉陶器	椀	1/4	口 14.6	灰白		東濃産。虎渓山１様式	49	33
302	ＳＸ119	木製品	椀	1/2 底部	台 8.0		ロクロ挽き	漆器。内外面、黒色漆	49	
303	６Ｃ４	須恵器	無台杯	1/8	口 12.3 底 8.6 高 4.3	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り		49	34
304	５Ｂ25	須恵器	無台杯	口縁の一部	口 13.0	灰	ロクロナデ		49	34
305	６Ｃ４	須恵器	無台杯	底部の1/3	底 6.4	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り		49	34
306	６Ｃ４	須恵器	有台杯	底部の一部	台 8.0	灰	ロクロナデ		49	34
307	５Ｃ５	須恵器	有台椀	1/4	口 12.8 台 8.0 高 5.0	灰	ロクロナデ、底部回転ヘラ切りか？		49	34
308	６Ｃ３	須恵器	杯蓋	2/3	口 13.4 高 2.4	灰	ロクロナデ		49	34
309	６Ｃ４	須恵器	短頸壺	口縁の一部	口 8.7	灰	ロクロナデ		49	34
310	５Ｂ17	須恵器	長頸壺	口頸の一部		灰	ロクロナデ		49	34
311	５Ｂ24	須恵器	長頸壺	底部の1/3	台 10.8	灰	ロクロナデ		49	34
312	６Ｃ４	須恵器	長頸壺	体部・底部の1/5	台 10.2	灰	ロクロナデ		50	34
313	６Ｃ４	須恵器	甕	口縁の一部	口 21.0	灰	ロクロナデ		50	34
314	６Ｃ１	須恵器	甕	口縁の一部	口 41.6	灰	ロクロナデ		50	34
315	５Ｂ25	土師器	無台椀	1/5	口 13.6	にぶい橙	ロクロナデ		50	34
316	５Ｃ３	土師器	小皿	ほぼ完形	口 9.6 底 4.6 高 2.7	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		50	34
317	６Ｂ21	土師器	無台椀	1/5 底部	底 5.4	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		50	34
318	６Ｂ21	土師器	小皿	1/5	口 9.5 底 4.6 高 2.8	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		50	34
319	５Ｂ17	黒色土器	有台椀	1/5 底部	台 6.2	にぶい橙	ロクロナデ	内面黒色処理	50	34
320	６Ｃ５	黒色土器	有台椀	4/5 口縁・体部	口 18.6	にぶい橙	ロクロナデ	内面黒色処理	50	34
321	６Ｂ21	黒色土器	有台椀	1/5 底部	台 7.8	にぶい橙	ロクロナデ	内面黒色処理、高台内に墨が付く転用硯か	50	34

報告番号	出土地点	種別	器種	遺存度	法量(cm)	色調	技法	特記事項	図面	写真
322	5 B24	土師器	甕	1/8	口 23	にぶい橙	ロクロナデ		50	34
323	6 C 4	土師器	甕	口縁の一部	口 13.6	にぶい橙	ロクロナデ		50	34
324	5 B17	土師器	甕	口縁の一部	口 12.4	にぶい橙	ロクロナデ		50	34
325	6 C 1	土師器	甕	底部	底 6.0	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		50	34
326	5 C 5	土師器	鍋	口縁の一部	口 26	にぶい橙	ロクロナデ		50	34
327	5 C 5	土師器	甕	口縁の一部	口 34.0	にぶい橙	ロクロナデ		50	34
328	6 C 4	灰釉陶器	皿	口縁の一部	口 14.4	灰白	ロクロナデ		51	34
329	6 C 4	灰釉陶器	皿	底部の一部	台 4.2	灰白	ロクロナデ		51	34
330	5 C 3	灰釉陶器	椀	底部の1/2	台 8.6	灰白、釉・明緑灰	ロクロナデ		51	34
331	5 B24	灰釉陶器	椀	底部の2/3	台 7.8	灰白	ロクロナデ、底部回転糸切り		51	34
332	5 C 5	山茶椀	椀	1/5 底部	台 7.4	灰白	ロクロナデ	高台に籾殻痕	51	34
333	6 C 8	中国陶磁器	碗	1/10	口 18.2	灰白、釉オリーブ灰		青磁。蓮弁文。太宰府分類〔横田・森田1978〕で碗Ⅰ-5-a	51	34
334	5 C 5	中国陶磁器	碗	1/10	口 15.6	灰白、釉・オリーブ灰			51	34
335	6 B21	中国陶磁器	碗	1/10	口 15.0	灰白、釉・オリーブ灰		青磁、無文	51	34
336	5 B24	瀬戸美濃焼	皿	1/4	底 12.0	褐灰、釉・浅黄橙			51	34
337	5 B24	瀬戸美濃焼	天目茶椀	口縁の一部	口 12.0	褐灰、釉・黒褐			51	34
338	6 C 8	瀬戸美濃焼	天目茶椀	1/5 底部	台 4.8	褐灰、釉・褐	削り出し高台		51	34
339	5 C 4	瀬戸美濃焼	香炉	体部の一部		褐灰、釉・黒褐		袴腰形	51	34
340	5 B25	瀬戸美濃焼	皿	1/2	口 10.4	褐灰、釉・黒褐		大窯	51	34
341	7 C 3	近世陶磁器	皿	1/10	口 12.2	褐灰、釉・オリーブ灰		肥前系陶器	51	35
342	5 C 5	近世陶磁器	天目茶椀	1/5 底部	台 4.6	褐灰、釉・オリーブ灰	削り出し高台	肥前系陶器	51	35
343	5 C 5	近世陶磁器	皿	1/3	台 6.0	褐灰、釉・褐	削り出し高台	越中瀬戸焼	51	35
344	5 B19	珠洲焼	片口鉢	口縁の一部	口 24.0	灰			51	35
345	5 C 3	珠洲焼	片口鉢	口縁の一部	口 25.0	灰			51	35
346	5 B24	珠洲焼	片口鉢	底部の一部	底 11.0	灰			51	35
347	5 B27	鍛冶関連	羽口	先端	径 7.3	にぶい黄橙			51	35
348	5 B25	鍛冶関連	羽口	先端の一部		浅黄			51	35
349	5 B17	鍛冶関連	羽口	先端の一部		浅黄			51	35
417～420		鍛冶関連						後述		35
350	5 B19	珠洲焼	片口鉢	底部の一部	底 11.6	灰			52	35
351	5 C 3	土製品	土錘	ほぼ完形	縦 9.7 径 3.9	にぶい橙			52	35
352	6 C 4	石製品	砥石	破片					52	35
353	6 C 4	石製品	砥石	上下欠	横 4.7 厚 1.5				52	35

報告番号	出土地点	種　別	器　種	遺存度	法量(cm)	色　調	技　　法	特記事項	図面	写真
354	５B25	石製品	砥石	上下欠	横 3.8 厚 2.3				52	35
355	５C３	石製品	磨石	一部					52	35
356	６C３	石製品	砥石		縦 7.8 横 6.5 厚 1.8				52	35
357	５B24	鉄製品	用途不明						52	35
358	６C４	鉄製品	用途不明					クサビか？	52	35
359	５B32	木製品	下駄	1/2	縦 20.2 高 1.9				52	35
360	５B23	木製品	用途不明					柄？	52	35
361	５C３	木製品	用途不明						52	35

別表４　鉄砲町二期線Ａ地区　出土遺物観察表

報告番号	出土地点	種　別	器　種	遺存度	法量(cm)	色　調	技　　法	特記事項	図面	写真
362	ＳＥ１	石製品	砥石		縦 14.0 横 5.3 厚 5.2				53	35
363	ＳＤ２	土師器	甕	底部の1/4	底 8.2	にぶい赤褐			53	35
364	ＳＤ３	須恵器	長頸壺	口縁の一部	口 25.0	灰	ロクロナデ		53	35
365	ＳＤ３	須恵器	長頸壺	底部の一部	台 10.6	灰	ロクロナデ		53	35
366	ＳＤ３	瀬戸美濃焼	天目茶椀	底部の一部	台 4.0	褐灰、釉・褐	削り出し高台		53	35
367	ＳＤ３	珠洲焼	壺	底部の一部	底 7.8	灰	Ｒ種		53	36
368	ＳＤ３	珠洲焼	片口鉢	底部の一部	底 12.8	灰			53	36
369	ＳＤ３	石製品	砥石	上下欠	縦 4.3 横 2.3 厚 2.3				53	36
370	ＳＤ３	石製品	砥石		縦 9.4 横 5.2 厚 3.4				53	36
371	ＳＤ３	石製品	磨石	4/5	縦 9.9 横 7.4 厚 4.4				53	36
372	ＳＤ３	石製品	石臼	1/8	口 31.2 高 14.0			上臼	53	36
373	ＳＤ３	石製品	石塔	完形	総縦25.9 口 17.8			五輪塔の空・風輪が一体となったもの	53	36
374	ＳＤ３	石製品	石塔	完形	縦 19.4 横 11.8 高 12.5				53	36
375	ＳＤ３	石製品	石塔	完形	縦横25.2 高 13.2			五輪塔の火輪	54	36
376	ＳＤ３	石製品	石塔	3/4	縦横24.0 高 11.1			五輪塔の火輪373とセット	54	36
377	ＳＤ３	石製品	石塔	完形	縦 24.0 横 23.0 高 18.0				54	36
378	ＳＤ７	土師器	小皿	1/5	口 9.3 底 5.0 高 2.1	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		54	36
379	ＳＤ７	須恵器	甕	体部の一部		灰			54	36
380	６B23	須恵器	有台杯	底部の一部	台 8.4	灰	ロクロナデ		54	36

報告番号	出土地点	種別	器種	遺存度	法量(cm)	色調	技法	特記事項	図面	写真
381	8 B24	須恵器	長頸壺	底部の一部	台 11.0	灰	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り		54	36
382	8 B23	須恵器	横瓶	口縁部	口 10.0	灰			54	36
383	5 B19	土師器	甕	底部の一部	底 8.6	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り	平底の小形甕	54	36
384	8 B21	土師器	甕	底部の一部	底 8.3	明褐灰	ロクロナデ、底部回転糸切り	平底の小形甕	54	36
385	8 B21	土師器	甕	口縁の一部	口 24.8	にぶい橙	ロクロナデ		54	36
386	5 B25	灰釉陶器	椀	底部の一部	台 7.6	灰白	ロクロナデ		54	36
387	7 B25	灰釉陶器	皿	口縁の一部	口 17.4	灰白	ロクロナデ		54	36
388	3 B14	土師質土器	皿	1/5	口 9.3 底 5.4 高 1.9	浅黄橙	手づくね		54	36

別表5　鉄砲町二期線B地区　出土遺物観察表

報告番号	出土地点	種別	器種	遺存度	法量(cm)	色調	技法	特記事項	図面	写真
389	SD1	黒色土器	椀	口縁の一部	口 16.0	橙	ロクロナデ	内面黒色処理	54	36
390	SD1	鍛冶関連	羽口	先端の一部		明褐灰			54	36
391	SD1	鍛冶関連	羽口	体部の一部		にぶい橙			54	36
392	5 B19	須恵器	長頸壺	口頸部の一部		灰黒	ロクロナデ		54	36
393	不明	土師器	甕	口縁部の一部	口 22.0	にぶい橙	ロクロナデ		54	36
394	5 B19	珠洲焼	片口鉢		口 30.0	灰			54	36

別表6　鉄砲町遺跡　出土遺物観察表（写真のみ掲載分）

報告番号	地区	出土地点	種別	器種	遺存度	法量	色調	特記事項	写真
395	3地区Ⅱ層	SK101	鉄製品	角釘	完形				36
396	3地区Ⅱ層	SK101	鉄製品	丸釘	上端				36
397	3地区Ⅱ層	SK101	鉄製品	丸釘	完形				36
398	3地区Ⅱ層	畝間76	石製品	用途不明				パステル形	36
399	3地区Ⅳ層	6 C 5	鍛冶関連	鉄滓		12 g			27
400	3地区Ⅳ層	6 C 5	鍛冶関連	鉄滓		50 g			27
401	3地区Ⅳ層	6 C10	鍛冶関連	鉄滓		29 g			27
402	3地区Ⅳ層	6 C10	鍛冶関連	鉄滓		8 g			27
403	3地区Ⅳ層	6 C10	鍛冶関連	鉄滓		10.5 g			27
404	3地区Ⅳ層	6 C10	鍛冶関連	鉄滓		5 g			27
405	3地区Ⅳ層	6 C10	鍛冶関連	鉄滓		54 g			27
406	3地区Ⅳ層	7 B21	鍛冶関連	鉄滓		20 g			27
407	3地区Ⅳ層	7 B21	鍛冶関連	炉壁材		67 g			27
408	CB 8 Ⅲ層	SD 2	鍛冶関連	鉄滓		25 g			30
409	CB 8 Ⅲ層	SD 2	鍛冶関連	鉄滓		132 g			30
410	CB 8 Ⅲ層	SD 2	鍛冶関連	鉄滓		329 g			30
411	3地区Ⅲ層	7 C 2	鍛冶関連	鉄滓		59 g			31
412	3地区Ⅲ層	7 C 2	鍛冶関連	鉄滓		165 g			31
413	3地区Ⅲ層	7 C 2	鍛冶関連	鉄滓		90 g			31
414	3地区Ⅲ層	7 C 2	鍛冶関連	炉壁材		315 g			31

報告番号	地　区	出土地点	種　別	器　種	遺存度	法量	色　調	特記事項	写真
415	１・２地区	ＳＤ105	鍛冶関連	鉄滓		101ｇ			32
416	１・２地区	ＳＤ108	鍛冶関連	鉄滓		42ｇ			33
417	１・２地区	５Ｂ17	鍛冶関連	鉄滓		63ｇ			35
418	１・２地区	５Ｂ19	鍛冶関連	鉄滓		144ｇ			35
419	１・２地区	５Ｂ25	鍛冶関連	鉄滓		195ｇ			35
420	１・２地区	５Ｂ21	鍛冶関連	鉄滓		104ｇ			35
421	１・２地区	ＳＤ104	近世陶磁器	碗	破片		灰白		32
422	１・２地区	ＳＤ105	近世陶磁器	碗	破片		にぶい橙		32
423	１・２地区	ＳＤ105	近世陶磁器	碗	破片		白		32
424	１・２地区	ＳＤ105	近世陶磁器	碗	破片		白		32
425	１・２地区	ＳＤ107	近世陶磁器	皿	破片		白		33
426	１・２地区	ＳＤ107	近世陶磁器	碗	破片		にぶい橙		33
427	１・２地区	ＳＤ108	近世陶磁器	碗	破片		灰白		33
428	３地区Ⅳ層	ＳＥ168	獣骨	ウマ骨				下顎骨(歯あり)	37
429	３地区Ⅳ層	ＳＥ168	獣骨	ウマ骨				下顎骨(歯あり)	37
430	３地区Ⅳ層	ＳＥ168	獣骨	ウマ骨				下顎骨(歯あり)	37
431	３地区Ⅳ層	ＳＥ168	獣骨	ウマ骨				下顎骨(歯あり)	37
432	３地区Ⅳ層	ＳＥ168	獣骨	ウマ骨				上腕骨(右)	37
433	３地区Ⅳ層	ＳＥ168	獣骨	ウマ骨				橈骨(左上半分)	37
434	３地区Ⅳ層	ＳＥ168	獣骨	ウマ骨				大腿骨(左下半分)	37
435	３地区Ⅳ層	ＳＥ168	獣骨	ウマ骨				大腿骨(右下2/3)	37
436	３地区Ⅳ層	ＳＥ168	獣骨	ウマ骨				脛骨(右下2/3)	37
437	３地区Ⅳ層	ＳＥ168	獣骨	ウマ骨				部位不明	37
438	３地区Ⅳ層	ＳＥ168	獣骨	ウマ骨				部位不明	37
439	３地区Ⅳ層	ＳＥ168	獣骨	ウマ骨				部位不明	37
440	３地区Ⅳ層	ＳＥ168	獣骨	ウマ骨				部位不明	37
441	３地区Ⅳ層	ＳＥ168	獣骨	ウマ骨				部位不明	37
442	３地区Ⅳ層	ＳＥ168	獣骨	ウマ骨				部位不明	37
443	３地区Ⅳ層	ＳＥ168	獣骨	ウマ骨				部位不明	37
444	３地区Ⅳ層	ＳＥ168	獣骨	ウマ骨				部位不明	37
445	３地区Ⅳ層	ＳＥ168	獣骨	ウマ骨				部位不明	37
446	３地区Ⅳ層	ＳＥ168	獣骨	ウマ骨				部位不明	37

引用・参考文献

浅野弘光　1992　『則考』　教育出版文化協会

上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』第２号　日本貿易陶磁研究会

大場磐雄　1934　「上総菅生遺蹟の一考察(一)・(二)」『考古学雑誌』第29巻第１号・第３号　日本考古学会

大橋康二　1989　『考古学ライブラリー55　肥前系陶磁』　ニュー・サイエンス社

小村　弋　1983　『幕藩制成立史の基礎的研究―越後国を中心として―』　吉川弘文館

小村　弋ほか責任編集　1989　『角川地名辞典　15　新潟県』　角川書店

春日真実　1993　「王朝国家期の越後―上越市一之口遺跡（西地区）・新潟市小丸山遺跡を事例として―」『新潟考古』第４号　新潟県考古学会

加藤唐九郎　1972　『原色陶器辞典』　淡交社

金子拓男　1990　「春日山城の城域拡大とその時代性について(上)」『新潟考古』第１号　新潟県考古学会

金子拓男　1991　「春日山城の城域拡大とその時代性について(中)」『新潟考古』第２号　新潟県考古学会

金子拓男　1992　「春日山城の城域拡大とその時代性について(下)」『新潟考古』第３号　新潟県考古学会

金子拓男　1994　「上杉氏による越後府中の経営と居城春日山城の成立」『1993年度日本考古学協会シンポジウム報告集　守護所から戦国城下町へ―地方政治都市論の試み―』　名著出版

金子拓男・前川　要編　1994　『1993年度日本考古学協会シンポジウム報告集　守護所から戦国城下町へ―地方政治都市論の試み―』　名著出版

川上　元　1986ａ　「足高高台付土器」『神奈川考古』第21号　シンポジウム古代末期～中世における在地系土器の諸問題　神奈川考古同人会

川上　元　1986ｂ　「信濃国における古代末期の土器様相」『神奈川考古』第21号　シンポジウム古代末期～中世における在地系土器の諸問題　神奈川考古同人会

河原正彦編　1986　『日本の美術』第237号　陶器（近世編）　至文堂

川村浩司　1989　「越後の古代集落の素描―遺跡の類型とその展開―」『新潟考古談話会会報』第３号　新潟考古談話会

木村宗文　1985　「上杉氏と春日山城の動向」『新潟埋蔵文化財調査報告書第38集　上越市春日・木田発掘調査報告書Ⅰ　57年度調査・池田遺跡・付編一之口遺跡４地区河川跡出土遺物』　新潟県教育委員会

小島幸雄　1989　『四ツ屋遺跡発掘調査報告書』　新潟県上越市教育委員会

小島幸雄　1994　「春日山と越後府内の発掘成果」『1993年度日本考古学協会シンポジウム報告集　守護所から戦国城下町へ―地方政治都市論の試み―』　名著出版

駒見和夫　1986　「井戸をめぐる祭祀―地域的事例の検討から―」『考古学雑誌』第77巻第４号　日本考古学会

坂井秀弥　1987　「第Ⅵ章　まとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第48集　番場遺跡』　新潟県教育委員会

坂井秀弥　1990ａ　「越後における古代末・中世の土器様相と画期」『シンポジウム「土器から見た中世社会の成立」』　シンポジウム実行委員会

坂井秀弥　1990 b 「越後平安期土器編年素描」『東国土器研究』第３号　東国土器研究会

坂井秀弥　1991 「シンポジウム『土器から見た中世社会の成立』の成果と今後の課題」『新潟考古学談話会会報』第７号　新潟考古学談話会

坂井秀弥ほか　1986 a 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第40集　上越市春日・木田発掘調査報告書Ⅱ　一之口遺跡西地区』 新潟県教育委員会

坂井秀弥ほか　1986 b 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第44集　新井市坪ノ内館跡』 新潟県教育委員会

坂井秀弥ほか　1987 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第48集　番場遺跡』 新潟県教育委員会

坂井秀弥・戸根与八郎ほか　1984 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集　今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』 新潟県教育委員会

坂詰秀一　1980 『図録歴史考古学の基礎知識』 柏書房

坂本美夫　1986 「柱状高台の皿・坏について」『神奈川考古』第21号　シンポジウム古代末期～中世における在地系土器の諸問題　神奈川考古同人会

佐々木達雄　1992 『日本史小百科　陶磁』 東京堂出版（近藤出版社）

品田高志　1991 a 「越後における古代・中世の漆器―漆器食膳具を中心にして―」『新潟考古学談話会会報』第７号　新潟考古学談話会

品田高志　1991 b 「越後の中世土師器―編年的研究の現状と課題―」『新潟考古学談話会会報』第８号　新潟考古学談話会

品田高志　1992 「柏崎市・北田遺跡出土土器をめぐって―中世成立期における土器の一様相―」『新潟考古学談話会会報』第９号　新潟考古学談話会

品田高志　1993 「越後における古代と中世の画期―土師器と漆器の食膳具からみた若干の検討―」『新潟考古学談話会会報』第11号　新潟考古学談話会

鈴木俊成　1994 「食膳具の変遷（頚城地方を中心に）」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集　上越市春日・木田発掘調査報告書Ⅳ　一之口遺跡東地区』 新潟県教育委員会・㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団

鈴木俊成・春日真実・高橋一功　1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集　上越市春日・木田発掘調査報告書Ⅳ　一之口遺跡東地区』 新潟県教育委員会・㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団

田口昭二　1983 『考古学ライブラリー17　美濃焼』 ニュー・サイエンス社

巽淳一郎　1985 『日本の美術』第235号　陶磁（原始・古代編）　至文堂

鶴巻康志　1992 「越後における中世土器の動向」『第５回　北陸中世土器研究会　中世前期の土器・陶磁器・漆器』 北陸中世土器研究会

寺崎裕助・鈴木俊成・田海義正ほか　1985 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第38集　上越市春日・木田発掘調査報告書Ⅰ　57年度調査・池田遺跡・付編一之口遺跡４地区河川跡出土遺物』 新潟県教育委員会

寺崎裕助・肥田野弘之・田中　靖　1986 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第42集　上越市春日・木田発掘調査報告書Ⅲ　高畑遺跡』 新潟県教育委員会

戸根与八郎・藤巻正信ほか　1985 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第32集　宮野遺跡』 新潟県教育委員会

奈良国立文化財研究所　1985 『木器集成図録　近畿古代篇』 奈良国立文化財研究所

楢崎彰一責任編集　1977 『世界陶磁全集　3　日本中世』 小学館

楢崎彰一責任編集　1979 『世界陶磁全集　2　日本古代』 小学館

萩原秀三郎　1988 『豊穣の神と家の神』 東京美術

原　明芳　1988 「長野県の9世紀後半から12世紀の食膳具の様相」『長野県埋蔵文化財センター紀要』 2 ㈶長野県埋蔵文化財センター

原　明芳　1990 「信濃における中世的土器様相の成立―古代末期の土器様相のいくつかの画期から―」『シンポジウム「土器から見た中世社会の成立」』 シンポジウム実行委員会

藤沢良裕　1990 「東海地方における窯業生産の転換期について」『シンポジウム「土器から見た中世社会の成立」』 シンポジウム実行委員会

藤田邦雄　1992 「加賀における様相―土師器―」『第5回　北陸中世土器研究会　中世前期の土器・陶磁器・漆器』 北陸中世土器研究会

藤巻正信　1988 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第27集　西田・鶴巻田遺跡群』 新潟県教育委員会

宮　栄二・山田英雄監修　1986 『日本歴史地名体系　第15巻　新潟県の地名』 平凡社

宮田健一・酒井重洋・宇野隆夫ほか編　1992 『第5回　北陸中世土器研究会　中世前期の土器・陶磁器・漆器』 北陸中世土器研究会

森田　勉　1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年について」『貿易陶磁研究』第2号　日本貿易陶磁研究会

矢田俊文　1994 「戦国期越後における守護・守護代と都市」『1993年度日本考古学協会シンポジウム報告書　守護所から戦国城下町へ―地方政治都市論の試み―』 名著出版

矢部良明編　1986 『日本の美術』第236号　陶磁（中世編）　至文堂

横田賢二郎・森田　勉　1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』 4 九州歴史資料館

吉岡康暢　1989 a 「総論　珠洲名陶」『珠洲の名陶』 珠洲市立珠洲焼資料館

吉岡康暢　1989 b 『人類史叢書10　日本海域の土器・陶磁器〔中世編〕』 六興出版

四柳嘉章　1993 「立山町辻遺跡出土中世漆器の塗膜分析」『大境』第15号　富山考古学会

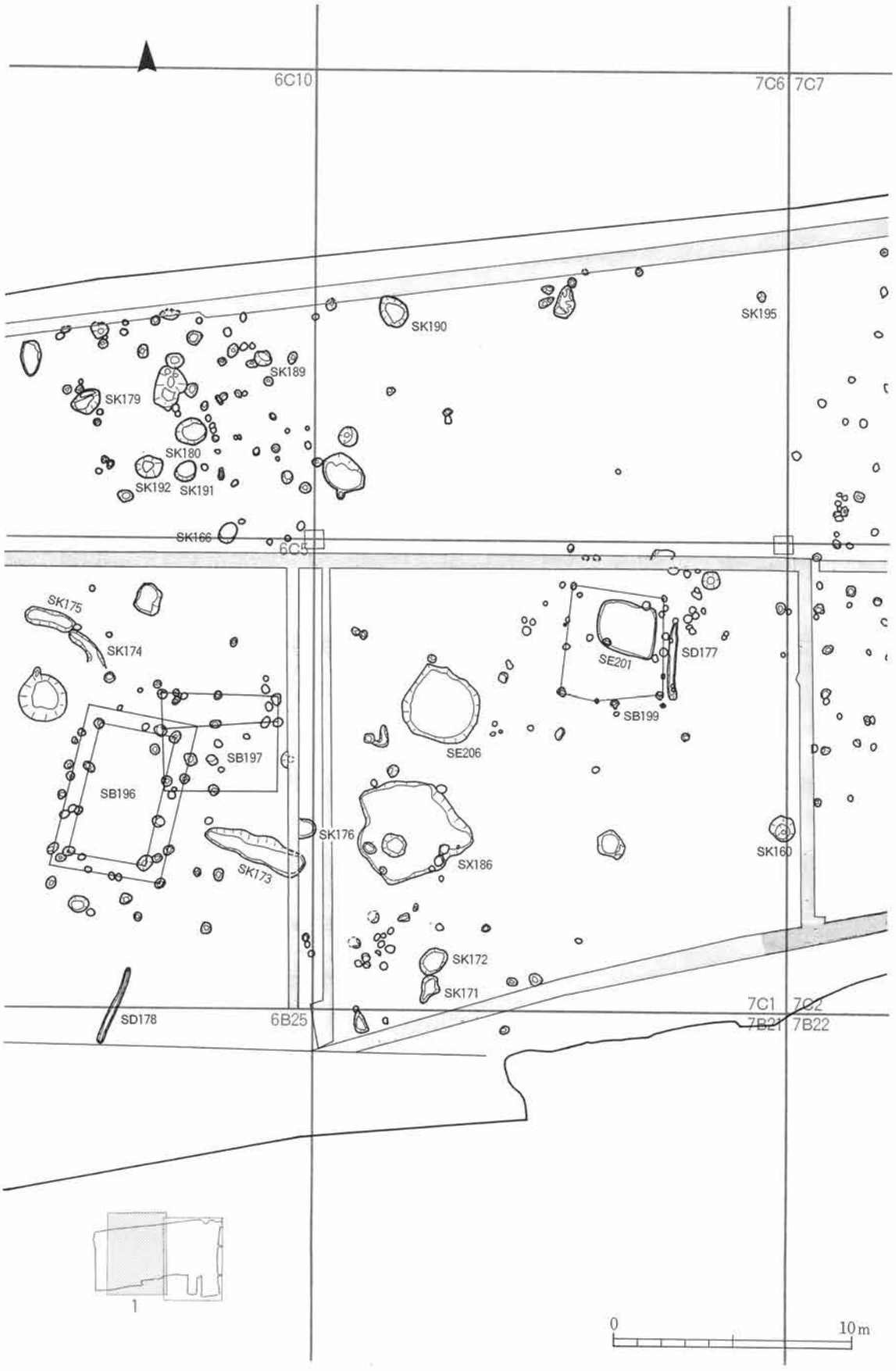
図　　版

凡　　例

1．図版は図面と写真とした。
2．遺構・遺物の報告番号等は、全て本文の報告番号と共通する。
3．遺物の種別等は報告図面中、実測図にトーンで次のように表示した。

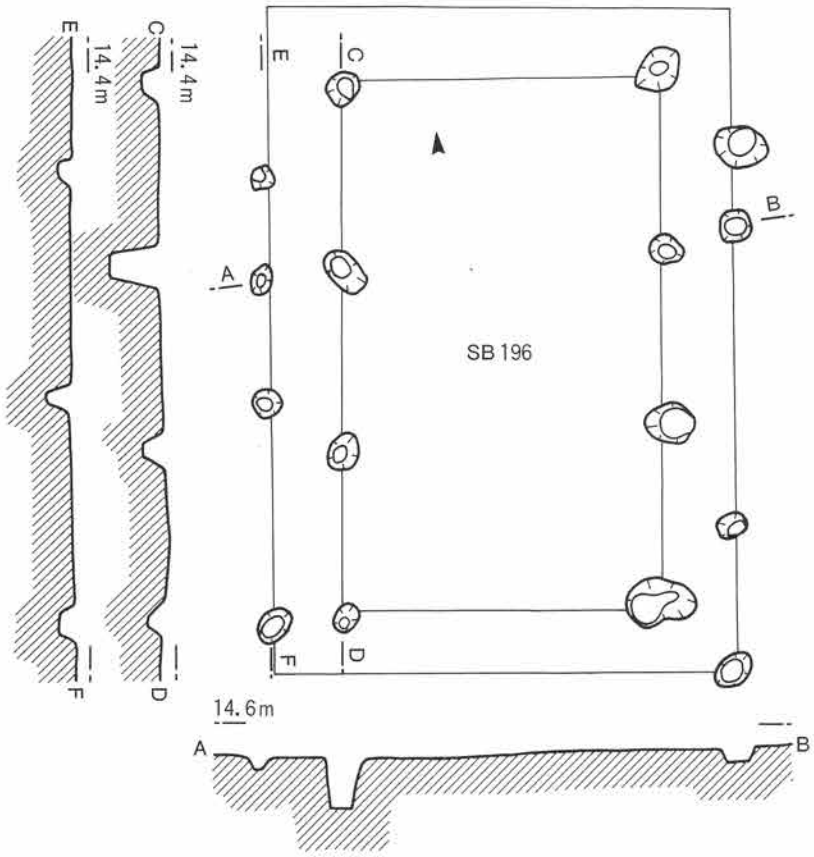
■	断面黒塗り	須恵器
□	断面網かけ	灰釉陶器
▒	内面網かけ	黒色土師器
□	白ヌキ	上記以外の遺物

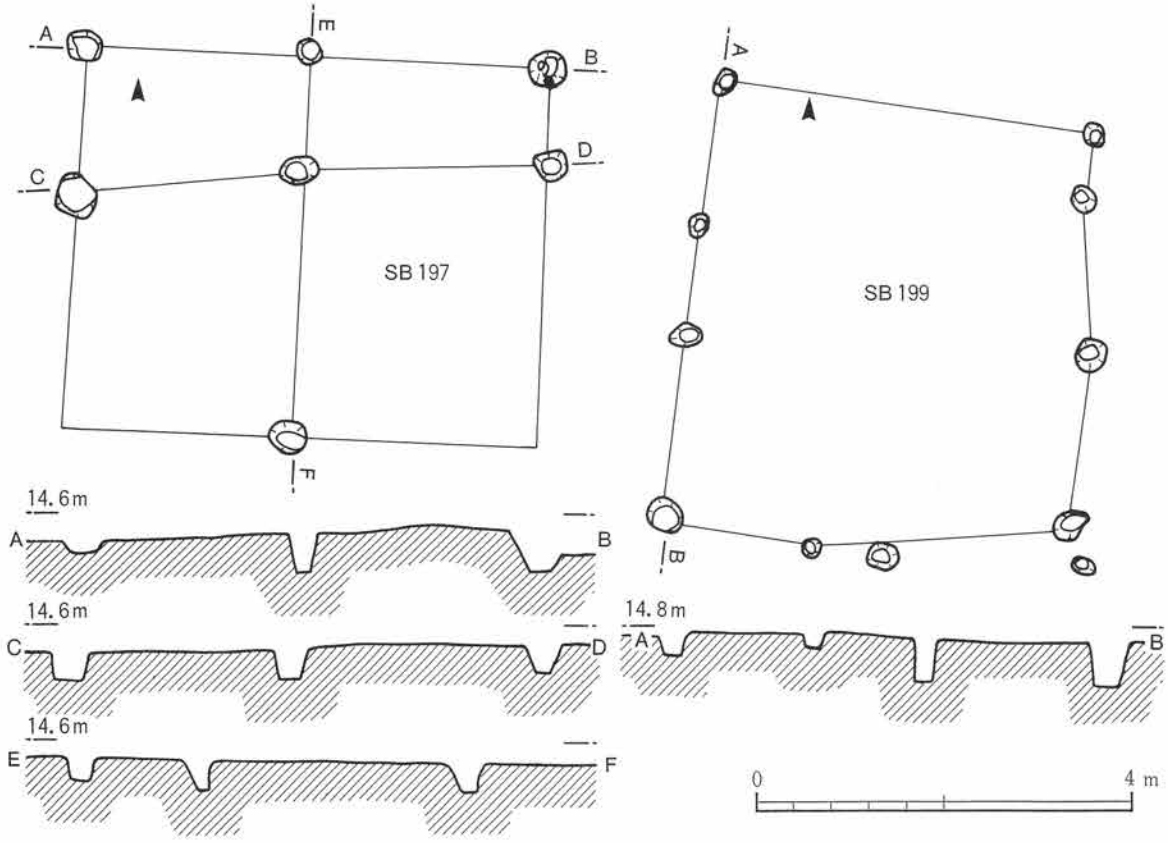
4．図版に掲載した写真の撮影は、遺物関係を藤巻正信が、遺構関係を現地調査員が担当し、空中写真は業者に委託した。


6C10
7C6
7C7
SK190
SK195
SK189
SK179
SK180
SK192
SK191
SK166
6C5
SK175
SK174
SE201
SD177
SB199
SB197
SB196
SE206
SK176
SX186
SK173
SK160
SK172
SK171
SD178
6B25
7C1
7C2
7B21
7B22
1
0
10m

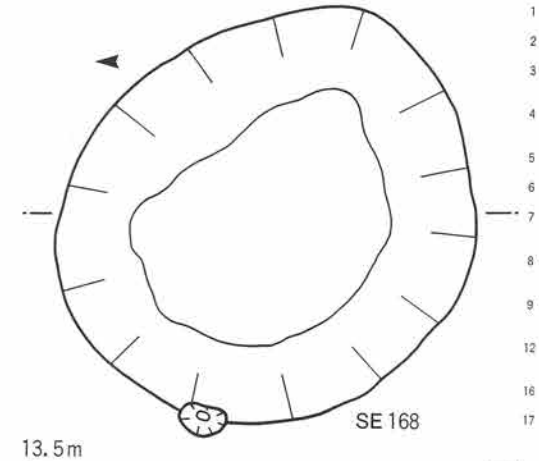
Ⅳ層下面遺構配置図 2

7C7
7C8
SK167
P144
SK162
SK161
SK170
SK163
SK164
SK42
SK41
P803
SK194
SK40
P111
P131
SK43
P774
SE168
SK44
P775
7C2
7C3
P776
7B22
7B23
SK37
SK36
SK38
SK35
SK181
SK182
SD35
2
0
10m

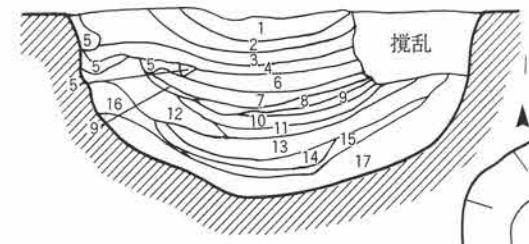

E
C
14.4m
14.4m
E
C
B
A
SB 196
F
D
F
D
14.6m
A
B

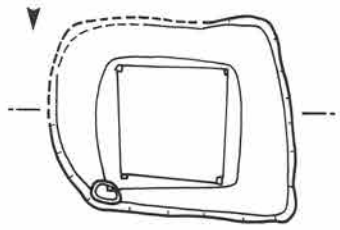

A
E
B
C
D
SB 197
F
14.6m
A
B
14.6m
C
D
14.6m
E
F
A
SB 199
B
14.8m
A
B
0
4 m

Ⅳ層下面遺構実測図 2（鉄 3　SE・SK）

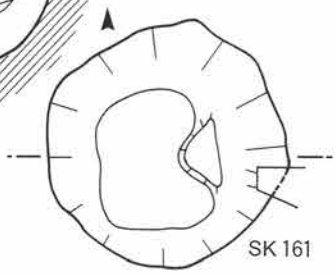


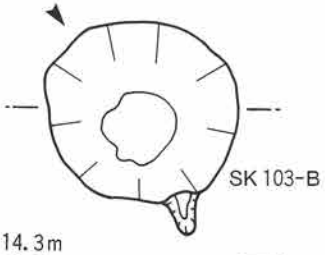
1　灰褐色土
　シルト、やや砂質、炭、小礫、土師器含む。
2　灰褐色土
　シルト、黄灰白砂ブロックを50％程含む。
3　灰褐色土
　シルト、1とほぼ同じ。しかし、緻密で、褐鉄鉱含む。
4　暗青灰色土
　シルト、炭の入る割合が1・3より多く、粘りもある。その他含有物は1・3と同じ。
5　にぶい黄橙色土
　シルト質砂、地山の崩落土。
6　暗青灰色土
　シルト、4と略同じ。5ブロックを含む。
7　暗青灰色土
　シルト、6と略同じ。炭の入る割合が6より多い。
8・10・13・15　黒色土
　シルト、炭層といってもよい程で、しまりなく、ゴミも多く入る。
9・11・14　黒褐色土
　シルト、8～16(上層)と互層をなし、緻密で炭少なく、褐鉄鉱を含む。
12　暗青灰色土
　シルト、上部は黄褐を呈し、緻密、下部はしまりなく、炭を多く含む。漸移層か。
16　にぶい黄橙色土
　シルト、上部が非常に緻密な他は12と同じ。
17　淡緑黒色土
　シルト、非常に緻密で、粘性も強い。周りの青灰色シルトとは、多少暗い色調で区別できる。
　墨書土器、木製椀出土

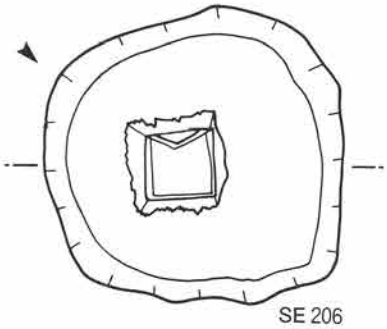


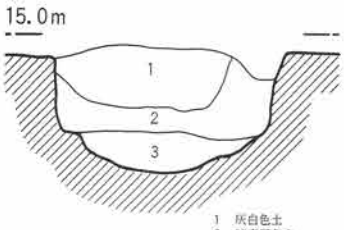


1　灰褐色土　砂質土
2　灰褐色土　粘土
3　黄褐色土　粘土、褐鉄鉱。
4　褐 色 土　粘質土、酸化鉄多し。
5　灰緑色土　粘質土
6　黒緑色土　粘質土
7　青灰色土　砂質土



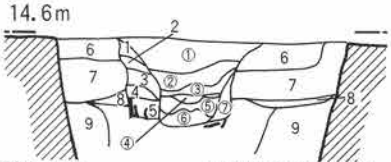






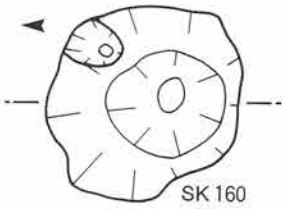
1　灰白色土
2　暗青灰色土
3　青(緑)黒色土

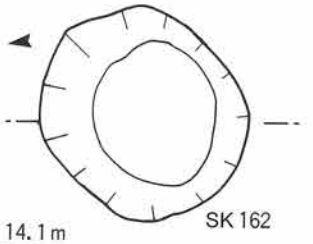
1　橙褐色土
　砂、灰色～暗灰色(粘土)のブロックを含む。
2　暗灰色土
　シルト(粘土)、灰褐色シルト(粘土)のブロックを含む。
3　橙褐色土　シルト粘土
4　橙褐色土　砂質シルト
5　(暗)灰色土　シルト(粘土)

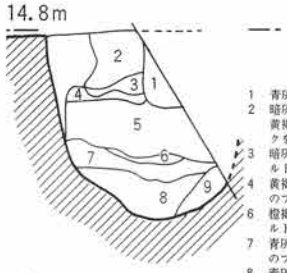


① 暗褐色土　シルト
② 暗～黒褐色土　シルト(植物腐敗土)
③ 暗黄褐色土　シルト
④ 黒褐色土　シルト(植物腐敗土)
⑤ 暗褐色土　シルト
⑥ 暗～黒褐色土　シルト(植物腐敗土)
⑦ 黄褐色土　シルト　ブロック状
　(黄褐色シルト)
　(白灰色シルト)

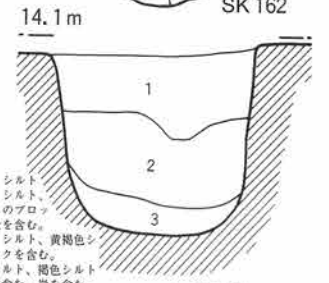
1　褐色土　シルト、①と同じ。
2　褐色～橙灰褐色土　シルト
3　橙褐色～灰褐色土　シルト、③と同じ。
4　橙褐色土　シルト、④と同じ。
5　灰～灰褐色土　シルト(板材の部分に近いところは、灰色化が強い)小礫を含む。
6　②と同じ。
7　⑤と同じ。
8　④と同じ。
9　青灰色土　砂質、褐鉱鉄を含む、河川の堆積層か。







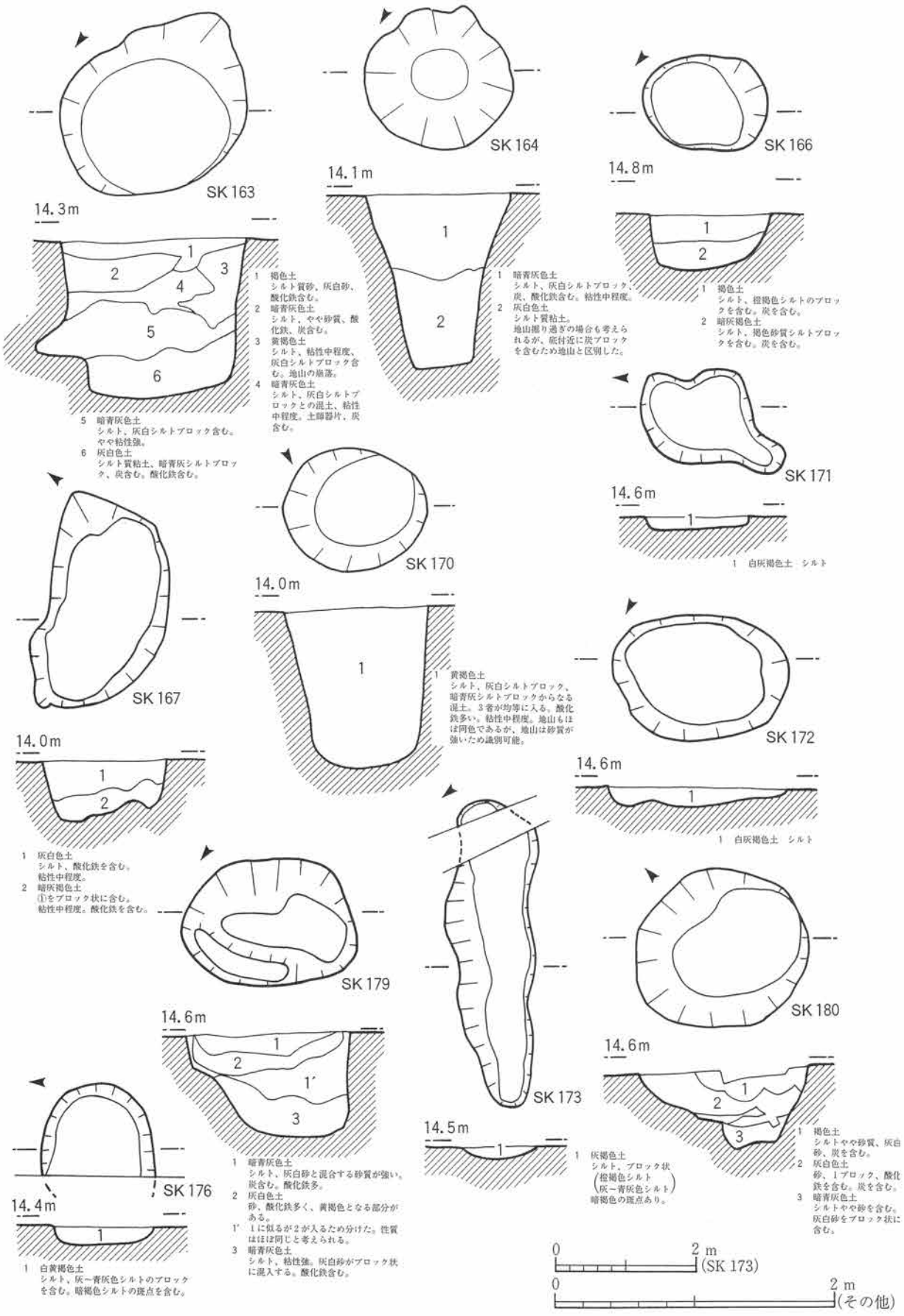
1　青灰褐色土　シルト
2　暗灰褐色土　シルト、黄褐色シルトのブロックを含む。炭を含む。
3　暗灰褐色土　シルト、黄褐色シルトのブロックを含む。
4　黄褐色土　シルト、褐色シルトのブロックを含む。炭を含む。
6　橙褐色土　シルト、青灰褐色シルトのブロックを含む。
7　青灰色土　シルト、褐色シルトのブロックを含む。
8　青灰色土　シルト、褐色シルトのブロックを含む。炭を含む。
9　白灰褐色土　橙褐色シルト



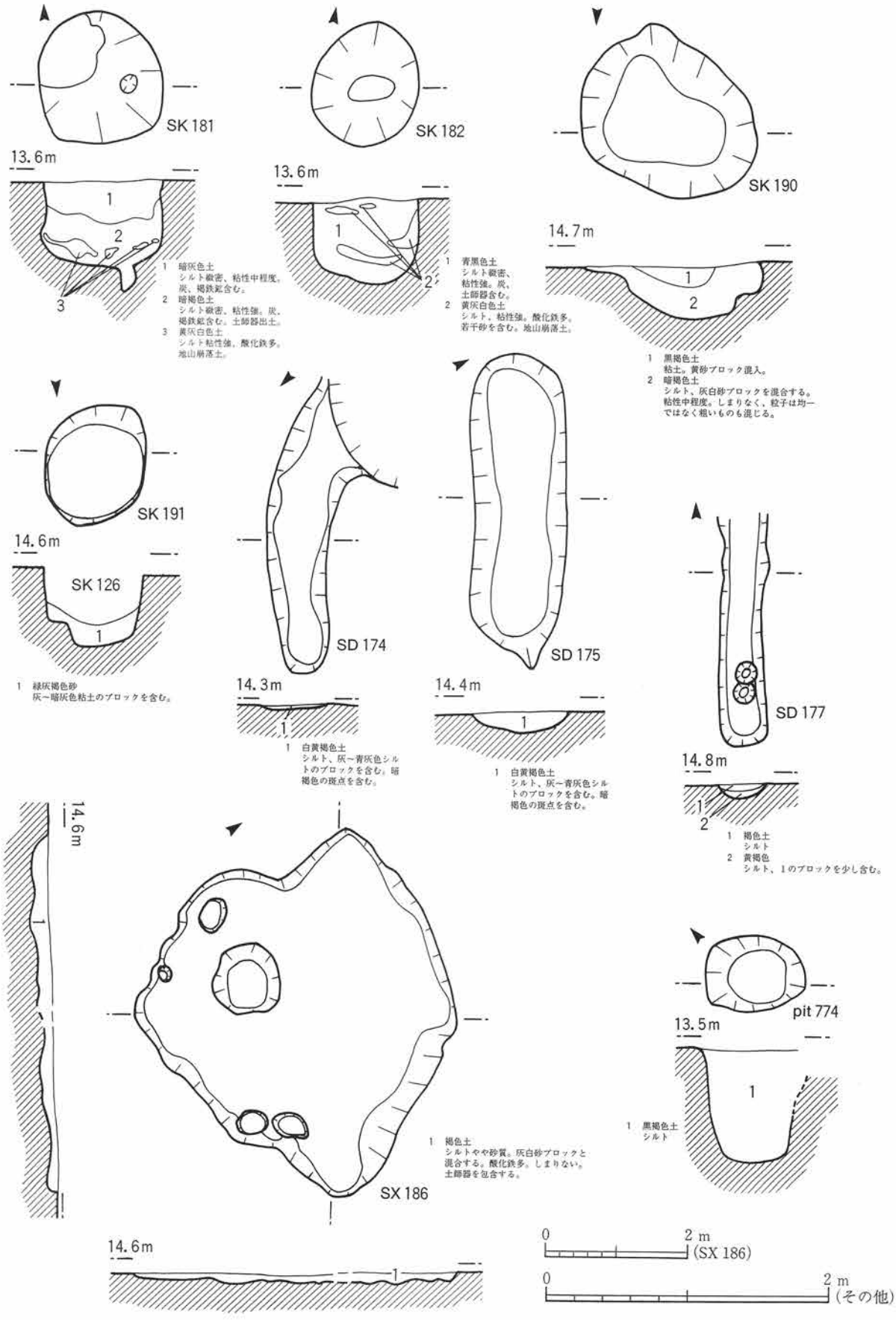
1　暗灰褐色土
　シルト、粘性中程度。酸化鉄を含む。灰白シルトブロック、炭を含む。
2　黄灰白色土
　シルト、粘性強。1ブロックを含む。暗青灰シルトブロックを含む。

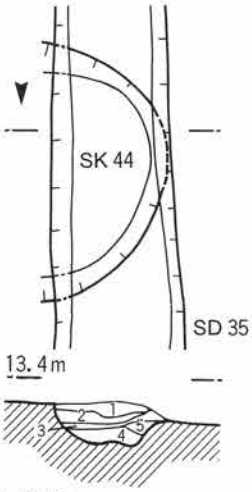
0　2 m（その他）

0　2 m（SE 168）

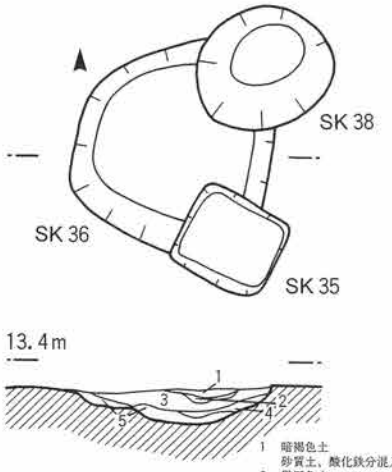

SK 163
14.3m
1 褐色土
シルト質砂、灰白砂、酸化鉄含む。
2 暗青灰色土
シルト、やや砂質、酸化鉄、炭含む。
3 黄褐色土
シルト、粘性中程度、灰白シルトブロック含む。地山の崩落。
4 暗青灰色土
シルト、灰白シルトブロックとの混土、粘性中程度。土師器片、炭含む。
5 暗青灰色土
シルト、灰白シルトブロック含む。やや粘性強。
6 灰白色土
シルト質粘土、暗青灰シルトブロック、炭含む。酸化鉄含む。
SK 164
14.1m
1 暗青灰色土
シルト、灰白シルトブロック、炭、酸化鉄含む。粘性中程度。
2 灰白色土
シルト質粘土。
地山掘り過ぎの場合も考えられるが、底付近に炭ブロックを含むため地山と区別した。
SK 166
14.8m
1 褐色土
シルト、橙褐色シルトのブロックを含む。炭を含む。
2 暗灰褐色土
シルト、褐色砂質シルトブロックを含む。炭を含む。
SK 171
14.6m
1 白灰褐色土　シルト
SK 170
SK 167
14.0m
1 黄褐色土
シルト、灰白シルトブロック、暗青灰シルトブロックからなる混土。３者が均等に入る。酸化鉄多い。粘性中程度。地山もほぼ同色であるが、地山は砂質が強いため識別可能。
SK 172
14.6m
1 白灰褐色土　シルト
14.0m
1 灰白色土
シルト、酸化鉄を含む。粘性中程度。
2 暗灰褐色土
①をブロック状に含む。粘性中程度。酸化鉄を含む。
SK 179
SK 173
SK 180
14.6m
1 暗青灰色土
シルト、灰白砂と混合する砂質が強い。炭含む。酸化鉄多。
2 灰白色土
砂、酸化鉄多く、黄褐色となる部分がある。
1′ １に似るが２が入るため分けた。性質はほぼ同じと考えられる。
3 暗青灰色土
シルト、粘性強。灰白砂がブロック状に混入する。酸化鉄含む。
14.5m
1 灰褐色土
シルト、ブロック状（橙褐色シルト（灰ー青灰色シルト））暗褐色の斑点あり。
14.6m
1 褐色土
シルトやや砂質、灰白砂、炭を含む。
2 灰白色土
砂、１ブロック、酸化鉄を含む。炭を含む。
3 暗青灰色土
シルトやや砂を含む。灰白砂をブロック状に含む。
SK 176
14.4m
1 白黄褐色土
シルト、灰ー青灰色シルトのブロックを含む。暗褐色シルトの斑点を含む。
0　2 m（SK 173）
0　2 m（その他）

Ⅳ層下面遺構実測図 4（鉄 3　SK・SD・SX・pit）

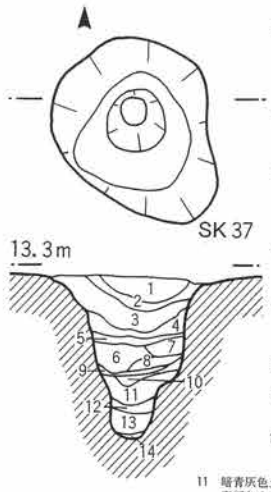




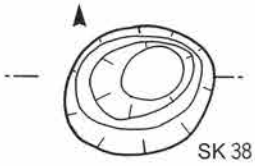
1　暗灰色土
　砂質土、酸化鉄、黄白色粘土混入。
2　灰黒色土
　砂質粘土、シルト化する砂土。
3　うす青灰色土
　砂質土、地山の土質に近似する。
4　灰黒色土
　粘質土、２層に比して砂質が少ないが類似する。

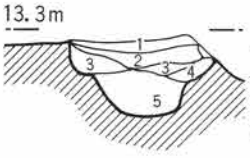


1　暗褐色土
　砂質土、酸化鉄分混入。
2　黒灰色土
　粘質土、灰緑色粘土ブロック混入。
3　暗灰色土
　粘質土、酸化鉄分を多く混入。
4　黒灰色土
　粘質土、白色粘土混入。
5　黒灰色土
　粘質土、地山ブロック，黄灰色砂質を混入。

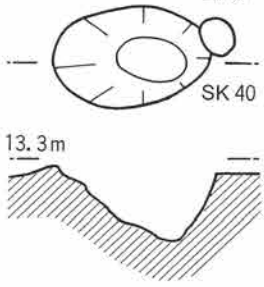


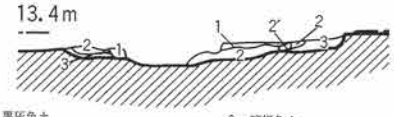
1　――
2　暗灰黒色土
　黄褐色土がブロック状に混入、固くしまりあり。
3　暗黒褐色土
　炭化物の黒色層と黒褐色土が互層になり遺物を多量に混入、中央部に特に炭化物の混入多、非常にかたくしまる。
4　青灰色土
　青灰色の粘質土であるが、酸化鉄を多量に混入している。
5　青灰色土
　粘質土で斑状に酸化鉄を混入、中央部は黒味強く若干炭化物混入。しまりあり。
6　明黒灰色土
　青灰色土層に炭化物、黒灰色土が多量に混入。砂質強。
7　青灰色土
　砂質でかたくしまり、黒灰色土の粒子が縞状に混入。
8　青灰色土
　７層より砂分が強い。
9　茶褐色土
　植物層、植物が層をなしている。
10　明青灰色土
　砂分が非常に強い。８層より若干明るい色調。
11　暗青灰色土
　青灰色土に黒灰色土粒子が均等に混入。
12　青灰色土　略同様の層で12層に黒灰色
13　青灰色土　の混入が多い。
14　青灰色土
　井戸の底をなす層で砂分が非常に多く、小礫が堆積している。



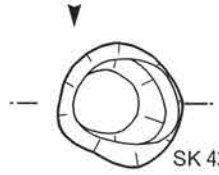


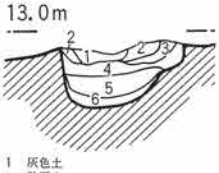
1　暗黒灰色土
　砂質土
2　灰色土
　粘土、黒色砂土混入
3　暗茶褐色土
　砂質土
4　暗灰色土
　砂質土
5　黒色土
　シルト層、灰色砂ブロック混入



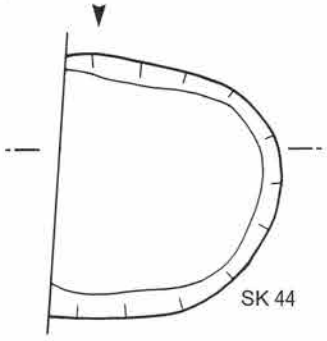


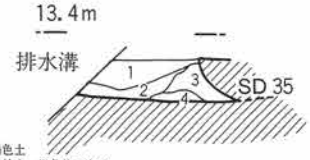
1　黒灰色土
　砂質土、土器、炭化物を多く混入。
2　暗灰褐色土
　粘質土，炭化物、灰色粘土混入。
2′　灰色土
　粘土ブロック
3　暗褐色土
　酸化鉄のシブ状の混入が認められ、白色粘土、黄色粘土を多く混入する。
4　灰褐色土
　粘土＋白色砂質土



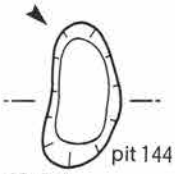


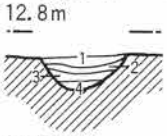
1　灰色土
　砂質土
2　灰色土
　粘土、黒色土、黄白色粘土混入。
3　青灰色土
　粘質土
4　灰色土
　粘土層、酸化鉄を混入。
5　灰色土
　酸化鉄、炭化物を混入。
6　灰褐色土
　砂質土、漸移層



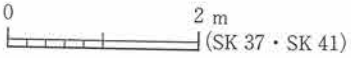


1　灰褐色土
　灰色粘土、炭化物を多く混入する。
2　黄褐色土
　酸化鉄混入。
3　暗灰色土
　粘質土、酸化鉄、炭化物をわずかに混入。
4　３層に類似するが、地山の砂質土を混入する。

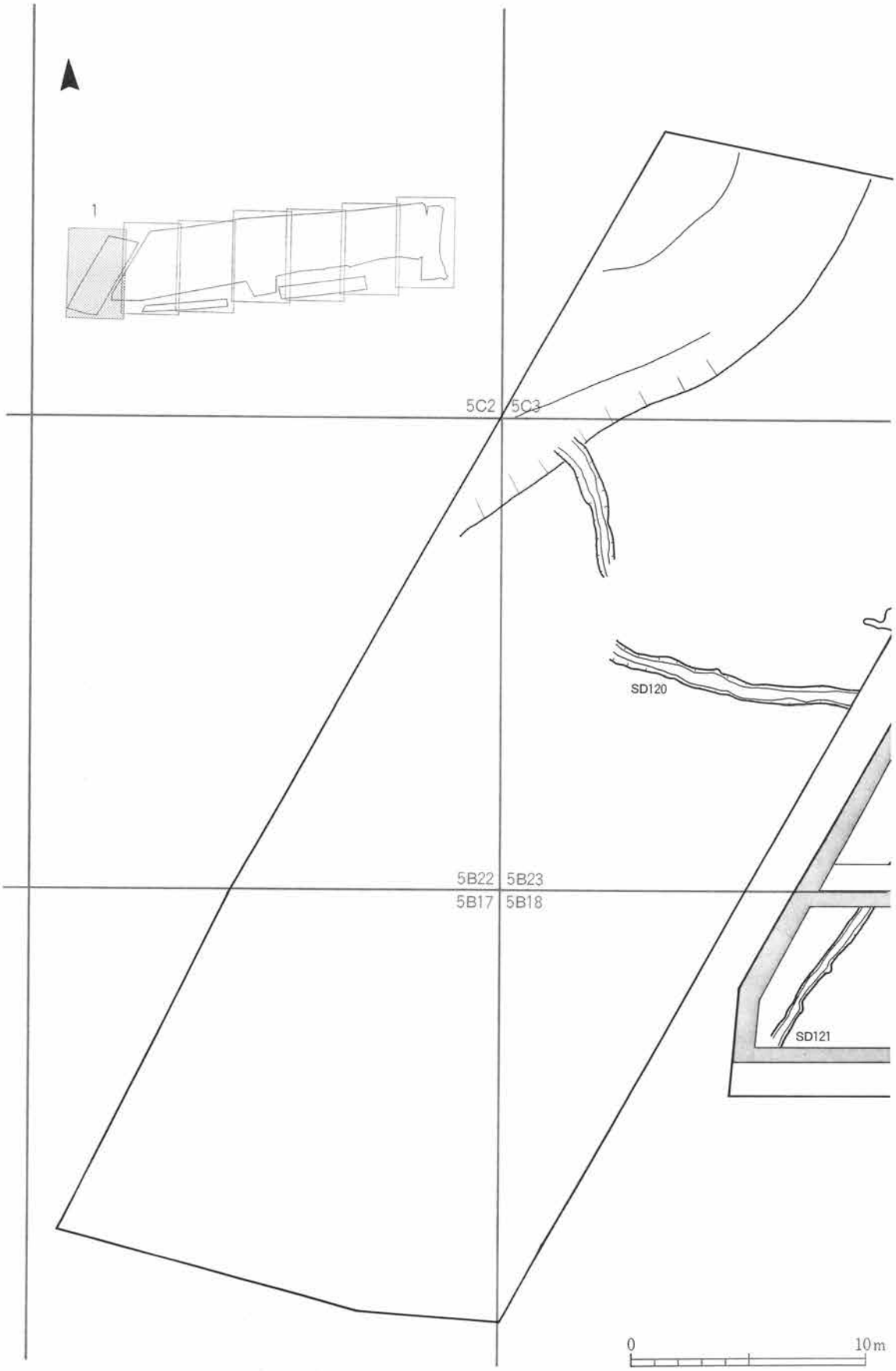




1　灰黒色土
　粘質で非常に固くしまっている。炭化物粒子、多量混入。
2　灰白色土
　粘土質でやわらかい。１層がブロック状に混入。
3　黒色土
　１層より黒味強く、炭化物が多量混入。
4　灰色土
　粘土質で黒色土を粒子状に多量混入。

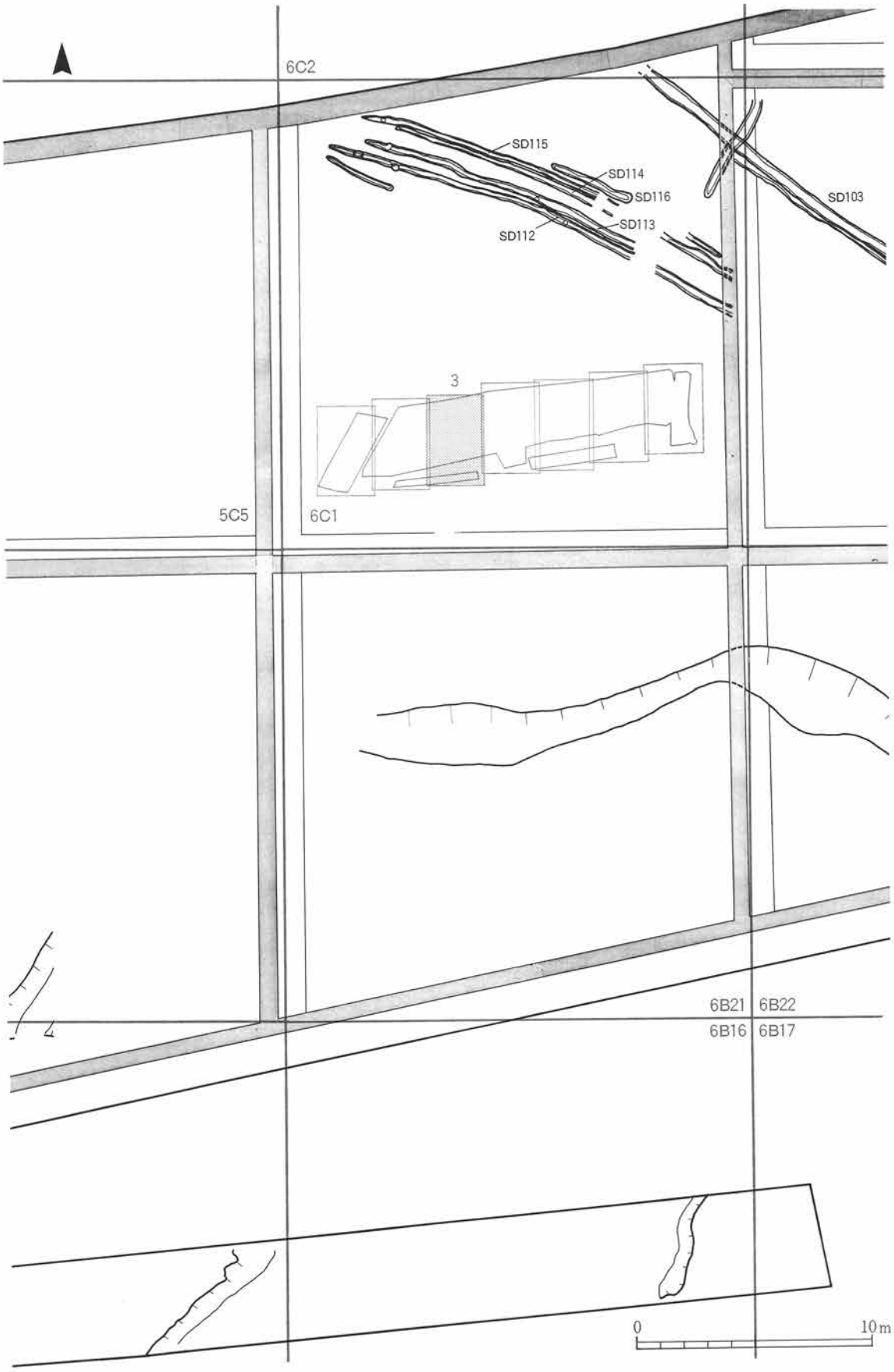


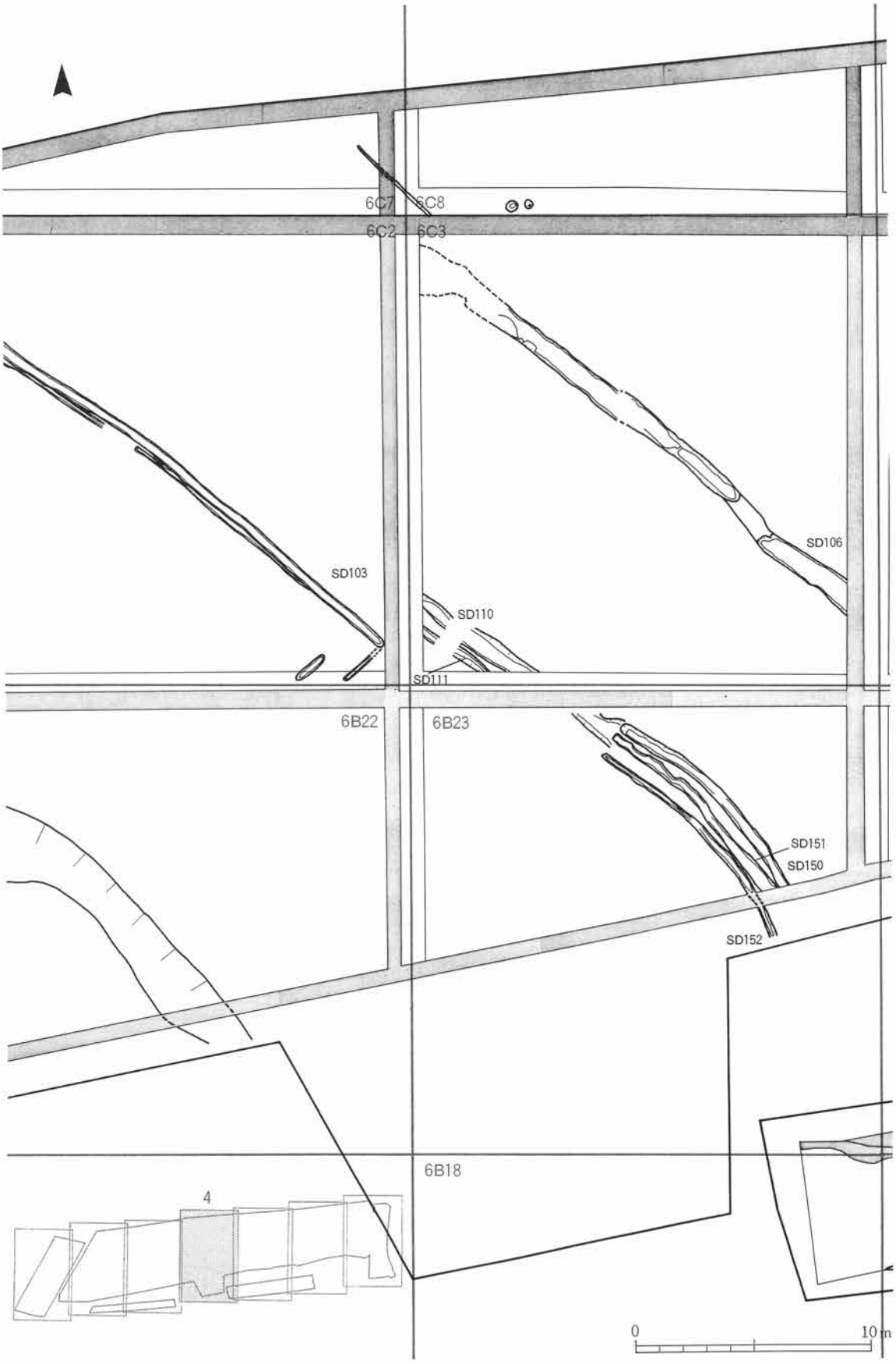
Ⅲ層下面遺構配置図 1



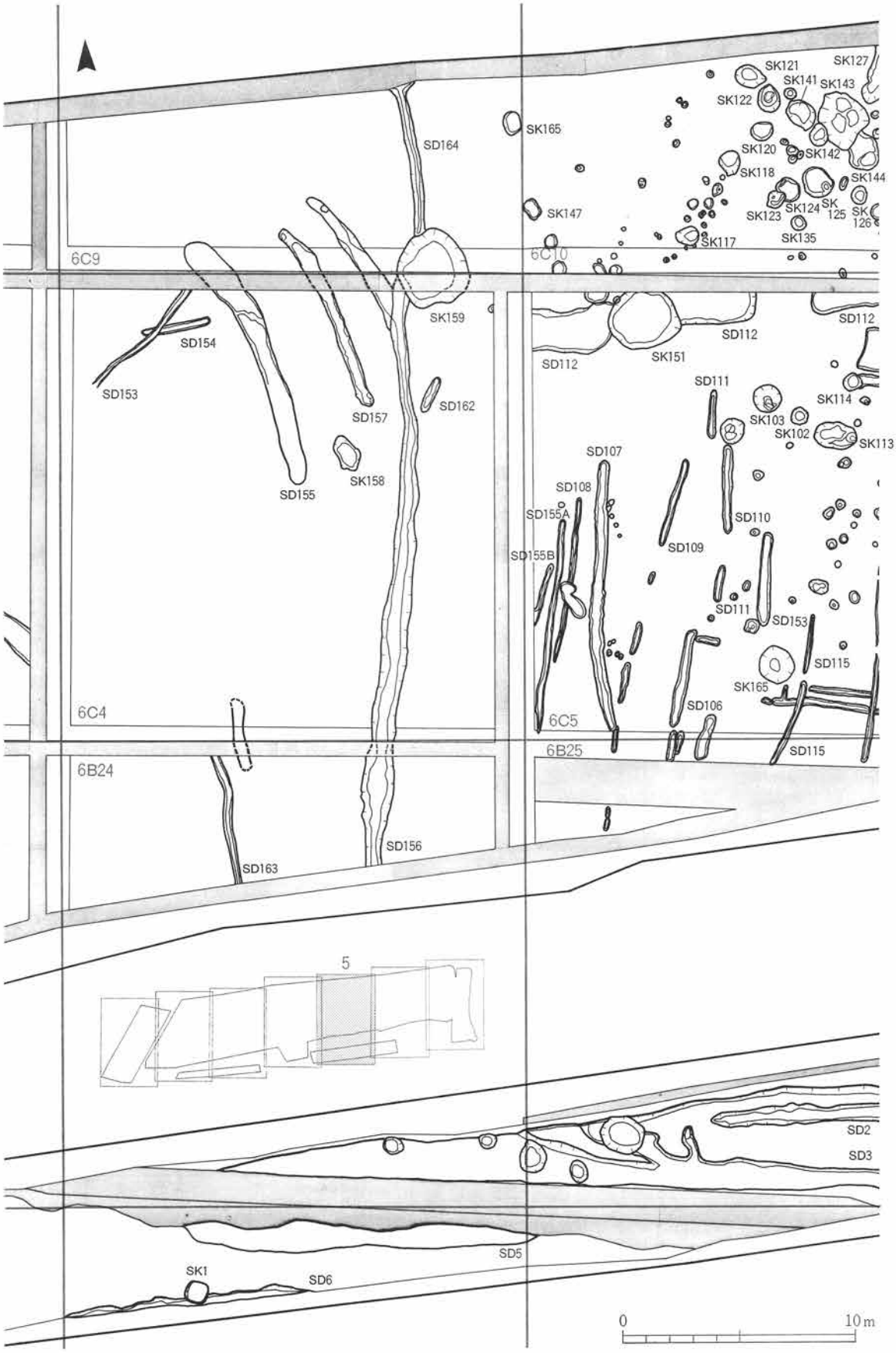
SD117
SD118
2
5C4
SD118
SD117
SX119
SK124
SD125
SD120
SK122
SK148
P139
5B24
5B25
5B19
5B20
SD121
0
10m

Ⅲ層下面遺構配置図３


6C2
SD115
SD114
SD116
SD113
SD112
SD103
3
5C5
6C1
6B21
6B22
6B16
6B17
0
10m


6C7
6C8
6C2
6C3
SD106
SD103
SD110
SD111
6B22
6B23
SD151
SD150
SD152
6B18
4
0
10 m

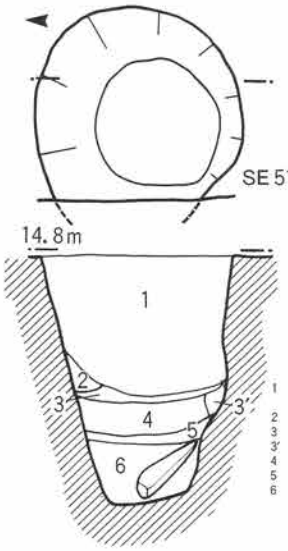
Ⅲ層下面遺構配置図5


SK121
SK127
SK141
SK143
SK122
SK165
SD164
SK120
SK142
SK118
SK144
SK147
SK123
SK124
SK 125
SK 126
SK135
SK117
6C9
6C10
SK159
SD112
SD154
SD153
SD157
SD162
SK151
SD111
SK114
SK103
SK102
SK113
SD107
SK158
SD155
SD108
SD155A
SD110
SD109
SD155B
SD111
SD153
SD115
SK165
SD106
6C4
6C5
6B25
SD115
6B24
SD156
SD163
5
SD2
SD3
SD5
SK1
SD6
0
10m

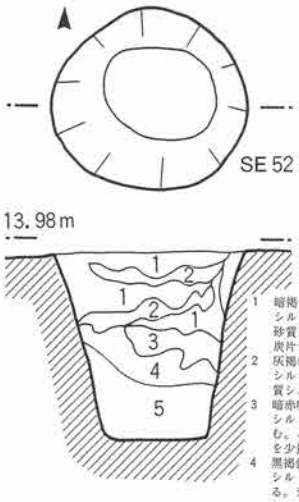
SK128
SK127
SK143
SK146
SK156
SD158
P202
P201
SK142
SK144
SK126
SK125
SK119
SK129
SK133
SK132
SK131
SK130
SK136
SK140
P180
SE85
P159
SE68
SD60
SK65
SD62
SK66
P216
SK98
SE71
SK84
P182
P181
SD134
SK137
SK138
SK139
6C10
7C6
SK166
SK165
SD112
SK148
SK149
SK114
SK113
SD209
SD205
SD204
SK203
SE51
SK74
SE73
SK91
SE75
SK90
SE92
SE76
P467
SK94
SK150
P401
SK160
SD212
SE202
SD211
SK207
P404
P405
SD210
SD115
SK157
SD208
SX200
6C5
6B25
7C1
7C2
7B21
7B22
SD3
SD2
6
0
10m

Ⅲ層下面遺構配置図７

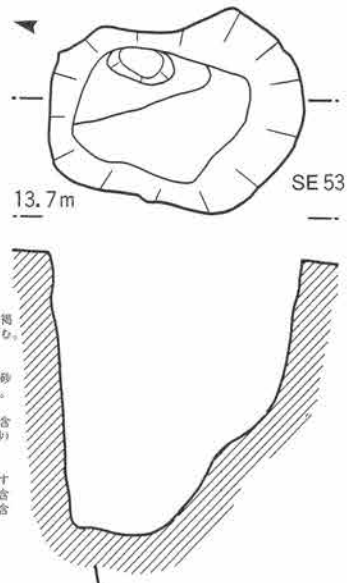
SK83
SD99
P192
P154
P159
SE54
P206
P172
SK96
P193
SK53
P158
SD60
SK65
SK78
SD60
SK58
SK92
SK59
SE97
SK64
SE67
SK66
SK57
SK70
SK82
SK56
SK69
P208
P166
P220
P484
SK55
SK86
P596
SK87
SE80
P639
SE76
SD81
SD95
SE79
SK93
P203
SK88
SE77
SK89
SK94
SK78
SK23
SK25
P10
SD2
SD7
SK25
SK24
SK10
SE33
7C8
SK11
SE5
SE6
SD3
SD1
SD16
SK13
SE12
SD15
SD15
SX14
SK21
SK20
SK19
SK22
7C2
7C3
7B22
7B23
SK26
SK27
SE31
SK29
7
0
10m

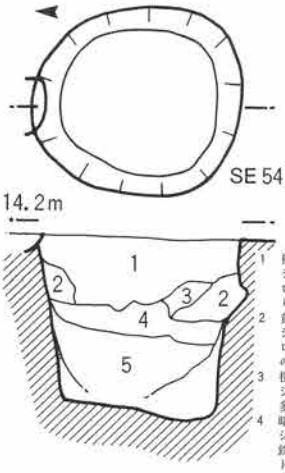


1　暗褐色土
　ロームブロック混入
2　黄色砂質土
3　赤褐色砂質土
3′　赤褐色砂質土
4　灰色粘土層
5　黒色粘土
6　灰色・黒色互層

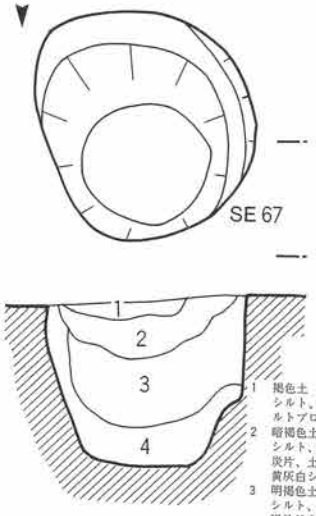


1　暗褐色土
　シルト、やや砂質、黄褐砂質シルトブロック含む。炭片含む。
2　灰褐色土
　シルト、砂質強、黄褐砂質シルトブロック含む。
3　暗赤灰色土
　シルト、褐鉄鉱を多く含む。小礫(or 大粒の砂)を少量含む。
4　黒褐色土
　シルト、褐鉄鉱を混入する。シルトブロックを含む。大粒の砂を多量に含む。

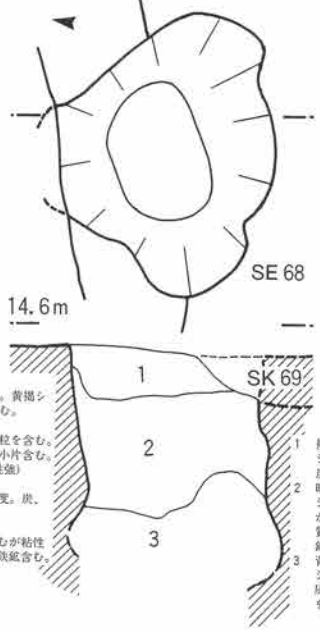




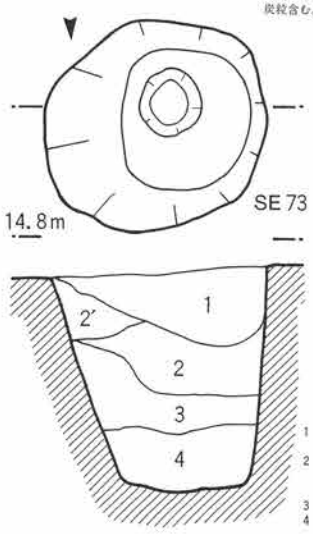
1　褐色土
　シルト、黄灰シルトブロック含む。余りしまりはない。炭粒含む。
2　黄褐色土
　シルト、褐シルトブロックとの混土。地山の崩落土。
3　橙色土
　シルト質砂、褐鉄鉱を多量に含む。
4　暗青灰色土
　シルト、やや砂質。褐鉄鉱含む。黄灰白シルトブロック含む。
5　青黒色土
　シルト、灰白シルトブロックを含む。粘性強、炭粒含む。



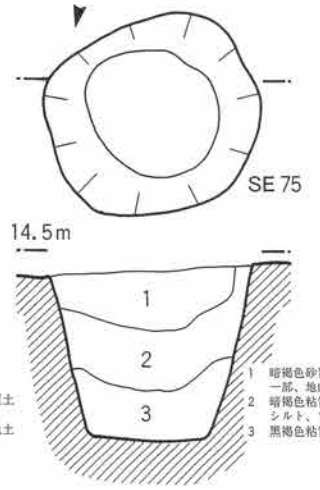
1　褐色土
　シルト、やや砂質。黄褐シルトブロックを含む。
2　暗褐色土
　シルト、大粒の砂粒を含む。炭片、土師質土器小片含む。黄灰白シルト(粘性強)
3　明褐色土
　シルト、粘性中程度。炭、褐鉄鉱含む。
4　灰黒色土
　シルト、微砂粒含むが粘性が強い。炭片、褐鉄鉱含む。



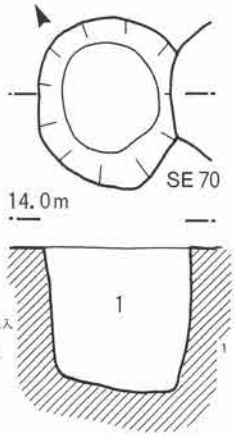
1　褐色土
　シルト、粗い土質。炭片、土師器片含む。
2　暗青灰色土
　シルト、1より粘性が強い。灰白シルト質砂ブロック、褐鉄鉱含む。
3　青黒色土
　シルト、粘性強。黄灰白シルトブロックを含む。



1　暗褐色砂質土
　暗褐色土＋黄色砂質土
2　暗茶褐色粘質土
　灰色シルト＋茶褐色土
　鉄分多く混入。
3　黒褐色粘質土
4　黒色土
　(炭化物を混入。)



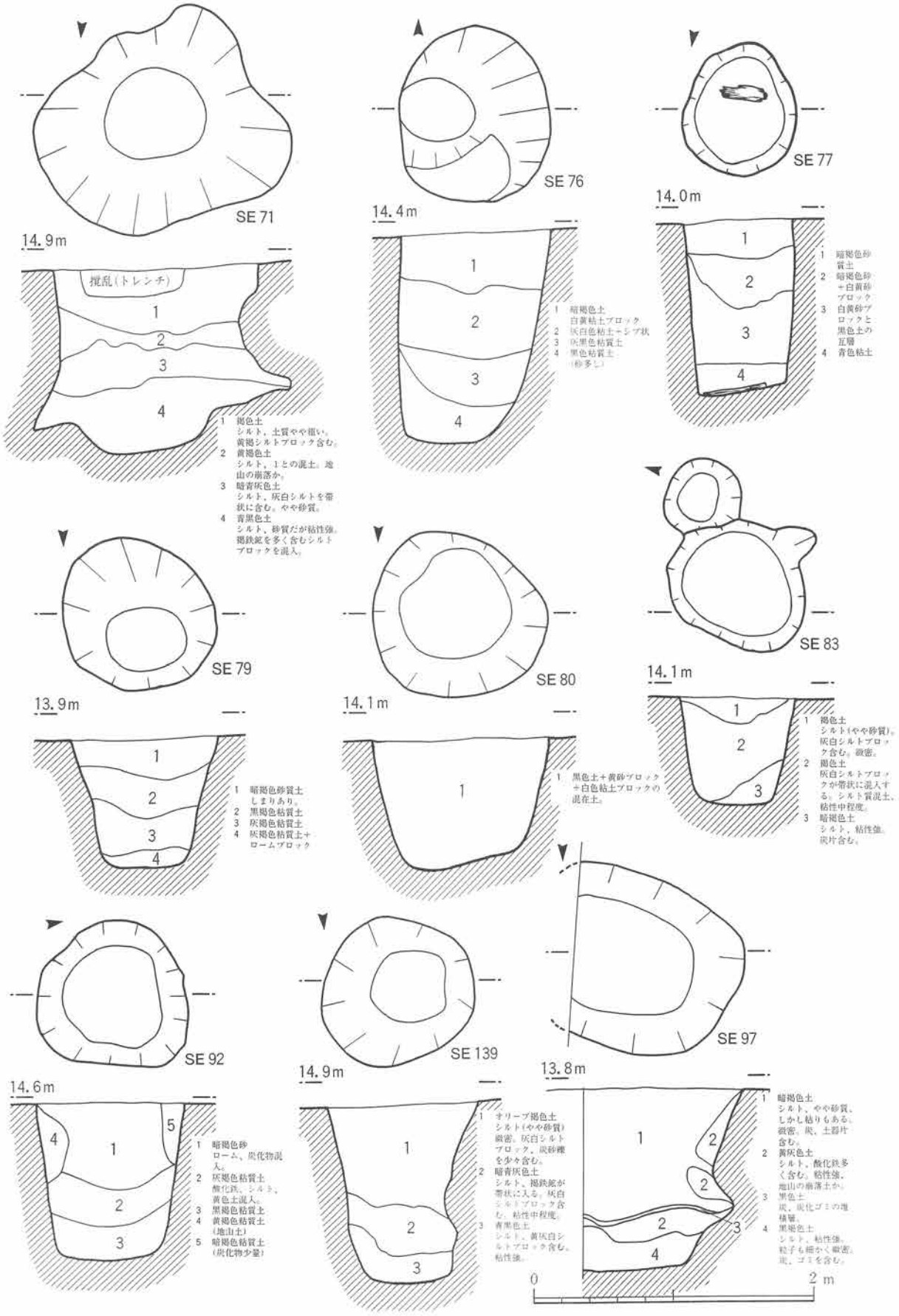
1　暗褐色砂質土
　一部、地山ブロック混入
2　暗褐色粘質土
　シルト、ブロック混入
3　黒褐色粘質土

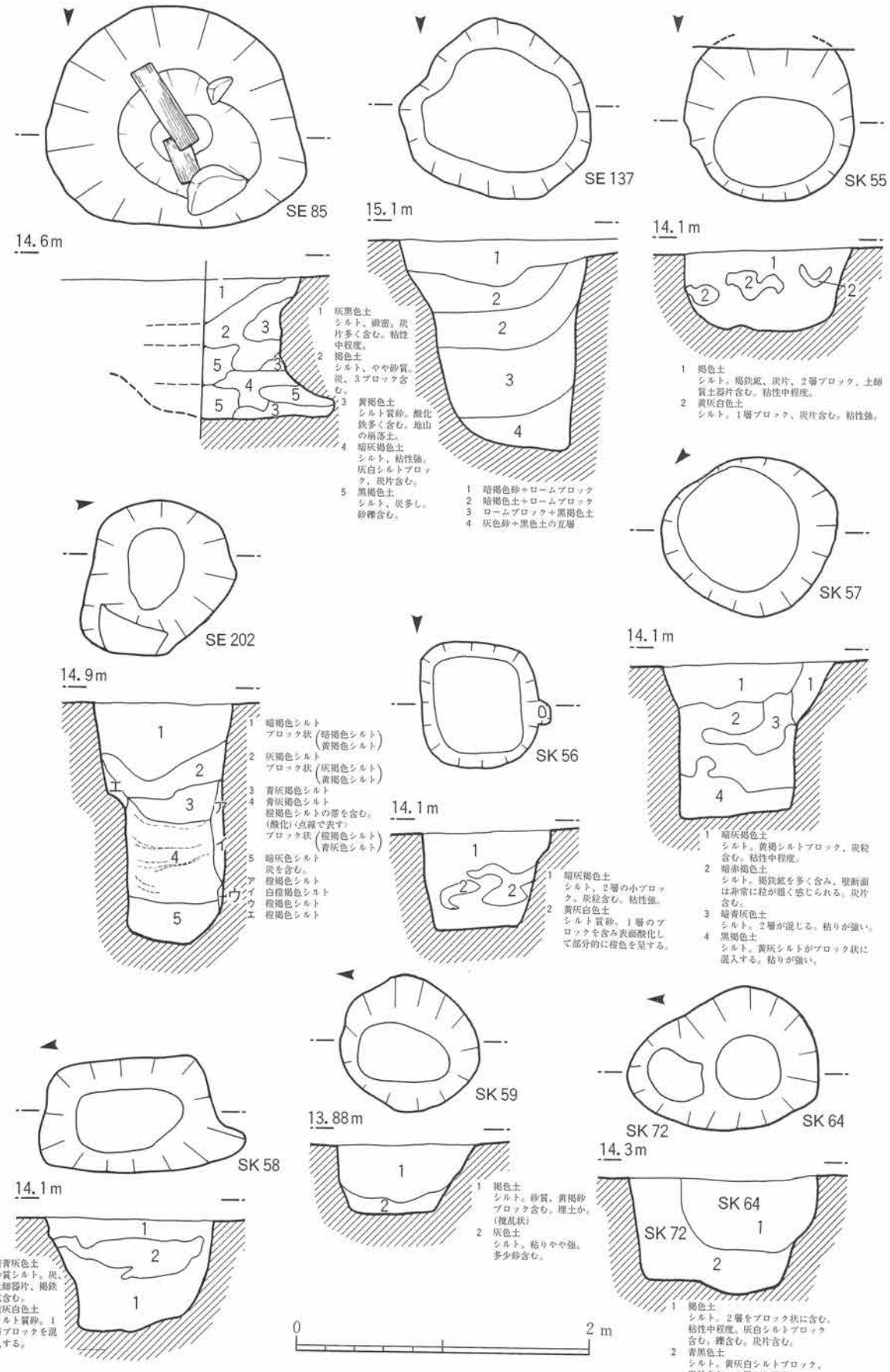


1　暗褐色土
　シルト、砂粒を少量含むが緻密な土質。黄灰白シルトブロックを極く少量含む。粘性は中程度。

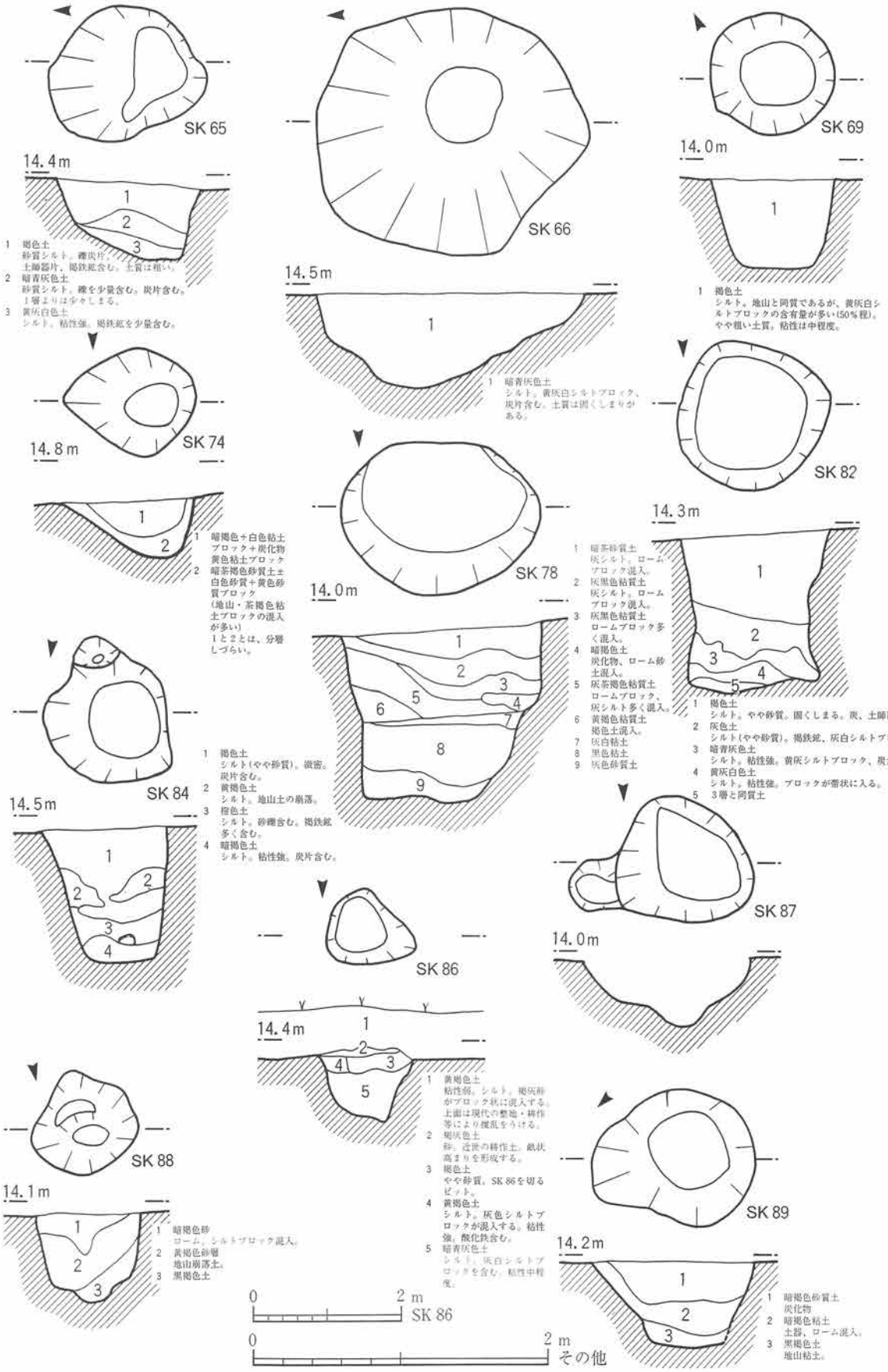
0　2 m

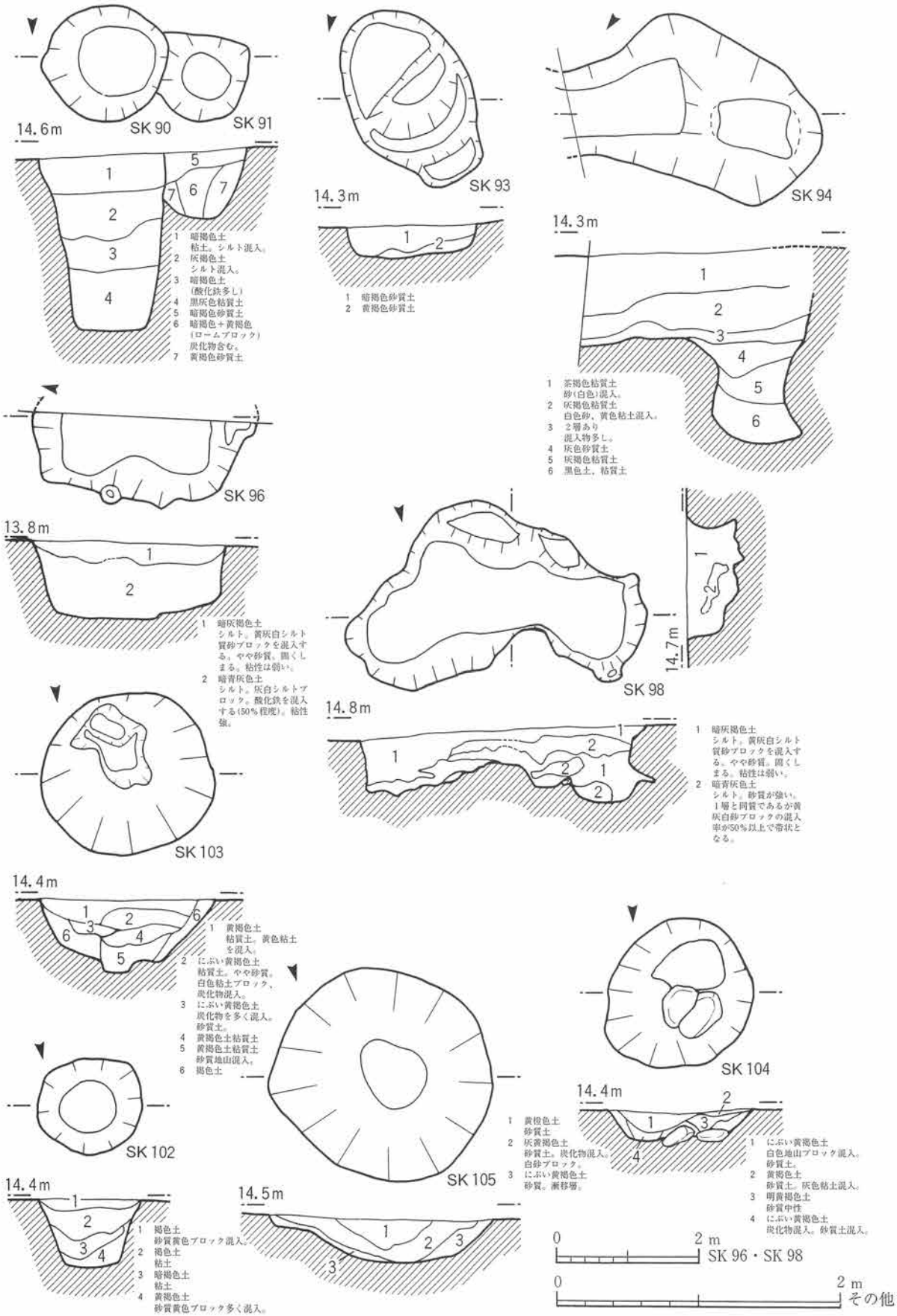
Ⅲ層下面遺構実測図2（鉄3　SE）



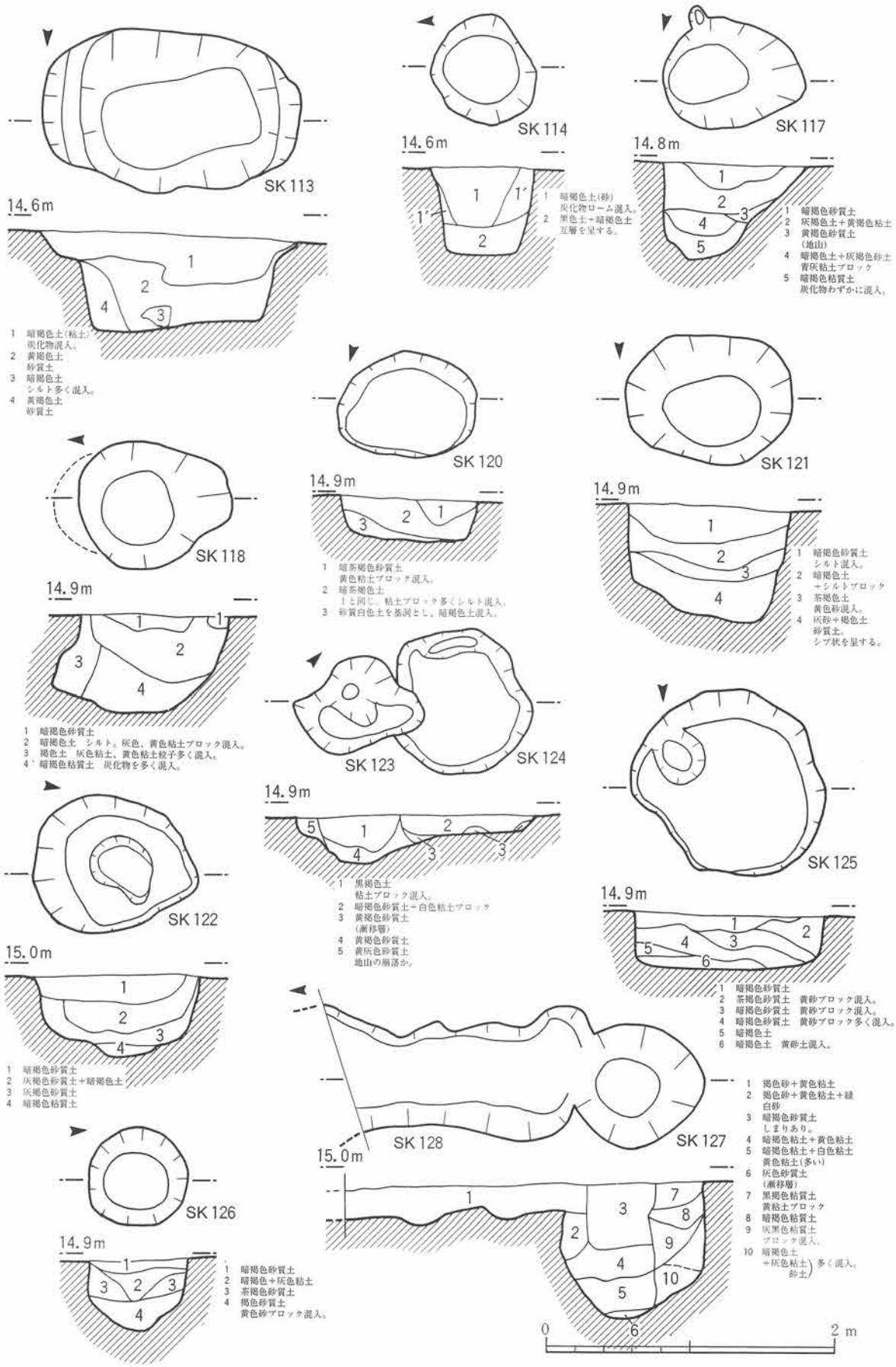

SE 85
14.6m
1 灰黒色土
シルト、緻密。炭片多く含む。粘性中程度。
2 褐色土
シルト、やや砂質。炭、3ブロック含む。
3 黄褐色土
シルト質砂。酸化鉄多く含む。地山の崩落土。
4 暗灰褐色土
シルト、粘性強。灰白シルトブロック、炭片含む。
5 黒褐色土
シルト、炭多し。砂礫含む。
SE 137
15.1m
1 暗褐色砂＋ロームブロック
2 暗褐色土＋ロームブロック
3 ロームブロック＋黒褐色土
4 灰色砂＋黒色土の互層
SK 55
14.1m
1 褐色土
シルト。褐鉄鉱、炭片、2層ブロック、土師質土器片含む。粘性中程度。
2 黄灰白色土
シルト。1層ブロック、炭片含む。粘性強。
SE 202
SK 56
14.1m
1 暗灰褐色土
シルト、2層の小ブロック。炭粒含む。粘性強。
2 黄灰白色土
シルト質砂。1層のブロックを含み表面酸化して部分的に橙色を呈する。
SK 57
14.1m
1 暗灰褐色土
シルト。黄褐シルトブロック、炭粒含む。粘性中程度。
2 暗赤褐色土
シルト。褐鉄鉱を多く含み、壁断面は非常に粒が粗く感じられる。炭片含む。
3 暗青灰色土
シルト。2層が混じる。粘りが強い。
4 黒褐色土
シルト。黄灰シルトがブロック状に混入する。粘りが強い。
14.9m
1 暗褐色シルト
ブロック状（暗褐色シルト／黄褐色シルト）
2 灰褐色シルト
ブロック状（灰褐色シルト／黄褐色シルト）
3 青灰褐色シルト
4 青灰褐色シルト
橙褐色シルトの帯を含む。（酸化）点線で表す。
ブロック状（橙褐色シルト／青灰色シルト）
5 暗灰色シルト
炭を含む。
ア 橙褐色シルト
イ 白橙褐色シルト
ウ 橙褐色シルト
エ 橙褐色シルト
SK 58
14.1m
1 暗青灰色土
砂質シルト。炭、土師器片、褐鉄鉱含む。
2 黄灰白色土
シルト質砂。1層ブロックを混入する。
SK 59
13.88m
1 褐色土
シルト。砂質、黄褐砂ブロック含む。埋土か。（撹乱状）
2 灰色土
シルト。粘りやや強。多少砂含む。
SK 72
SK 64
14.3m
1 褐色土
シルト。2層をブロック状に含む。粘性中程度。灰白シルトブロック含む。礫含む。炭片含む。
2 青黒色土
シルト。黄灰白シルトブロック、炭粒含む。1層より緻密。
0
2 m

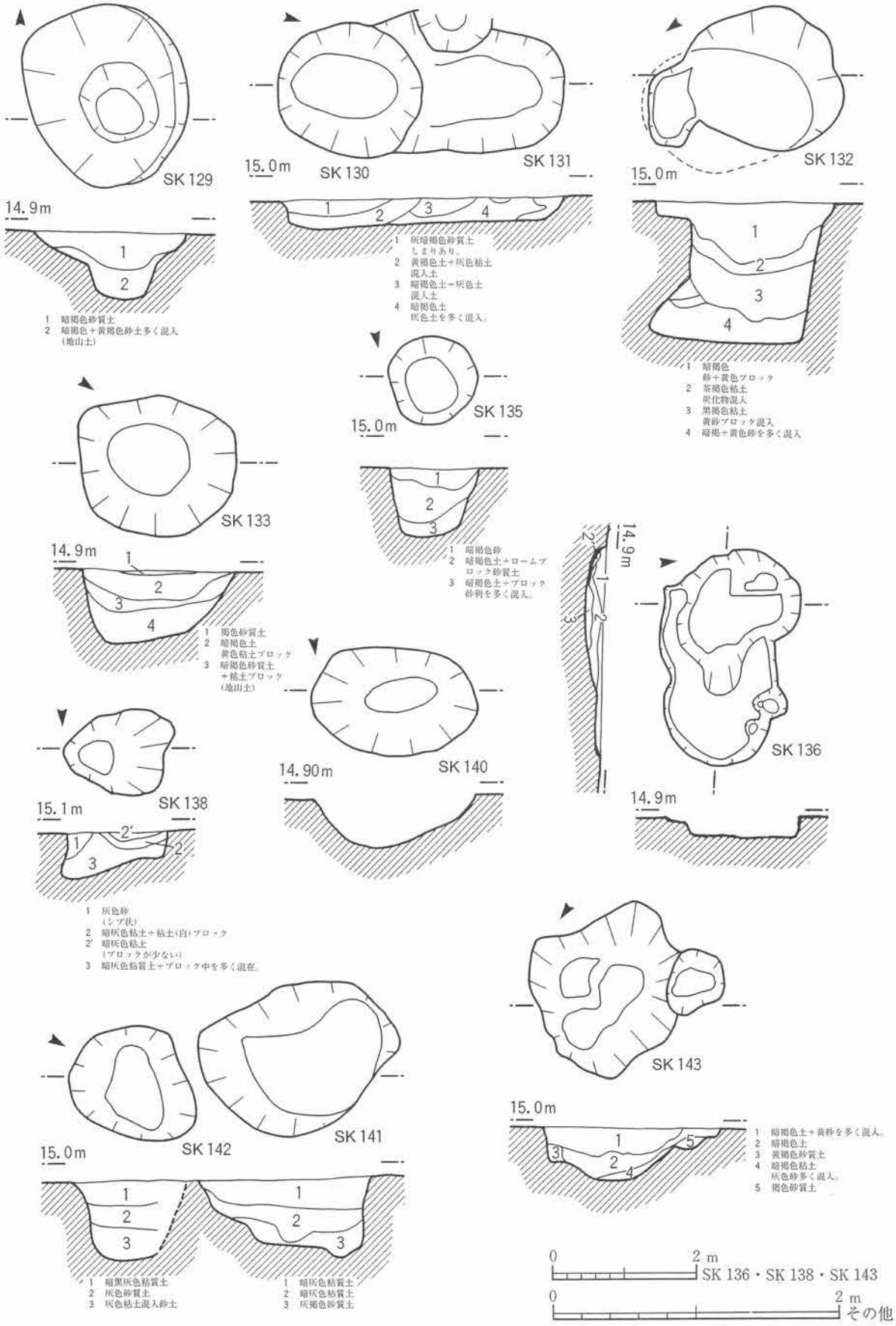
Ⅲ層下面遺構実測図４（鉄３　SK）



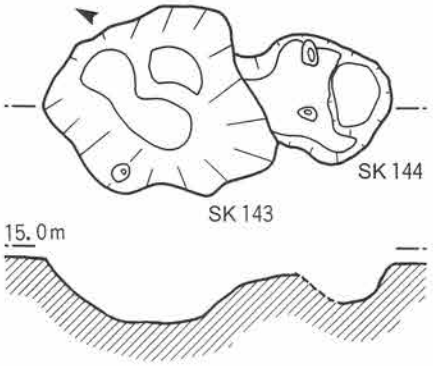

SK 90
SK 91
14.6m
1 暗褐色土 粘土。シルト混入。
2 灰褐色土 シルト混入。
3 暗褐色土 (酸化鉄多し)
4 黒灰色粘質土
5 暗褐色砂質土
6 暗褐色＋黄褐色 (ロームブロック) 炭化物含む。
7 黄褐色砂質土
SK 93
14.3m
1 暗褐色砂質土
2 黄褐色砂質土
SK 94
14.3m
1 茶褐色粘質土 砂(白色)混入。
2 灰褐色粘質土 白色砂，黄色粘土混入。
3 2層あり 混入物多し。
4 灰色砂質土
5 灰褐色粘質土
6 黒色土，粘質土
SK 96
13.8m
1 暗灰褐色土 シルト。黄灰白シルト質砂ブロックを混入する。やや砂質。固くしまる。粘性は弱い。
2 暗青灰色土 シルト。灰白シルトブロック。酸化鉄を混入する(50%程度)。粘性強。
SK 98
14.7m
14.8m
1 暗灰褐色土 シルト。黄灰白シルト質砂ブロックを混入する。やや砂質。固くしまる。粘性は弱い。
2 暗青灰色土 シルト。砂質が強い。1層と同質であるが黄灰白砂ブロックの混入率が50%以上で帯状となる。
SK 103
14.4m
1 黄褐色土 粘質土。黄色粘土を混入。
2 にぶい黄褐色土 粘質土。やや砂質。白色粘土ブロック，炭化物混入。
3 にぶい黄褐色土 炭化物を多く混入。砂質土。
4 黄褐色土粘質土
5 黄褐色土粘質土 砂質地山混入。
6 褐色土
SK 102
14.4m
1 褐色土 砂質黄色ブロック混入。
2 褐色土 粘土
3 暗褐色土 粘土
4 黄褐色土 砂質黄色ブロック多く混入。
SK 105
14.5m
1 黄橙色土 砂質土
2 灰黄褐色土 砂質土。炭化物混入。白砂ブロック。
3 にぶい黄褐色土 砂質。漸移層。
SK 104
14.4m
1 にぶい黄褐色土 白色地山ブロック混入。砂質土。
2 黄褐色土 砂質土。灰色粘土混入。
3 明黄褐色土 砂質中性
4 にぶい黄褐色土 炭化物混入。砂質土混入。
0 2 m
SK 96・SK 98
0 2 m
その他

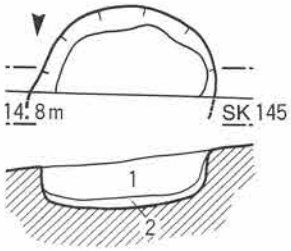
Ⅲ層下面遺構実測図６（鉄３　SK）



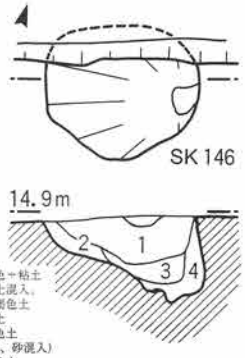

SK 129
14.9m
1 暗褐色砂質土
2 暗褐色＋黄褐色砂土多く混入
（地山土）
15.0m
SK 130
SK 131
1 灰暗褐色砂質土
しまりあり。
2 黄褐色土＋灰色粘土
混入土
3 暗褐色土＋灰色土
混入土
4 暗褐色土
灰色土を多く混入。
15.0m
SK 132
1 暗褐色
砂＋黄色ブロック
2 茶褐色粘土
炭化物混入
3 黒褐色粘土
黄砂ブロック混入
4 暗褐＋黄色砂を多く混入
SK 133
14.9m
1 褐色砂質土
2 暗褐色土
黄色粘土ブロック
3 暗褐色砂質土
＋粘土ブロック
（地山土）
15.0m
SK 135
1 暗褐色砂
2 暗褐色土＋ローム
ブロック砂質土
3 暗褐色土＋ブロック
砂利を多く混入。
14.9m
SK 136
14.9m
SK 138
15.1m
1 灰色砂
（シブ状）
2 暗灰色粘土＋粘土(白)ブロック
2′ 暗灰色粘土
（ブロックが少ない）
3 暗灰色粘質土＋ブロック中を多く混在。
14.90m
SK 140
SK 143
15.0m
1 暗褐色土＋黄砂を多く混入。
2 暗褐色土
3 黄褐色砂質土
4 暗褐色粘土
灰色砂多く混入。
5 褐色砂質土
SK 142
SK 141
15.0m
1 暗黒灰色粘質土
2 灰色砂質土
3 灰色粘土混入砂土
1 暗灰色粘質土
2 暗灰色粘質土
3 灰褐色砂質土
0 2 m
SK 136・SK 138・SK 143
0 2 m
その他

Ⅲ層下面遺構実測図８（鉄３　SK）

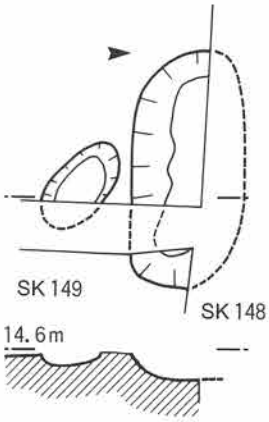


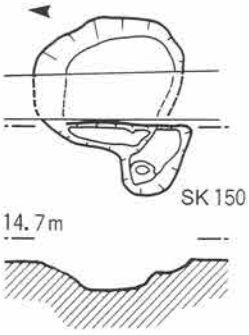


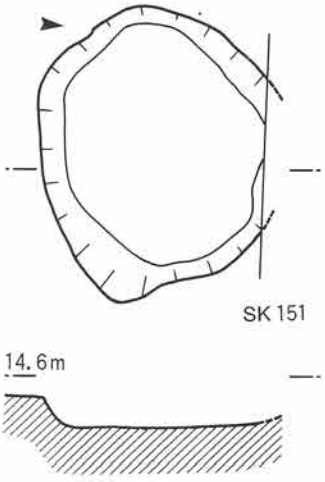
1　灰褐色シルト
　（砂質）
2　灰褐色砂質土

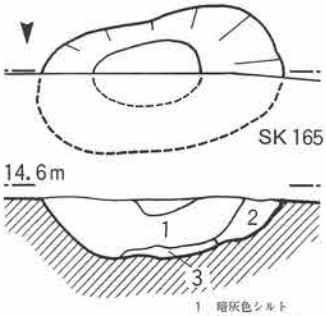


1　暗褐色～粘土
　黄色土混入。
2　灰暗褐色土
　砂質土
3　灰黒色土
　（粘土、砂混入）
4　灰黒色土
　（粘土、砂多く混入）

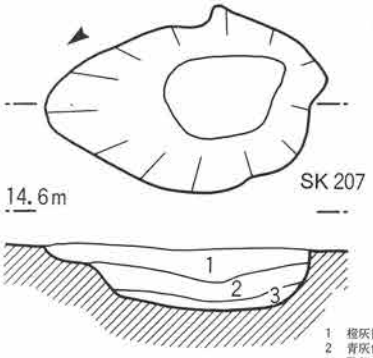




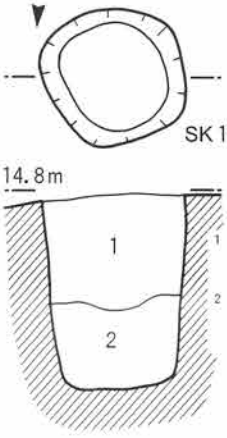




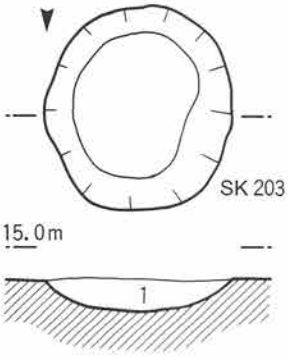
1　暗灰色シルト
　褐色シルトのブロック、暗褐色シルトの斑点を含む。
2　灰褐色シルト
　明橙褐色砂のブロックを含む。
3　灰色～橙褐色（まばら状）砂
　１層の暗灰色シルトのブロックを含む。



1　橙灰褐色シルト
2　青灰色シルト
　酸部分あり。
3　青灰色シルト
　炭含む。



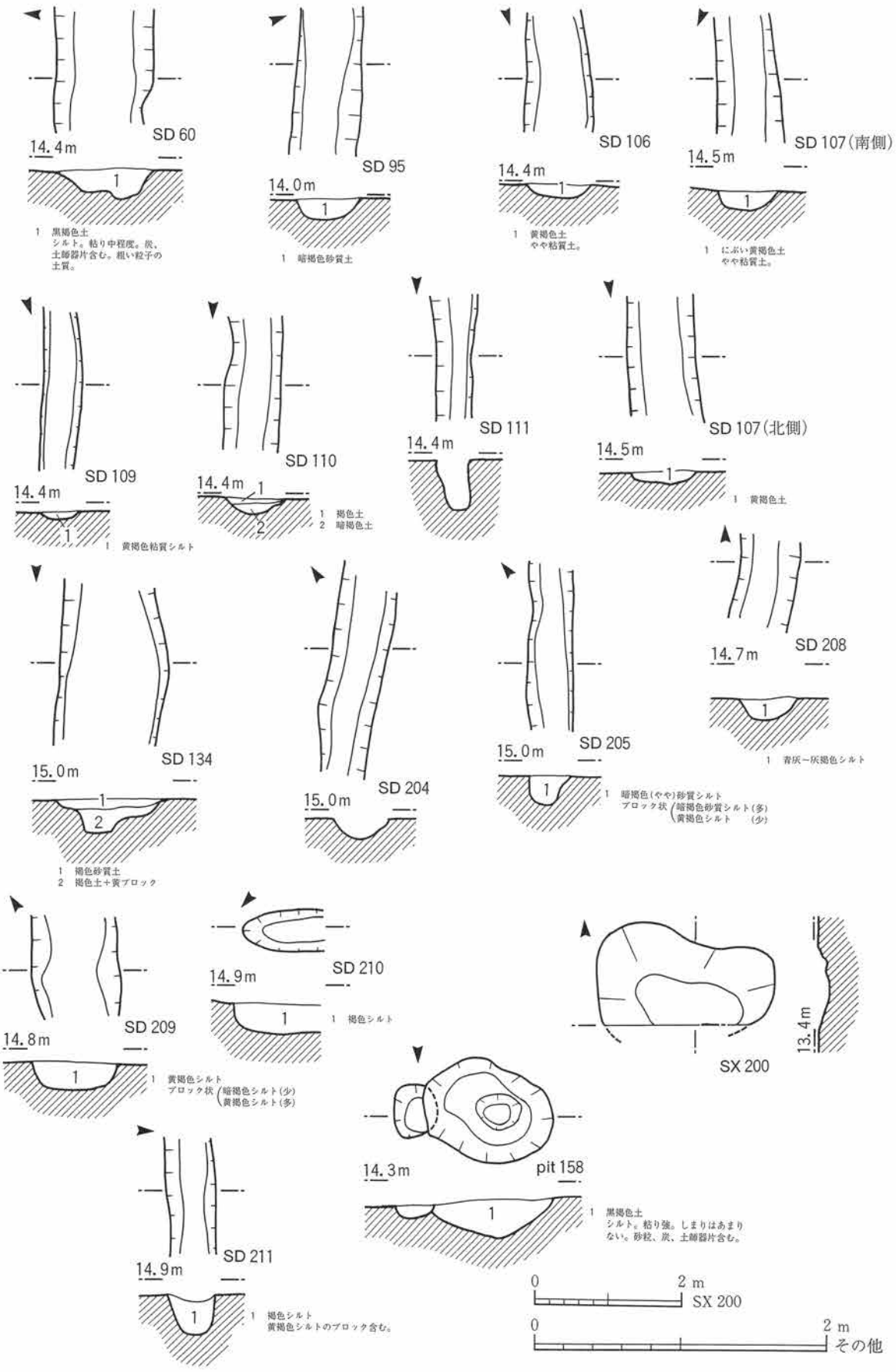
1　灰褐色シルト
　黄褐シルト質砂ブロック含む。土質は緻密である。
2　青黒色シルト
　黄灰白シルトブロック、褐鉄鉱含む。粘性強。

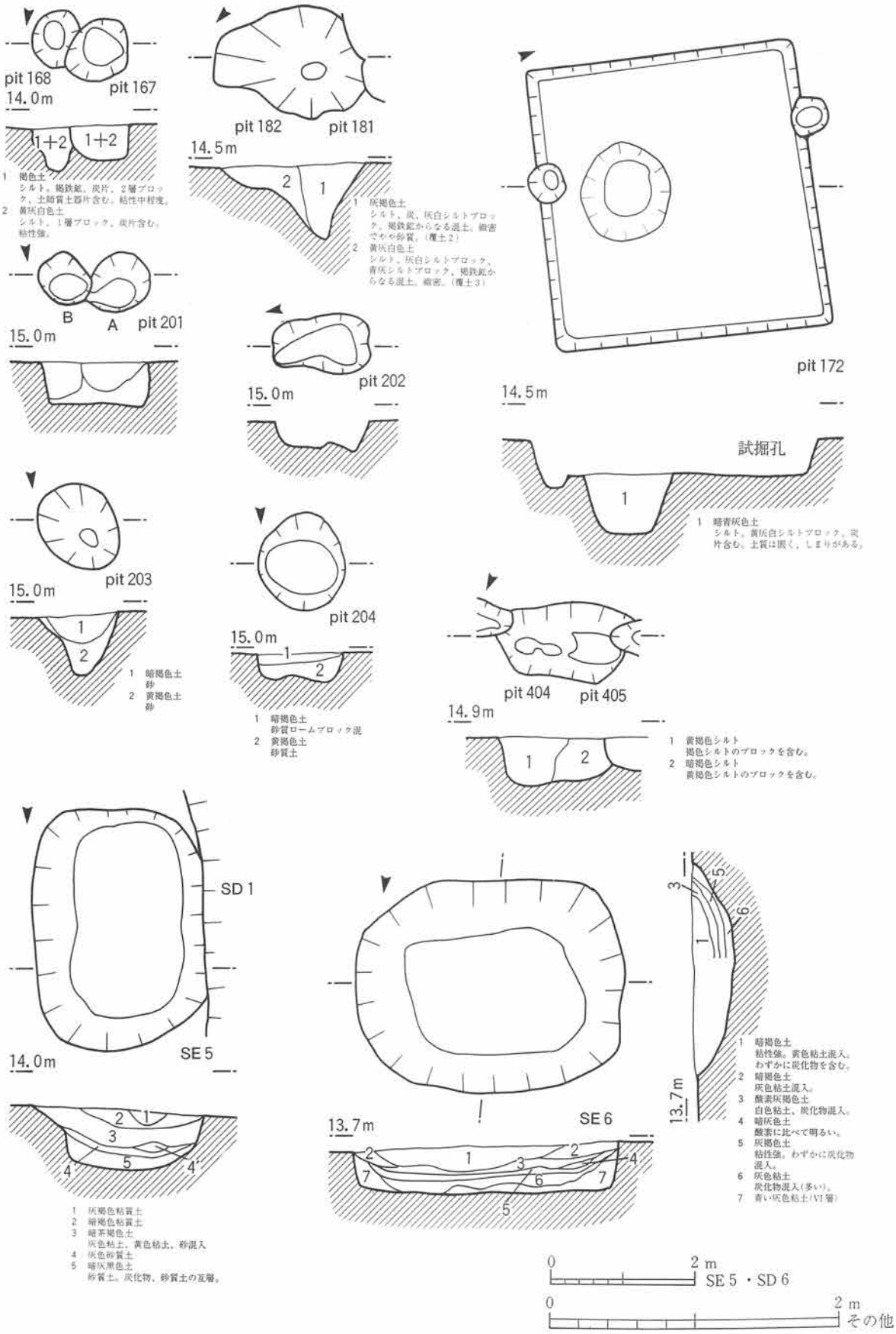


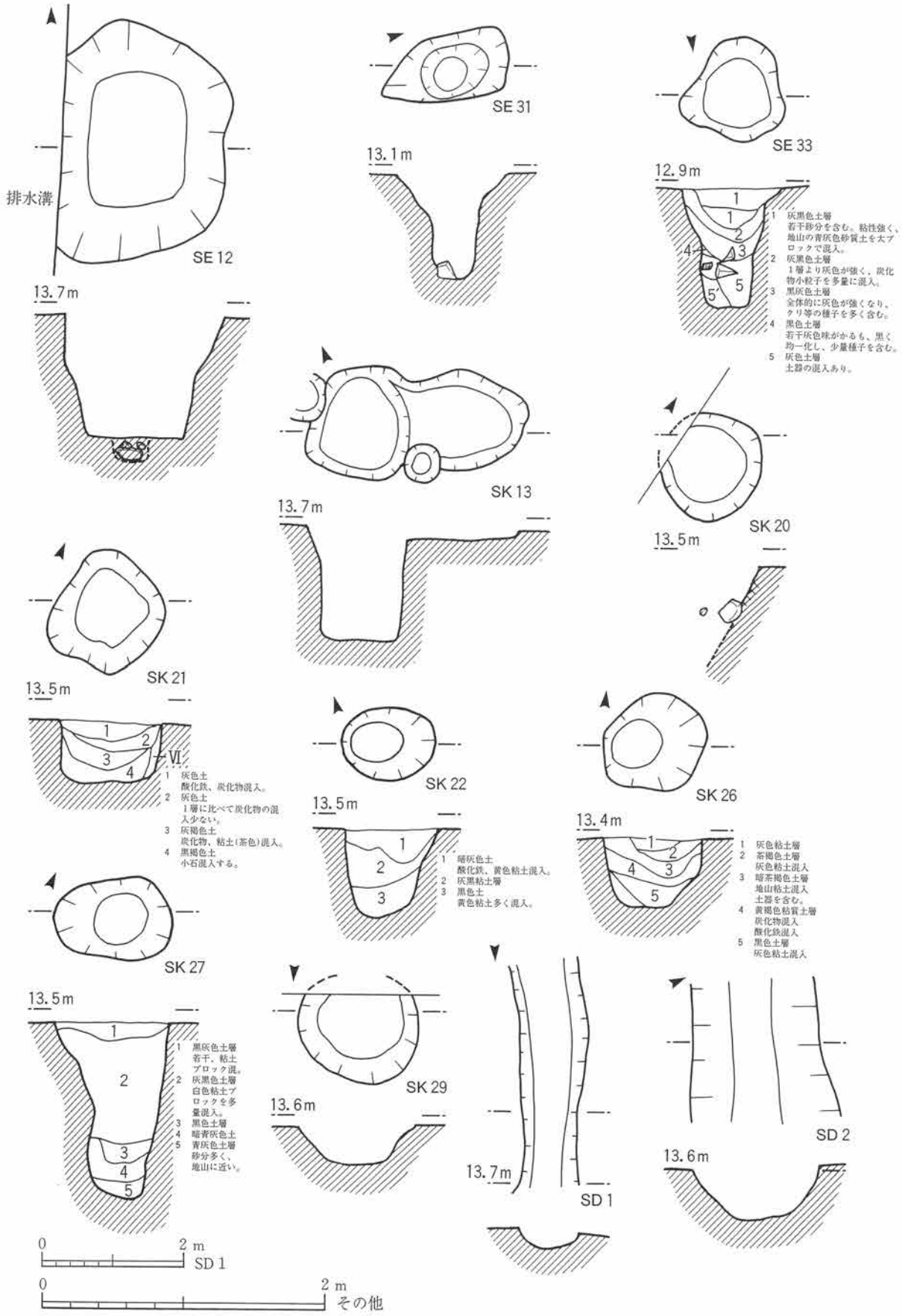
1　暗黄褐色シルト
　ブロック状（暗褐色シルト
　　黄褐色シルト）

0　2 m　SK 144・SK 146・SK 148・SK 150・SK 151

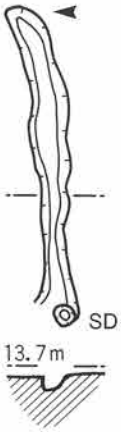
0　2 m　その他

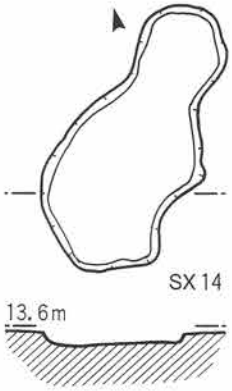

SD 60
14.4m
1　黒褐色土
シルト。粘り中程度。炭、土師器片含む。粗い粒子の土質。
SD 95
14.0m
1　暗褐色砂質土
SD 106
14.4m
1　黄褐色土
やや粘質土。
SD 107（南側）
14.5m
1　にぶい黄褐色土
やや粘質土。
SD 109
14.4m
1　黄褐色粘質シルト
SD 110
14.4m
1　褐色土
2　暗褐色土
SD 111
14.4m
SD 107（北側）
14.5m
1　黄褐色土
SD 134
15.0m
1　褐色砂質土
2　褐色土＋黄ブロック
SD 204
15.0m
SD 205
15.0m
1　暗褐色（やや）砂質シルト
ブロック状（暗褐色砂質シルト（多）
黄褐色シルト　（少））
SD 208
14.7m
1　青灰～灰褐色シルト
SD 209
14.8m
1　黄褐色シルト
ブロック状（暗褐色シルト（少）
黄褐色シルト（多））
SD 210
14.9m
1　褐色シルト
SX 200
13.4m
pit 158
14.3m
1　黒褐色土
シルト。粘り強。しまりはあまりない。砂粒、炭、土師器片含む。
SD 211
14.9m
1　褐色シルト
黄褐色シルトのブロック含む。
0　2 m
SX 200
0　2 m
その他

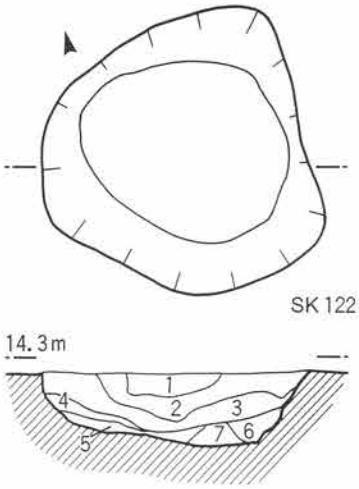

pit 168
pit 167
14.0m
1+2
1+2
1　褐色土
シルト。褐鉄鉱、炭片、２層ブロック、土師質土器片含む。粘性中程度。
2　黄灰白色土
シルト。１層ブロック、炭片含む。粘性強。
pit 182
pit 181
14.5m
2
1
1　灰褐色土
シルト、炭、灰白シルトブロック、褐鉄鉱からなる混土。緻密ややや砂質。（覆土２）
2　黄灰白色土
シルト、灰白シルトブロック、青灰シルトブロック、褐鉄鉱からなる混土。緻密。（覆土３）
B
A
pit 201
15.0m
pit 202
15.0m
pit 172
14.5m
試掘孔
1
1　暗青灰色土
シルト。黄灰白シルトブロック、炭片含む。土質は固く、しまりがある。
pit 203
15.0m
1
2
1　暗褐色土
砂
2　黄褐色土
砂
pit 204
15.0m
1
2
1　暗褐色土
砂質ロームブロック混
2　黄褐色土
砂質土
pit 404
pit 405
14.9m
1
2
1　黄褐色シルト
褐色シルトのブロックを含む。
2　暗褐色シルト
黄褐色シルトのブロックを含む。
SD 1
SE 5
14.0m
2
1
3
4
5
4'
1　灰褐色粘質土
2　暗褐色粘質土
3　暗茶褐色土
灰色粘土、黄色粘土、砂混入
4　灰色砂質土
5　暗灰黒色土
砂質土。炭化物、砂質土の互層。
SE 6
13.7m
2
1
3
2
4
7
6
7
5
3
5
6
1
13.7m
1　暗褐色土
粘性強。黄色粘土混入。わずかに炭化物を含む。
2　暗褐色土
灰色粘土混入。
3　酸素灰褐色土
白色粘土、炭化物混入。
4　暗灰色土
酸素に比べて明るい。
5　灰褐色土
粘性強。わずかに炭化物混入。
6　灰色粘土
炭化物混入（多い）。
7　青い灰色粘土（Ⅵ層）
0
2 m
SE 5 ・SD 6
0
2 m
その他


排水溝
SE 12
13.7m
SE 31
13.1m
SE 33
12.9m
1 灰黒色土層
若干砂分を含む。粘性強く、地山の青灰色砂質土を大ブロックで混入。
2 灰黒色土層
1層より灰色が強く、炭化物小粒子を多量に混入。
3 黒灰色土層
全体的に灰色が強くなり、クリ等の種子を多く含む。
4 黒色土層
若干灰色味がかるも、黒く均一化し、少量種子を含む。
5 灰色土層
土器の混入あり。
SK 13
13.7m
SK 20
13.5m
SK 21
13.5m
1 灰色土
酸化鉄、炭化物混入。
2 灰色土
1層に比べて炭化物の混入少ない。
3 灰褐色土
炭化物、粘土（茶色）混入。
4 黒褐色土
小石混入する。
Ⅵ
SK 22
13.5m
1 暗灰色土
酸化鉄、黄色粘土混入。
2 灰黒粘土層
3 黒色土
黄色粘土多く混入。
SK 26
13.4m
1 灰色粘土層
2 茶褐色土層
灰色粘土混入
3 暗茶褐色土層
地山粘土混入
土器を含む。
4 黄褐色粘質土層
炭化物混入
酸化鉄混入
5 黒色土層
灰色粘土混入
SK 27
13.5m
1 黒灰色土層
若干、粘土ブロック混。
2 灰黒色土層
白色粘土ブロックを多量混入。
3 黒色土層
4 暗青灰色土
5 青灰色土層
砂分多く、地山に近い。
SK 29
13.6m
SD 1
13.7m
SD 2
13.6m
0
2 m
SD 1
0
2 m
その他

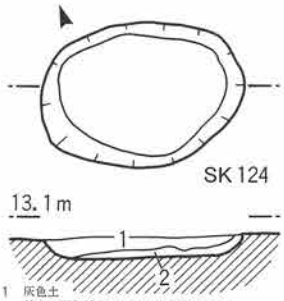
Ⅲ層下面遺構実測図12(CB8　SD・SX、鉄1・2　SK・SD)





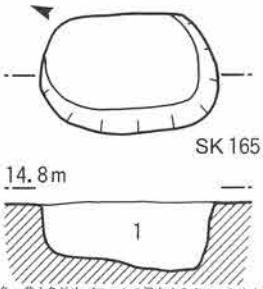


1　黒灰色土
黒色の粘質シルトに青灰色ブロック混入。
2　灰色土
上層と基本的に同じ。シルトブロックの量多い。
3　黒色土
粘質シルト、シルトブロック、炭化物粒、土器・木器等多い。やわらかく、粗い。
4　青灰色土
シルトブロックが主体を占め、黒色土が混入する。
5　灰色土
粘質シルト腐植土が多くを占める。
6　青灰色土
地山の青灰粘土ブロックの崩壊したもの。
7　6＋5
全体に緻密なのは、プレロードで圧されているため。木製品が割合出土している(曲物の底板等)。

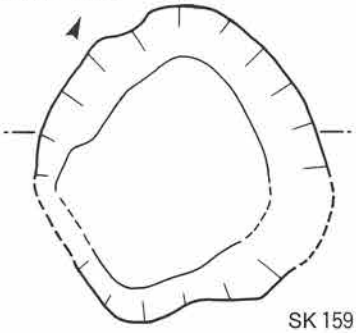


1　灰色土
粘土、灰色粘土ブロック炭化物、シルトブロック等が混在し、粗い面をみせる。
2　黒色土
粘土質シルト。2－10mmの炭化物を含み、灰白粘土ブロックを混入。

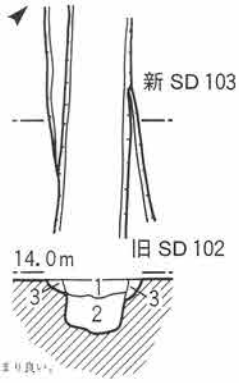
1　灰白色土
粘質シルト。1mm大の炭を含む地山の明灰白のシルトがシミ状に混入する。均質で緻密である。土師器片出土。



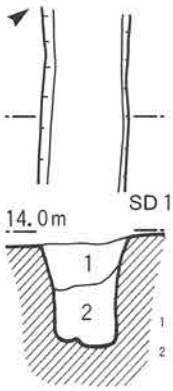
1　茶色、黄土色地山ブロックの混在するもの。シルト質である。一時的に堆積したもの。南にもう1つ似た形態の土坑があり堆積状況も同じ。それより5枚の古銭が重なって出土しており、墓と思われる。これも同じだろうか。



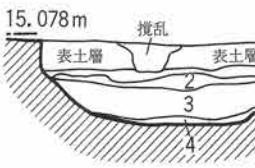
1　褐色土
粘性のあるシルト。灰色の粘土ブロックを少量(2％)含む。炭化物粒も若干みられて、やわらかく、しまりが弱い。
2　褐灰色土
1と灰色粘土質ブロックが混在する。
3　灰黄色土
粘質土ブロックが主体を占める。
4　灰色土
粘土、緻密でしまり良い。粘性強め。
2～4層は、一時的に堆積したものと考えられる。

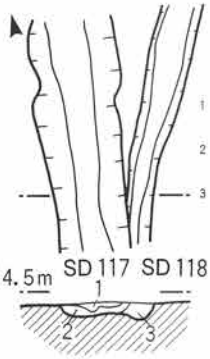


1　灰色土
緻密でしまり良い。
2　青灰色土
粘土。緻密でしまり良く、炭化物の粒子混入する。
3　SD 102、灰色粘土
粘土にⅥ層のブロック混入。炭化物もみられる。

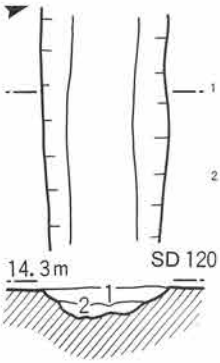


1　灰色土
緻密でしまり良い。
2　地山Ⅵ層ブロック混入する。

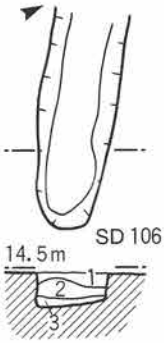




1　暗灰色土
粘土。緻密でしまり良い。炭化物粒少し混入。
2　灰色土
粘土。地山の灰白粘土少量混入。土師器混入。
3　灰色土
粘土。緻密でしまり良い。暗灰粘土が縞状に入る。



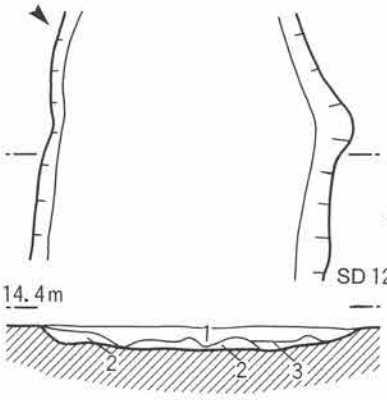
1　灰色土
粘質シルト。1mm程の炭化物の混入があって、灰白シルト粒の混入等、粗い感じを受ける。
2　明灰色土
粘質シルト。炭化物、土師器混在。灰白シルトブロックが混入し、粗い。



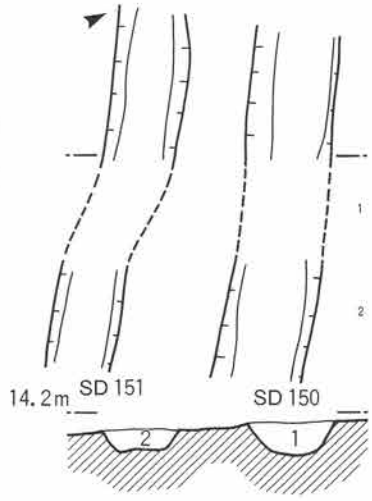
1　表土層
1層のSD108に含まれて、茶色のシルトを混在する。
2　灰色土
1－5mm大の炭化物を混入し小礫もみられる。粘質シルト－シルト質である。Ⅲ層に相当すると思われる。
3　灰色土
1層よりやや明るい。粘質土である。地山のⅥ層のブロックが混入する。撹り込みは浅いが、土師器・須恵器片を出土する。

0　2 m
SD 3・SX 14・SK 159・SD 106

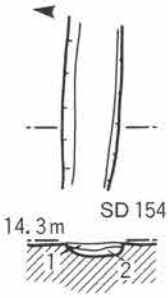
0　2 m
その他



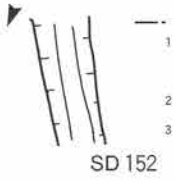
1　黒灰色土
粘質シルト。土師器、須恵器片出土。炭化物粒、小礫、灰色シルトが少量混入。
2　灰色土
粘質シルト。地山の灰色シルトがかるく混入する。いずれも硬さ、しまりともブレロードの圧力で。
3　暗灰色土
粘土。しまり良い。
炭化物粒混入。



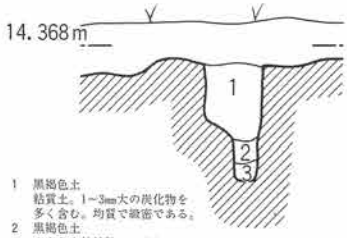
1　灰色土
10～20㎜大の灰色粘土粒と、地山のオレンジ灰のシルト土の混在したもの。全体が一時的に堆積したもの。
2　灰色土
灰色粘土とシルトの混在したもの。



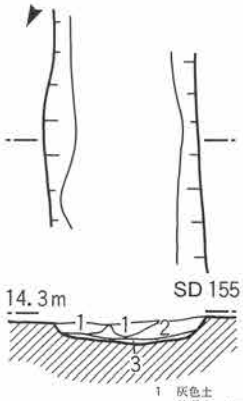
1　灰色土
粘土。炭化物粒多く、やや粘性ある。
2　明灰色土
粘土。緻密でしまり良い。



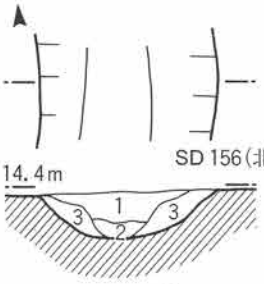
1　灰色土
粘土ブロック10～50㎜大が主体を占め、間をうめるようにシルトが入る。
2　灰白シルト
均一な土層面をみせる。
3　青灰シルト
ほとんど地山と区別できないが、炭化物が少量混入する。



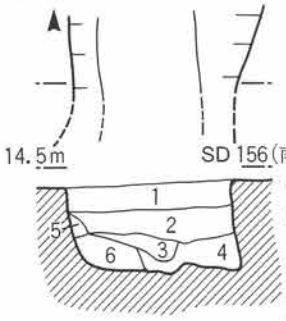
遺物は全く出土しないが、掘り込み面が上部のため新しいものと考えられる。



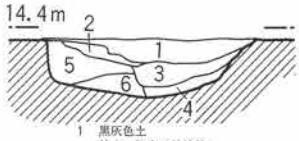
1　灰色土
粘質土。1㎜大の炭化物少量混入。地山明灰白シルト粒もみられる。
2　灰色土
1を主体に地山土の粒が多量に入る。粗いがブレロードのためか。
3　明灰白土
シルトブロック



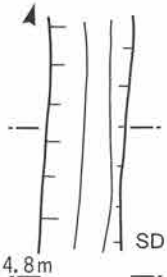
1　黒褐色土
粘質土。1～3㎜大の炭化物を多く含む。均質で緻密である。
2　黒褐色土
1よりも粘性強い。また、やや緻密であるが軟質である。
3　灰色土
粘質シルトを主体に地山の明灰白シルトを含む。



1　灰色土
耕作土。近代から古代までの遺物を含む。
2　黒褐色土
土師器等の出土から、平安時代の遺構と考えられる。
3　灰色土
4　灰黒色土
粘質も粗く、しまり弱い。
5　灰色土。しまり良い。
6　青灰～橙色シルト層



1　黒灰色土
粘土。緻密で粘性強い。
2　青灰色土
粘土。河川堆積のものか、線引きは困難。
3　1と2が混在
薄い互層をなす。青灰粘土がブロック状に入る。
4　青灰粘土ブロックと黒色粘土ブロックの混在するもの。
5　暗灰色土。粘質土
6　黒色土。粘質土

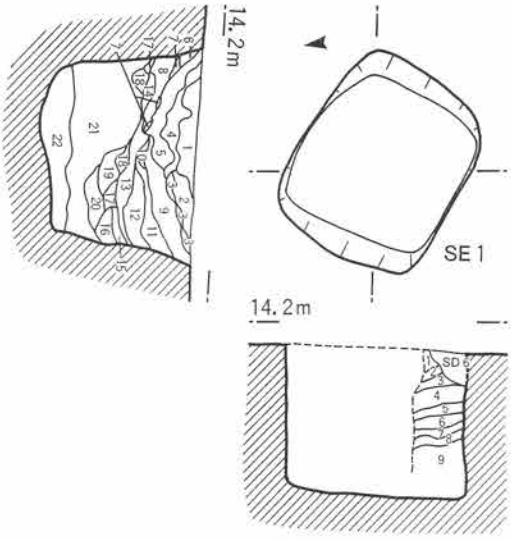


1　褐灰色土
シルト質。しまり弱く、やわらかい粘土ブロックが混入。
2　灰褐色土
粘土ブロック、シルトの混入。やわらかく、しまり弱い。

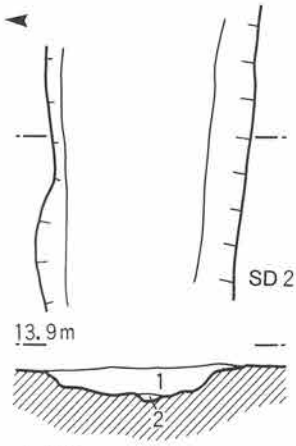
0　2 m
SX 119

0　2 m
その他

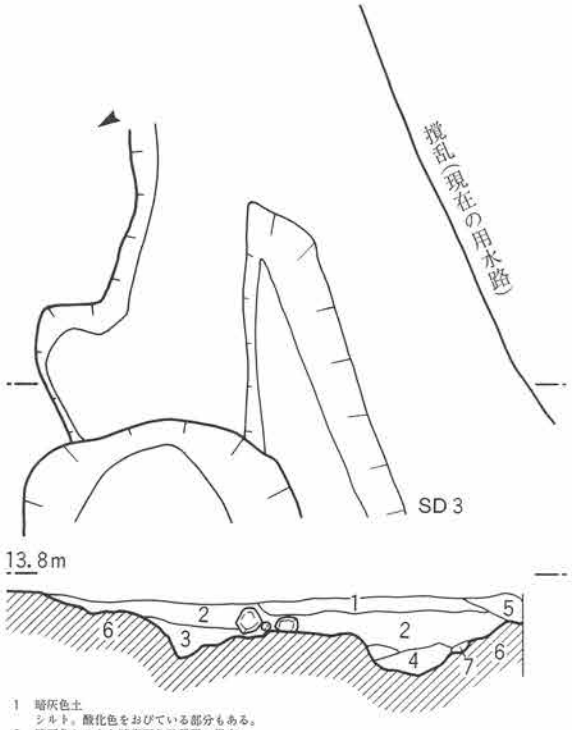
遺構実測図(鉄A　SE・SD)



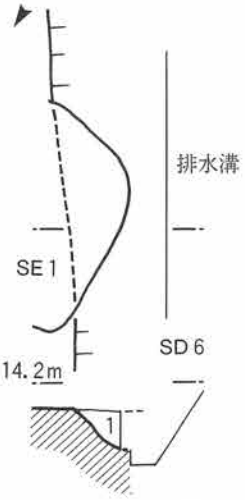
1　暗褐色土
　しまり弱く、粘性やや強い。
2　暗灰色砂質土
　しまり、粘性とも強い。
3　緑灰色シルト
　しまり強く、粘性弱い。
4　青灰色粘土
　しまり、粘性ともに強い。
5　青灰色粘土
　4層に類似するが、やや色調が明るい。
6　灰色シルト
　5層に類似するが、炭化物を少量まばらに含む。
7　青灰色シルト
　しまり、粘性ともに弱い。炭化物を含まない。
8　灰色シルト
　6層に類似するが、6層より炭化物を多く含む。
9　青灰色砂質土
　7層より粒子が粗い。



1　灰色土
　粘質シルト。シルトを基本に砂が混入する。15mm程の炭化物をはじめ土師器・須恵器を出土するが、いずれも細片である。しまりよく緻密である。
2　灰褐色土
　砂。全体にあるわけではないが、溝、底部には砂が多い。

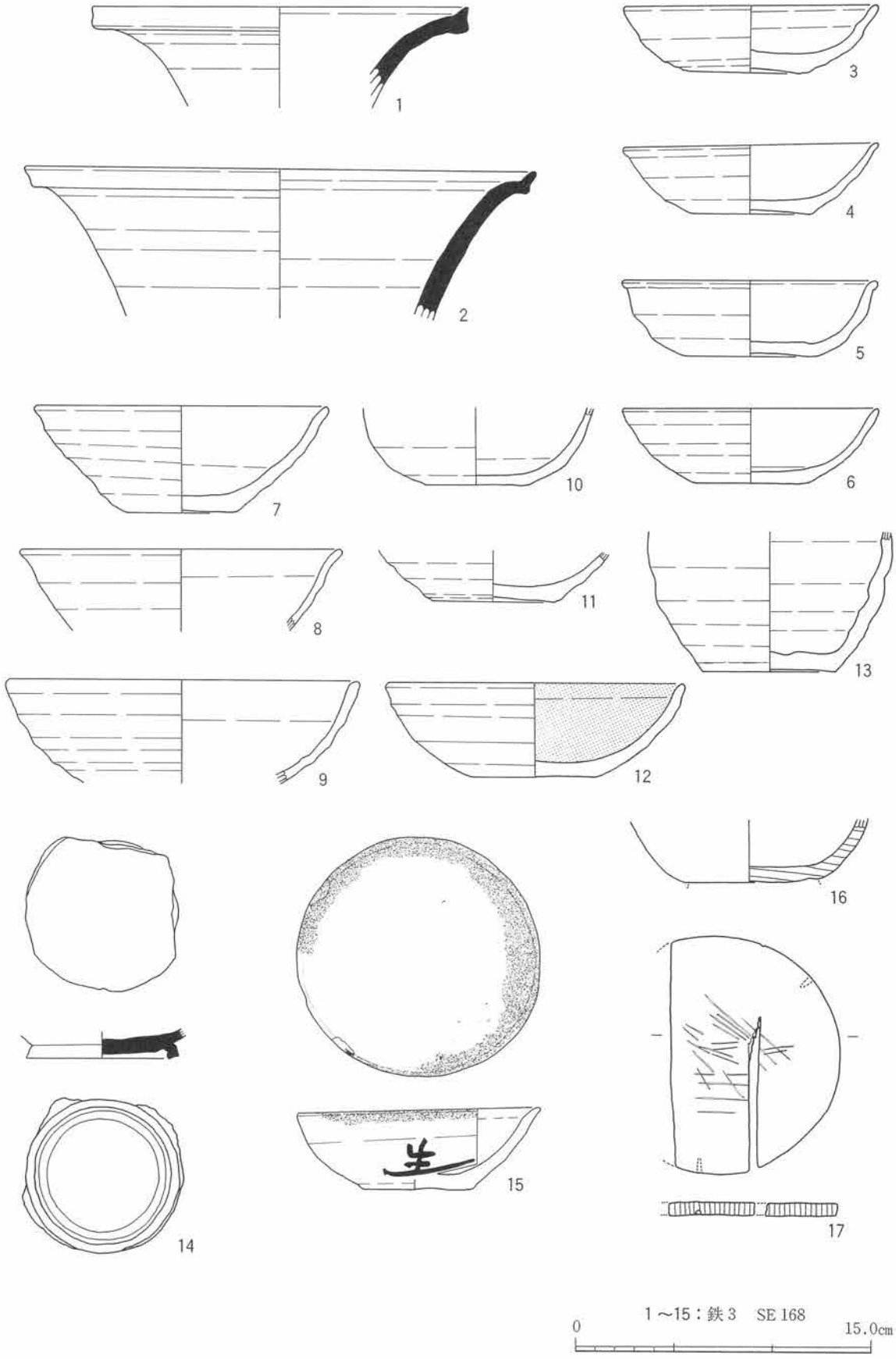


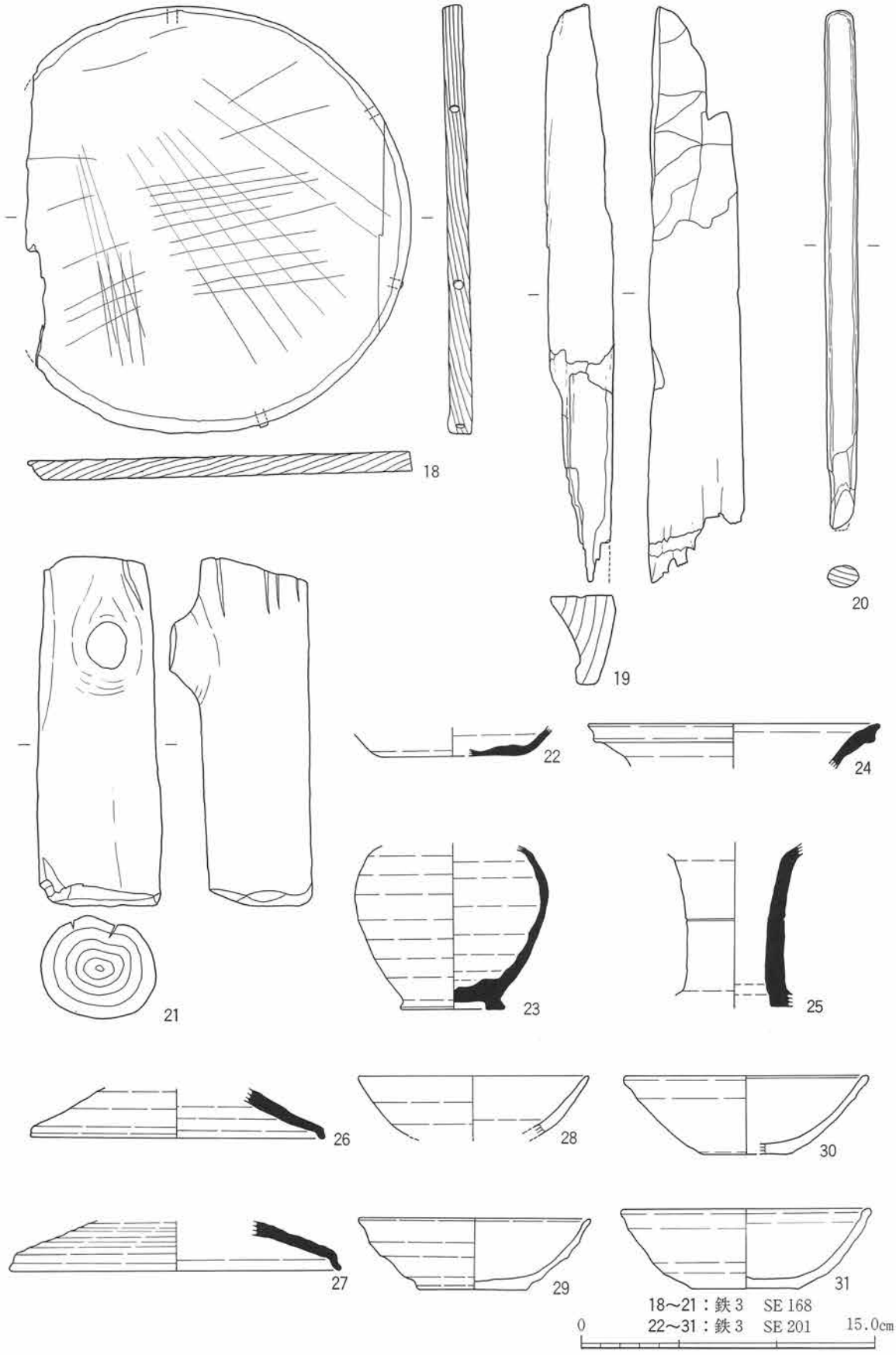
1　暗灰色土
　シルト。酸化色をおびている部分もある。
2　暗灰色シルトと暗青灰色砂質層の混合
　大きな石、小粒な炭化ブロックをまばらに含む。
3　暗灰色シルト(やや粗い)
　炭化物ブロックを含む。青灰色の砂も少量含む。
4　暗灰色シルトに青灰色砂質層、小粒(1mm)のジャリ、炭化物などの混合層。
5　暗青灰色粘土層
6　青灰色砂質層で部分的に酸化色をおび、小粒の炭化物ブロックが混じる。
7　灰色シルト

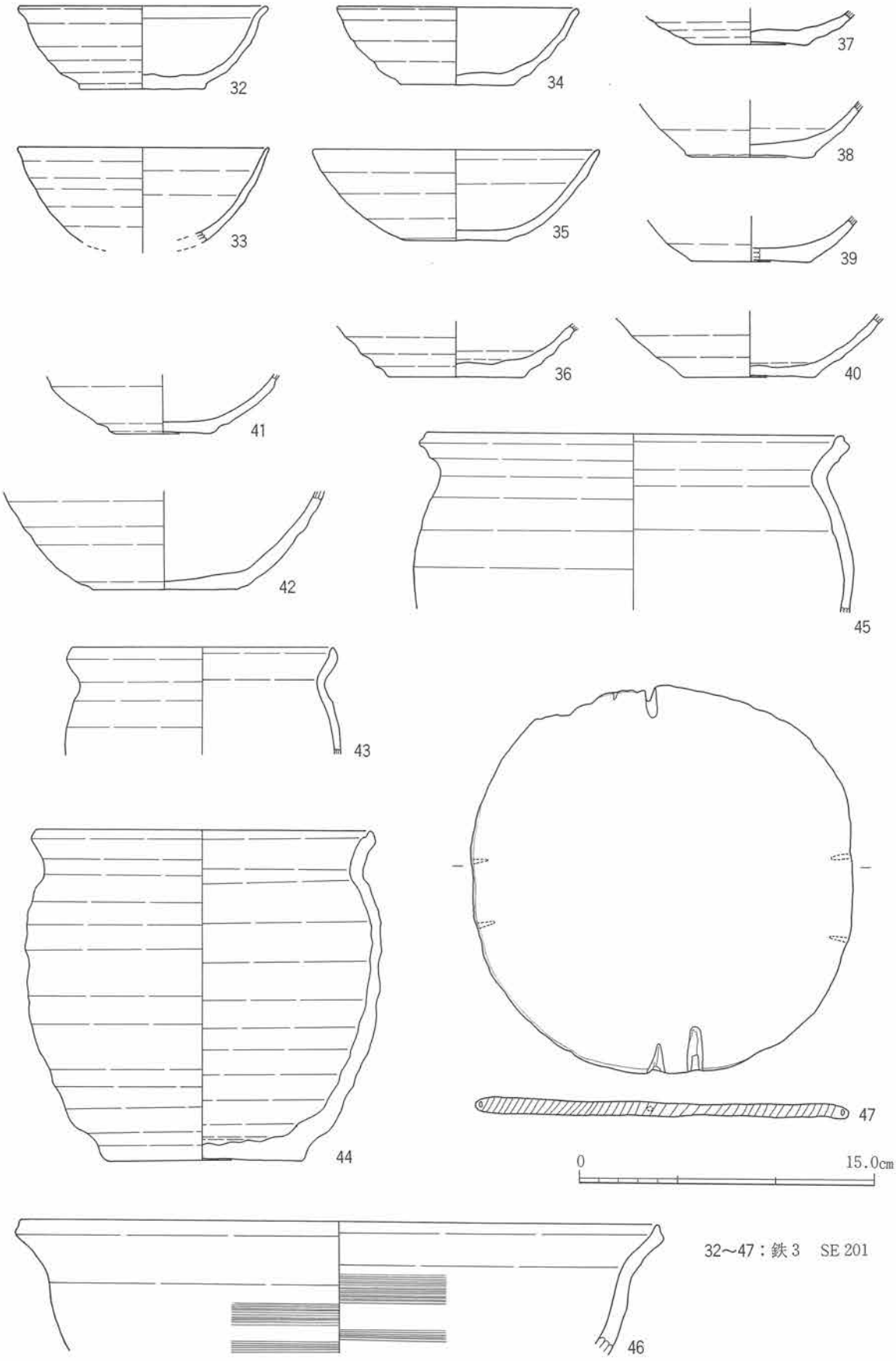


1　黒褐色粘質土と青灰色粘質土がブロック状に混じる。

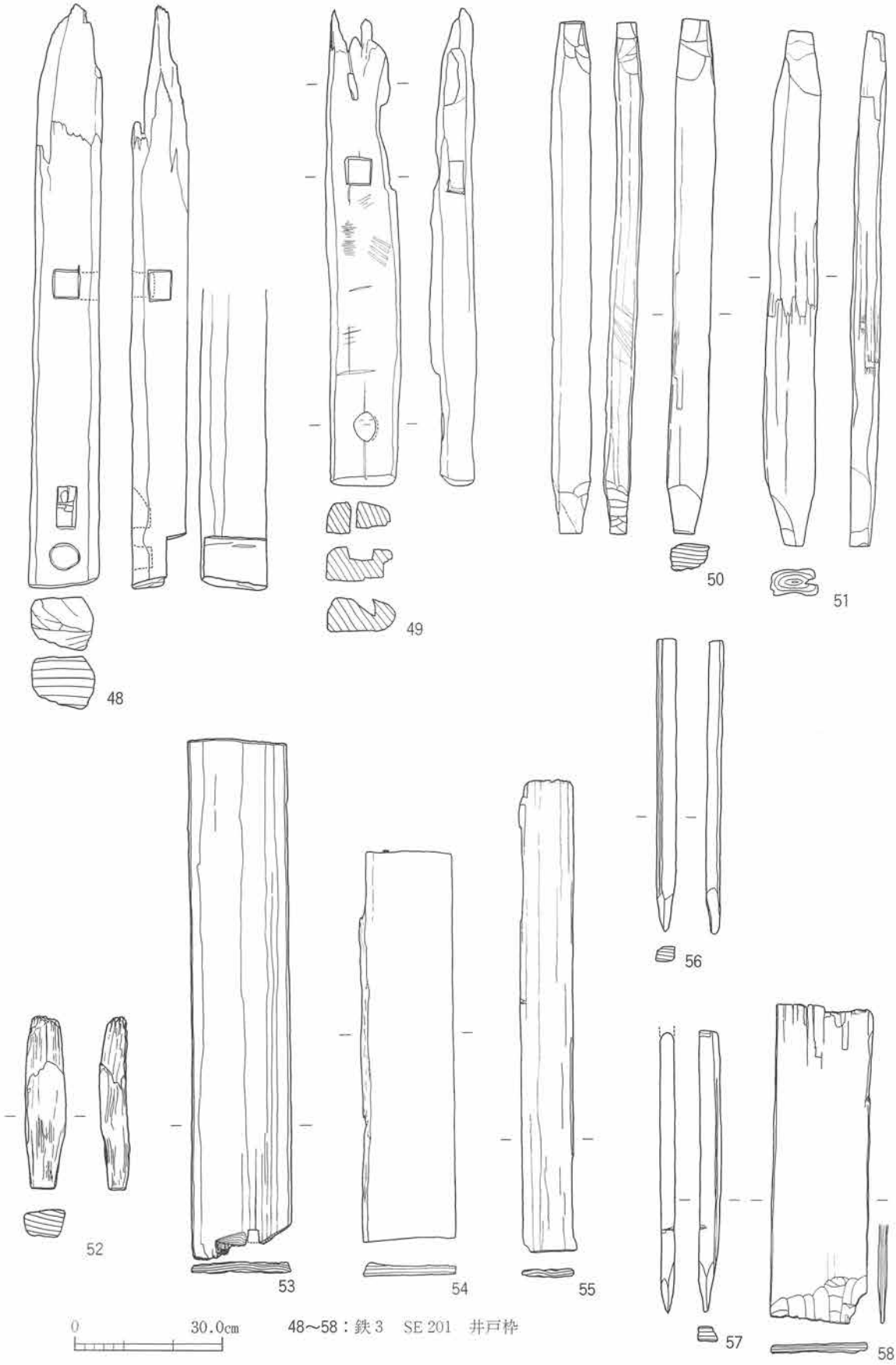
0　2 m


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
1～15：鉄３　SE 168
0
15.0cm

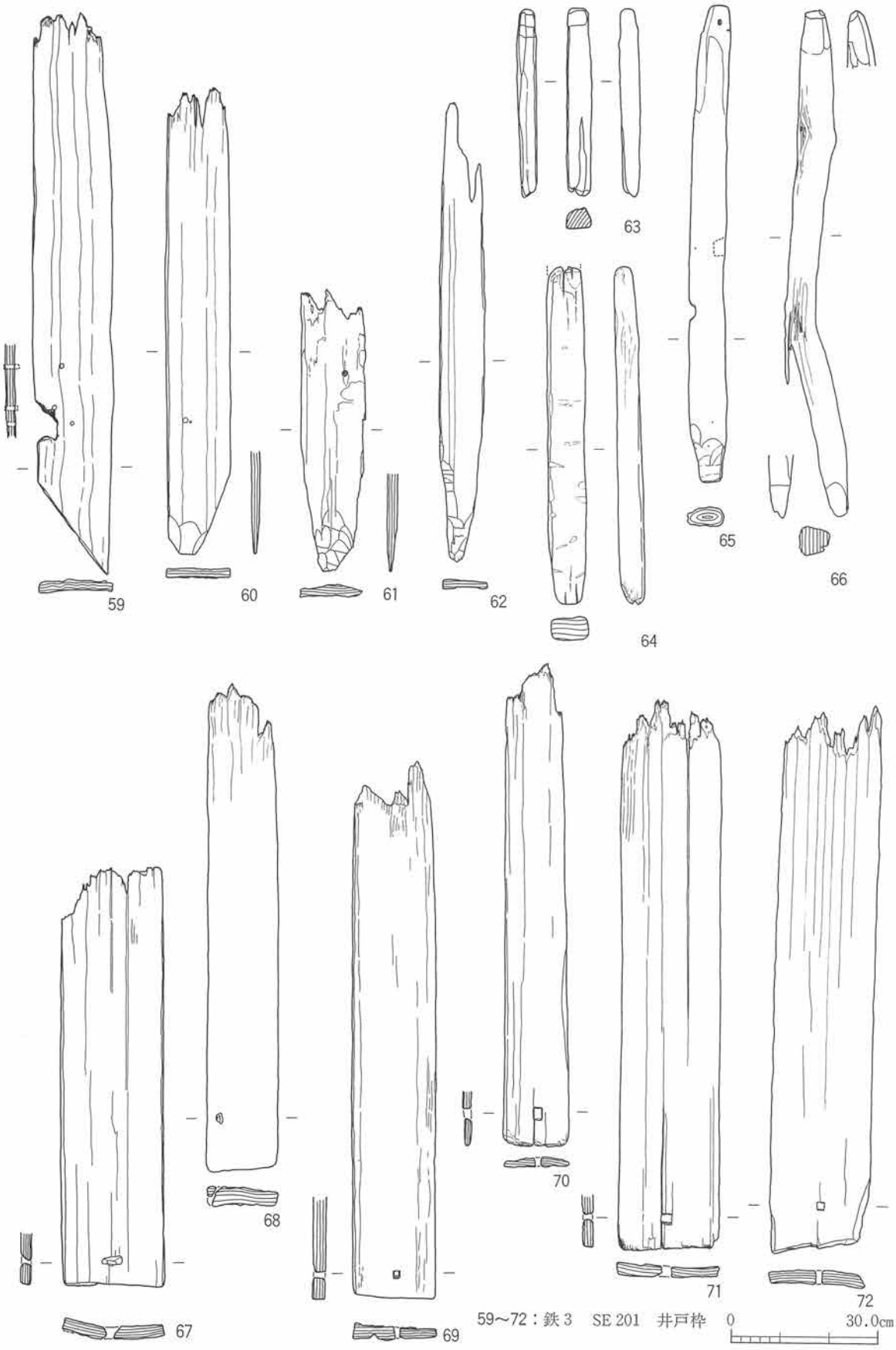

18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
18～21：鉄３　SE 168
22～31：鉄３　SE 201
0
15.0cm

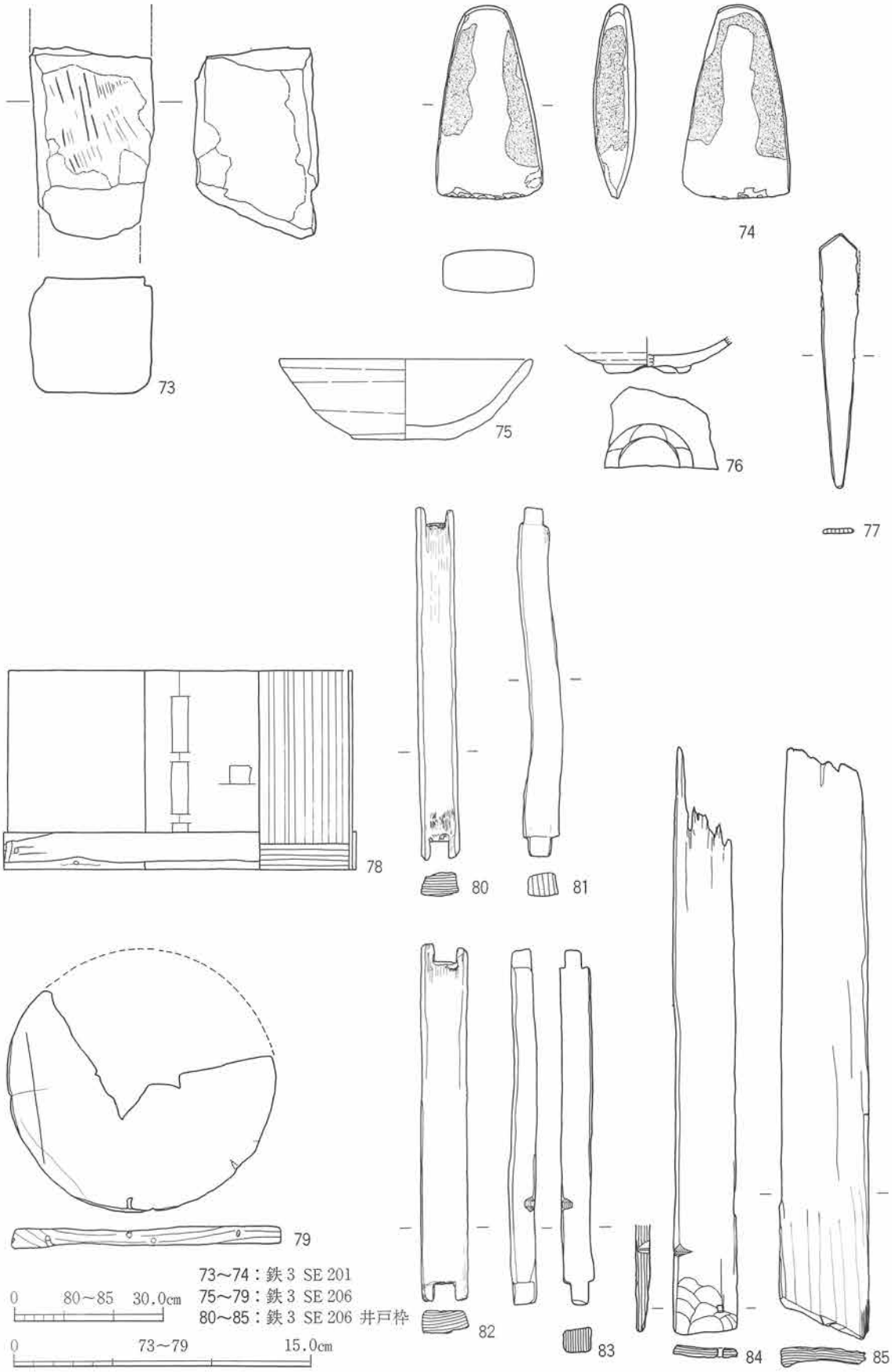


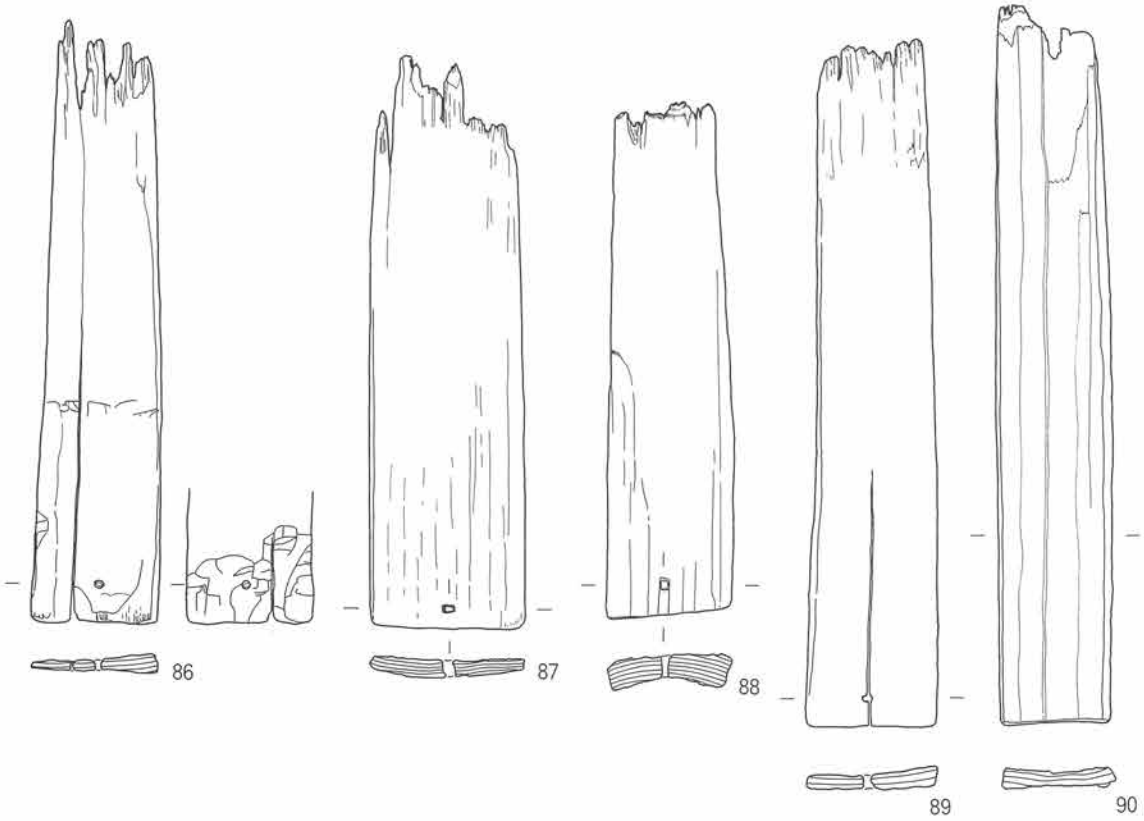
32～47：鉄３　SE 201

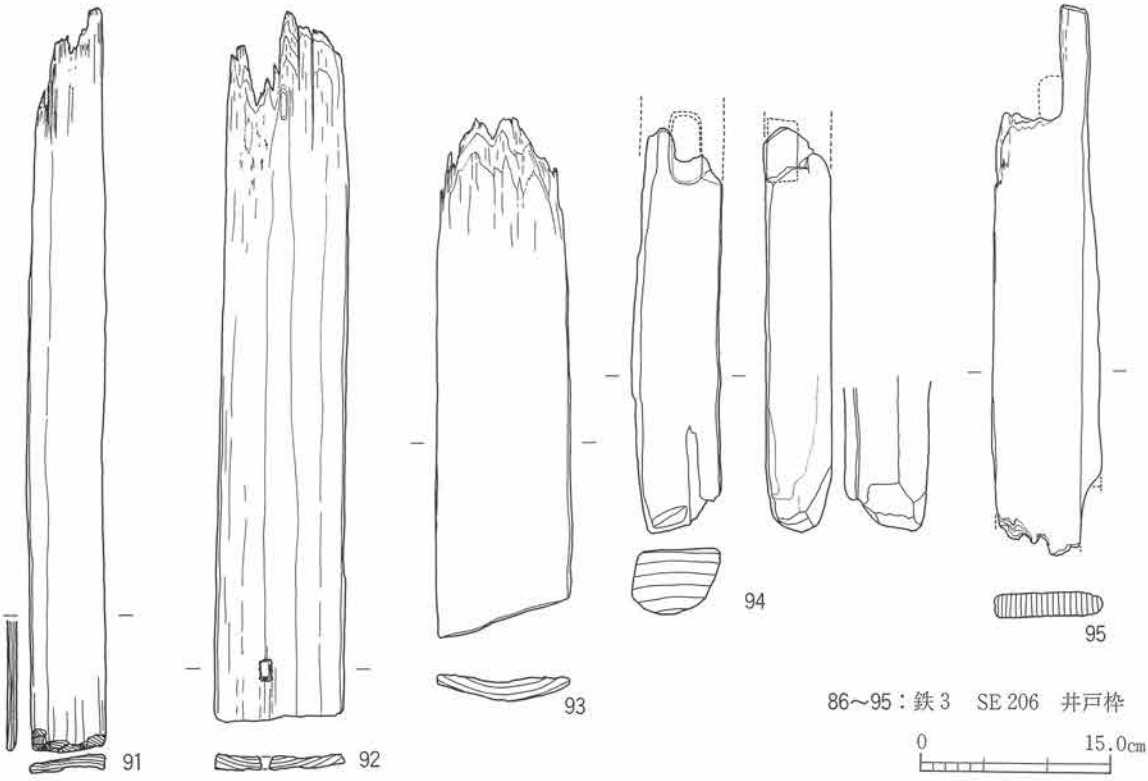


48～58：鉄３　SE 201　井戸枠


59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
59～72：鉄３　SE 201　井戸枠
0
30.0cm


73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
73～74：鉄３ SE 201
75～79：鉄３ SE 206
80～85：鉄３ SE 206 井戸枠
0 80～85 30.0cm
0 73～79 15.0cm



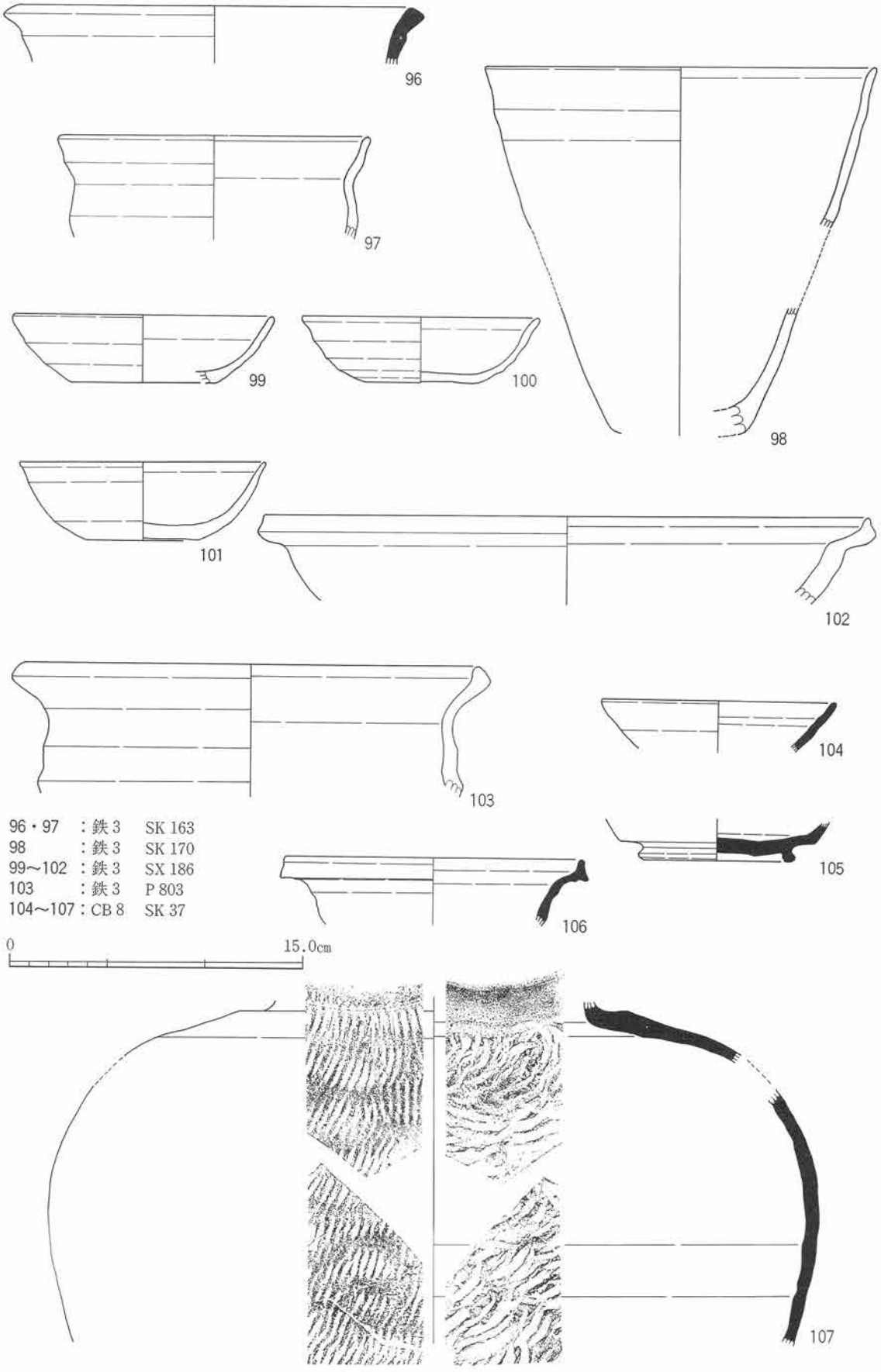


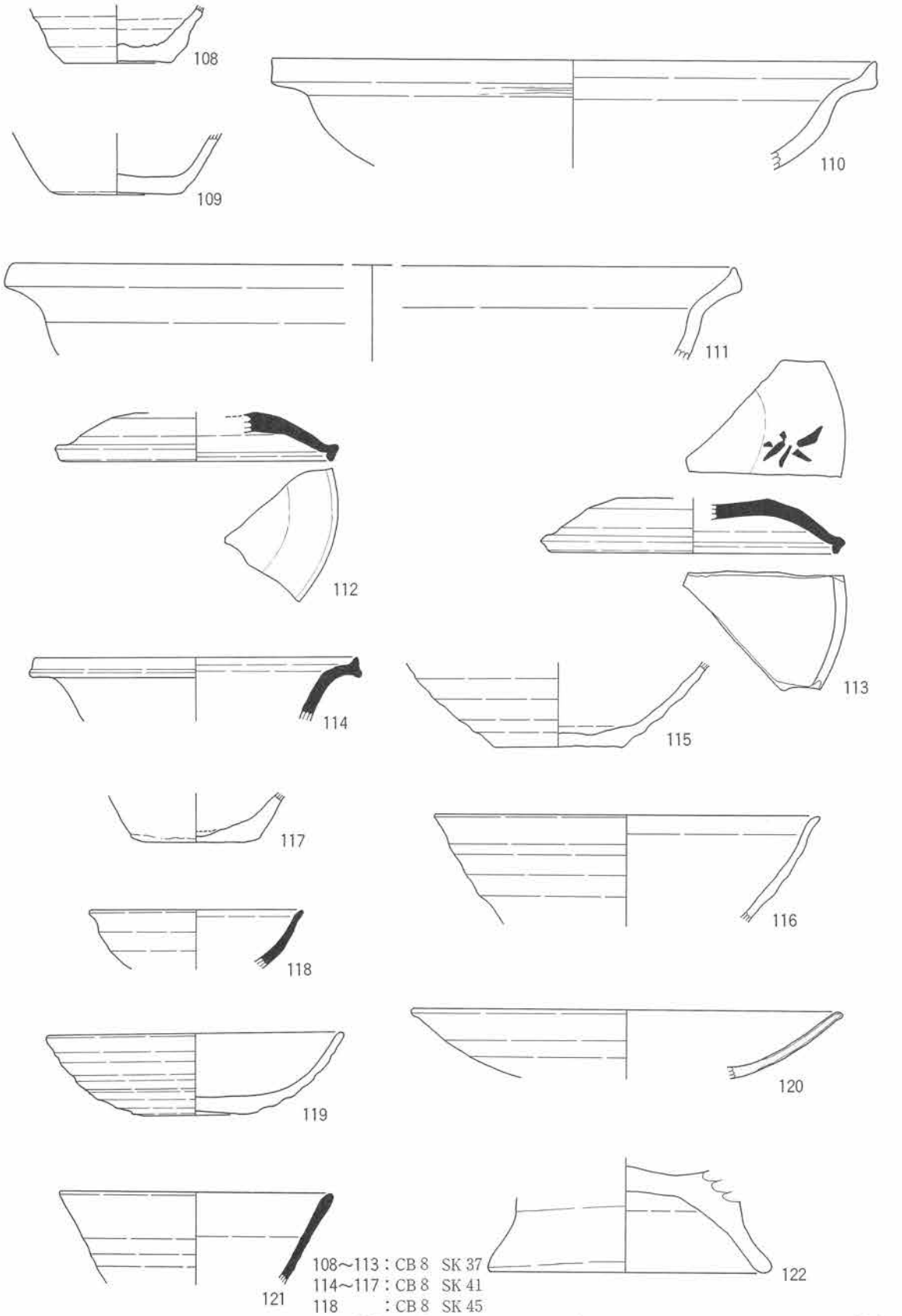
86～95：鉄３　SE 206　井戸枠

0　15.0cm

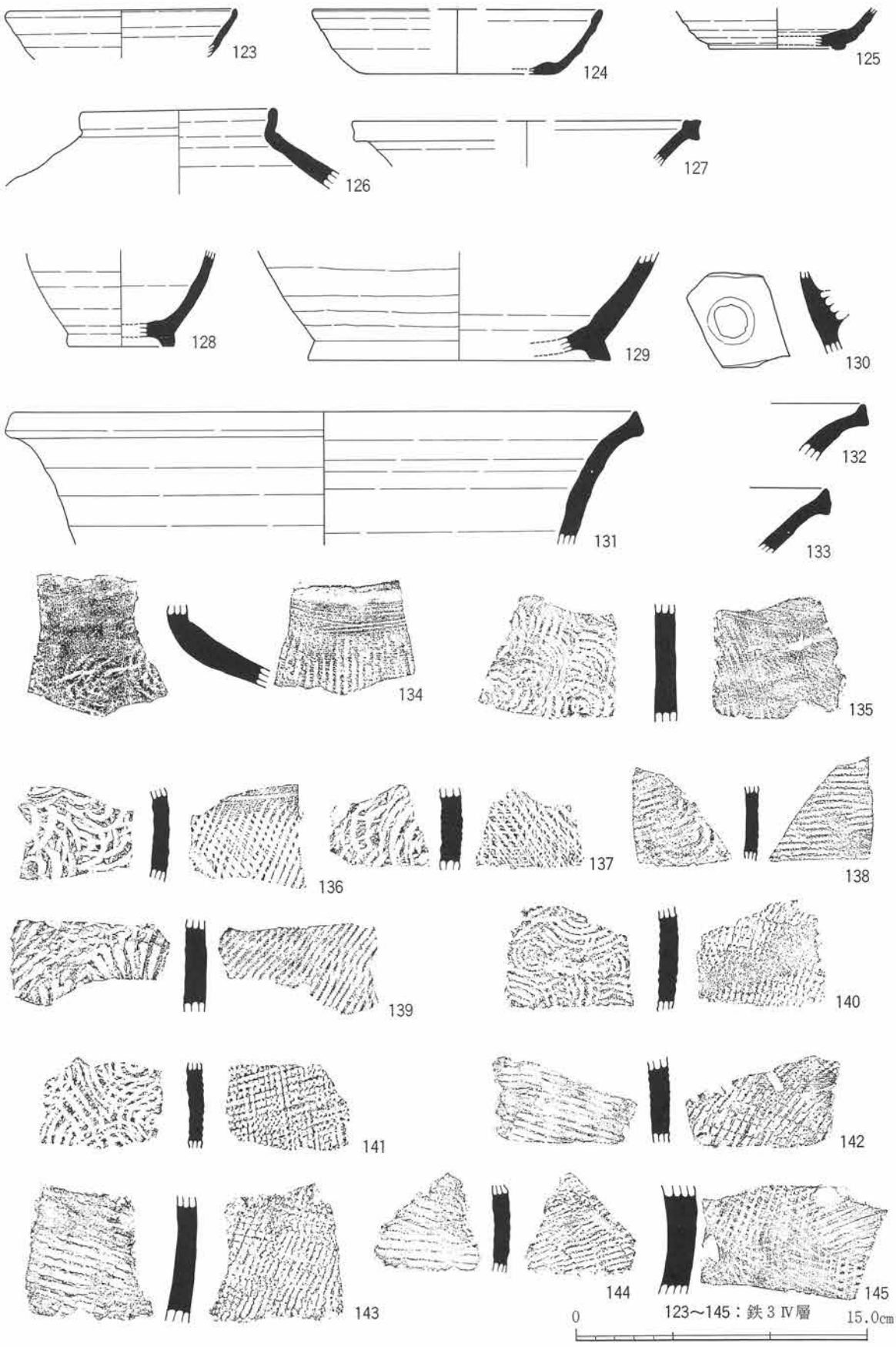
図面36

鉄砲町３地区Ⅳ層下面遺構出土遺物出土遺物８
CB８ブロックⅣ層下面遺構出土遺物１

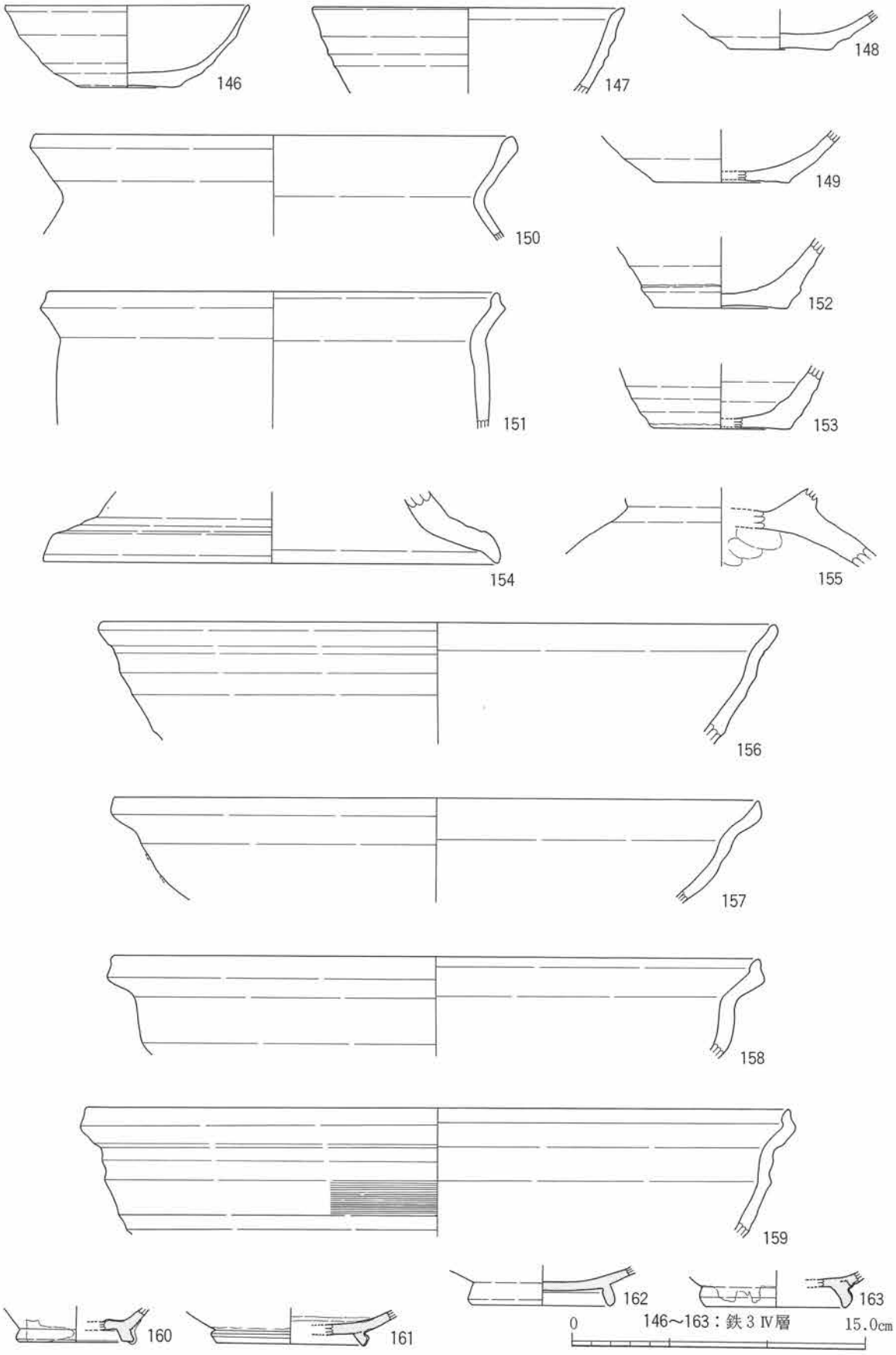


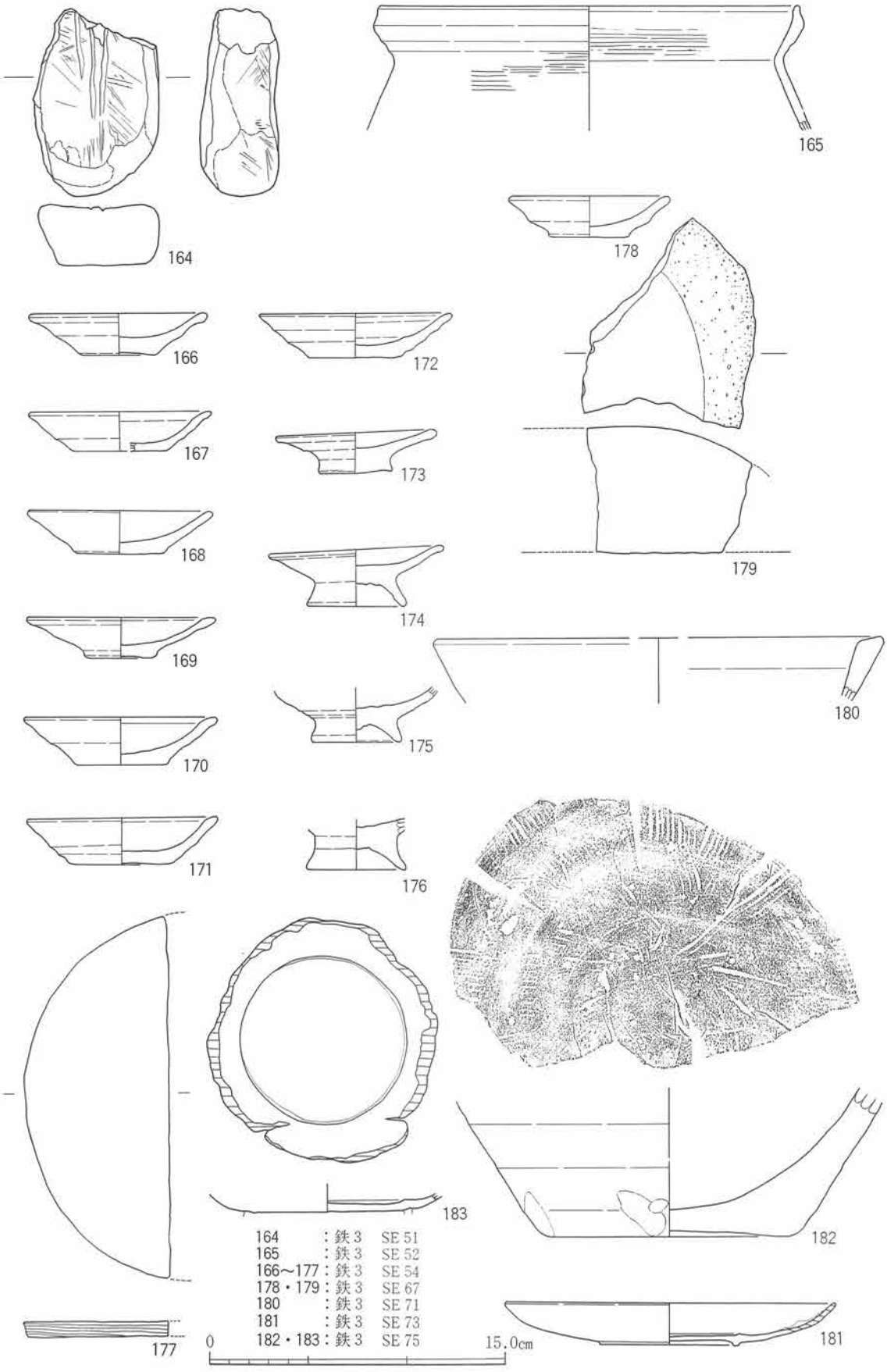


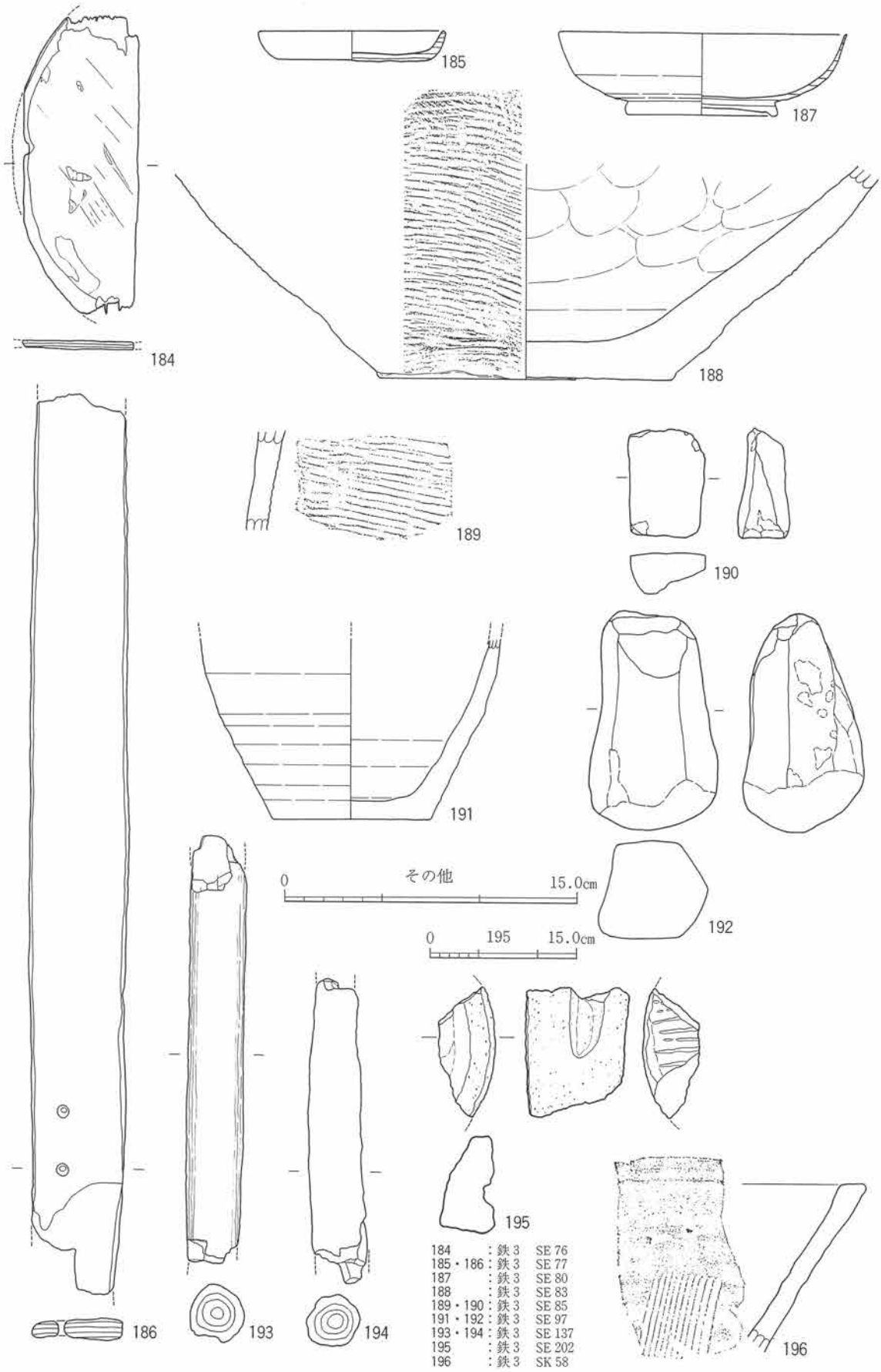
108～113：CB 8　SK 37
114～117：CB 8　SK 41
118　　：CB 8　SK 45
119・120：CB 8　SK 47
121　　：CB 8　P 111
122　　：鉄 3　SK 89


123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
0
15.0cm

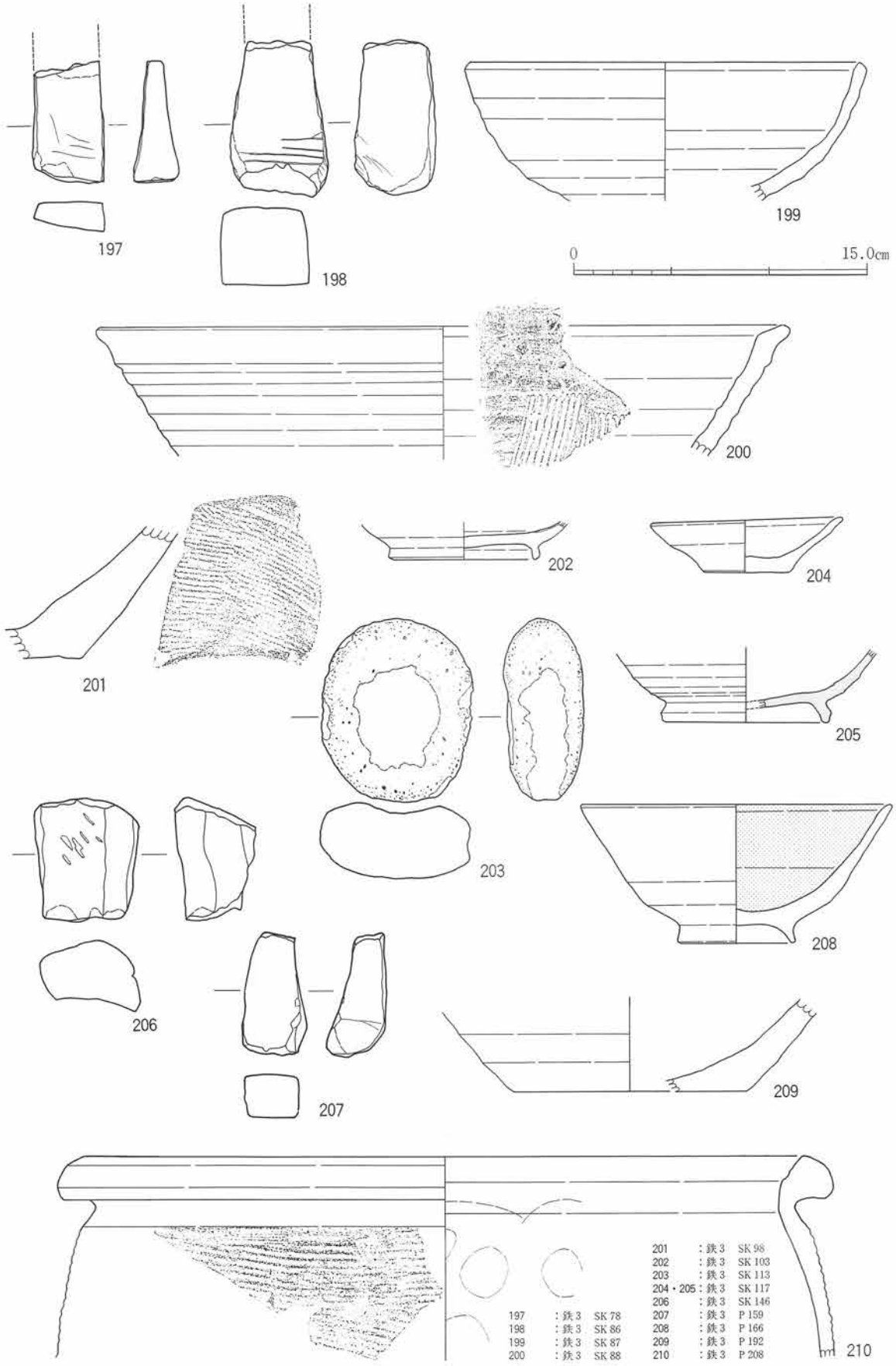
123～145：鉄３Ⅳ層

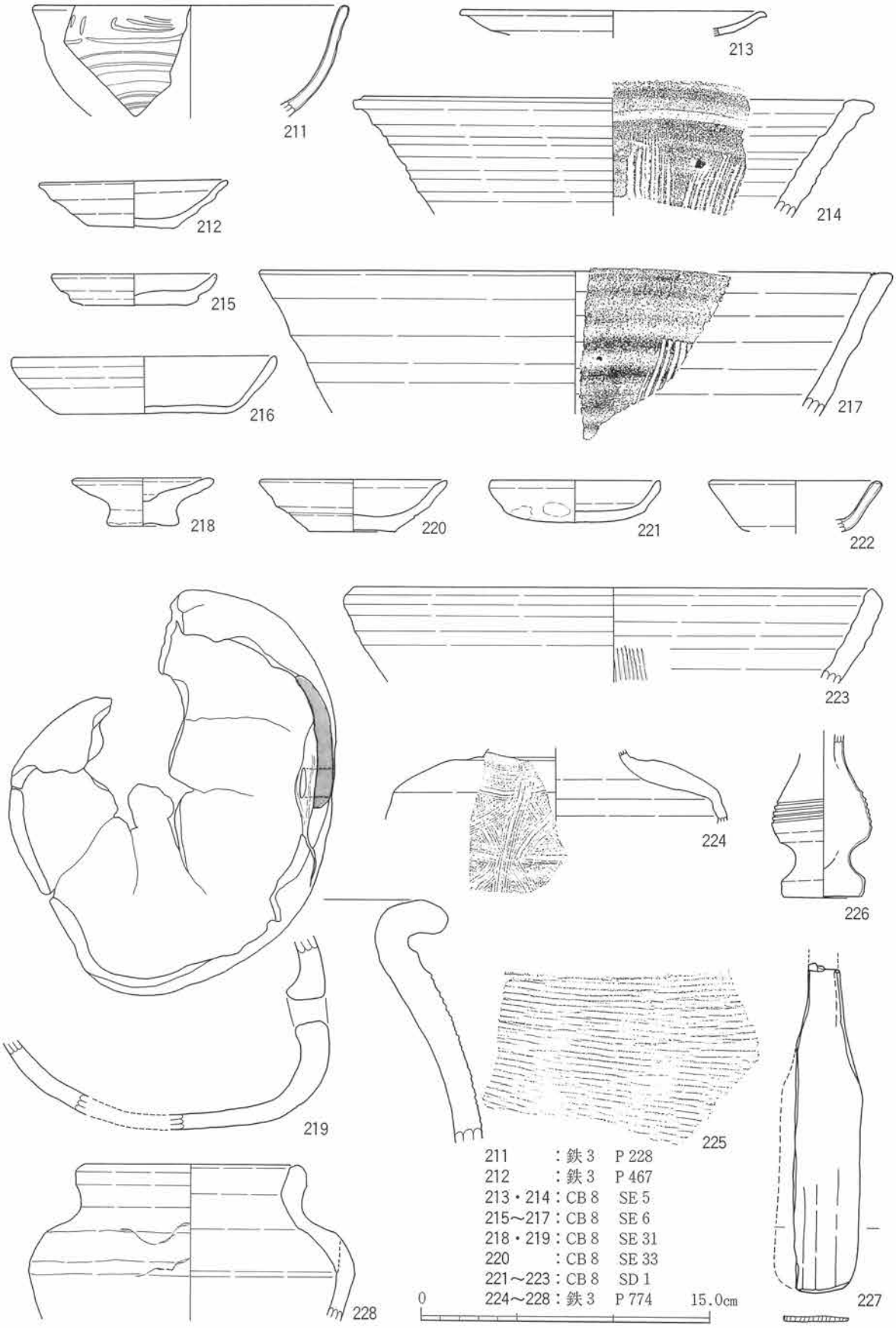

146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
0
146～163：鉄３Ⅳ層
15.0cm

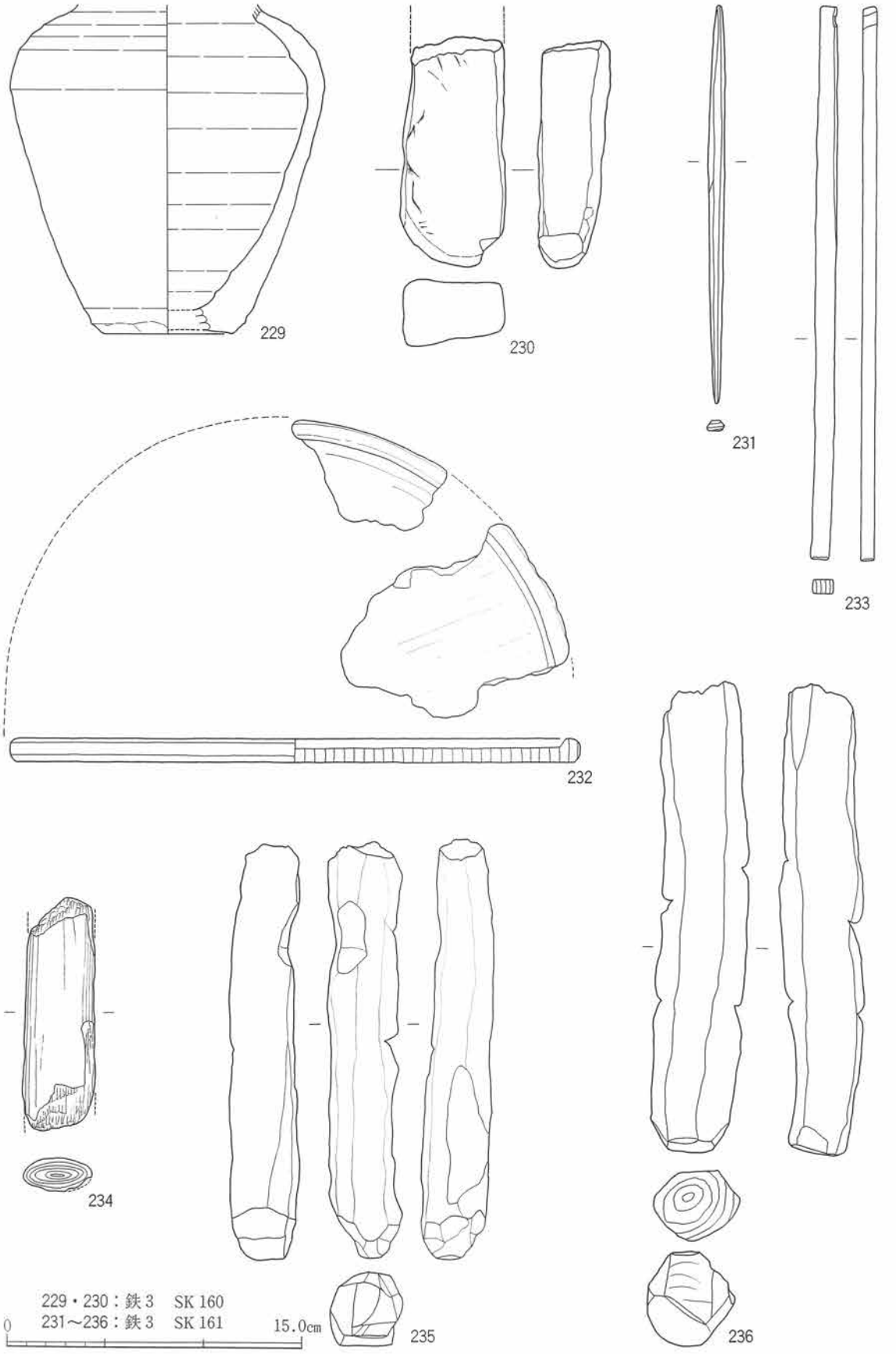

164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
164　：鉄３　SE 51
165　：鉄３　SE 52
166～177：鉄３　SE 54
178・179：鉄３　SE 67
180　：鉄３　SE 71
181　：鉄３　SE 73
182・183：鉄３　SE 75
0
15.0cm

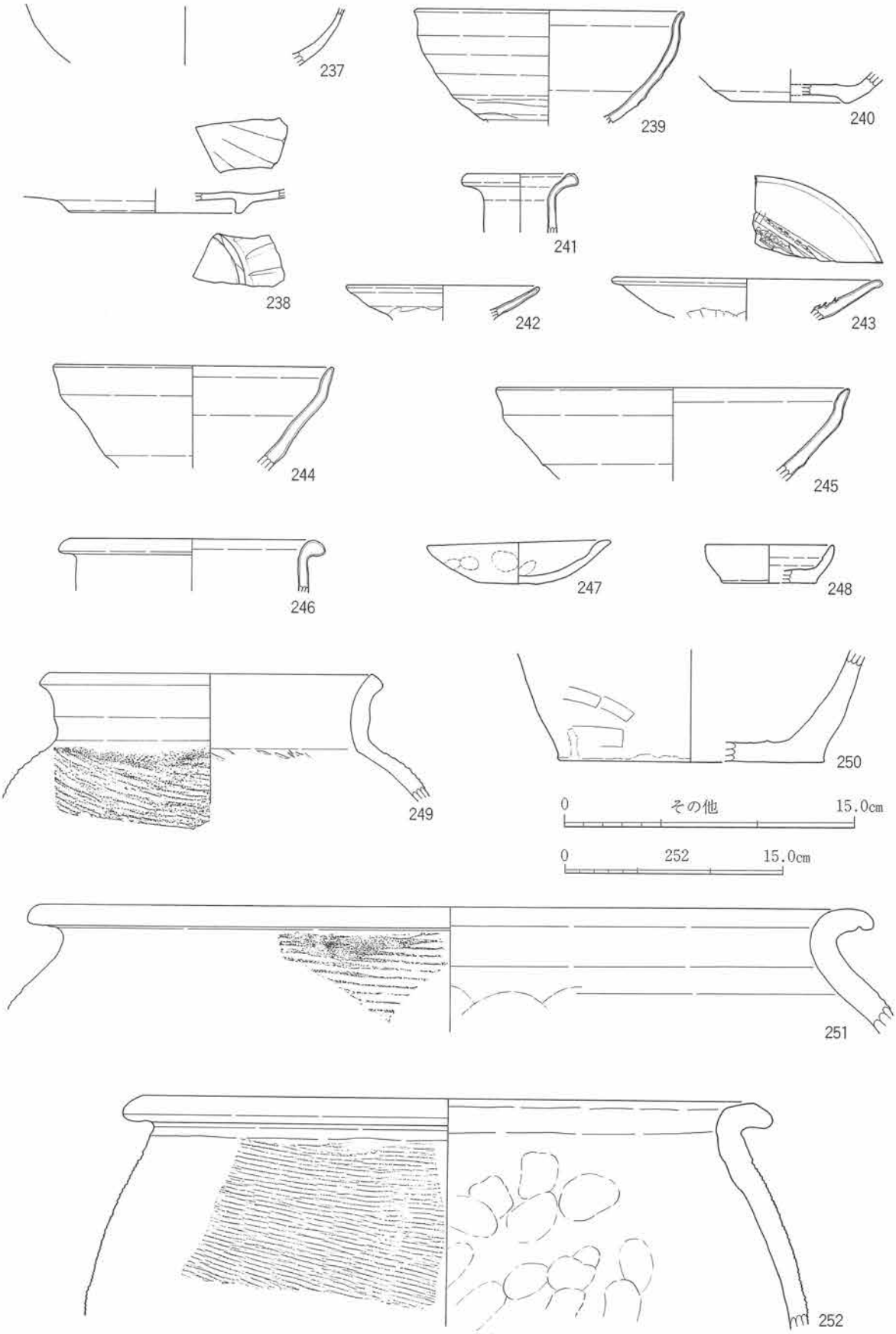

184
185
187
188
189
190
191
192
その他
0
15.0cm
0
195
15.0cm
186
193
194
195
196
184　：鉄３　SE 76
185・186：鉄３　SE 77
187　：鉄３　SE 80
188　：鉄３　SE 83
189・190：鉄３　SE 85
191・192：鉄３　SE 97
193・194：鉄３　SE 137
195　：鉄３　SE 202
196　：鉄３　SK 58

鉄砲町３地区Ⅲ層下面遺構出土遺物３

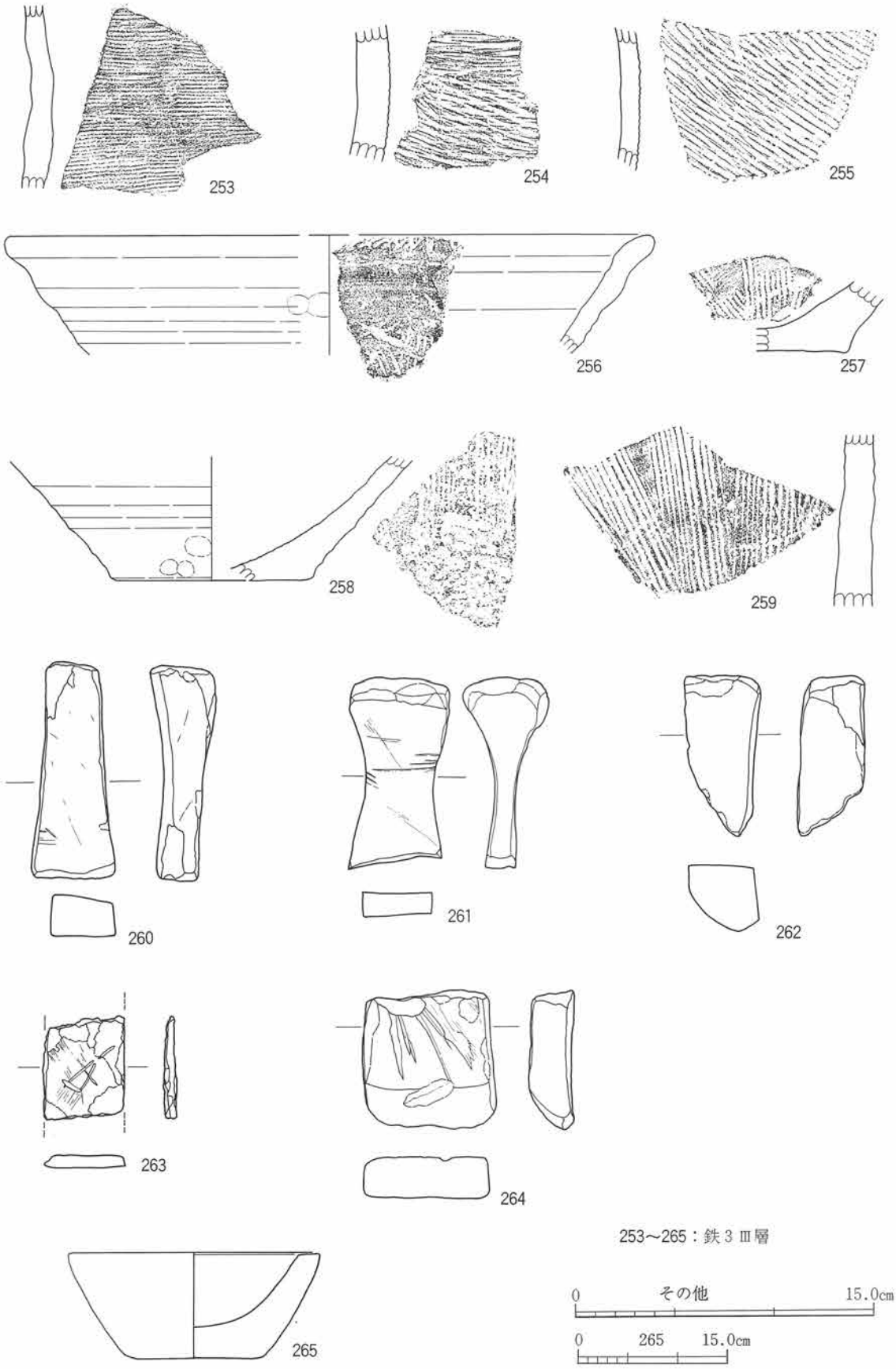


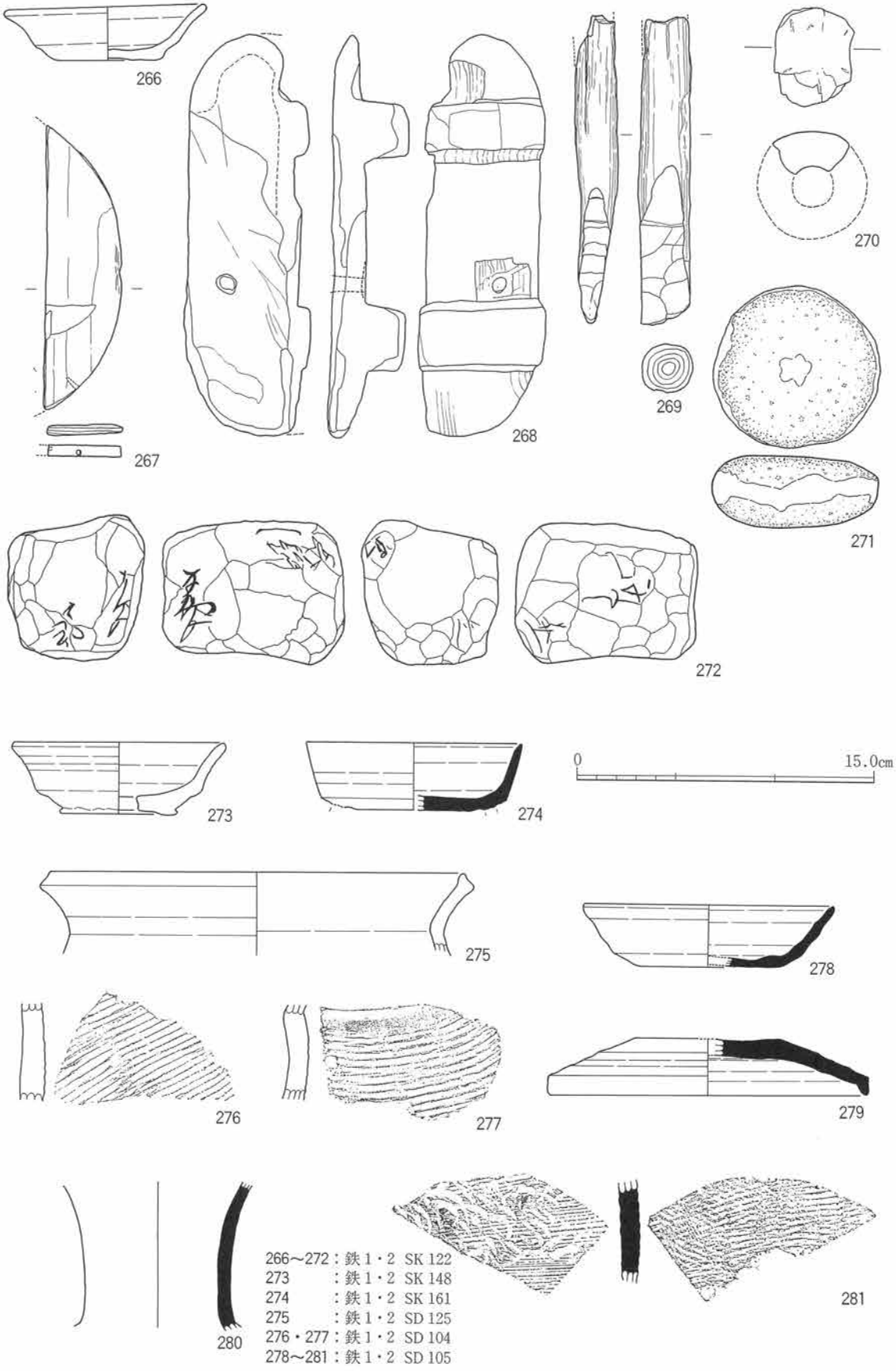

211
212
213
214
215
216
217
218
220
221
222
223
224
225
226
227
228
211　：鉄 3　P 228
212　：鉄 3　P 467
213・214：CB 8　SE 5
215～217：CB 8　SE 6
218・219：CB 8　SE 31
220　：CB 8　SE 33
221～223：CB 8　SD 1
224～228：鉄 3　P 774
0
15.0cm


229
230
231
233
232
234
235
236
229・230：鉄３　SK 160
231～236：鉄３　SK 161
0
15.0cm

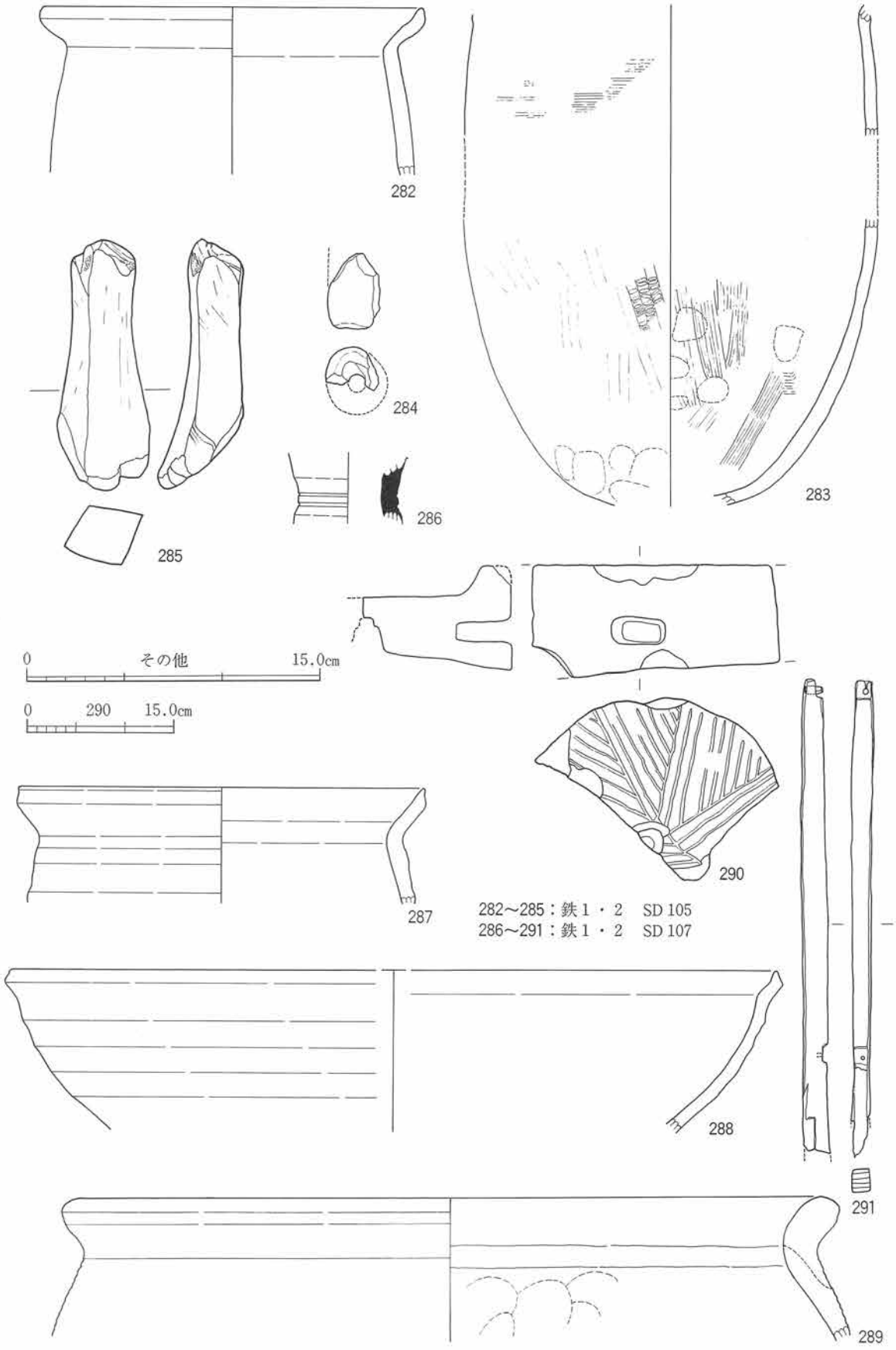


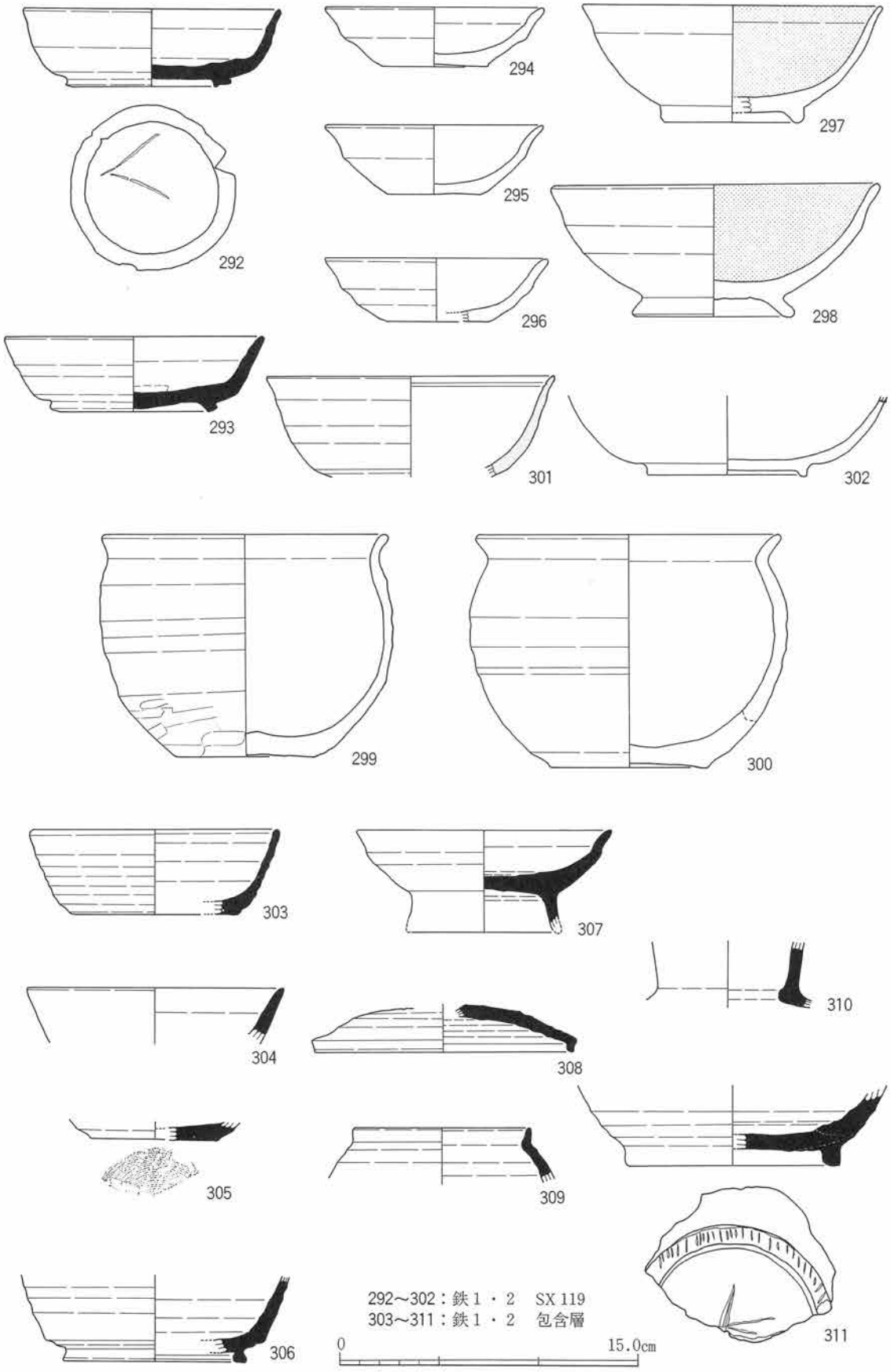
237～247・249・251・252：鉄３ Ⅲ層
248・250　　：CB８ Ⅲ層

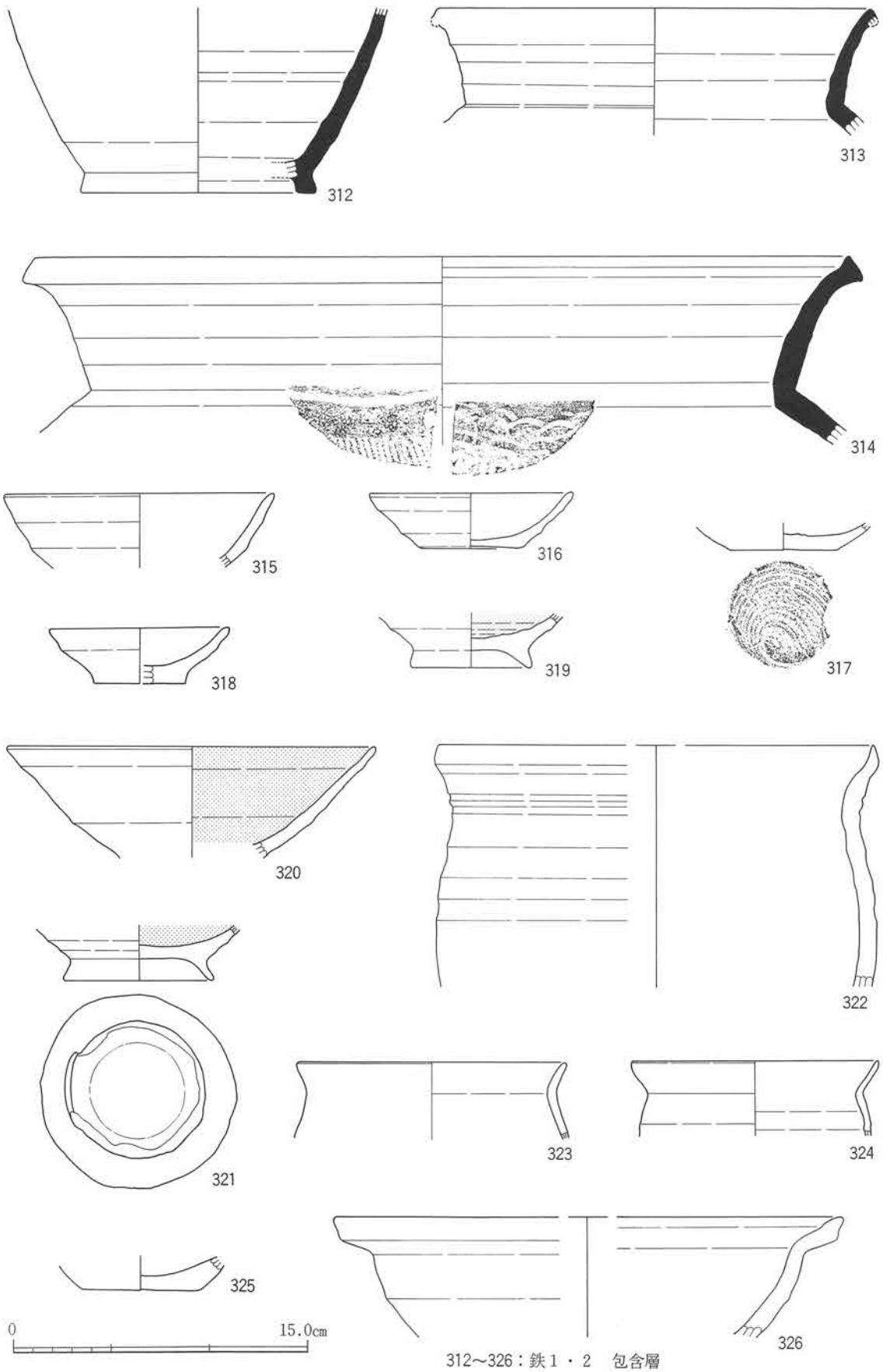

253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
253～265：鉄３Ⅲ層
0
その他
15.0cm
0
265
15.0cm



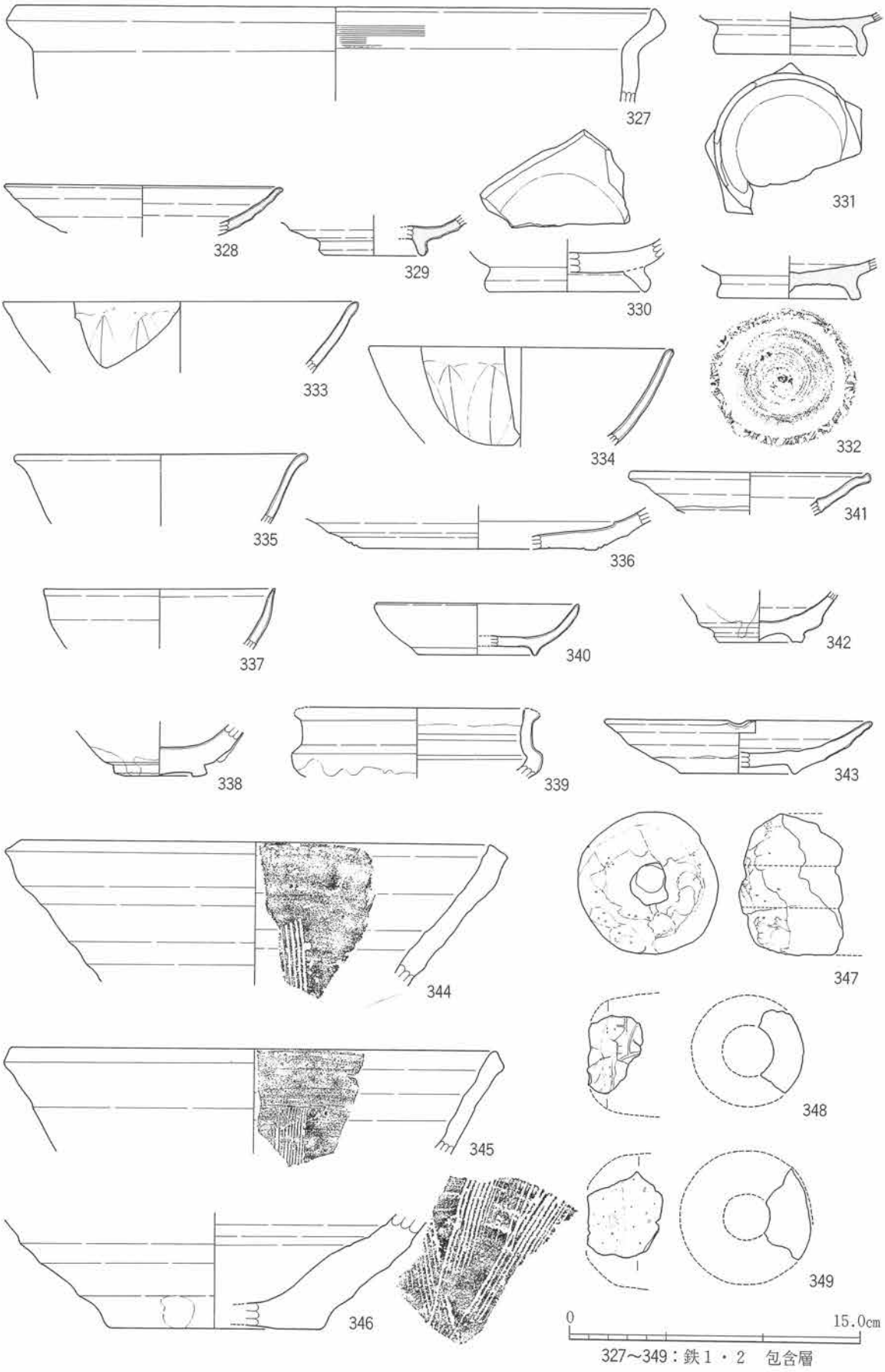
266～272：鉄１・２ SK 122
273　　：鉄１・２ SK 148
274　　：鉄１・２ SK 161
275　　：鉄１・２ SD 125
276・277：鉄１・２ SD 104
278～281：鉄１・２ SD 105


282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
0 その他 15.0cm
0 290 15.0cm
282～285：鉄１・２ SD 105
286～291：鉄１・２ SD 107

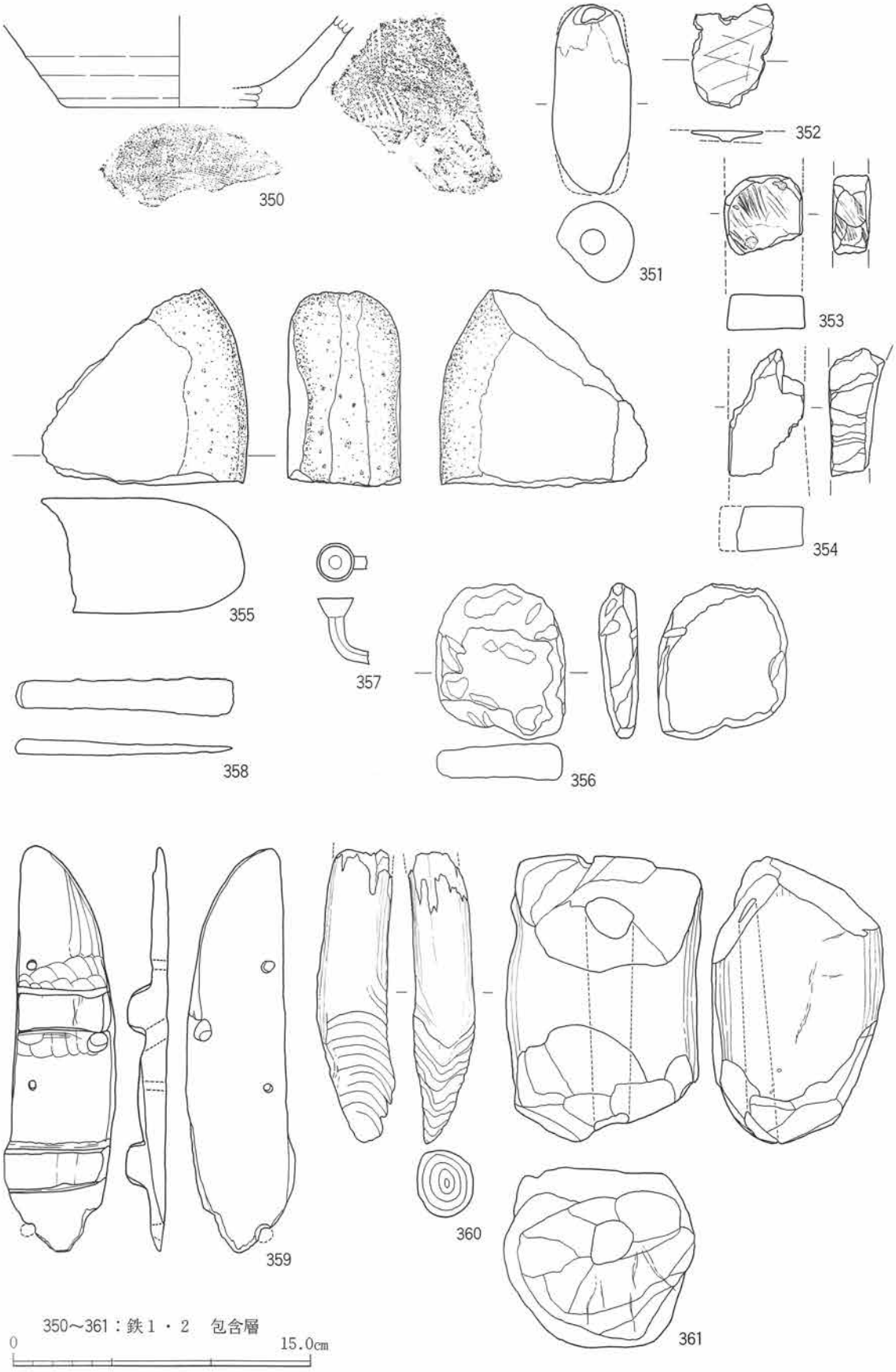

292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
292～302：鉄１・２　SX 119
303～311：鉄１・２　包含層
0
15.0cm

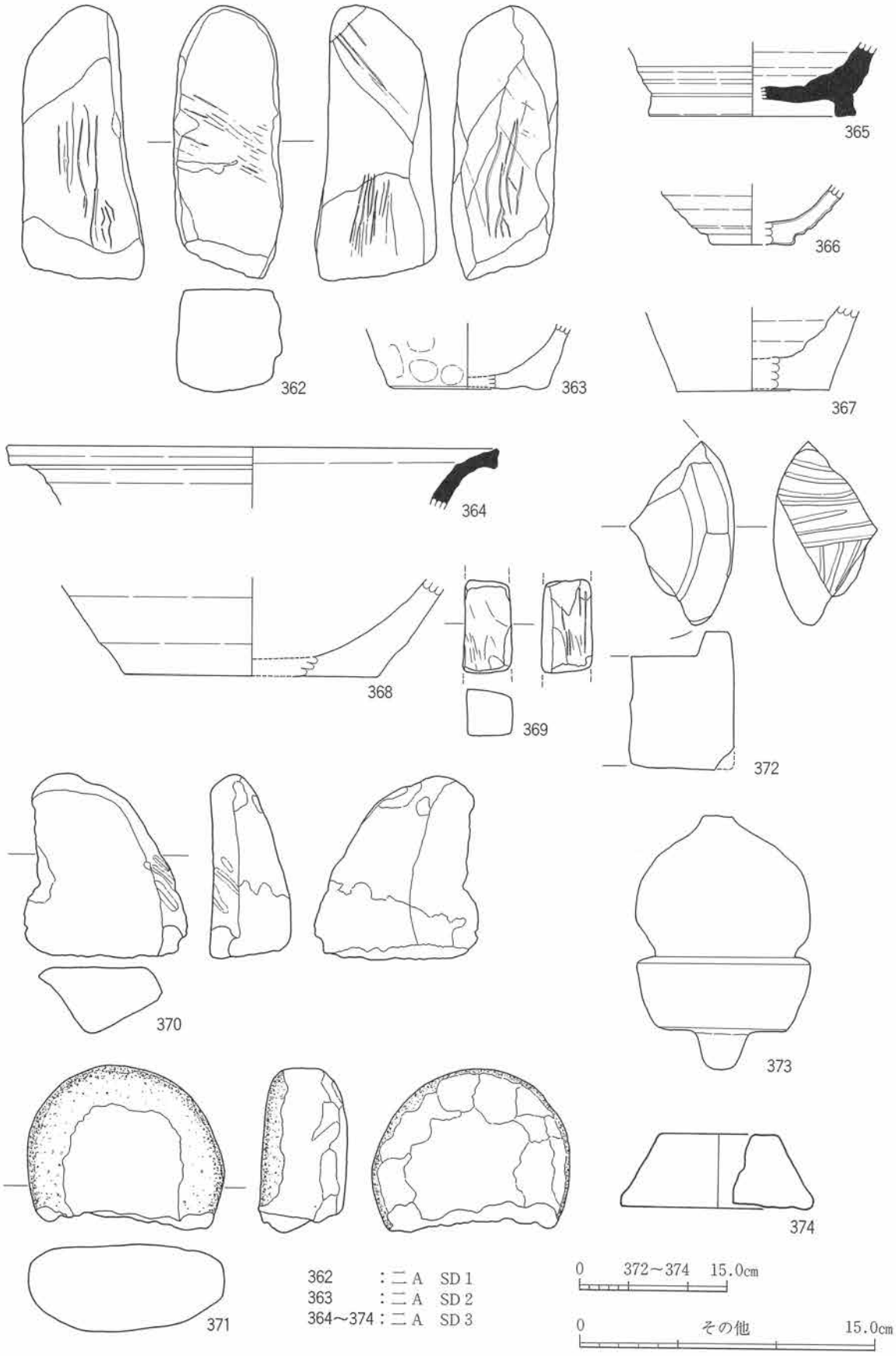


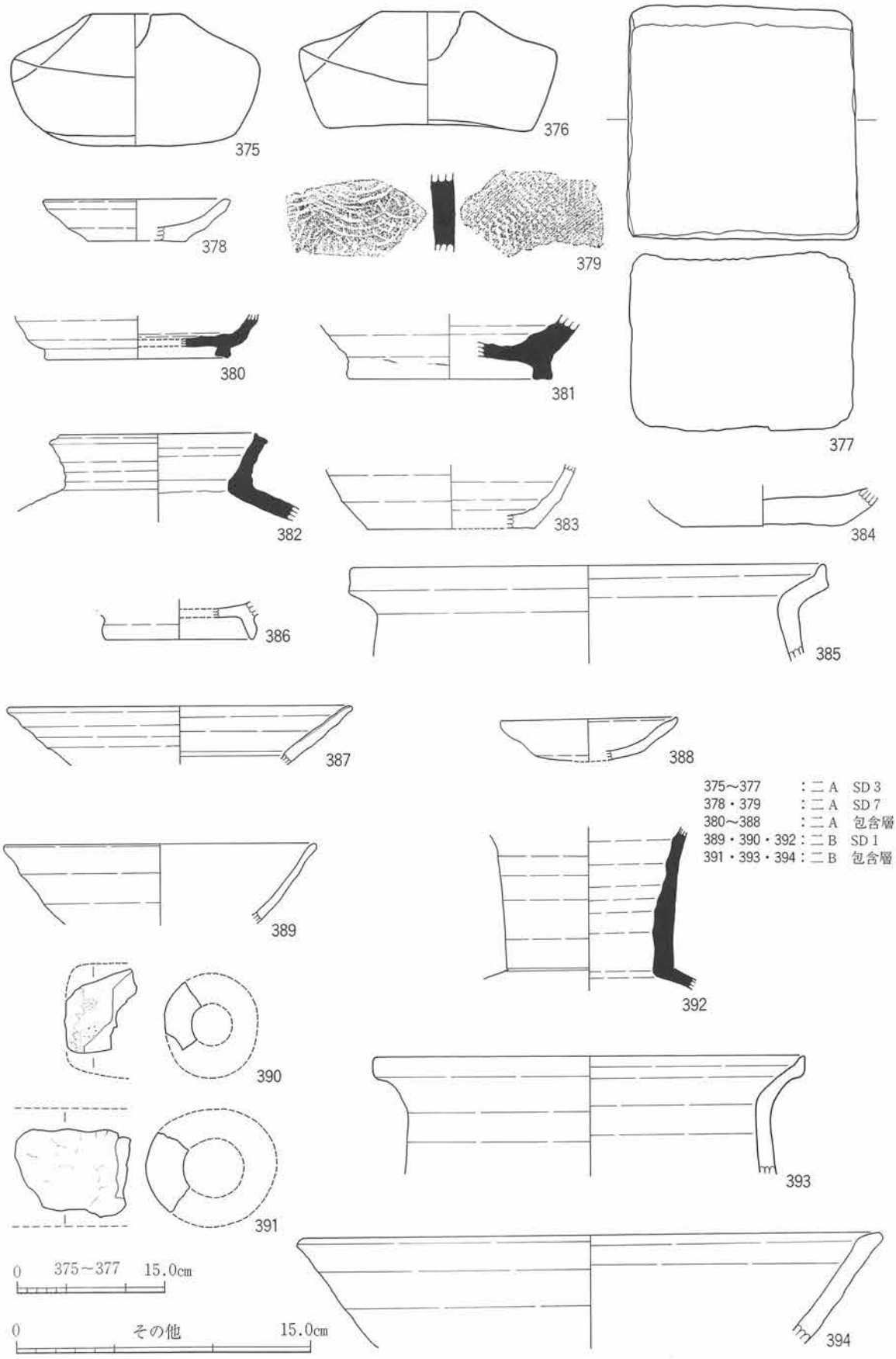
312～326：鉄１・２　包含層



327～349：鉄１・２　包含層


350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
350～361：鉄１・２　包含層
0
15.0cm


362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
362　：二A　SD 1
363　：二A　SD 2
364～374：二A　SD 3
0　372～374　15.0cm
0　その他　15.0cm


375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
375～377　：二A　SD 3
378・379　：二A　SD 7
380～388　：二A　包含層
389・390・392：二B　SD 1
391・393・394：二B　包含層
0　375～377　15.0cm
0　その他　15.0cm

鉄砲町３地区　Ⅳ層下面

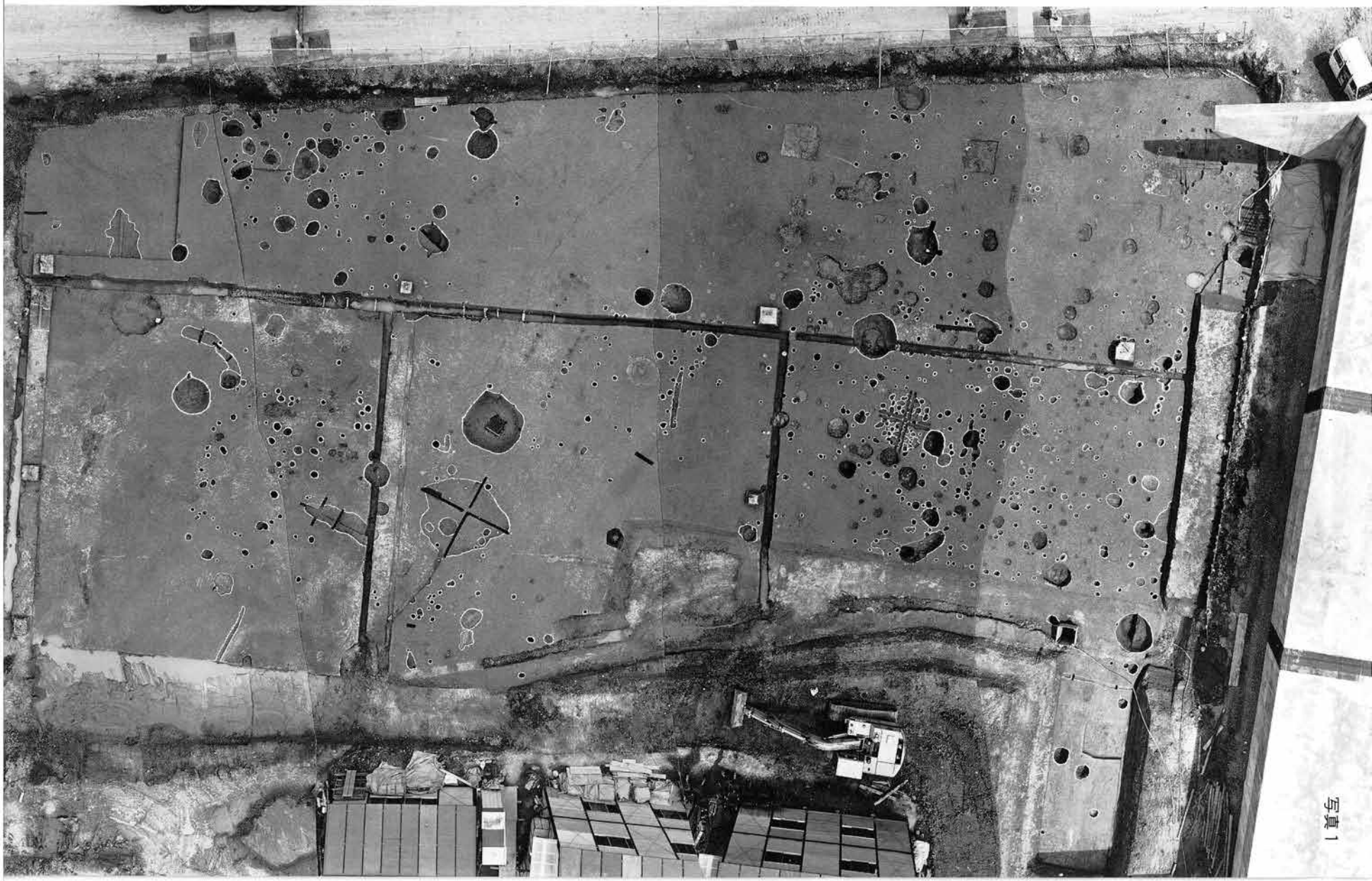
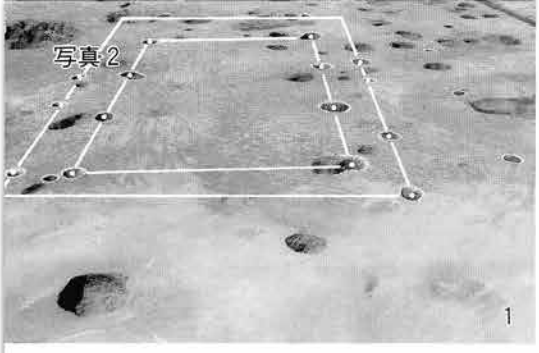


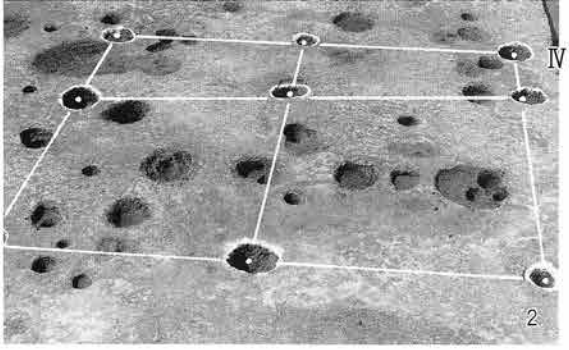
写真１

写真2

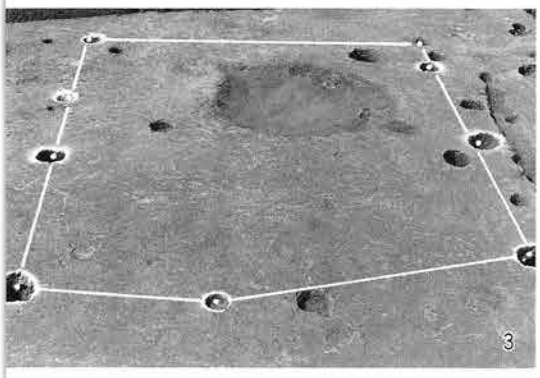
Ⅳ層下面検出遺構1

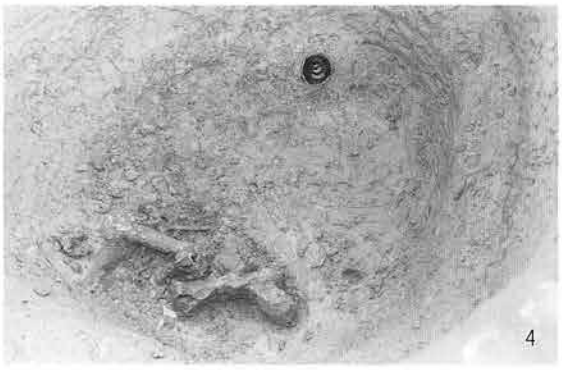
鉄砲町3地区



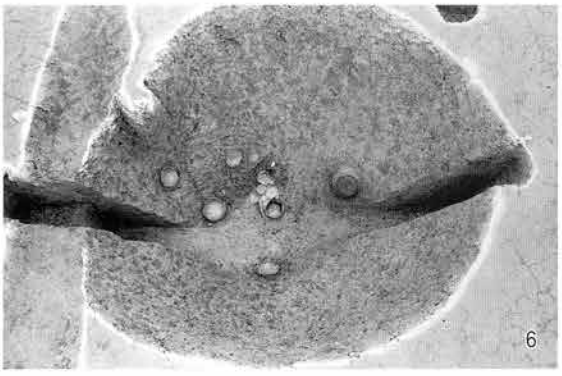


1．SB 196 （南から）
2．SB 197 （南から）



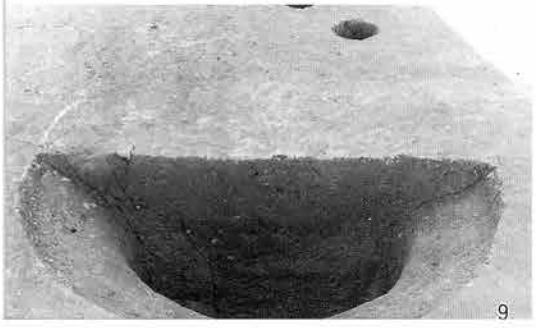


3．SB 199 （南から）
4．SE 168
（遺物出土状況）



5．SE 168
6．SE 201
（遺物出土状況）

7．SE 201
（井側検出状況）
8．SE 201



9．SE 206
10．SE 206
（井側検出状況）

Ⅳ層下面検出遺構 2

写真 3

1．SK 103
2．SK 160
（遺物出土状況）

1

2

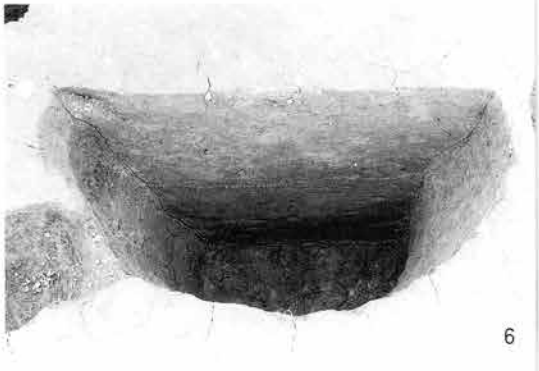
3．SK 161
（遺物出土状況）
4．SK 162

3

4

5．SK 163
6．SK 164

5


6

7．SK 166
8．SK 167

7

8

9．SK 170
10．SK 171

9

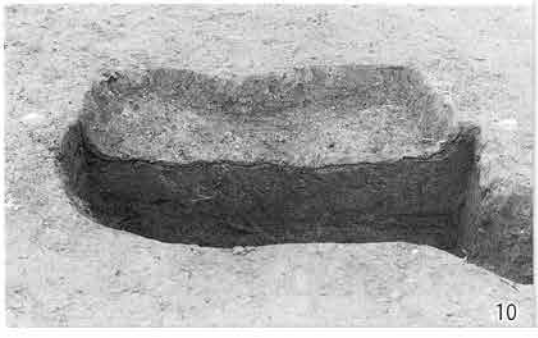
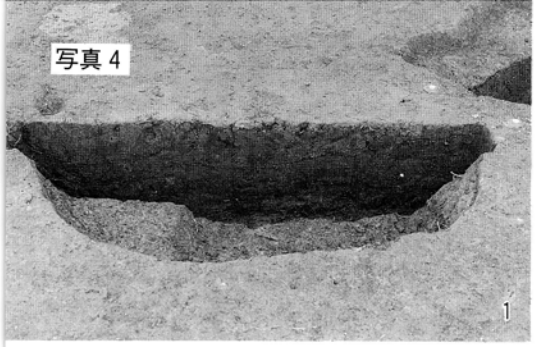
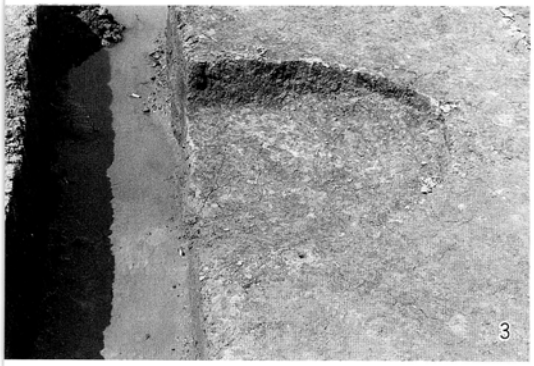

10

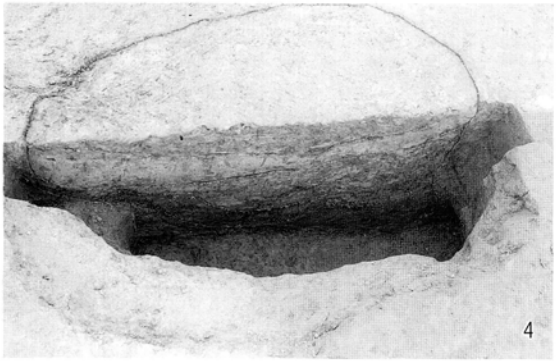
写真 4

Ⅳ層下面検出遺構 3

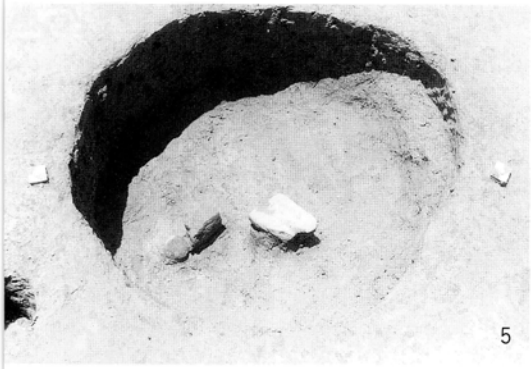


1．SK 172
2．SK 173

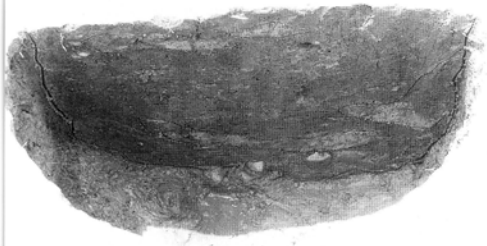




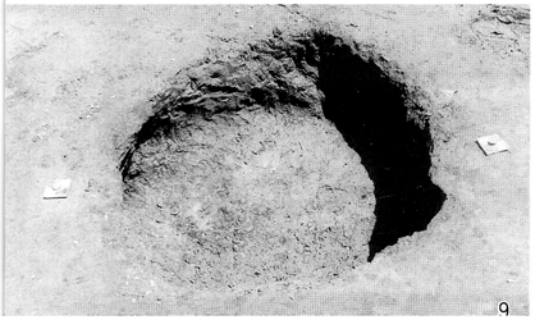
3．SK 176
4．SK 179



5．SK 180
6．SE 168



7．SK 182
8．SK 190

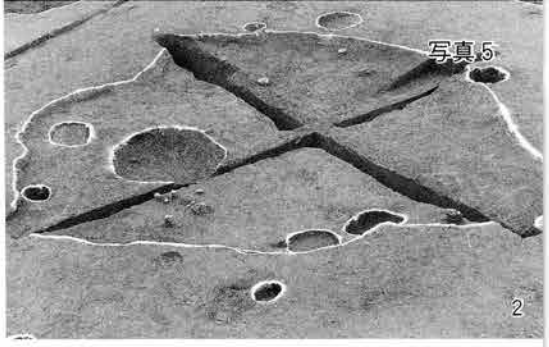


9．SK 191
10．SD 174

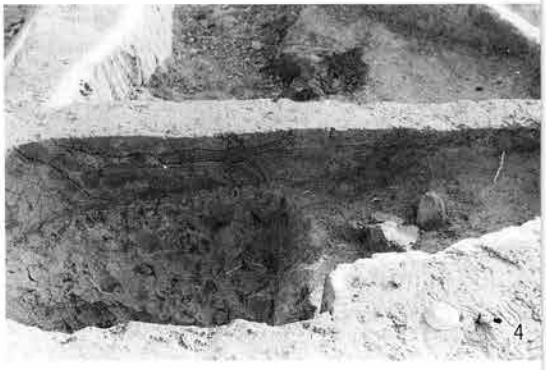
Ⅳ層下面検出遺構 4

写真 5

1．SD 177
2．SX 186



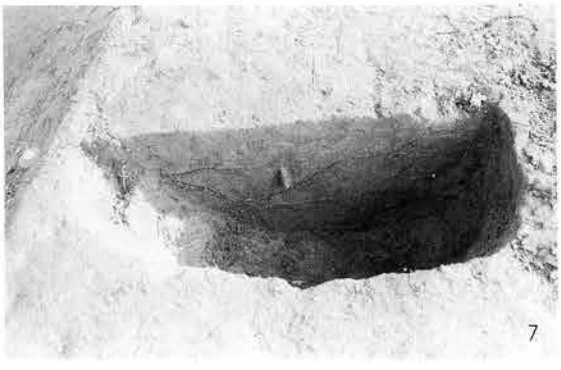
3．P 774
4．SK 36



CB 8 ブロック

5．SK 37
6．SK 38

7．SK 40
8．SK 41



9．SK 43
10．P 144

鉄砲町１・２(及び鉄砲町３の一部)地区

鉄砲町３（及び鉄砲町１・２の一部）地区　Ⅲ層下面

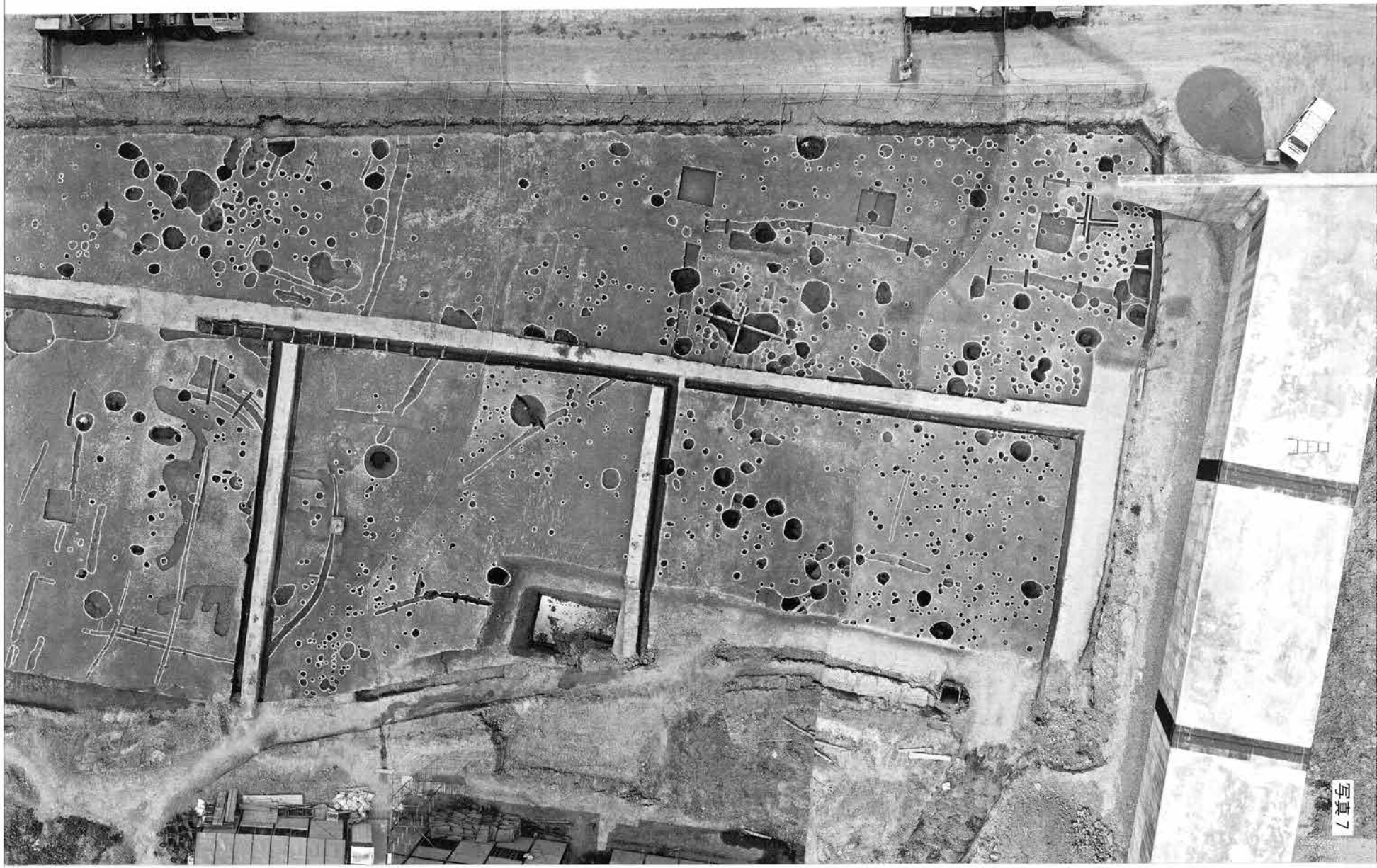


写真７

写真 8

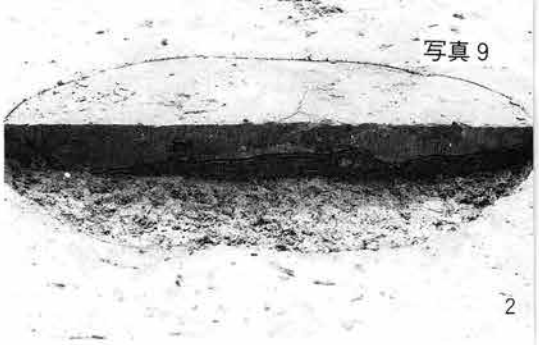
鉄砲町 CB8 ブロック　Ⅲ層下面

Ⅲ層下面検出遺構 1

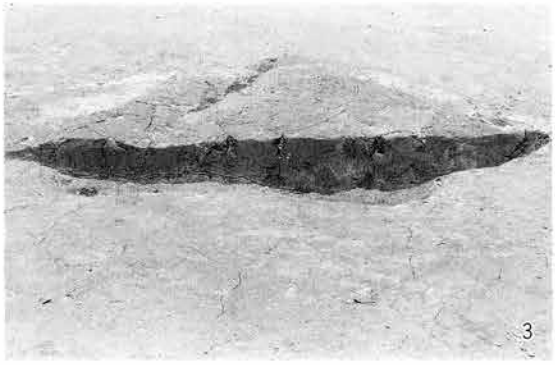
鉄砲町 1 ・ 2 地区

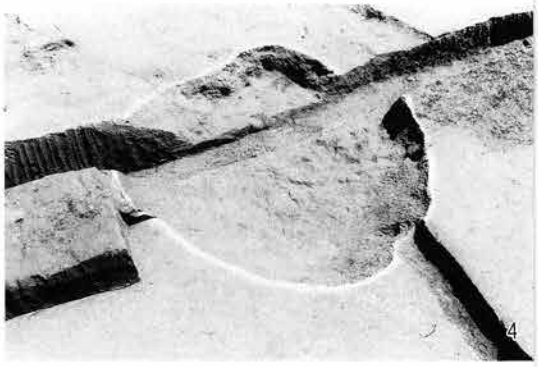
写真 9

1．SK 122
2．SK 124

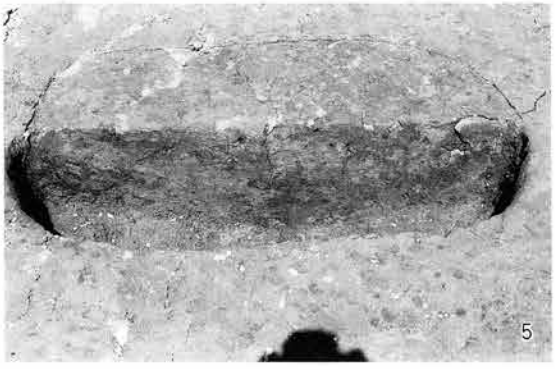


3．SK 158
4．SK 159

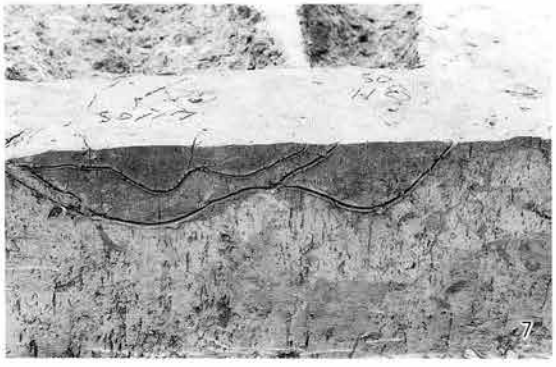


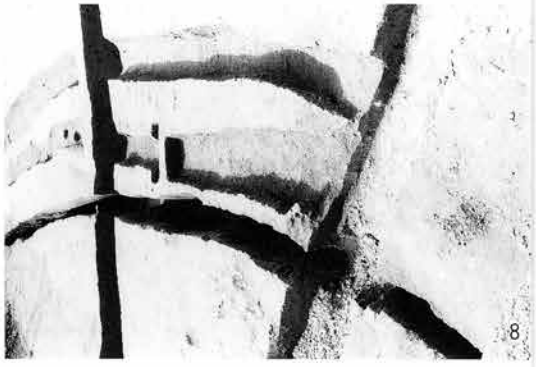


5．SK 165
6．SD 106



7．SD 117・118
8．SD 150・151





9．SD 152
10．SD 155

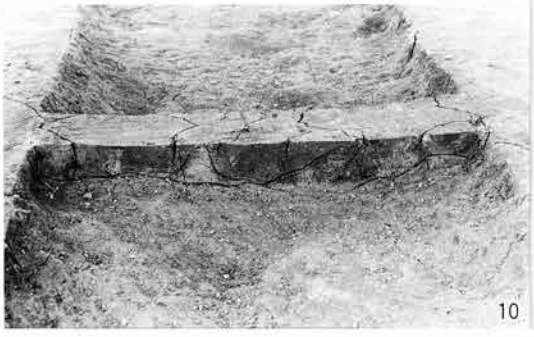
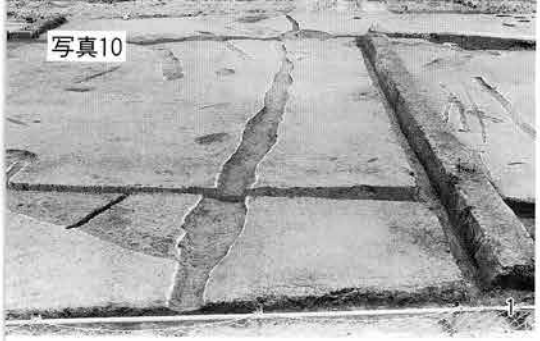


写真10



Ⅲ層下面検出遺構 2

1．SD 156
2．SX 119

鉄砲町 3 地区

3．SE 51
4．SE 52

5．SE 53
6．SE 54

7．SE 67
8．SE 68

9．SE 71
10．SE 73

1．SE 75
2．SE 76

1

2

3．SE 77
4．SE 79

3

4

5．SE 80
6．SE 83

5

6

7．SE 85
8．SE 92

7

8

9．SE 97
10．SE 137

9

10

写真12

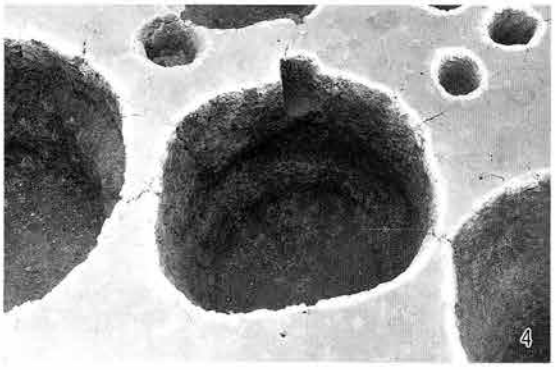
Ⅲ層下面検出遺構 4

1

2

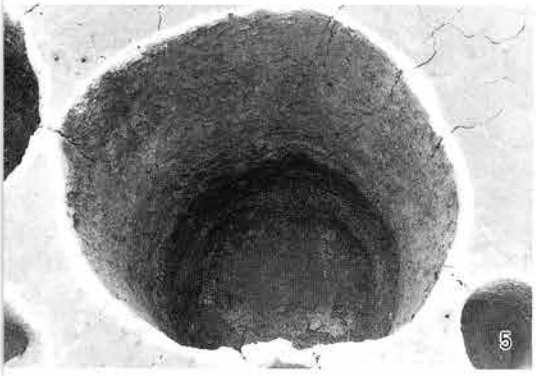
1．SE 139
2．SE 202

3



4

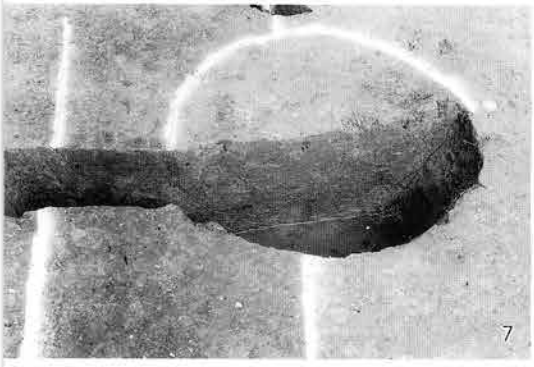
3．SK 55
4．SK 56



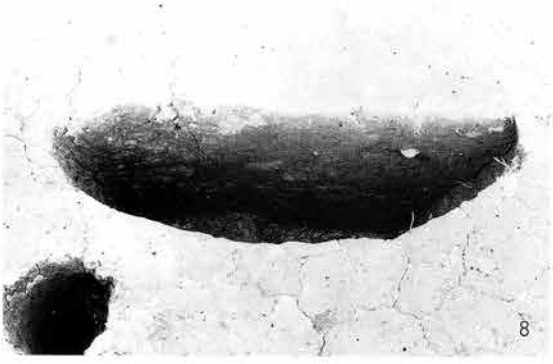
5

6

5．SK 57
6．SK 58



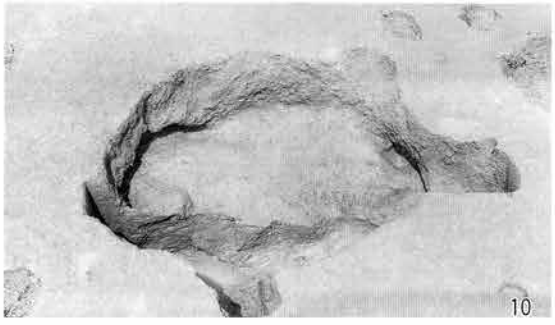
7



8

7．SK 59
8．SK 64・72

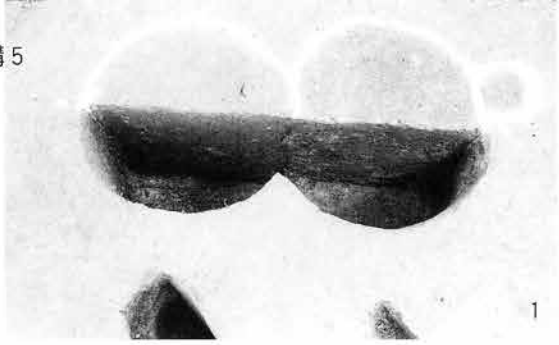
9

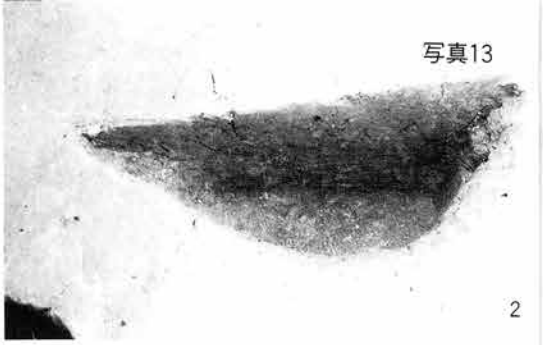


10

9．SK 65
10．SK 66

1．SK 69
2．SK 74


1


2

3．SK 78
4．SK 82

3

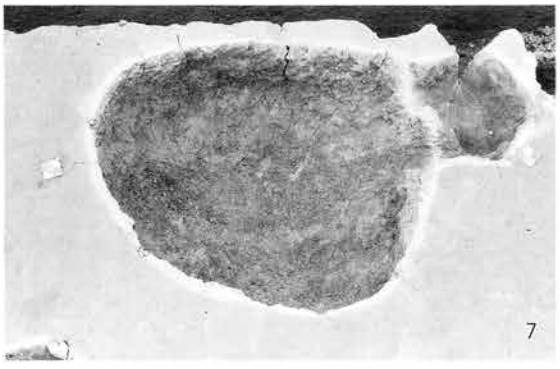
4

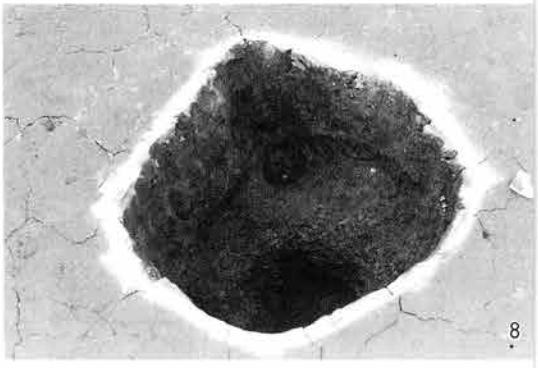
5．SK 84
6．SK 86

5

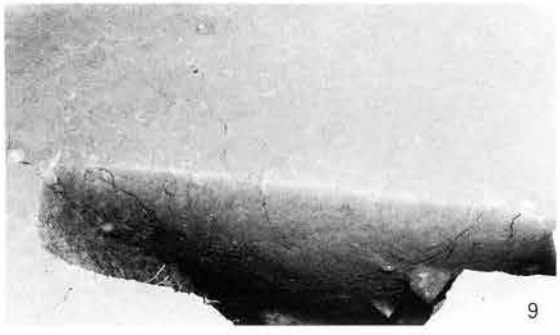
6

7．SK 87
8．SK 88


7


8

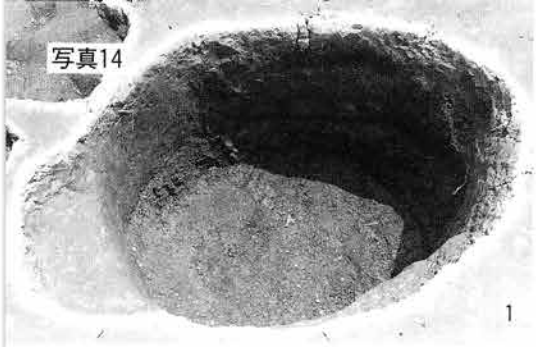
9．SK 89
10．SK 90・91


9

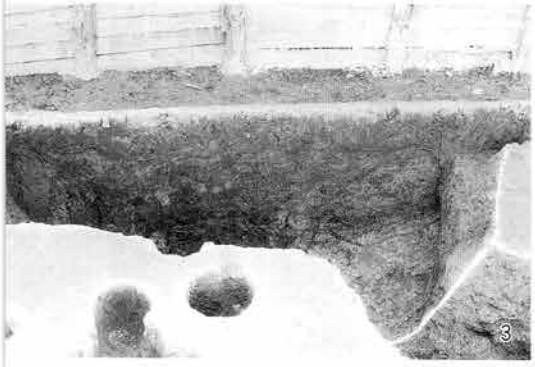
10

写真14

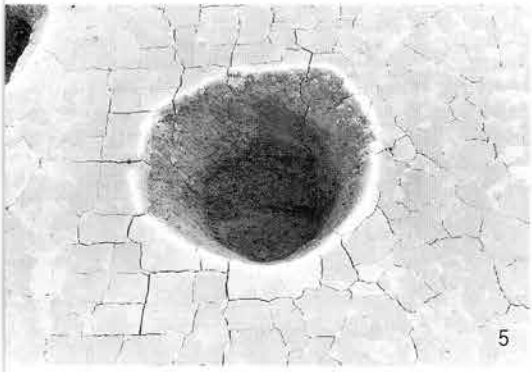
Ⅲ層下面検出遺構 6

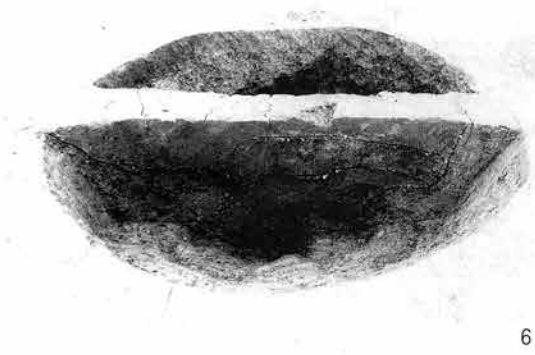


1．SK 93
2．SK 94

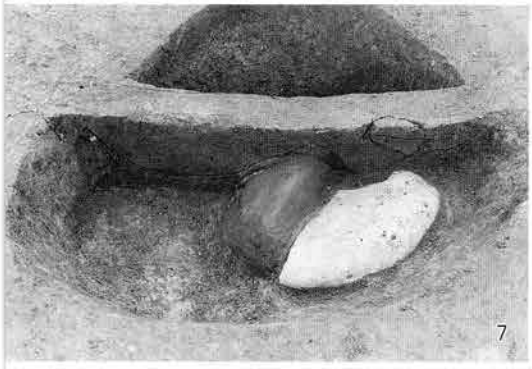


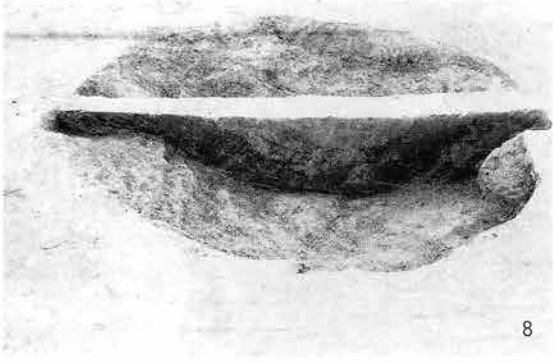
3．SK 96
4．SK 98



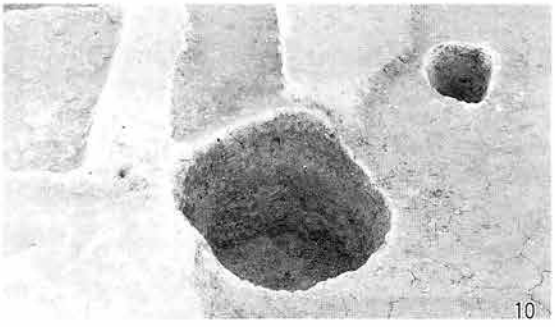


5．SK 102
6．SK 103





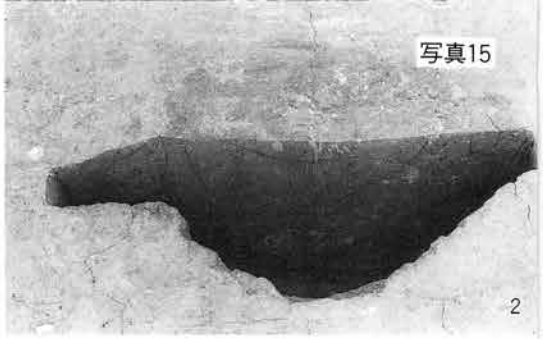
7．SK 104
8．SK 105



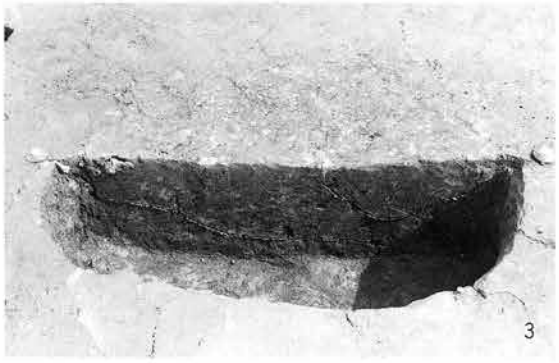
9．SK 113
10．SK 114

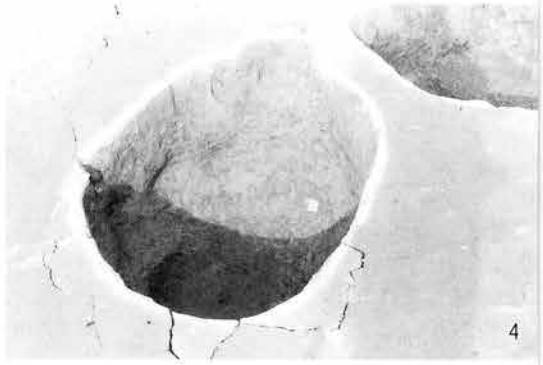
1．SK 117
2．SK 118

1


2

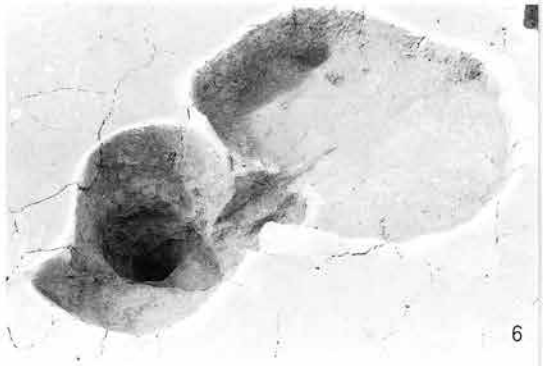
3．SK 120
4．SK 121


3

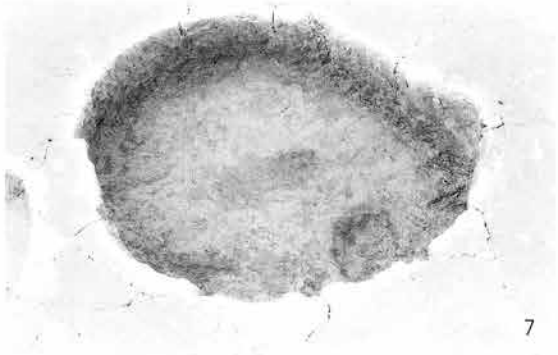

4

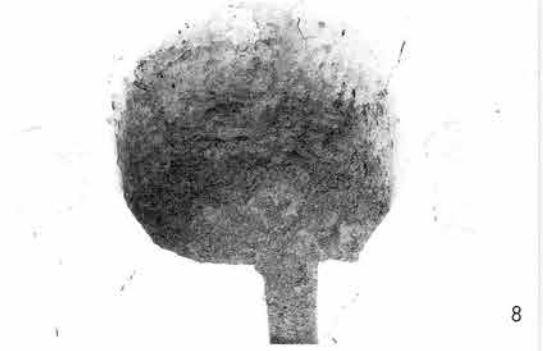
5．SK 122
6．SK 123・124

5

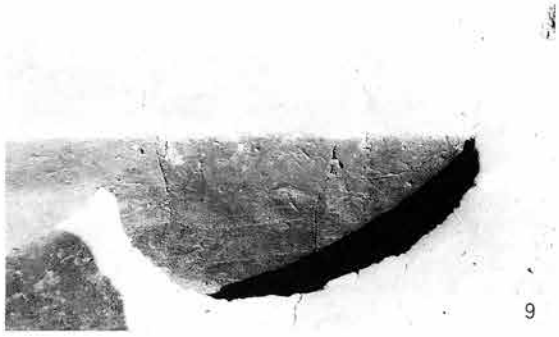

6

7．SK 125
8．SK 126


7

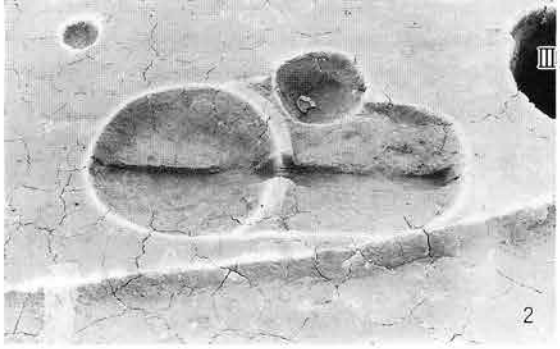

8

9．SK 127
10．SK 127・128

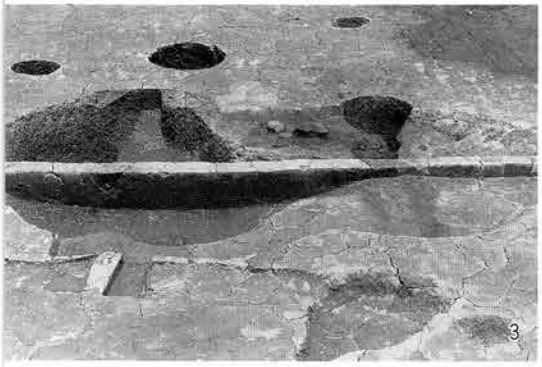

9

10

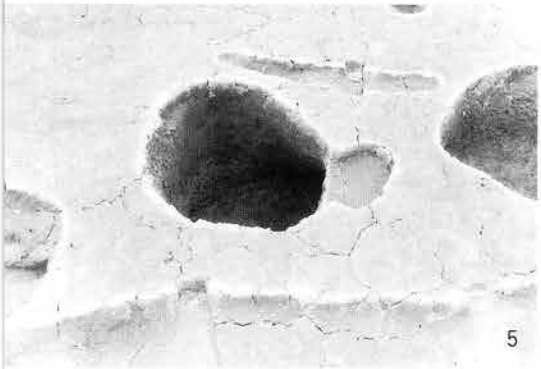
Ⅲ層下面検出遺構 8



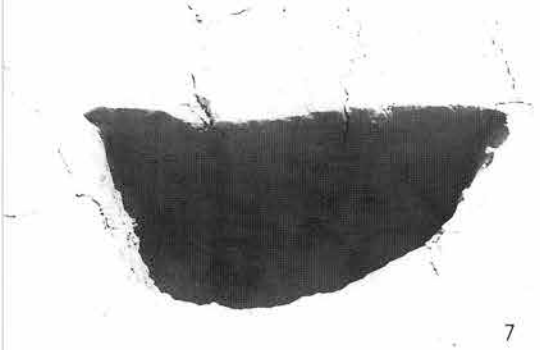
1．SK 129
2．SK 130・131（右

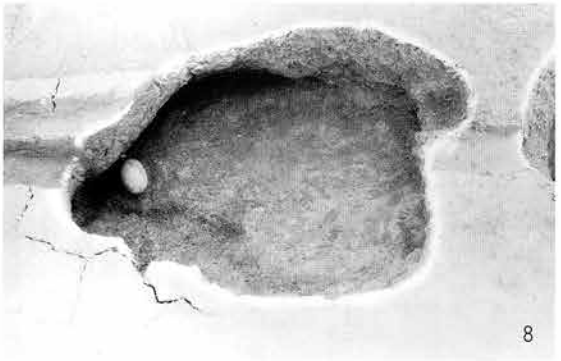


3．SK 136
4．SK 136
（遺物出土状況）

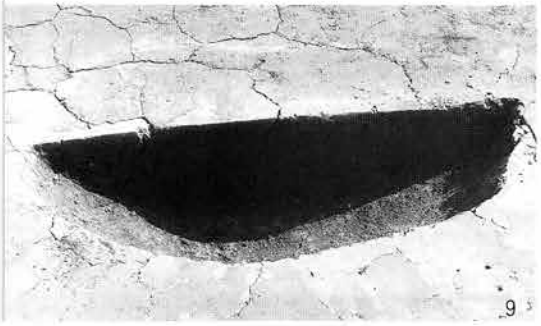


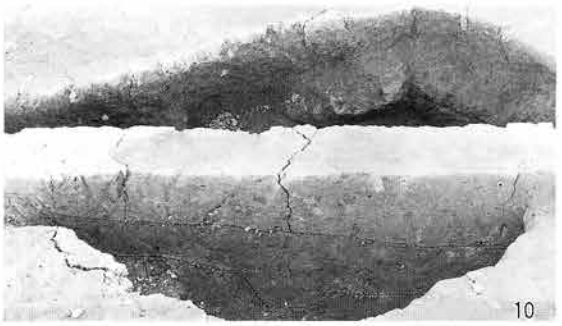
5．SK 132
6．SK 133





7．SK 135
8．SK 138



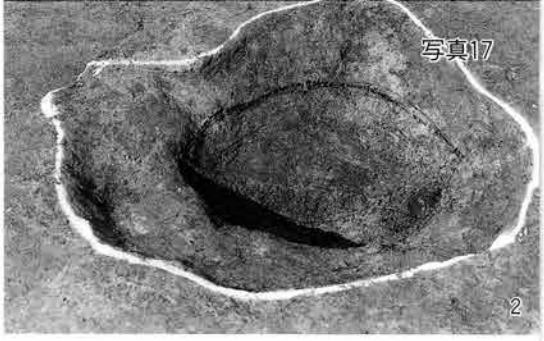


9．SK 140
10．SK 141

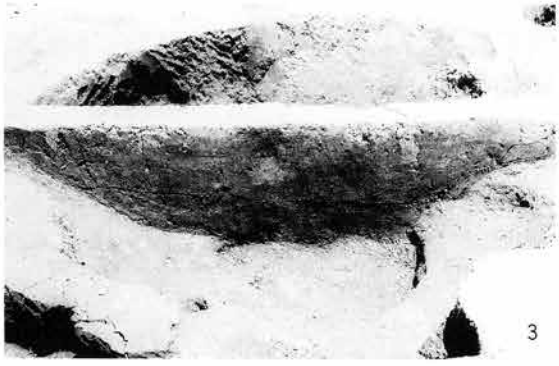
Ⅲ層下面検出遺構 9

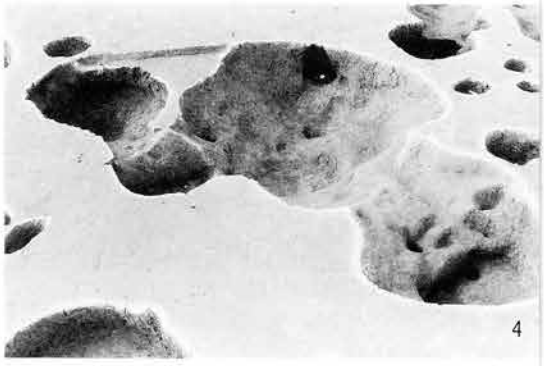
写真17

1．SK 142
2．SK 141・142

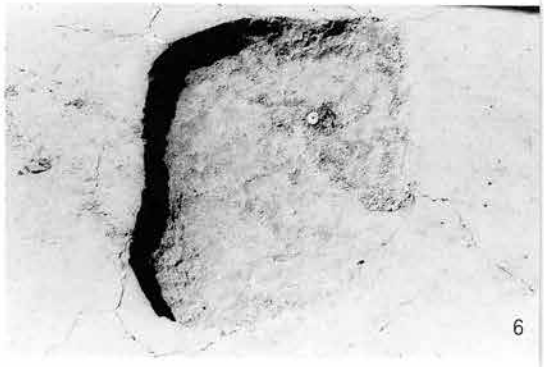


3．SK 143
4．SK 143・144

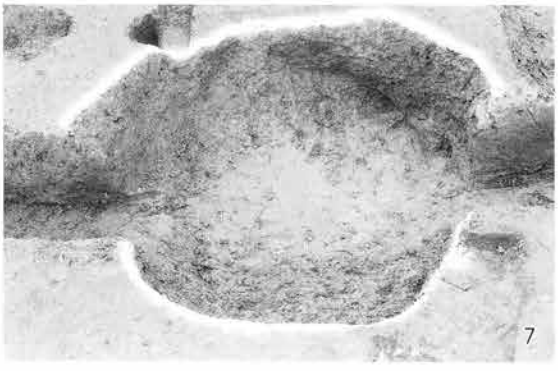


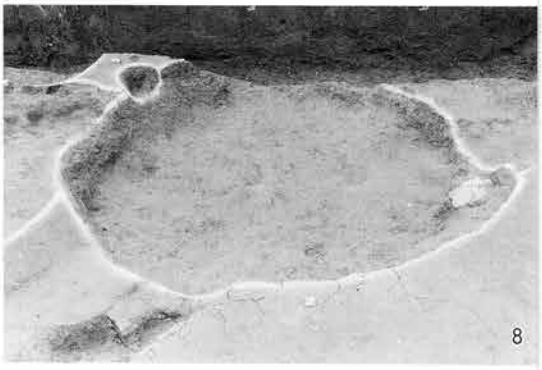


5．SK 146
6．SK 147

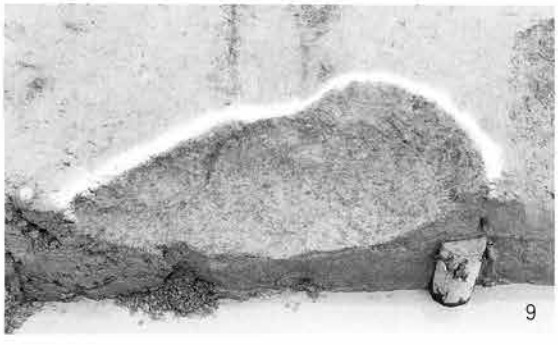


7．SK 150
8．SK 151





9．SK 165
10．SK 195



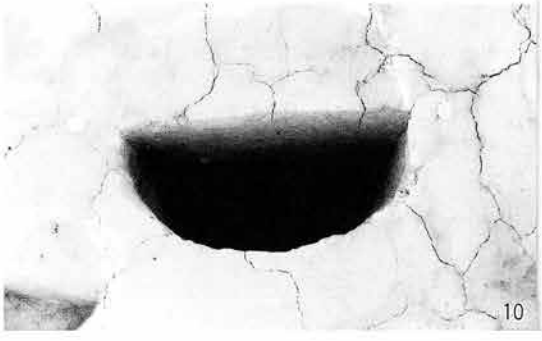
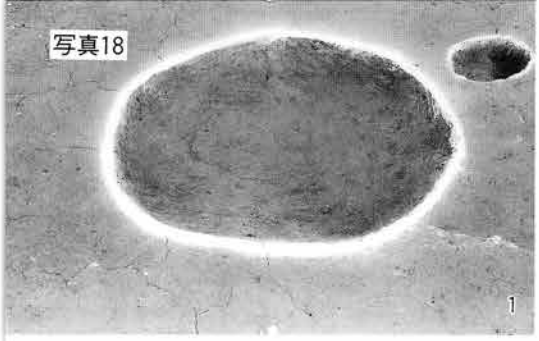
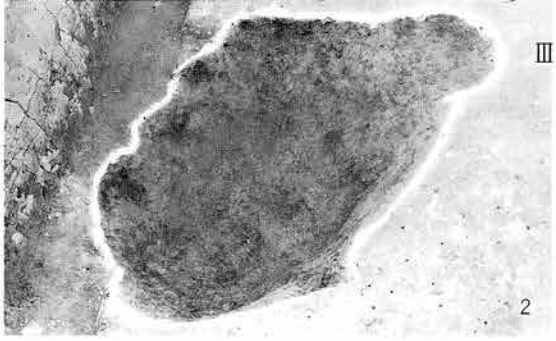


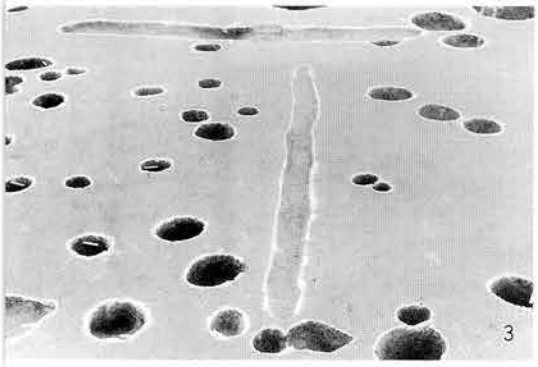
写真18

Ⅲ層下面検出遺構10

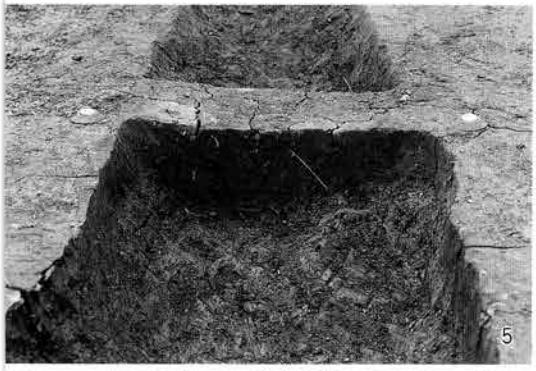


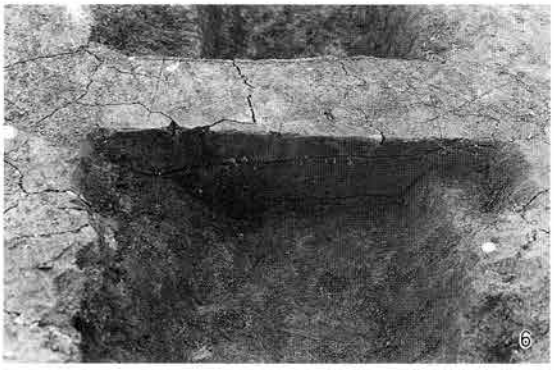


1．SK 203
2．SK 207



3．SD 95
4．SD 106



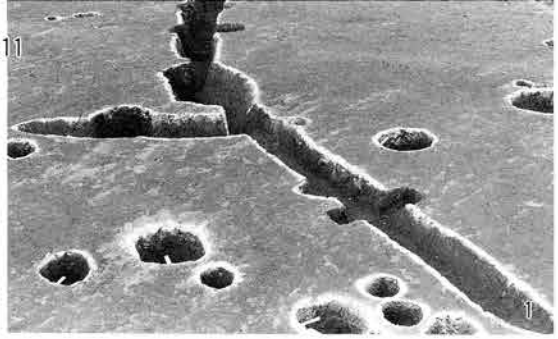


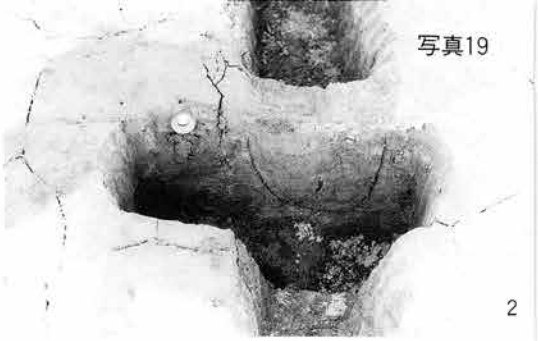
5．SD 107
6．SD 110

7．SD 111
8．SD 205

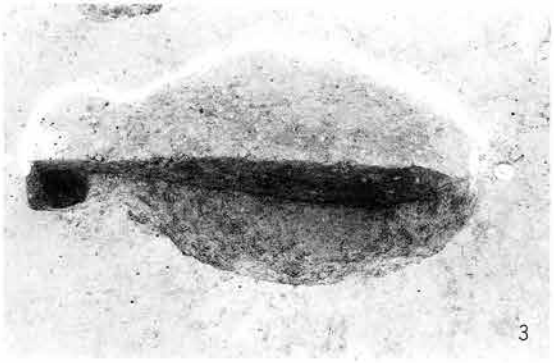
9．SD 208
10．SD 209

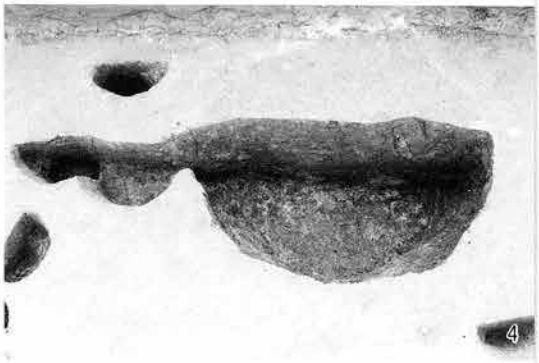
1．SD 210
2．SD 211



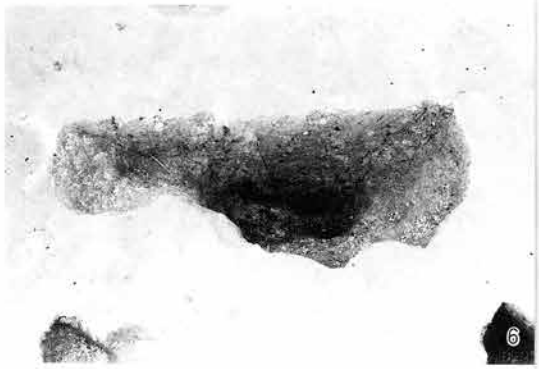


3．P 158
4．P 167・168





5．P 172
6．P 181・182



7．P 201
8．P 202

CB 8 ブロック

9．SE 5
10．SE 6

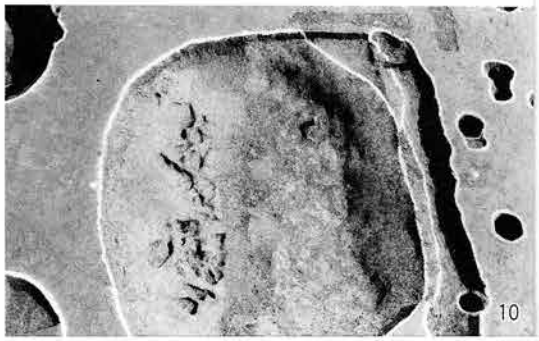
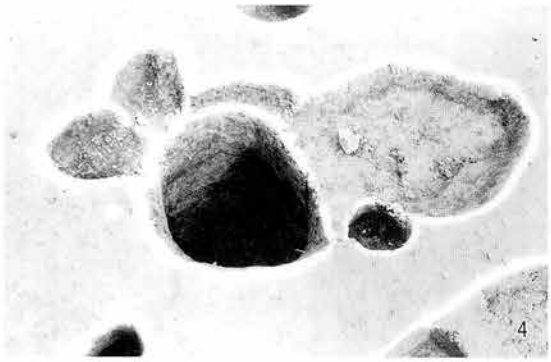


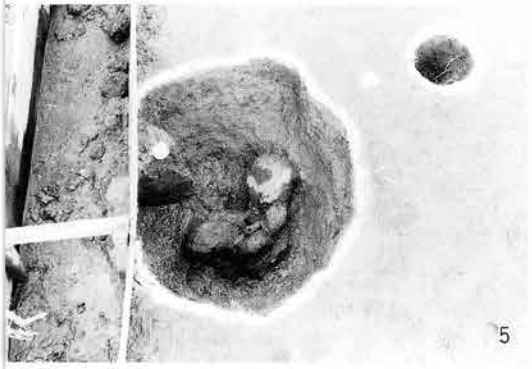
写真20

Ⅲ層下面検出遺構12

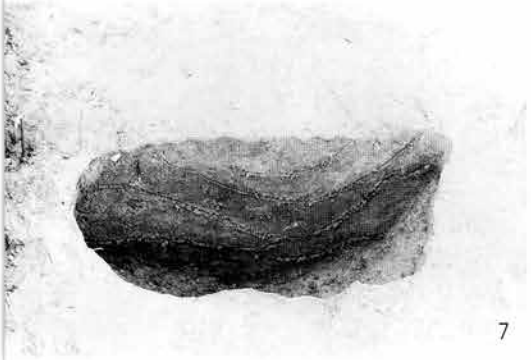
1．SE 12
2．SE 31

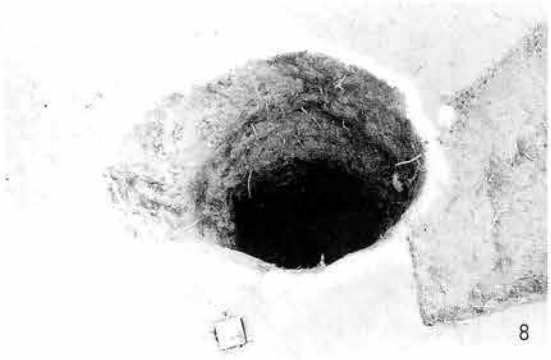


3．SE 33
4．SK 13

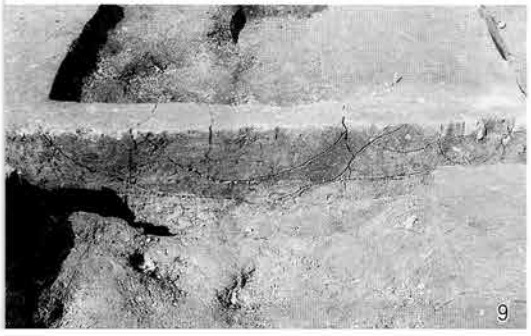


5．SK 20
6．SK 22





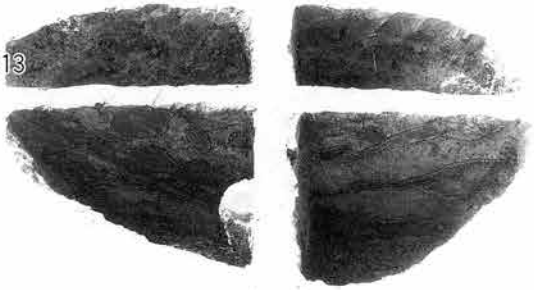
7．SK 26
8．SK 27



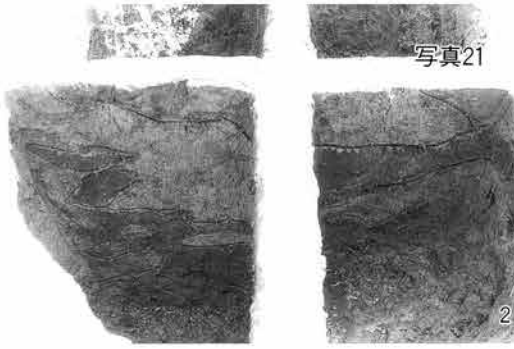
9．SD 1
10．SD 2

Ⅲ層下面検出遺構13

二期線 A 地区



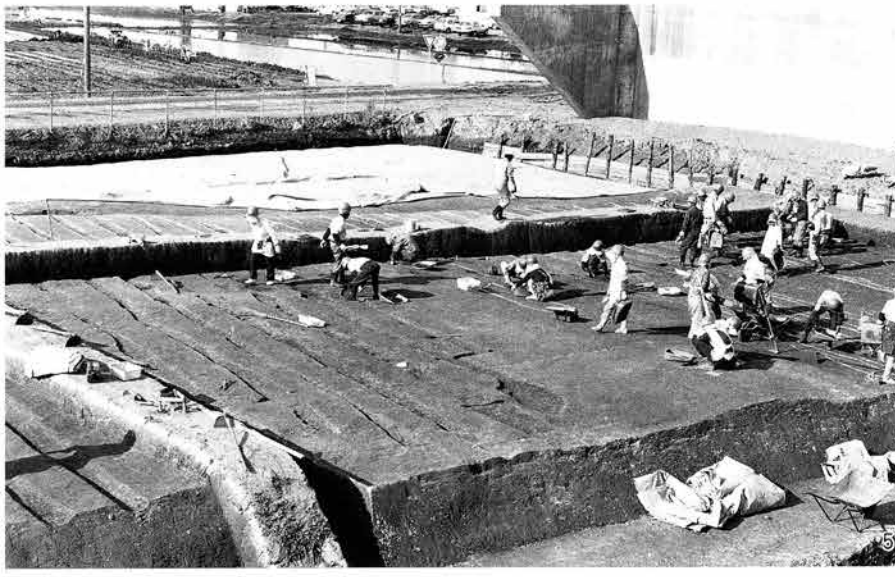
1．SE 1
2．SE 1



3．SD 2
4．SD 3

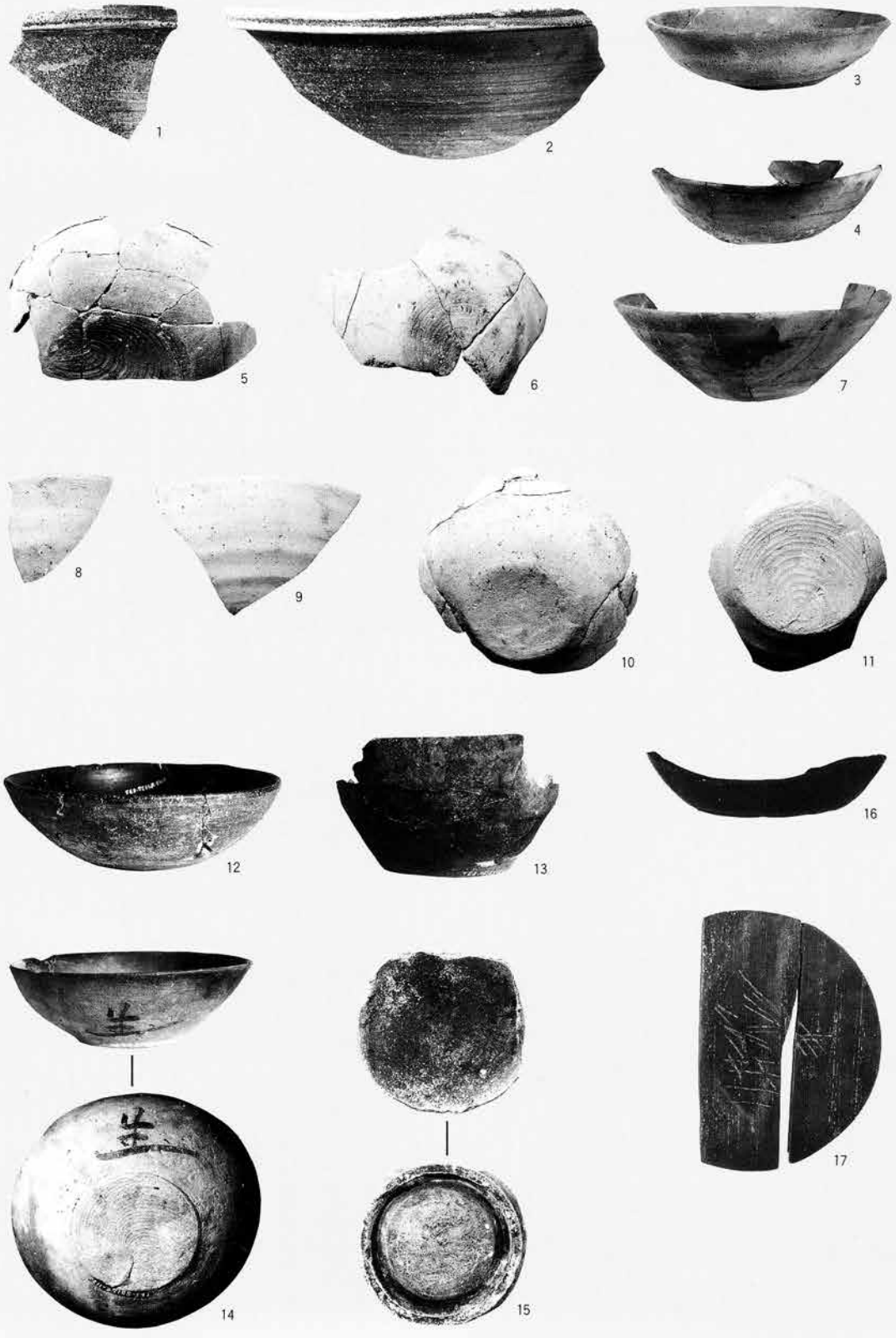
Ⅱ層下面検出遺構

鉄砲町 3 地区



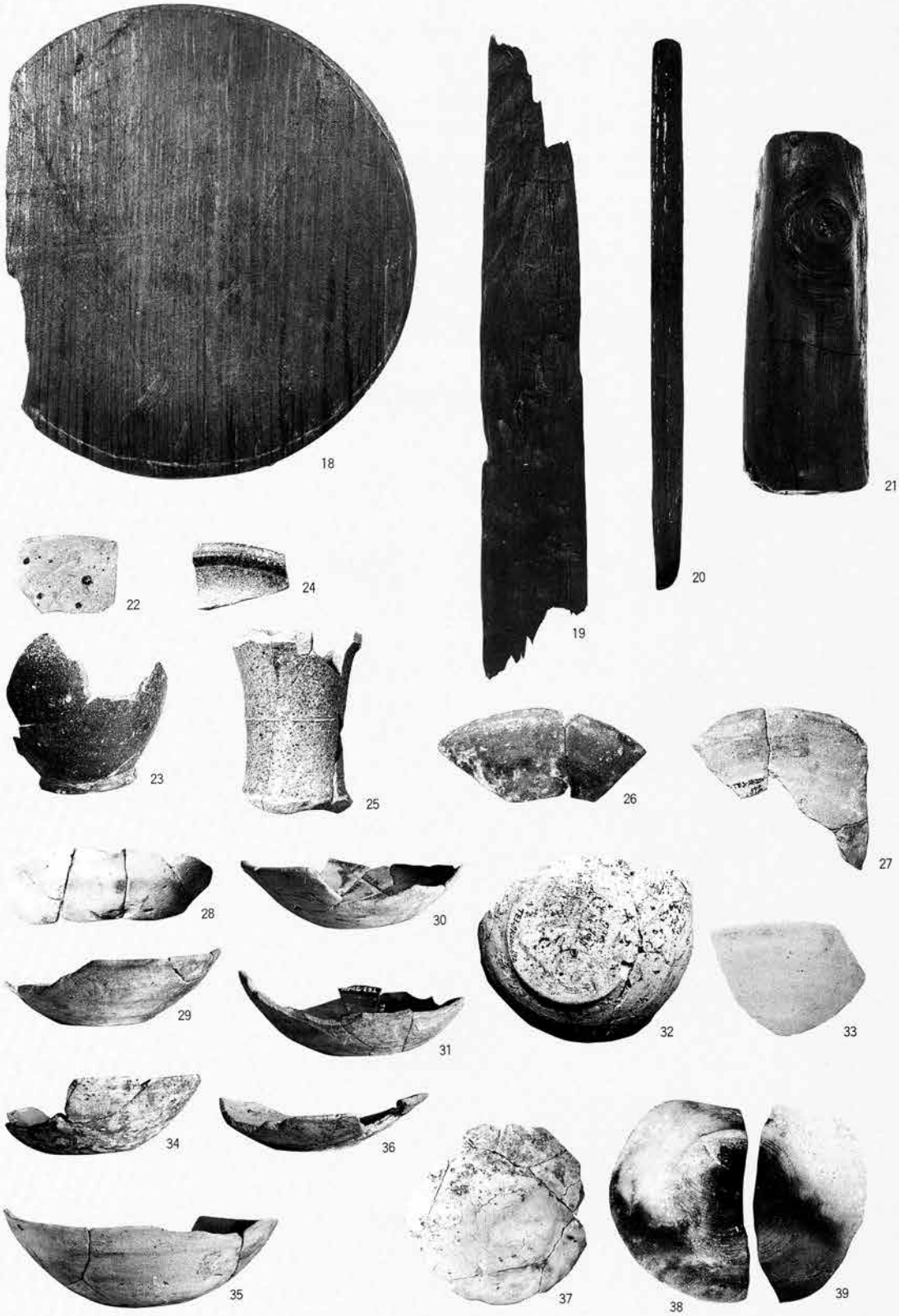
5．畝間状遺構

6．畝間状遺構



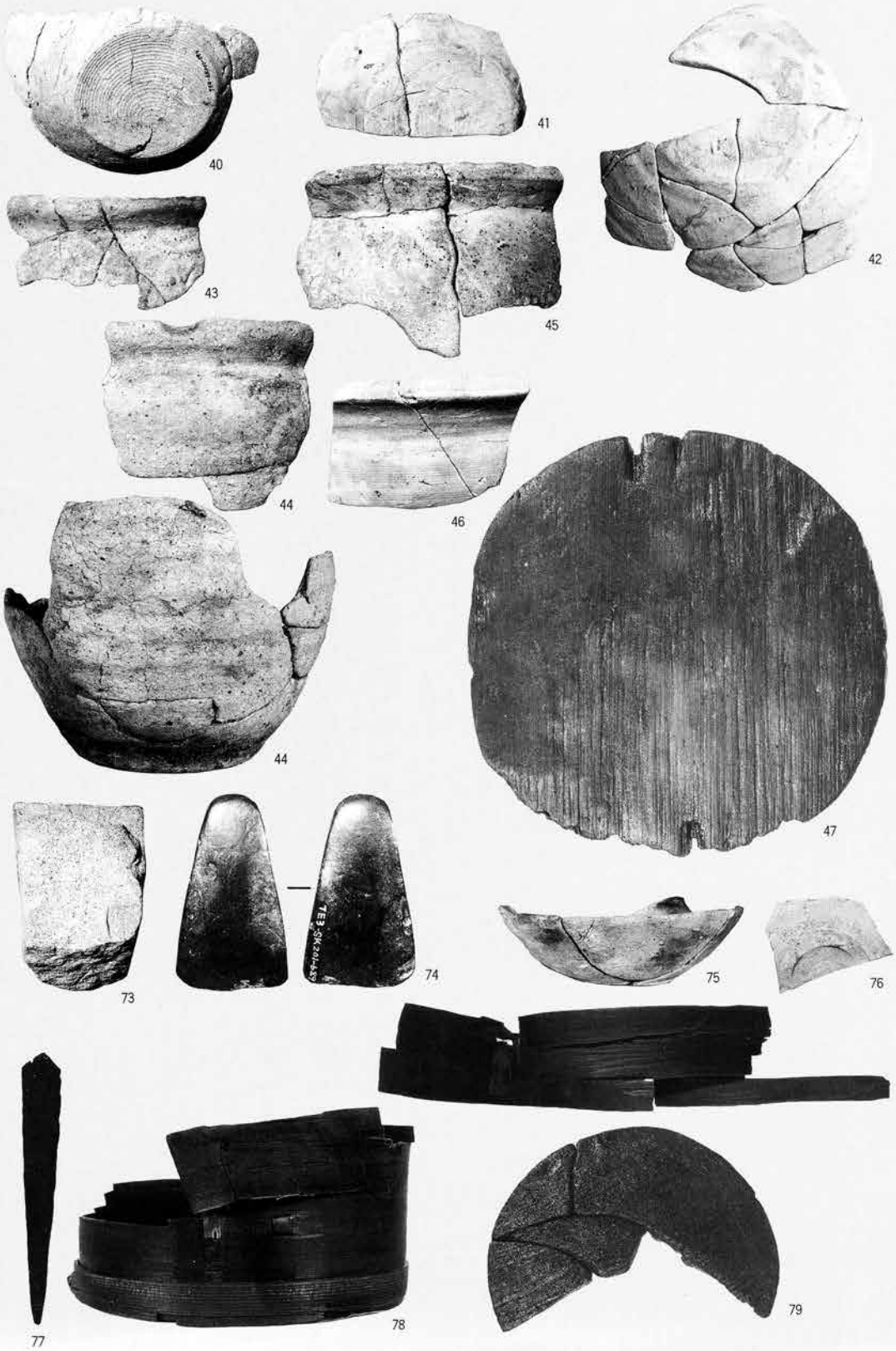
１～17　鉄３　SE 168

１：３



18～21　鉄３　SE 168
22～39　鉄３　SE 201

1：3



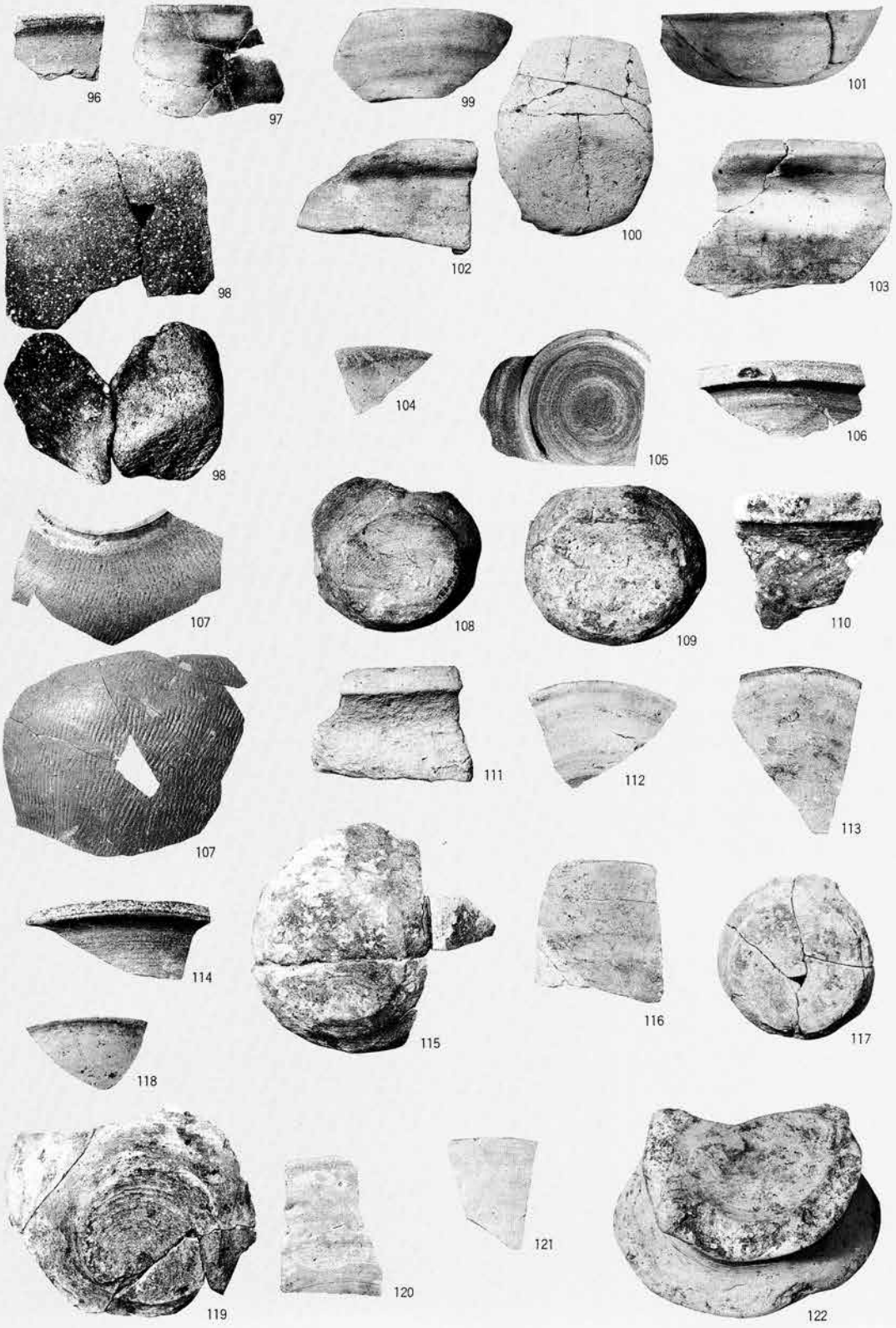
40～74　鉄３　SE 201
75～79　鉄３　SE 206

1：3

48～70　鉄３　SE 201
80～95　鉄３　SE 206

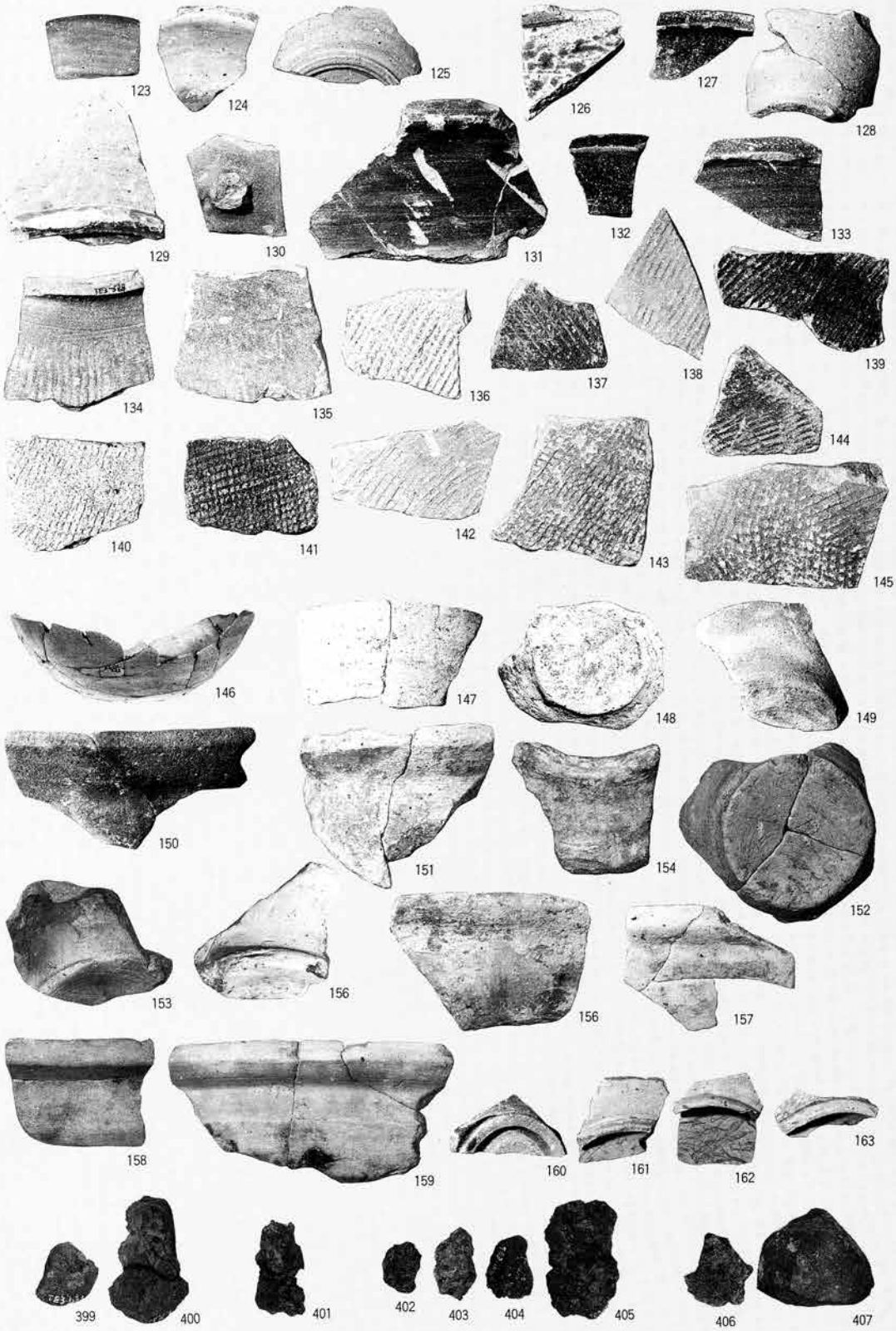
1：15

CB 8 ブロック　Ⅳ層下面検出遺構出土遺物
鉄砲町 3 地区　Ⅲ層下面検出遺構出土遺物 1



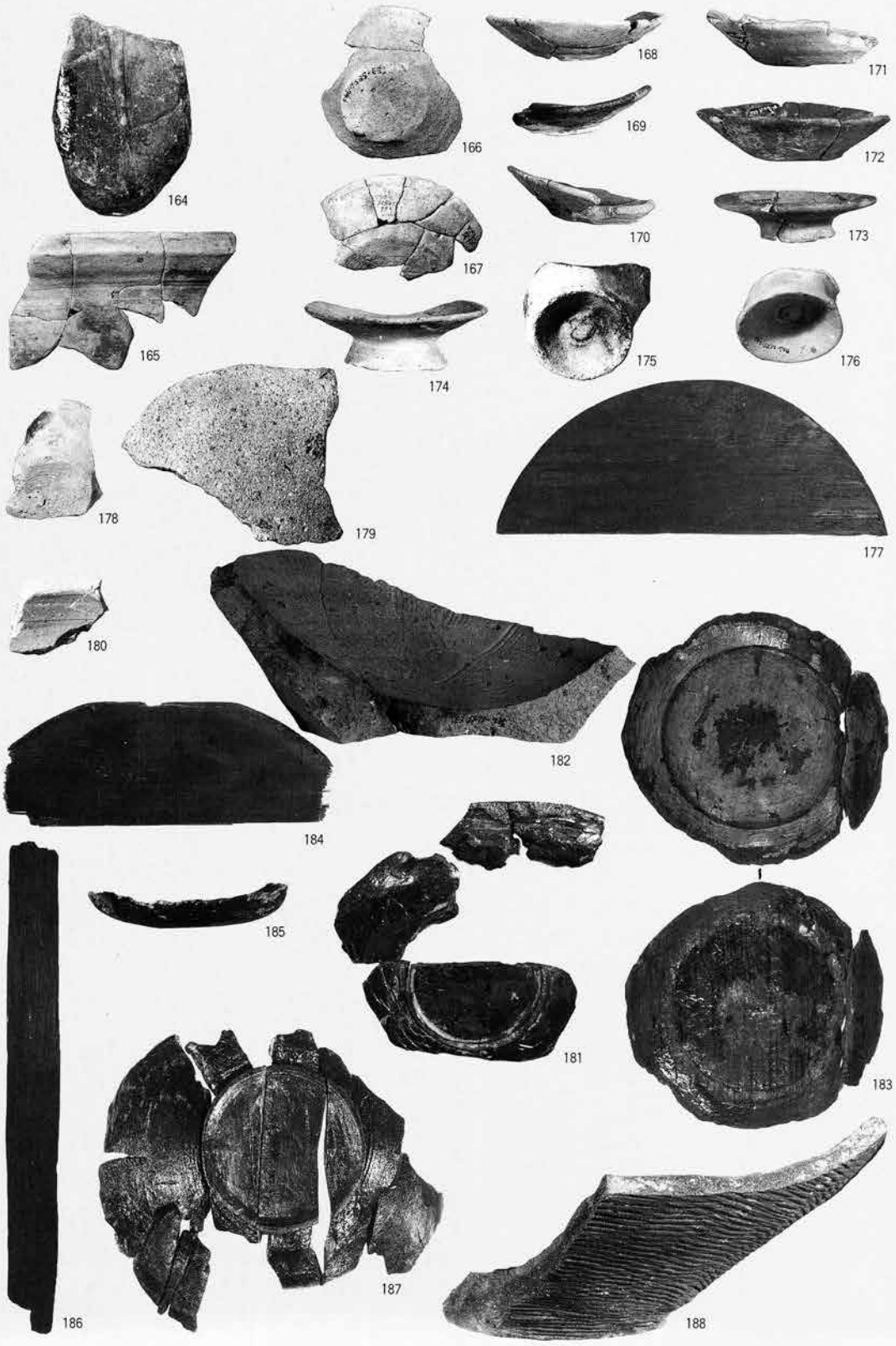
96・97	鉄 3	SK 163	104～113	CB 8	SK 37	121	CB 8	P 111
98	鉄 3	SK 170	114～117	CB 8	SK 41	122	鉄 3	SK 89
99～102	鉄 3	SX 186	118	CB 8	SK 45			
103	鉄 3	P 180	119・120	CB 8	SK 47			

1 : 3

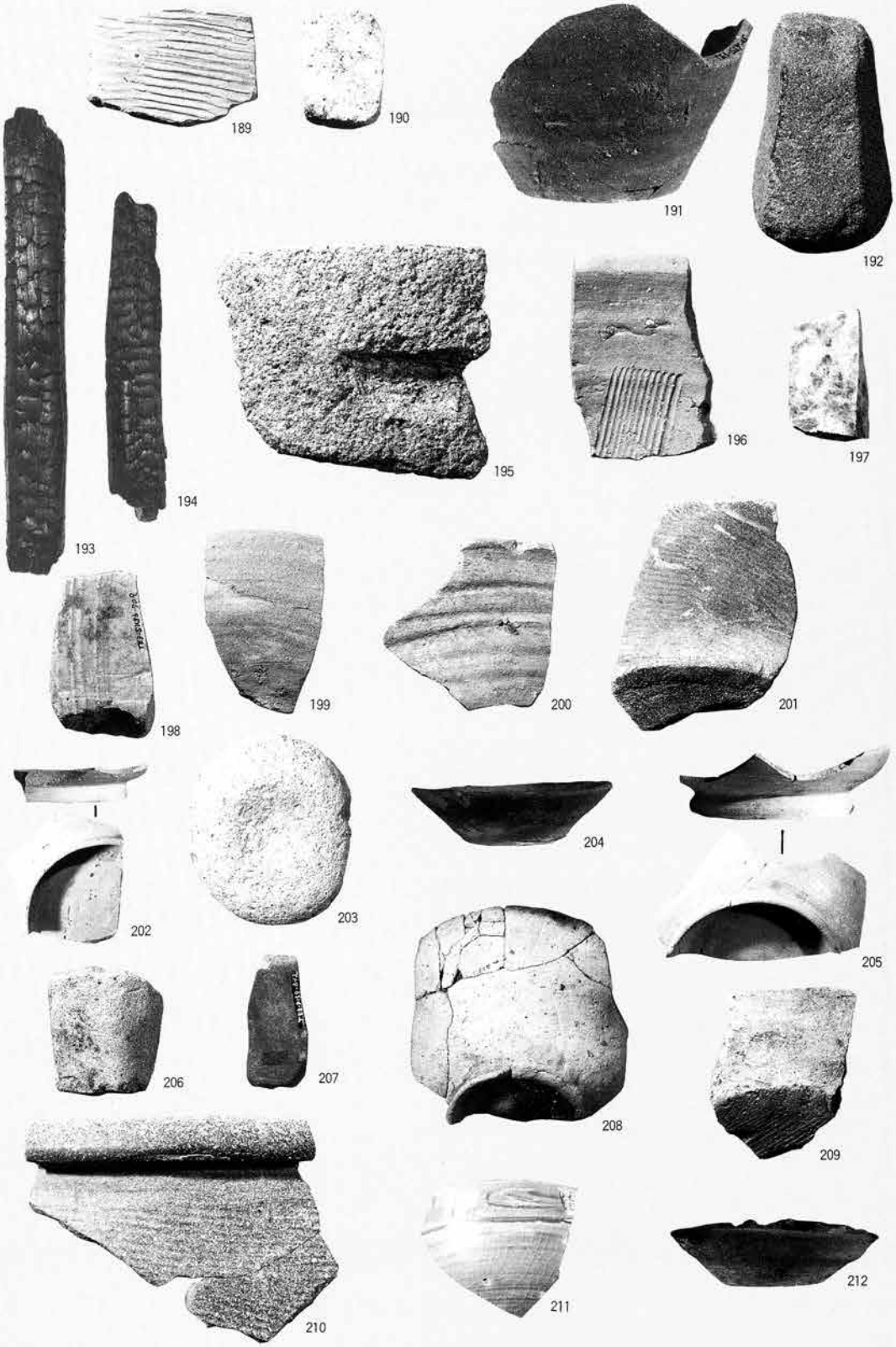


123～131・133～140・142～163・399～407　鉄３　包含層
132・141　CB８　包含層

1：3



164	鉄３	SE 51	180	鉄３	SE 71	185・186	鉄３	SE 77		
165	鉄３	SE 52	181・182	鉄３	SE 75	187	鉄３	SE 80	186　１：６	
166～177	鉄３	SE 54	183	鉄３	SE 73	188	鉄３	SE 83	他は１：３	
178・179	鉄３	SE 67	184	鉄３	SE 76					



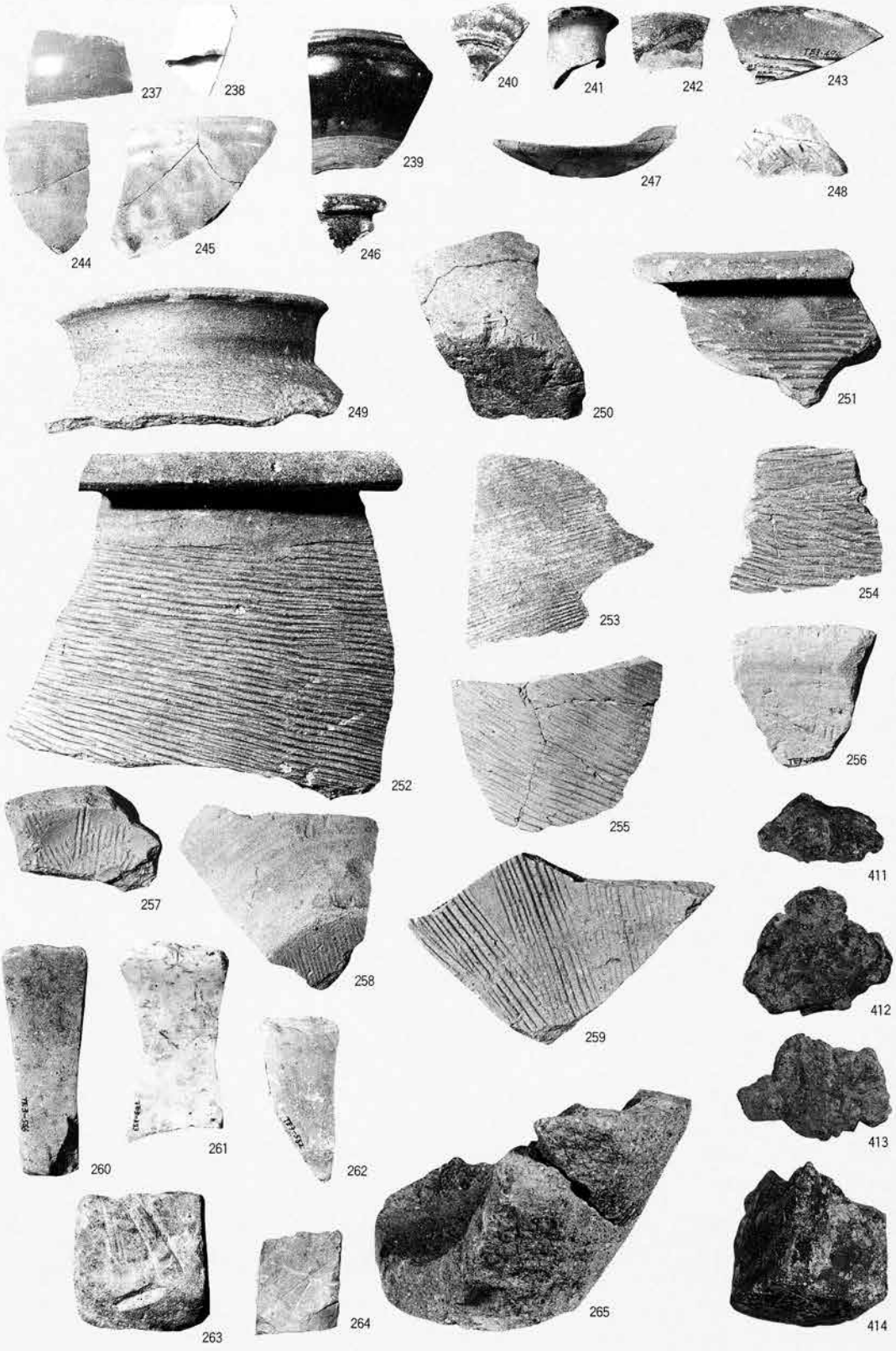
189・190	鉄３	SE 85	197	鉄３	SK 78	202	鉄３	SK 103	208	鉄３	P 166
191・192	鉄３	SE 97	198	鉄３	SK 86	203	鉄３	SK 113	209	鉄３	P 192
193・194	鉄３	SE 137	199	鉄３	SK 87	204・205	鉄３	SK 117	210	鉄３	P 208
195	鉄３	SE 202	200	鉄３	SK 88	206	鉄３	SK 146	211	鉄３	P 220
196	鉄３	SK 58	201	鉄３	SK 89	207	鉄３	P 159	212	鉄３	P 467

195　1：6
他は1：3

CB 8 ブロック　Ⅲ層下面検出遺構出土遺物
鉄砲町 3 地区　Ⅳ層下面検出遺構出土遺物 5

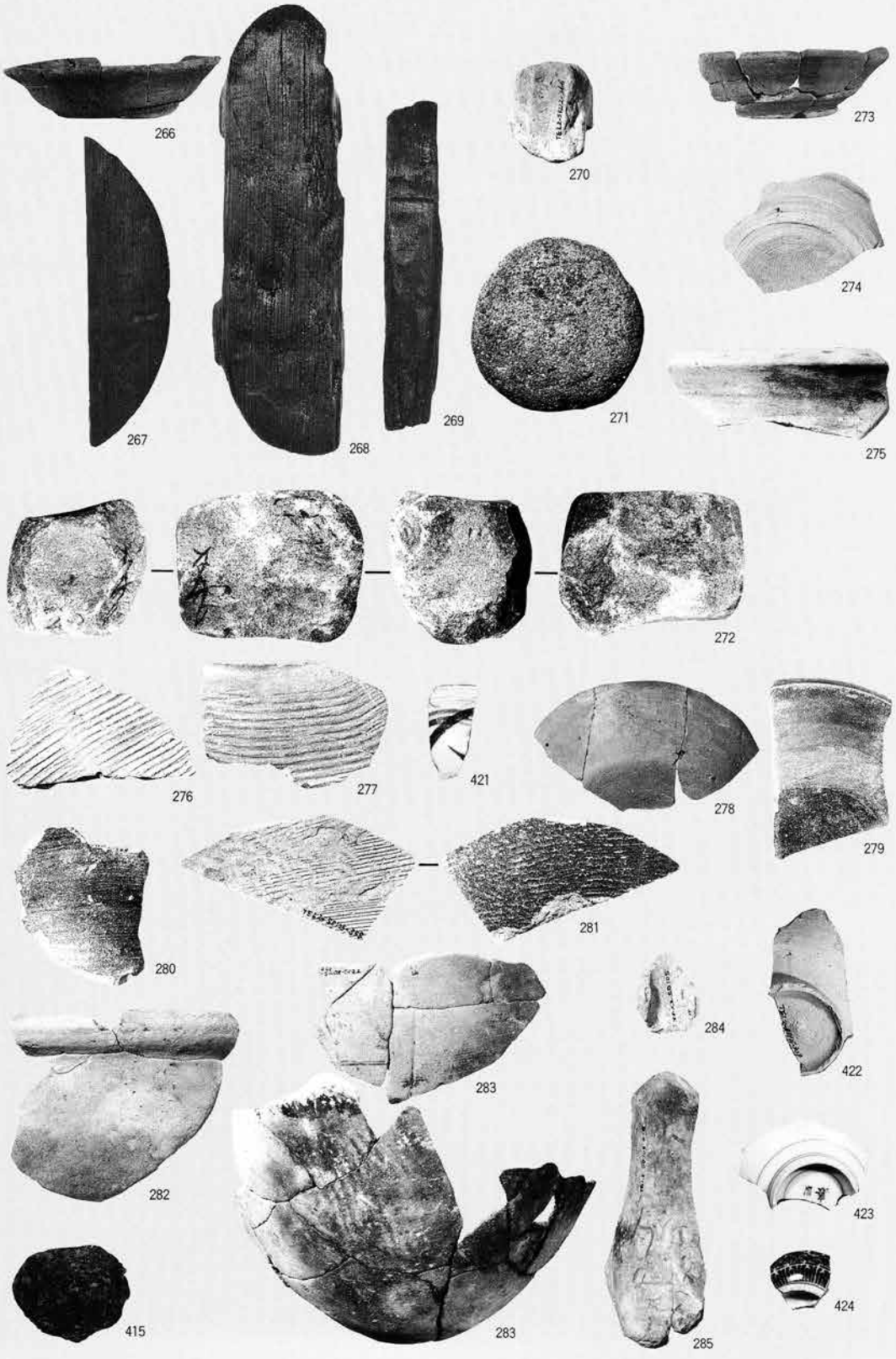
213・214	CB 8	SE 5	220	CB 8	SE 33	224～227	鉄 3	P 774
215～217	CB 8	SE 6	221～223	CB 8	SD 1	228	鉄 3	SE 201
218・219	CB 8	SE 31	408～410	CB 8	SD 2	229～236	鉄 3	SK 161

1 : 3



237～244・246・247・249・251・252・255～257・259・260・262・264・265・411～414　鉄３
245・248・250・253・254・258・261・263　CB８

1：3



262～272	鉄１・２	SK 122	276・277・421	鉄１・２	SD 104
273	鉄１・２	SK 148	278～285・422～424・415	鉄１・２	SD 105
274	鉄１・２	SK 161			
275	鉄１・２	SD 125			

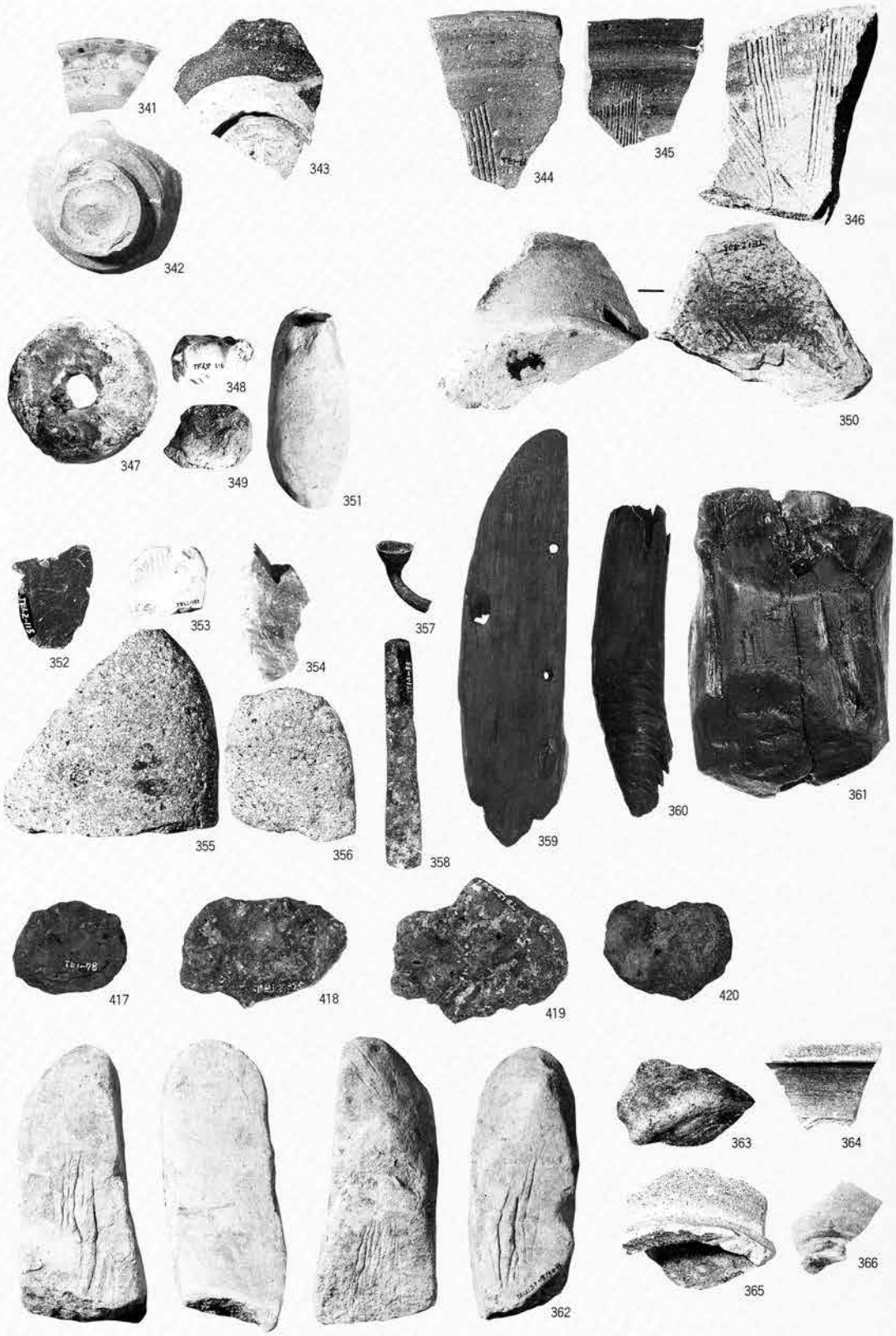
１：３

286～291・425・426　鉄１・２　SD 107
416・427　鉄１・２　SD 108
292～301　鉄１・２　SX 119

１：３

303～340　鉄１・２　包含層　　１：３

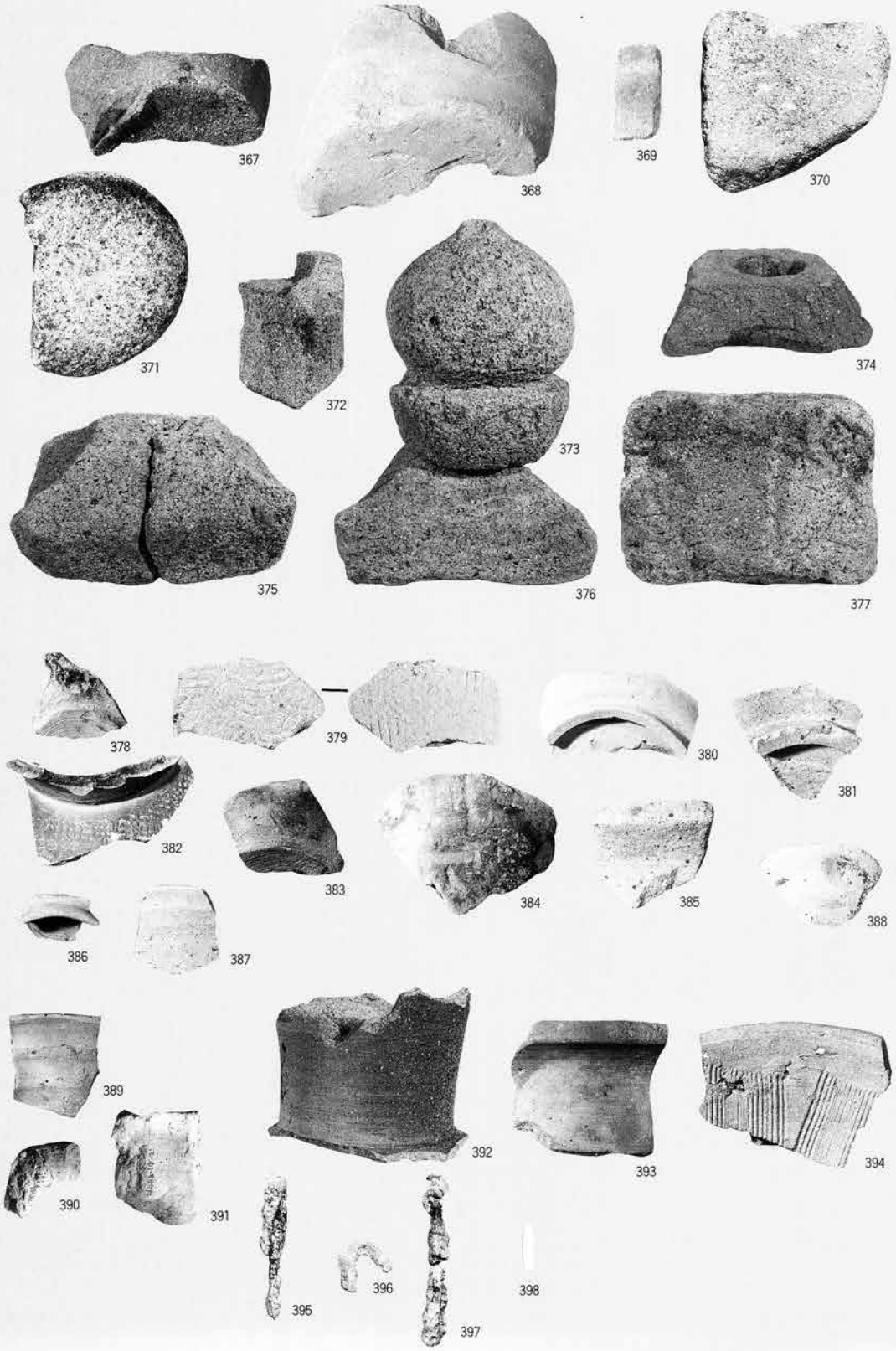
鉄砲町１・２地区包含層出土遺物２
二期線Ａ地区出土遺物１



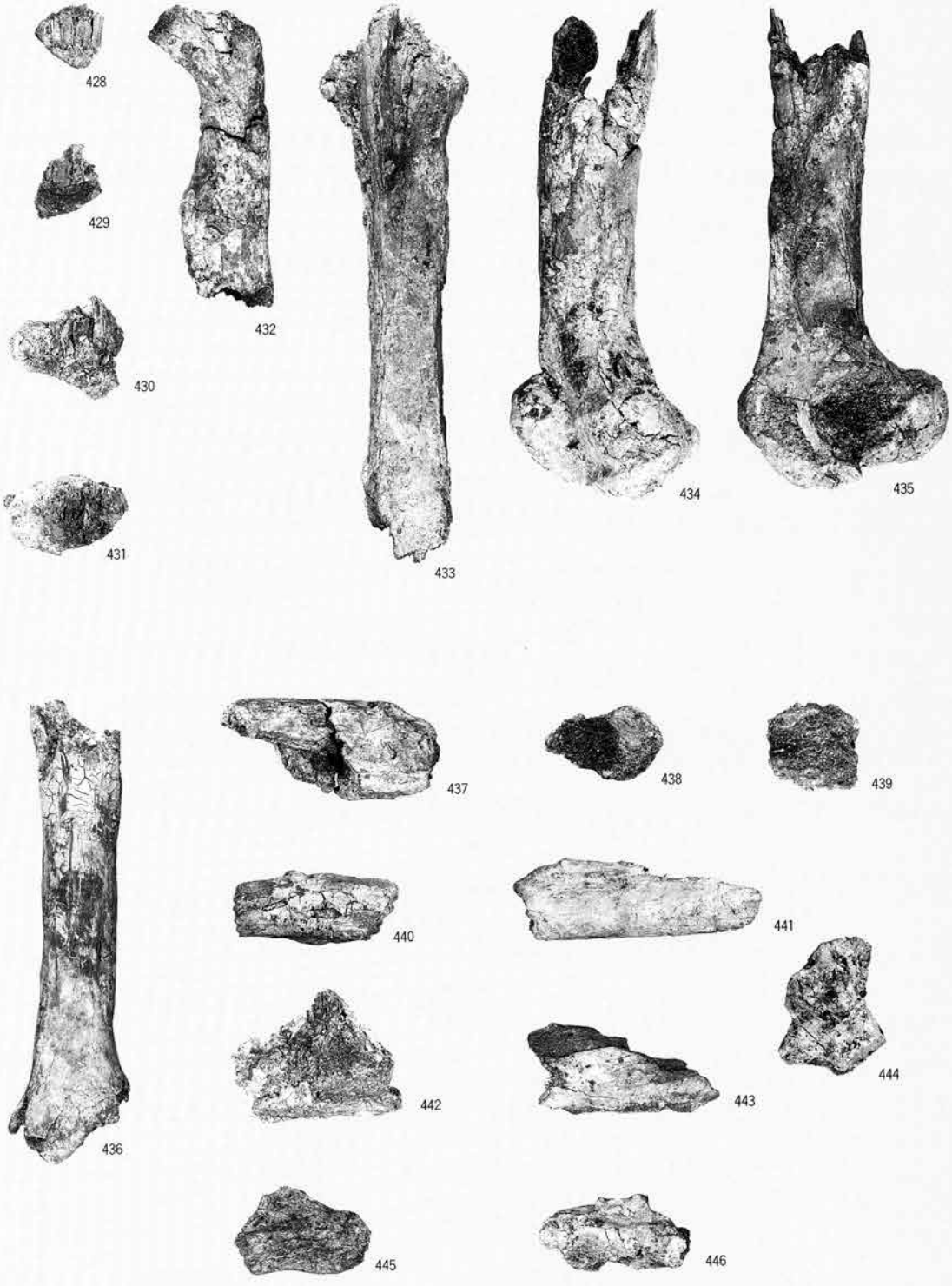
341～361・417～420　鉄１・２　包含層
362　二Ａ　SE１
363　二Ａ　SD２
364～366　二Ａ　SD３

１：３

二期線A・B地区出土遺物
鉄砲町3地区Ⅱ層下面検出遺構出土遺物



367～377	二A	SD 3	392～394	二B	包含層			
378～388	二A	包含層	395～397	鉄3Ⅱ層	SK 101		372～377	1：6
389～391	二B	SE 1	398	鉄3Ⅱ層	畝間76		他は	1：3



428～431　下顎骨(歯の破片あり)
432　上腕骨(右)
433　橈骨(左、上半分)
434　大腿骨(左、下半分)
435　大腿骨(右、下2/3)
436　脛骨(右、下2/3)
437～446　不明

×0.3

報告書抄録

書　　名	鉄砲町遺跡
副　書　名	北陸自動車道 上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅴ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第65集
編著者名	藤巻正信・横田　浩
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
所　在　地	〒950　新潟県新潟市一番堀通町5923-46　TEL 025-223-5642
発行年月日	西暦　1995年3月31日

所収遺跡	所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
鉄砲町遺跡	新潟県上越市大字大豆字鉄砲町 他	222	104	37度8分13秒	138度12分29秒	第1期線分 19840905～19841030 19850407～19850724	9,302	北陸自動車道の建設
						第2期線分 19870828～19871011 19880908～19881008	667	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鉄砲町遺跡	集落	平安時代中期 9C末～10C末	掘立柱建物 3棟 井戸 3基 土坑 34基 溝 5条	須恵器・土師器 井戸枠・木製品	
		平安時代末期・中世 12C前半 14・15C	井戸 26基 土坑 82基 溝 50条	珠洲焼・土師質土器・瀬戸美濃焼・木製品	

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第65集

北陸自動車道

上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅴ

鉄砲町遺跡

平成7年3月20日印刷
平成7年3月31日発行

発行・編集　新潟県教育委員会
新潟市新光町4－1
電話　(025) 285-5511

㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団
新潟市一番堀通町5923-46
電話　(025) 223-5642

印刷・製本　長谷川印刷
新潟市小針1－11－8
電話　(025) 233-0321